山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告

筑紫郡那珂川町観音山古墳群の調査

第 5 集

本 文

1 9 7 8

福岡県教育委員会

山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

筑紫郡那珂川町観音山古墳群の調査

第 5 集

本 文

この報告書は、福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて、昭和46年度 から実施している山陽新幹線建設路線内および博多総合車輌基地内の埋蔵文化財 発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は、筑紫郡那珂川町所在の観音山古墳群に所属する中原古墳群についてのもので、『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第4集に続くものであります。

なお、調査に対してご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位のご援助 とご配慮により本書を発刊するはこびになりましたので、心から感謝を申し上げ ます。

昭和53年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦 山 太 郎

例 言

- 1. 本書は、昭和47年11月24日から 昭和48年7月24日までに 福岡県教 育委 員会が、日本国有鉄道下関工事局から委託されて、山陽新幹線博多総合車輌基地 建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した5冊目の報告書である。
- 2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	••••••	柳田	康雄
I	• • • • • • • • •		柳田	康雄
I I − 1 · 2 ······	•••••		井上	裕弘
<u>II</u> — 3 ·····	•••••	••••••	池辺	元明
I I − 4 • 5 • 6 ······	•••••	••••••	井上	裕弘
I − 7 ⋅ 8 ⋅ 9 ······	•••••		木下	修
I I −10 ······	柳田	康雄•	小林	義彦
I I ─11 ······	柳田	康雄•	小田	雅文
I I −12 • 13 • 14 ······	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		柳田	康雄
Ⅲ —15 • 16 • 17 ······				元明
I I −18 ······				康雄
Ⅲ —19 ·····				元明
II −20 ·····	柳田	康雄•	小林	義彦
I I −21 • 22 • 23 ······	櫻井	康治•	小田	雅文
Ⅲ —24 ······		•••••	柳田	康雄
I −25 • 26 • 27 ······	櫻井	康治•	小田	雅文
I I −28 ·····	••••••	••••••	柳田	康雄
I I −29 • 30 ······	木下	修•	櫻井	康治
Ⅲ —31 ······	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	••••••	池辺	元明
ıy	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	池辺	元明
V-1 · 2 ······	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	柳田	康雄
V — 3 ·····	• • • • • • • • •		木下	修

M -	- 1	•••••	大澤	正已
VI —	- 2		松本	勗
矸	43.		i • 小ホ	大義を

- 3. 掲載の写真の撮影,実測図の作成および製図は、図版目次と挿図目次に示すとおりである。
- 4. 本書の編集は、柳田が担当した。

本 文 目 次

I	序	文1
${\rm I\hspace{1em}I}$	調	査の経過3
	1.	報告にあたって
	2.	調査の経過
${\rm I\hspace{1em}I}$	各	古墳の記録9
	1.	1号墳9
	2.	2 号墳17
	3.	3 号墳23
	4.	4 号墳26
	5.	5 号墳30
	6.	6 号墳39
	7.	7 号墳47
	8.	8 号墳54
	9.	9 号墳59
	10.	10号墳64
	11.	11号墳69
	12.	12号墳82
	13.	13号墳98
	14.	14号墳
	15.	15号墳
	16.	16号墳
	17.	17号墳
	18.	18号墳
	19.	19号墳
	20.	20号墳 123
	21.	21号墳
	22.	22号墳

	23.	23号墳	141
	24.	24号墳	147
	25.	25号墳	156
	26.	26号墳	162
	27.	27号墳	166
	28.	28号墳	170
	29.	29号墳	172
	30.	30号墳	176
	31.	31号墳	178
IV	土壙	基群······	179
V	後	論······	191
	1.	観音山古墳群成立の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	191
	2.	古墳群の配列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	196
	3.	須恵器について	200
VI	自然	科学的分析	206
	1.	鉱滓の調査	206
	2.	7号土壙墓出土木棺材の樹種名について	215
	付 録		
	春日	市下白水大塚古墳出土品	216

図 版 目 次

				本文対照頁
図	版	1	(1)	発掘前の7号・8号墳付近(北西から)47
			(2)	発掘前の12号墳から東側の状況(南西から)82
		2	(1)	発掘前の10号墳から東側の状況(西から)64
			(2)	発掘前の20号墳の状況(東上から) 123
		3		観音山中原支群古墳群発掘区全景(南上空から) 196
		4		観音山中原支群古墳群西半(南上空から) 196
		5		観音山中原支群古墳群中央(東上空から) 196
		6		観音山中原支群古墳群中央(東上空から) 196
		7	(1)	観音山中原支群古墳群東半(北上空から) 196
			(2)	中原支群14号・18号・20号~25号・27号~31号墳(東上空から) 106
		8	(1)	1号~3号墳航空写真9
			(2)	4 号~ 6 号墳航空写真26
		9	(1)	5 号~7 号・9 号墳航空写真30
			(2)	6 号~11号墳航空写真39
		10	(1)	10号~24号・29号・30号・土壙墓航空写真64
			(2)	14号・18号~31号墳・土壙墓群航空写真 106
		11	(1)	1号墳全景9
			(2)	1 号墳石室全景10
		12	(1)	1 号墳石室全景10
			(2)	1 号墳出土須恵器12
		13	(1)	1 号墳出土耳鐶・鉄製品15
			(2)	1 号墳出土歴史時代土師器14
		14	(1)	2 号墳全景17
			(2)	2 号墳石室全景18
		15	(1)	2 号墳石室(南から)
			(2)	2号墳石室(北から)
		16	(1)	2 号墳文室側壁石積み状態(車壁)

	(2)	2号墳石組墓道側壁石積み状態(東側) 18
17		2 号墳出土須恵器20
18	(1)	3 号墳全景(南から)23
	(2)	3 号墳石室全景(南から)23
19	(1)	3 号墳石室右側壁(西から)23
	(2)	3 号墳石室左側壁(東から)23
20	(1)	4 号墳全景(南から)26
	(2)	4 号墳全景(東から)26
21		4 号墳出土須恵器26
22	(1)	5 号墳全景(南から)30
	(2)	5 号墳石室全景(南から)31
23	(1)	5 号墳石室全景(西から)31
	(2)	5 号墳玄室31
24	(1)	5 号墳玄室奥壁31
	(2)	5 号墳玄室右側壁31
25	(1)	5 号墳玄室左側壁31
	(2)	5号墳玄門と閉塞石(玄室から)31
26	(1)	5 号墳羨道石組墓道31
	(2)	羡道内土器出土状態32
27		5 号墳出土須恵器32
28	(1)	5号墳出土須恵器,刀子32
	(2)	5 号墳出土人面,獣形土製品35
29	(1)	5 号墳と 6 号墳全景(南上空から)39
	(2)	6 号墳全景(南から)39
30	(1)	6 号墳近景(南から)39
	(2)	6 号墳石室全景(東上から)39
31	(1)	
	(2)	6 号墳石室全景(北上から)39
32	(1)	6 号墳の玄室と羨道(西上から)39
	(2)	6 号墳の石組墓道(西から)40
33	(1)	
	(2)	
3/	(1)	6 号墳文室舉辟40

	(2)	6 号墳玄室右側壁40
35	(1)	6 号墳玄室左側壁40
	(2)	6 号墳羨道右側壁40
36	(1)	6 号墳羨道床面の須恵器出土状態41
	(2)	6号墳南側周溝内土器出土状態41
37		6 号墳出土,土器,鉄器41
38	(1)	祭祀遺構全景(南から)45
	(2)	祭祀遺構全景(北から)45
39	(1)	祭祀遺構近景45
	(2)	祭祀遺構內玉類出土状態45
40	(1)	祭祀遺構出土玉類,鉄製品46
	(2)	配石遺構全景45
41	(1)	7~9号墳全景航空写真(南から)47
	(2)	調査前の7号墳墳丘47
4 2	(1)	7 号墳墳丘とセクションベルト47
	(2)	7 ・ 8 号墳間の土層断面47
43	(1)	墳丘横断面(南から)47
	(2)	墳丘縦断面(西から)47
44	(1)	石室全景(東から)49
	(2)	石室全景(北から)49
45	(1)	石室全景(南から)49
	(2)	閉塞石除去後の石室・・・・・・・・・・49
46	(1)	奥壁石積状態······49
457	(2)	墓道遺物出土状態······50
47		7 号墳出土須恵器
48	/a)	7 号墳出土須恵器、土師器
49		調査前の8号墳(東から)
5 0	(2)	04
50	(1)	
E-1	(2)	石室全景(南から)
51	(1)	閉塞石除去後の石室全景56
EO		出土須恵器と土鈴
5 2	(1)	調査中の石室・・・・・・・

		(2)	9 号墳全景(南から)59
;	53	(1)	石室全景(東から)59
		(2)	石室全景(南から)
:	54		出土須恵器62
	55	(1)	10号墳全景(南から)64
		(2)	10号墳石室全景(西上から)64
;	56	(1)	10号墳石室(南から)64
		(2)	10号墳石室(北上から)64
!	57	(1)	10号墳玄室奥壁64
		(2)	10号墳玄室左側壁64
:	58	(1)	10号墳玄室右側壁······64
		(2)	10号墳右袖石と羨道側壁64
	59	(1)	10号墳羨道右側壁の根石・・・・・・
		(2)	10号墳羨道と閉塞石(玄室から)65
1	60	(1)	10号墳玄室敷石と框石65
		(2)	10号墳玄門と羨道65
	61	(1)	10号墳素掘墓道上層の土鍋出土状態66
		(2)	10号墳出土須恵器66
	62		10号墳出土須恵器,土師器
	63	(1)	11号墳墳丘と石室全景(南上から)69
		(2)	11号墳地山整形と石室(南上から)70
	64	(1)	11号墳石室全景(南から)71
		(2)	11号墳石室(東上から)71
	65	(1)	11号墳石室全景(南上から)71
		(2)	11号墳石室全景(北上から)71
	66	(1)	11号墳玄室右側壁の裏込め石71
		(2)	11号墳玄室床面の遺物出土状態(南から)72
	67	(1)	11号墳墓道内遺物出土状態72
		(2)	11号墳出土須恵器72
	68		11号墳出土須恵器77
	69	(1)	11号墳出土土師器,耳環78
		(2)	11号墳出土鉄鏃79
	70		11号墳出土鉄釘

71	(1)	12号墳地山整形と石室全景(南上から)82
	(2)	12号墳石室全景(東上から)82
7 2	(1)	12号墳石室全景(北上から)82
	(2)	12号墳石室全景(南上から)82
73	(1)	12号墳羨道と石室(墓道から)82
	(2)	12号墳玄室(南上から)84
74	(1)	12号墳玄門(北上から)84
	(2)	12号墳前室と側壁(西上から)84
75	(1)	12号墳羨道床面遺物出土状態84
	(2)	12号墳墓道内遺物出土状態84
76		12号墳出土須恵器86
77	(1)	12号墳出土須恵器,耳環,ガラス丸玉89
	(2)	12号墳出土刀裝具、刀子,鉄刀片89
78		12号墳出土鉄鏃
79		12号墳出土鉄器91
80	(1)	12号墳出土鉄釘94
	(2)	12号墳出土包丁94
81		12号墳出土土師器、瓦質土器,青磁97
82	(1)	13号墳地山整形と石室全景(南から)98
	(2)	13号墳石室全景(東上から)98
83	(1)	13号墳石室全景(北上から)
	(2)	13号墳石室全景(南から)98
84	(1)	13号墳玄室右側壁99
	(2)	13号墳玄室左側壁99
85	(1)	13号墳羨道右側壁 101
	(2)	13号墳羨道左側壁 101
86	(1)	13号墳玄門と閉塞石(玄室から) 101
	(2)	13号墳墓道と閉塞石と遺物出土状態(南から) 101
87	(1)	13号墳羨道の盗難前の遺物スナップ(西から) 101
	(2)	13号墳出土須恵器①102
88		13号墳出土須恵器②102
89	(1)	13号墳出土須恵器③102
	(2)	13号墳出土土師器

90	(1)	14号墳地山整形と石室全景(南から)	106
	(2)	14号墳石室全景(東上から)	106
91	(1)	14号墳石室全景(北上から)	106
	(2)	14号墳石室全景(南上から)	106
92	(1)	14号墳玄室奥壁	
	(2)	14号墳玄室右側壁	
93	(1)	14号墳玄室左側壁	108
	(2)	14号墳の玄門と閉塞石	108
94	(1)	14号墳墓道の遺物出土状態(東から)	109
	(2)	14号墳墓道床面の遺物出土状態(東から)	
95	(1)	14号墳の墓道と奥壁	
	(2)	14号墳出土の須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
96		14号墳出土の須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	109
97	(1)	14号墳出土の須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	(2)	14号墳出土の土師器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
98	(1)	15号墳石室全景(東上から)	
	(2)	15号墳石室(北から)	
99	(1)	15号墳石室と遺物出土状態(南から)	
	(2)	15号墳出土の須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
100	(1)	16号墳石室全景(東から)	
	(2)	16号墳石室全景(南から)	
101	(1)	17号墳石室と墓道(南上から)	117
	(2)	17号墳石室全景(西上から)	117
102	(1)	17号墳石室全景(閉塞石除去後)	
	(2)	17号墳羨道と石室(墓道から)	118
103	(1)	17号墳玄室奥壁	118
	(2)	17号墳玄室右側壁	118
104	(1)	17号墳玄室左側壁	
	(2)	17号墳墓道右側壁	
105	(1)	17号墳奥壁裏込め石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	(2)	17号墳右側壁裏込め石	118
106	(1)	17号墳石室解体(西上から)	118
	(2)	17号墳石室腰石(西上から)	118

107	(1)	18号墳地山整形と石室全景(南上から)	119
	(2)	18号墳石室全景(西上から)	119
108	(1)	18号墳遺物出土状態(北上から)	120
	(2)	16,17号墳付近出土須恵器	120
	(3)	18号墳出土須恵器	120
109	(1)	19号墳全景(南上から)	121
	(2)	19号墳石室全景(東上から)	122
110	(1)	19号墳石室全景(南上から)	122
	(2)	19号墳石室(北から)	122
111	(1)	19号墳石室東側壁	122
	(2)	19号墳石室敷石	122
112	(1)	20号墳発掘前(南西から)	123
	(2)	20号墳全景(東から)	123
113	(1)	.20号墳石室全景(南上から)	125
	(2)	20号墳石室全景(北上から)	125
114	(1)	20号墳石室奥壁	125
	(2)	20号墳玄室右側壁·····	125
115	(1)	20号墳左側壁	125
	(2)	20号墳玄門と奥壁(羨道から)	125
116	(1)	20号墳玄門と閉塞石	125
	(2)	20号墳羨道右側壁	125
117	(1)	20号墳羨道左側壁·····	125
	(2)	20号墳墓道左側壁·····	125
118	(1)	20号墳石室全景(閉塞石除去後南から)	125
	(2)	20号墳石室(閉塞石除去後北から)	125
119	(1)	20号墳素掘墓道から見た石室	126
	(2)	20号墳石組墓道の遺物と小石の集積	126
120		20号墳出土須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	127
121		20号墳出土須恵器,土師器	
122	(1)	21号墳全景(南上から)	
	(2)	21号墳石室全景(南上から)	
123		21号墳出土須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	134
124	(1)	22号墳地山整形と石室全景(南から)	136

.

•

	(2)	22号墳石室全景(南から)	136
125		22号墳出土須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	136
126	(1)	22号墳出土須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	(2)	22号墳出土須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	137
127	(1)	23号墳地山整形と石室全景(南上から)	141
	(2)	23号墳石室全景(東上から)	141
128	(1)	23号墳素掘墓道と石室	141
	(2)	23号石室(閉塞石除去後)	141
129	(1)	23号墳付属小石室	141
	(2)	23号墳閉塞石と遺物出土状態	142
130		23号墳出土須恵器①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	142
131		23号墳出土須恵器②	143
132		23号墳出土土師器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	145
133	(1)	24号墳地山整形と石室全景(南上から)	147
	(2)	24号墳石室全景(西上から)	147
134	(1)	24号墳石室(東上から)	147
	(2)	24号墳玄室内遺物出土状態(南上から)	149
135		24号墳出土須惠器①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	149
136		24号墳出土須恵器②	15 2
137		24号墳出土須惠器③	154
138	(1)	25号墳墳丘全景(南から)	156
	(2)	25号墳墳丘地山整形と石室(南から)	156
139	(1)	25号墳地山整形と石室(南から)	156
	(2)	25号墳石室全景(東上から)	157
140	(1)	25号墳石室(南上から)	157
	(2)	25号墳閉塞石と墓道の遺物	157
141	(1)	25号墳玄室内遺物出土状態(東上から)	157
	(2)	25号墳羨道(墓道から)	157
1 42		25号墳出土須恵器①	157
143		25号墳出土須恵器②	160
144	(1)	25号墳出土須恵器③	161
	(2)	25号墳出土土師器	161
145	(1)	26号墳地山整形と石室全景(南から)	162

	(2)	26号墳石室全景(西上から)	163
146	(1)	26号墳石室と墓道(南西から)	163
	(2)	26号墳石室全景(北から)	163
147	(1)	26号墳石室全景(南上から)	163
	(2)	26号墳石室全景(北上から)	163
148	(1)	26号墳墓道と閉塞石(墓道から)	163
	(2)	26号墳羨道と閉塞石(玄室から)	163
149	(1)	26号墳奥壁裏込石	163
	(2)	26号墳玄室右側壁と奥壁の裏側	163
150	(1)	26号墳玄室裏込石	163
	(2)	26号墳出土須恵器と耳環	163
151	(1)	27号墳地山整形と石室全景(南から)	166
	(2)	27号墳石室全景(東上から)	166
152	(1)	27号墳墓道の遺物と石室(南から)	166
	(2)	27号墳石室全景(閉塞石除去後)	166
153	(1)	27号墳玄門と閉塞	166
	(2)	27号墳石室全景(閉塞石除去後)	166
154	(1)	27号墳玄室と羨道の遺物出土状態	166
	(2)	27号墳墓道の遺物出土状態(西上から)	166
155		27号墳出土須恵器	
156		27号墳出土須恵器,鉄器,耳環	
157	(1)	28号墳石室全景(南上から)	
	(2)	28号墳石室全景(西上から)	
158	(1)	29号墳全景と30号墳(南西上から)	
	(2)	29号墳石室全景	172
159	(1)	29号墳石室(西上から)	17 2
	(2)	29号墳石室(東上から)	172
160	(1)	30号墳石室全景(南から)	176
	(2)	30号墳石室全景(東上から)	176
161	(1)	31号墳石室全景·····	178
	(2)	31号墳石室全景·····	178
162	(1)	1 号土壙墓	179
	(2)	2 号土壙墓	180

.

		163	(1) 3 号土壙墓
			(2) 4 号土壙墓
		164	(1) 5 号土壙墓 183
			(2) 6 号土壙墓
		165	(1) 6 号土壙墓(敷石除去後)
			(2) 6 号土壙墓耳環出土状態 183
			(3) 6 号土壙墓出土耳環
		166	(1) 7号土壙墓(南上から) 185
			(2) 7 号土壙墓内水晶玉, 鉄鏃出土状態
		167	(1) 7 号土壙墓(遺物除去後)
			(2) 7 号土壙墓出土鉄製工具
		168	7 号土壙墓出土鉄釘 187
		169	(1) 8号土壙墓(西から) 188
			(2) 8 号土壙墓(東から) 188
		170	(1) 9号土壙墓
			(2) 10号土壙墓 188
		171	鉱滓の顕微鏡組織 206
		172	鉱滓の顕微鏡組織 206
		173	下白水大塚古墳出土土鈴① · · · · · · 216
		174	下白水大塚古墳出土土鈴② 216
		175	下白水大塚古墳出土土製品216
		176	下白水大塚古墳出土土製品 219
			插 図 目 次
	1		山陽新幹線の路線と博多車輌基地の位置(佐々木隆彦作成)本文挿入み
第	2	図	山陽新幹線博多総合車輌基地付近地形図及び遺跡分布図
4.62	_		(日本国有鉄道原図,木下修作成) ··········本文折込み
	3		観音山古墳群中原Ⅲ支群地形実測図(各担当者実測,高田弘信製図)本文折込み
		図	*古墳各部の名称(柳田作成)
		図	ベルトコンベアーによる排土作業(柳田撮影)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
		図	8 号墳の発掘調査(柳田撮影)
第	7	図	11号墳と13号墳の発掘作業風景(柳田撮影)7

.

第 8	図	25号墳から西側の発掘調査風景(柳田撮影) 8
第 9	図	1号墳地形実測図(井上・櫻井実測,荒武製図) 9
第 10	図	1号墳丘断面図(木下・櫻井実測,井上製図)10
第 11	図	1号墳石室実測図(木下・櫻井・渡辺実測, 荒武製図)折込み
第 12	図	1号墳石室プラン及び遺物出土状態実測図(木下・櫻井実測,荒武製図)…11
第 13	図	1号墳出土須恵器実測図(井上実測,製図)12
第 14	図	1号墳出土土師器・磁器実測図(井上実測,製図)14
第 15	図	1号墳出土耳環・鉄鏃・帯金具実測図(井上実測,製図)15
第 16	図	2号墳墳丘実測図(宮小路賀宏・靏久嗣郎・井上実測,井上製図)17
第 17	図	2・3号墳地形実測図(宮小路・靏久・井上実測, 井上製図)折込み
第 18	図	2号墳墳丘断面図(櫻井・木太久守実測,井上製図)18
第 19	図	2号墳石室実測図(宮小路・井上実測,井上製図)折込み
第 20	図	2 号墳出土須恵器実測図(1) (井上実測, 製図)20
第 21	図	2号墳出土須恵器実測図(2)(小林実測,製図)22
第 22	図	2号墳出土耳環実測図(井上実測,製図)23
第 23	図	3号墳石室実測図(池辺・桑田実測,井上製図)24
第 24	図	3号墳出土土器実測図(小林実測,荒武製図)25
第 25	図	4号墳地形実測図(高田一弘・高田(弘)実測、井上製図)折込み
第 26	図	4号墳出土須恵器実測図(井上実測,製図)27
第 27	図	4号墳出土土師器実測図(井上実測,製図)30
第 28	図	4号墳出土鉄鏃実測図(井上実測,製図)30
第 29	図	5・6号墳地形実測図(高田(一)・高田(弘)実測,井上製図)折込み
第 30	図	5号墳墳丘断面図(井上・渡辺実測,井上製図)折込み
第 31	図	5号墳石室実測図(池辺・若月省吾実測,井上製図) 折込み
第 32	図	5号墳出土須恵器実測図(井上実測,製図)33
第 33	図	5号墳出土土師器・手揑土器実測図(井上実測,製図)35
第 34	図	5号墳出土土製品実測図(小林実測,井上製図)36
第 35	図	5号墳出土鉄器実測図(井上実測,製図)37
第 36	図	6号墳墳丘断面図(櫻井・三津井・渡辺実測,井上製図)折込み
第 37	図	6号墳石室実測図(井上・石田広美・渡辺・佐藤晴久実測, 井上製図)…折込み
第 38	図	6 号墳石室プラン実測図(井上・石田・渡辺実測,井上製図)40
第 39	図	6号墳出土須恵器(1~8)・土師器(9)中世土師器(10)実測図
		(井上実測, 製図)

第	40	図	6号墳出土刀子実測図(井上実測,製図)43
第	41	図	6 号墳周轟内木棺墓実測図(井上実測,製図)44
第	4 2	図	6 号墳土壙内出土鉄釘実測図(井上実測,製図)45
第	4 3	図	6 号墳配石遺構実測図(河野・渡辺実測,井上製図) 45
第	44	図	祭祀遺構実測図(井上・石田・佐藤実測、井上製図)折込み
第	45	図	6号墳祭祀遺構出土装身具・鉄器実測図(井上実測,製図)46
第	46	図	7 号墳墳丘実測図(高田(一)実測・木下製図)48
第	47	図	7 号墳墳丘断面図(木下・三津井・塚脇康宏実測,木下製図)折込み
第	48	図	7・8・9号墳地形実測図(高田(一)・高田(弘)実測,木下製図)折込み
第	49	図	7号墳石室実測図(木下・山口・池辺・桑田・三津井実測, 木上製図)…折込み
第	50	図	7号墳石室プラン実測図(三津井実測,木下製図) 49
第	51	図	7号墳出土須恵器実測図(1)(木下実測,製図)51
第	52	図	7号墳出土須恵器実測図(2)(木下実測、製図) 52
第	53	図	7号墳出土須恵器実測図(3)(木下実測,小林製図)53
第	54	図	7号墳出土土師器実測図(木下実測,製図)53
第	55	図	8号墳墳丘実測図(高田(一)・高田(弘)実測, 木下製図)55
第	56	図	8 号墳墳丘断面図(木下・三津井実測,荒武製図) 折込み
第	57	図	8号墳石室実測図(木下・山口・三津井実測,木下製図)折込み
第	58	図	8号墳出土須恵器実測図(1)(木下実測,製図)57
第	59	図	8号墳出土須恵器実測図(2)(木下実測,製図)58
第	60	図	8号墳出土土鈴・鉄釘実測図(小田実測,木下製図) 58
第	61	図	9号墳墳丘実測図(高田(一)・高田(弘)実測,木下製図)60
第	62	図	9 号墳石室実測図(三津井・塚脇実測,木下製図)61
第	63	図	9号墳出土須恵器実測図(木下実測,製図)63
第	64	図	10号墳墳丘実測図(高田(一)・高田(弘)実測,小田製図)65
第	65	図	10号墳墳丘断面図(宮崎・松村実測,木下製図)折込み
第	66	図	10号墳石室実測図(木下・山口・桑田・三津井・石田実測, 荒武製図)…折込み
第	67	図	10号墳出土須恵器実測図(小林実測,製図)67
第	68	図	10号墳出土土師器実測図(小林実測,荒武製図)68
第	69	図	10号墳出土土鍋実測図(井上実測,荒武製図)69
第	70	図	11・15号墳墳丘実測図(高田(一)・高田(弘)実測, 荒武製図)70
第	71	図	11号墳墳丘断面図(木下・宮崎・松村・三津井実測・小林製図)折込み
第	72	図	11号~20号墳地山整形実測図(高田(一)・高田(弘)実測,荒武製図)…折込み

第	7 3	図	11号墳石室実測図(柳田・桑田実測,荒武製図)折込み
第	74	図	11号墳石室内遺物出土状態(柳田・桑田実測,荒武製図)73
第	75	図	11号墳出土須恵器実測図(1)(小田・小林実側,小林製図)75
第	76	図	11号墳出土須恵器実測図(2)(小田・小林実測,荒武製図)76
第	77	図	11号墳出土須恵器実測図(3)(小田・小林実測,小林製図)78
第	78	図	11号墳出土土師器実測図(小田·小林実測,小林製図) ·····79
第	79	図	11号墳出土金環実測図(小田実測,柳田製図)79
第	80	図	11号墳出土鉄鏃実測図(柳田実測,製図)80
第	81	図	11号墳出土鉄釘実測図(柳田実測,製図)81
第	82	図	12号墳墳丘実測図(高田(一)・高田(弘)実測,小田製図)83
第	83	図	12号墳墳丘断面図(木下・三津井・桑田・森田・渡辺実測, 荒武製図)…折込み
第	84	図	12号墳石室実測図(池辺・若月実測, 荒武製図) … 折込み
第	85	図	12号墳石室内遺物出土状態(池辺・若月実測、荒武製図)85
第	86	図	12号墳出土須恵器実測図(1)(柳田実測,小林製図)86
第	87	図	12号墳出土須恵器実測図(2)(小田・小林実測,小林製図)87
第	88	図	12号墳出土須恵器実測図(3)(小田実測,小林製図88
第	89	図	12号墳出土須恵器実測図(4)(小田実測,小林製図)90
第	90	図	12号墳出土耳環実測図(小田実測,柳田製図) … 90
第	91	図	12号墳出土丸玉実測図(柳田実測,製図) 90
第	92	図	12号墳出土武器実測図(柳田実測,製図) … 91
第	93	図	12号墳出土鉄鏃実測図(柳田・小田実測,柳田製図)92
第	94	図	12号墳出土鉄器実測図(柳田実測,製図) 93
第	95	図	12号墳出土鉄釘実測図(柳田実測,製図) … 94
第	96	図	12号墳出土鉄器実測図(柳田実測,製図)95
第	97	図	12号墳出土土師器実測図(小田実測,小林製図)95
第	98	図	12号墳出土土師質・瓦質土器実測図(小田実測, 荒武製図)96
第	99	図	12号墳出土青磁・石鍋実測図(小田実測,荒武製図)97
第	100	図	13号墳墳丘実測図(高田(一)・高田(弘)実測,小田製図)99
第	101	図	13号墳墳丘断面図(木下・三津井・桑田・渡辺実測,木下製図)99
第	102	図	13号墳石室実測図(柳田·高田実測,小田製図)······ 100
第	103	図	13号墳出土須恵器実測図(小林実測,荒武製図) 103
第	104	図	13号墳出土須恵器実測図(小林実測,製図) … 104
第	105	図	13号墳出土須恵器・土師器実測図(小林実測,製図) 105

第 106 図	13号墳出土鉄器実測図(柳田実測,製図) 106
第 107 図	14・15・16・17号墳墳丘実測図(高田(一)・高田(弘)実測, 小田製図)… 107
第 108 図	14号墳墳丘断面図(桑田・渡辺実測,小林製図)折込み
第 109 図	14号墳石室実測図(柳田・池辺・桑田・渡辺実測,小田製図)折込み
第 110 図	14号墳石室プラン・掘方実測図
	(柳田・池辺・桑田・渡辺実測,小田製図) 108
第 111 図	14号墳出土須恵器実測図(1)(木下洋子実測,小林製図) 110
第 112 図	14号墳出土須恵器実測図(2)(木下(洋)実測,小林製図) 112
第 113 図	14号墳出土須恵器実測図(3)(木下(洋)実測,小林製図) 112
第 114 図	14号墳出土須恵器実測図⑷(小林実測,製図) 113
第 115 図	14号墳出土土師器実測図(木下(洋)実測,小林製図) 113
第 116 図	15号墳石棺実測図(池辺・渡辺実測,小田製図) 114
第 117 図	15号墳出土須恵器実測図(小林実測,荒武製図) 115
第 118 図	16号墳石棺実測図(池辺・渡辺実測,小田製図) 116
第 119 図	16・17号墳附近出土須恵器実測図(小林実測,荒武製図) 116
第 120 図	17号墳石室実測図(池辺実測,小田製図) 117
第121図	18号墳石棺実測図(池辺・渡辺実測,小田製図) 119
第 122 図	18号墳出土須恵器実測図(小田実測,荒武製図) 120
第 123 図	19・14号墳墳丘実測図(高田(一)・高田(弘)実測,小林製図) 121
第 124 図	19号墳石棺実測図(三津井実測,小田製図) 122
第 125 図	19号墳出土須恵器実測図(小田実測,荒武製図) 123
第126図	18・20・21・23・24号墳墳丘実測図
	(高田(一)・高田(弘)実測,小田製図) 124
第 127 図	20号墳墳丘実測図(櫻井・高田(一)・高田(弘)実測,木下製図) 125
第 128 図	20号墳墳丘断面図(木下・櫻井・肥山・渡辺実測,荒武製図)折込み
第 129 図	14~31号墳地山整形実測図(高田(一)・高田(弘)実測,小田製図)折込み
第 130 図	20号墳石室実測図(柳田実測,小田製図)折込み
第131図	20号墳出土須恵器実測図(1)(木下(洋)実測,小林製図) 127
第 132 図	20号墳出土須恵器実測図(2)(小田・小林実測,小林製図) 129
第 133 図	20号墳出土須恵器実測図(3)(小林実測,製図) 130
第 134 図	20号墳出土土師器実測図(小林実測,製図) 131
第 135 図	21・27墳墳丘実測図(櫻井・高田(一)実測,小田製図) 132
第 136 図	21号墳石室実測図(櫻井実測,荒武製図) 133

		21号墳石室内遺物出土状態(櫻井実測,荒武製図) 134
	第 138 図	21号墳出土須恵器実測図(小田・丸山康晴実測,小林製図) 135
	第 139 図	22号墳石室実測図(櫻井実測,製図)折込み
	第140図	22号墳石室内遺物出土状態(櫻井実測,荒武製図) 136
	第141図	22号墳出土須恵器実測図(1)(小田実測,荒武製図) 137
	第 142 図	22号墳出土須恵器実測図(2)(丸山実測,荒武製図) … 138
	第 143 図	22号墳出土須恵器実測図(3)(小田・小林実測,小林製図) 139
	第 144 図	22号墳出土土師器実測図(丸山・小林実測, 荒武製図) 140
	第 145 図	22号墳出土土鍋実測図(小田実測,荒武製図) 140
	第 146 図	23号墳墳丘実測図(櫻井実測,小田製図) 141
	第 147 図	23号墳石室実測図(櫻井実測,製図)折込み
	第 148 図	23号墳出土須恵器実測図(1)(小林実測,製図) 143
	第 149 図	23号墳出土須恵器実測図(2)(小林実測,製図) 145
	第 150 図	23号墳出土土師器実測図(小林実測,製図) 146
	第 151 図	24号墳石室実測図(柳田実測,荒武製図) 148
	第 152 図	24号墳石室内遺物出土状態(柳田実測,荒武製図) 150
	第 153 図	24号墳出土須恵器実測図(1) (木下(洋)実測,荒武製図) … 151
	第 154 図	24号墳出土須恵器実測図(2)(木下(洋)実測,小林製図) … 153
	第 155 図	24号墳出土須恵器実測図(小林実測,製図) 154
	第 156 図	24号墳出土土師器実測図(小林実測,製図) 155
	第 157 図	24号墳出土刀子実測図(柳田実測, 製図) 155
	第 158 図	25号墳墳丘実測図(櫻井実測,小田製図) 156
	第 159 図	25号墳墳丘断面図(櫻井・肥山・森田・渡辺実測, 小林製図)折込み
•	第 160 図	25号墳石室実測図(櫻井実測,製図)折込み
	第 161 図	25号墳出土須恵器実測図(櫻井実測,小林製図) 158
:	第 162 図	25号墳出土須恵器実測図(櫻井実測,小林製図) 160
	第 163 図	25号墳出土須恵器実測図(櫻井実測,荒武製図) 161
:	第 164 図	25号墳出土歴史時代土師器実測図(櫻井・小田実測,小林製図) 161
į	第 165 図	26・31号墳墳丘実測図(櫻井実測,小田製図) 162
3	第 166 図	26号墳墳丘断面図(櫻井・肥山・桑田実測,小林製図)折込み
ĝ	第 167 図	26号墳石室実測図(櫻井実測,製図)折込み
j	第 168 図	26号墳出土須恵器実測図(小林実測,荒武製図) 164
ğ	第 169 図	26号墳出土土師質土器実測図(丸山実測,小林製図) 165

第 170 図	26号墳出土金環実測図(小田実測,製図) 165
第 171 図	27号墳石室実測図(櫻井実測,製図) 折込み
第 172 図	27号墳石室内遺物出土状態(櫻井実測,荒武製図) 167
第 173 図	27号墳出土須恵器実測図(1)(櫻井・小林実測,小林製図) 168
第 174 図	27号墳出土須恵器実測図(2)(櫻井・小林実測,小林製図) 169
第 175 図	27号墳出土鉄器・耳環実測図(柳田実測, 製図) 170
第 176 図	28号墳石室実測図(櫻井実測,小林製図) 171
第177図	28号墳石室プラン実測図(櫻井実測,荒武製図)172
第 178 図	22・29・30号墳墳丘実測図 (高田(一)実測, 小田製図) 173
第 179 図	29号墳石室実測図(池辺・渡辺実測,小林製図) 174
第 180 図	29号墳出土須恵器・中世土師器実測図(木下実測, 製図) 175
第 181 図	30号墳石室実測図(池辺・渡辺実測, 小田製図) 176
第 182 図	30号墳出土須恵器実測図(木下実測,製図)
第 183 図	31号墳石棺実測図(池辺・渡辺実測, 小田製図) 178
第 184 図	1号土壙墓実測図(池辺・桑田実測,高田(弘)製図 179
第 185 図	2・3号土壙墓実測図(池辺・桑田実測,高田(弘)製図)180
第 186 図	4号土壙墓実測図(池辺・桑田実測,高田製図) 181
第 187 図	5 ・ 6 号土壙墓実測図(池辺・桑田実測,高田製図) 182
第 188 図	6 号土壙墓出土金環実測図(小林実測,柳田製図) 183
第 189 図	7号土壙墓実測図(池辺実測,高田(弘)製図) 184
第 190 図	7号土壙墓出土鉄器実測図(柳田実測,製図) 185
第 191 図	7号土壙墓出土鉄釘実測図(柳田実測,製図) 186
第 192 図	8~10号土壙墓実測図(池辺実測,高田(弘)製図) 189
第193図	春日・那珂川地区の古墳時代遺跡分布図(柳田作成)本文折込み
第 194 図	観音山古墳群中原Ⅲ支群発掘区全体遺構配置図(各担当者実測,高田(弘)
	製図)折込み
第 195 図	観音山古墳群中原 Ⅱ 支群の墓道復原(柳田作成)本文折込み
第 196 図	須恵器蓋・身分類図(木下作成) 203
第 197 図	返りの有無による法量図(木下作成) 204
第 198 図	下白水大塚古墳出土土鈴実測図(小林実測,製図)217
第 199 図	下白水大塚古墳出土土製品実測図(小林実測,製図)218

表 目 次

1 山陽新幹線関係遺跡一覧表(瓥久嗣郎作成)本文折込み	表1
2	表2
3 春日・那珂川地区古墳時代地名表(柳田作成) 192	表3
4 須恵器杯蓋・杯身分類表(木下作成)200・201	表4
5 供試鉱滓の履歴及び調査項目(大澤作成) 206	表5
6 古墳供献鉱滓の化学組成(大澤作成) 209	表6
7 福岡県における鉱滓供献古墳一覧表(大澤作成)本文折込み	表7
8 県外における鉱滓供献(出土)古墳一覧表(大澤作成)本文折込み	表 8

I 序 文

本書は、筑紫郡那珂川町大字中原に所在する観音山古墳群中の中原支群(第38・40~43・45~49・49-1~4・51地点)の発掘調査報告書である。

観音山古墳群とは、観音山と称する標高 132 mの山の裾に群集する古墳群全体をさすものであり、大字中原から大字松木に分布している。調査の対象になったのは、車輌基地南端にあたり、古墳の最も密集度の高い大字中原字深原に中心を置き、一部字井手ノ原と大字松木字ッタカ尻に所在する中原 II 支群と命名したものである。

今回調査した地域は、一度宅地造成のため削平されており、分布調査の時点では笹とつる草が繁茂し、人の進入を許さなかった。したがって、古墳として確認されたものは少なく、当初第38・40~43・45~47・49・51地点の番号であげられていた10基だけであった。しかし、実際に発掘を開始するに先立って伐採を行なったところ、破壊されて墳丘が目立たなくなった古墳が多数確認される一方、第40~43・49・51地点の番号が付されたものは、造成のため移動した古墳の石材と土砂の集積であることが判明したので、新発見の古墳に番号を付けなおした。しかし、新発見の古墳が多いため、地点の近い第49地点に第49—1~4として付加した。

このように本格的に観音山古墳群の発掘調査を開始したのは昭和47年11月24日からであったが、第38・45~48地点は予備調査的に昭和46年8月17日から11月30日と昭和47年2月1日から3月31日までに調査を実施している。第38地点は古墳として調査したが、第48地点は縄文時代遺物散布地として調査を開始し、埋没した古墳2基(5・6号墳)を発見して年度末で調査を中止した。第45~47地点の3基の古墳は、地形測量を実施しただけであった。

観音山古墳群の発掘調査は、昭和46年度と昭和47・48年度の3年度に渡って実施され、発掘 調査関係者は次のとおりである。

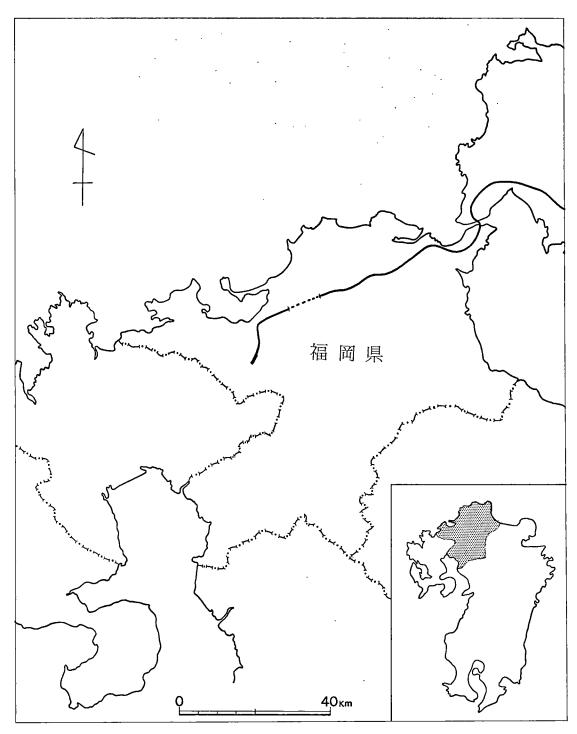
福岡県教育委員会

総	括	教 育 長	吉	久	勝	美(昭和46年度)
		同	森	田		實
		教 育 次 長	村	上		智(昭和46年度)
		同	西	村	太	郎
		文化課課長	岩	下	光	弘(昭和46年度)
		同	古	Ж	善	久(昭和47年度)
		同	森		英	俊(昭和48年度)
		同 課長補佐	菅			隆

	同 課長	補佐	今	井	岩	男(昭和48年度)
庶 務	庶 務 係	長	姫	野		博
	同		前	田	栄	ー (昭和47・48年度)
	主	事	小	川	浩 一	・郎
	同		植	田		實(昭和48年度)
	嘱	託	吉	村	源	七
発掘調査	課長技術	補佐	渡	辺	Œ	気(昭和46年度)
	同		藤	井		功
	調査係	長	藤	井		功(昭和46年度)
	同		松	畄		史
	技 術 主	查	靍	久	嗣	郎(昭和46年度)
	技	師	宮 小	路	賀	宏(昭和46年度)
	同		柳	田	康	雄(昭和47・48年度)
	同		井	上	裕	弘
	司		木	下		修(昭和48年度)
	調査	員	木	下		修(昭和47年度)
	同		櫻	井	康	治(昭和47・48年度)

外に調査補助員として、高田一弘・肥山正秀・池辺元明・石田宏美・宮崎貴夫・三津井知廣 ・渡辺和子・桑田和義・佐藤晴久・松村恵司が参加した。

なお、国鉄関係者は「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第1・2集に示すとおり。

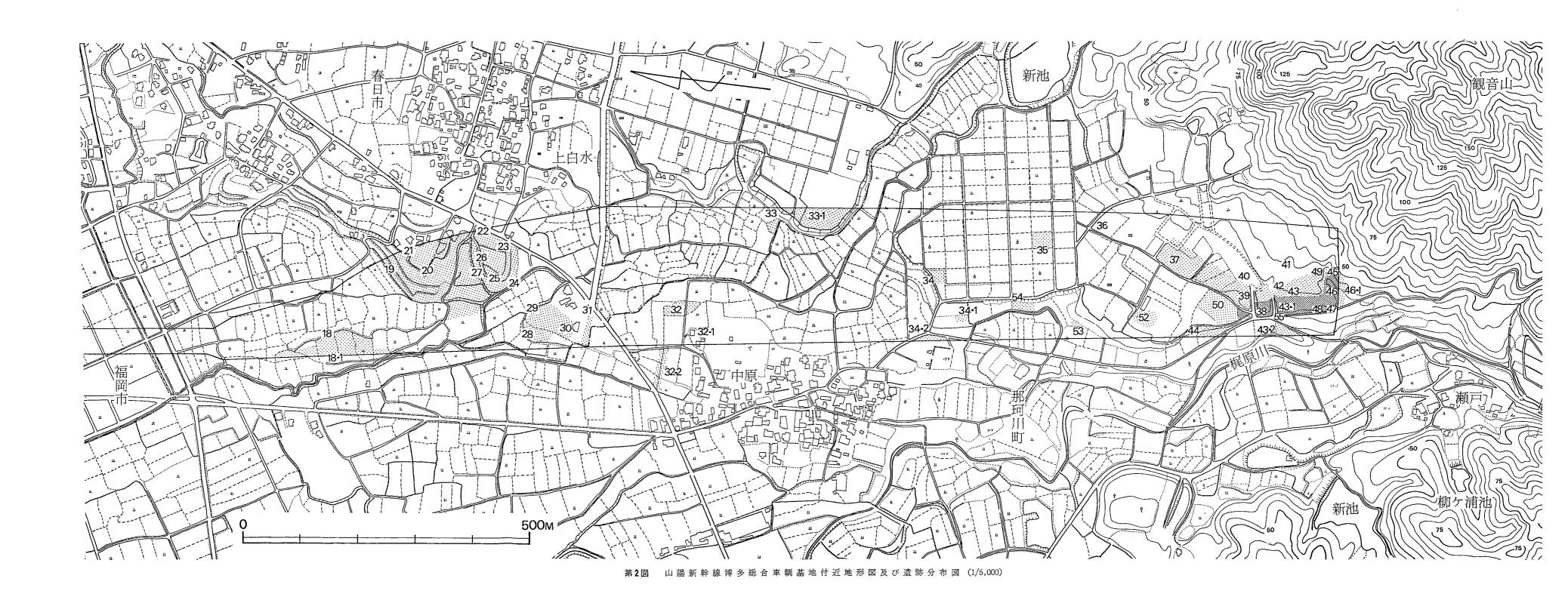


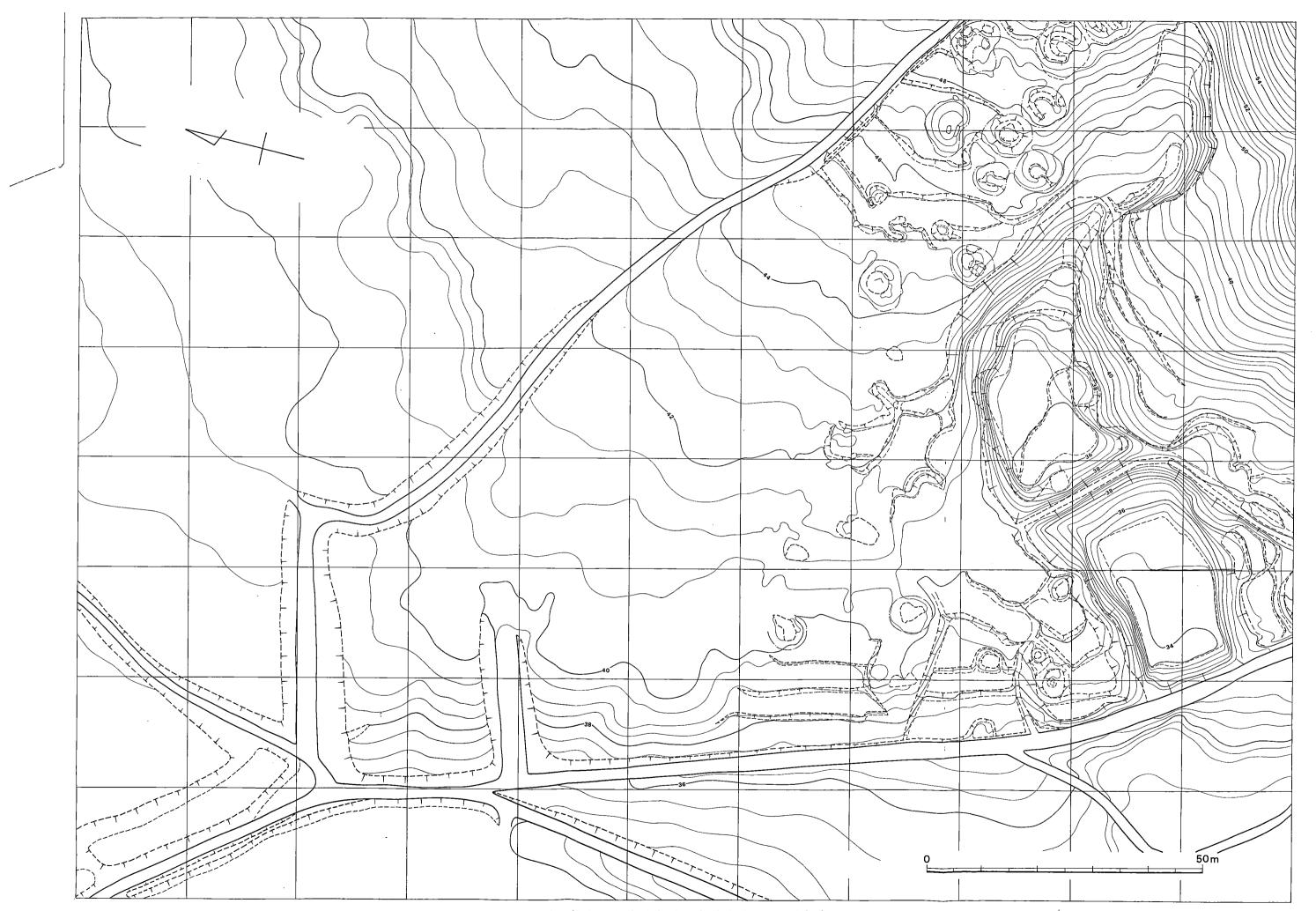
第1図 山陽新幹線の路線と博多車輌基地の位置 (1/1,000,000)

表1 山陽新幹線関係遺跡一覧表

3 小田山墓地 鞍手郡鞍手町中山 近世墓地 加 加 加 加 加 加 1集 4 下松尾墓地 川 川 川 近世墓地 加 加 加 加 加 1集 5 京尾遺跡 川 宮木 中世配石遺構 一 加 加 加 加 加 加 加 加 加										調	 査 終	了	 i 積			
4 下足の基地 2 2 2 2 2 2 2 2 2	地点番号	遺跡	名	所	右	E	地	内 容	46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度		報告書
4 下原及産族	3	小田山道	生 抽	松毛那 都	北毛用	r d ılı		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	ni	m²	m²	m³		\overline{m}^{3}		1集
5 京民 漫態 * 密報 中世紀の選集 - の * 過程 * 過程 <t< td=""><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>_</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></t<>										_						
6 書名集 世 / 名数世 / 少 全人 大阪 / 近世整性 229 一月 田 京 遠 遊 / 少 全人 大阪 / 近世整性 / / 方 6-1 田 京 遠 遊 / 少 全人 大阪 / 近世整性 2,035 3,000				ļ —————		_				_			-			"
6-0-1				·	-					229						"
6-1 司 皮 連 座 " ** 金丸 · 久原 計算、医皮肉件: 在補除 2,035 3,000 連絡した。 ** /* ** 6-2 別 当 屋 / ** " ** / 作 屋 / ** " ** / 作 屋 / ** ** / 作 屋 / ** " ** <		<u> </u>					_								調査前に工事のため改葬。	"
6-2 別 性 聚		田尻漬	脉							2,035		3,000				"
6-3 八 権 聚										146					遺構・遺物なし。	"
7 杉田 遠 路										16			300			
18				-			:								遺構なし。	1集
18		12 14 16	7 1931	- 			•			100						"
18-2											790					4集
18-2		柏田遺	動	春日市」	上白力	K		遺構,溝状遺構				2,100	1,000		昭和49年度は、別府大学に一部調査委嘱。	"
19-27 円 追 跡				"	"								,			
28~31 下原遺跡 // // // // // // // // // // // // //	19~27	門田道	計	"				先土器~歴史時代:住居跡, 貯蔵穴, 甕棺墓, 石棺墓, 土壙墓, 古墳5基		予備調査 (4,500)	7,170	9,700	4,570		昭和48年度に,門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱。	3集(門田地区・ 生活遺構のみ)
32-1	28~31	下原遺	計跡	"	"			古墳時代:住居跡	2,784							3 集
32-2 久保遠跡	32	油田遺	計跡	筑紫郡那	邦珂丿	[町中	原	古墳時代: 散布地		690				<u> </u>		2集
	32—1	_//		"	"	"		古墳時代:				300				//
第 古 墳 群 // // // // // // // // // // // // //	32-2	久保湿	量 跡	"	"	"		縄文, 歴史時代: 溝状遺構		_				700_		
33-1	33			春日市」	上白力	k	·	古墳時代:散布地			197	,				2集
原 遺 跡	00 1	原古墳	貫群					円墳3基,周溝墓8基,土壙墓4基			1,725	800	1 510			"
34-1 34-2 鳥ノ巣遺跡 " " " " 先土器, 縄文時代: 散布地 267 別府大学に調査委嘱。 35 " " " " " 近世: 資標(かんのん道) 200 5集 37, 39 50, 55 井手/原遺跡 " " " " 中世: 方形区画遺構, 溝状遺構 1,814 1,515 1,500 2集 38, 40~43 45~49 49-1-4, 51 報音山古墳群 " " " " 古墳31基 707 6,400 220 昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱。 43-1 43-2 深原 遺跡 " " " 離文時代: 石組炉跡32基, 円形竪穴遺構 1,840 2,540 昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱。 44 " " " 中世: 散布地 271 1,021 46-1 " " " " 離文, 古墳: 散布地 452 1,021 52 " " " " 古墳時代: 散布地 452 遺構なし。 53 " " " " " お毎代: 散布地 123 遺構なし。 54 " " " " " " " お毎代: 散布地 150 遺構なし。	331	原 遺	跡		"			縄文時代早期,弥生時代甕棺墓				800	1,510		一部保存	
34-2	34			筑紫郡那	邦珂儿	川町中	原	弥生時代:散布地		135				<u> </u>	遺構・遺物なし。	
34-2 35	341	自 , 光 :	电叶	,,	,,	,,	,	生十里 建立時代·粉布地		267						
36	34—2	一局 / 果)	退跡	<i>"</i>		″		九上帝,相又时代,权利地		<u>.</u>	288				別府大学に調査委嘱。	
37, 39 50, 55 55, 55 55, 55 38, 40~43 45~49 49-1~4, 51 排手 / 原遺跡	35			"	"	"	•	中世:散布地			200					-
50, 55 分子子/原过師 " " " " " " " " " " " " " " " " " " "				"	"	"	•	近世:道標(かんのん道)								
38, 40~43 45~49 49-1-4, 51 観音山古墳群 中原支群 " " " " 古墳31基 707 6,400 220 昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱。 43-1 43-2 深原遺跡 " " " " # 縄文時代:石組炉跡32基,円形竪穴遺構 1,840 2,540 昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱。 44 " " " " # 中世:散布地 271 46-1 " " " " # 縄文, 古墳:散布地 1,021 52 " " " " 中世:散布地 452 53 " " " " 古墳時代:散布地 123 遺構なし。 54 " " " " " " " " " " " " " " " " " " "	37, 39 50, 55	井手ノ原	遺跡	"	"	//	•	中世:方形区画遺構, 溝状遺構	1,814	1,515	1,500			-		2集
43-1 43-2 深原遺跡 パパパパ 機文時代:石組炉跡32基,円形堅穴遺 構 1,840 1,840 2,540 昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱。 44 パパパ	38, 40~43 45~49	観音山古中 原 す	墳群	"	"	"	•	古墳31基	707	6,400	220					5 集
43-2 深原道跡			ts ++1					縄文時代:石組炉跡32基。円形堅穴清		1,840	2,540				昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱。	
44 パ パ パ パ 中世:散布地 271 1,021 46-1 パ パ パ パ 神世:散布地 1,021 52 パ パ パ ア 中世:散布地 452 53 パ パ パ パ 方墳時代:散布地 123 遺構なし。 54 別 パ パ パ 野生,古墳時代:散布地 150	l	深 原 遺	動	//	"	"	•	構								
46-1 " " " " 編文, 古墳: 散布地 1,021 52 " " " " 中世: 散布地 452 53 " " " " 古墳時代: 散布地 123 遺構なし。 54 " " " " 弥生, 古墳時代: 散布地 150				"	"	"	,	中世:散布地		271						
52 " " " " 中世: 散布地 452 53 " " " " 古墳時代: 散布地 123 遺構なし。 54 " " " " 弥生, 古墳時代: 散布地 150		-		"										1,021		
53 パ パ パ パ カ 古墳時代:散布地 123 遺構なし。 54 パ パ パ パ 弥生,古墳時代:散布地 150		· · ·		"						452						
54	`-			"		_	-			-					遺構なし。	
				"									-			
							-	- 		1	95					
合 計 5,305 14,369 14,829 15,900 7,380 1,721	0.1	·							5,305	14.369		15.900	7,380	1,721		

- 註 1. 地点番号1,2は北九州市教育委員会,9~17は福岡市教育委員会が調査を担当した。
 - 2. 路線以外の付帯施設にかかわる調査地点は上表に含めてある。
 - 3. 面積欄に (一) で示したものは調査面積としてはあげないが当該年度に調査したことを示す。





第3図 観音山古墳群中原Ⅲ支群地形実測図(1/600)

Ⅱ 調査の経過

山陽新幹線関係埋蔵文化財の発掘調査は、国鉄の要望に応じ昭和46年度から着手すべく、当教育委員会は対応したが、国鉄の用地買収交渉が難行し、発掘調査についての地権者の承諾がえられないままに半年ちかくが経過した。こうして最初に発掘調査に着手できたのが、第38・第55地点であった。

1. 報告にあたって

観音山古墳群とは、前章で述べたように観音山山裾に群集する 古墳群 に対して付 けた 名称で、そのうちその大半が大字中原に所属するものを中原支群として分類した。大字中原に含まれる地域には、さらに 3 群に細分できる各古墳群がある。 1 つは観音山の東側の 1 つの尾根線上にあるもの、もう 1 つは北側の 大徳寺周辺に 点在するものと今回報告の 古墳群の 3 群である。この 3 古墳群は地区が離れていると同時に、東側の群は尾根線上に並び、北側の群は間隔を置いて点在するありかたを示し、報告分のように密集していない。ここで前 2 者と区別するために、東側の群を中原 Ⅰ 群、北側を中原 Ⅰ 群、今回報告の分を中原 Ⅱ 群としたい。つまり、観音山古墳群中原 Ⅱ 一 1 ~ 31 号墳と呼ぶことにするが、この報告は中原 Ⅱ 群のみであるから、文章中にはとくに Ⅲ 群を頭に付さない。

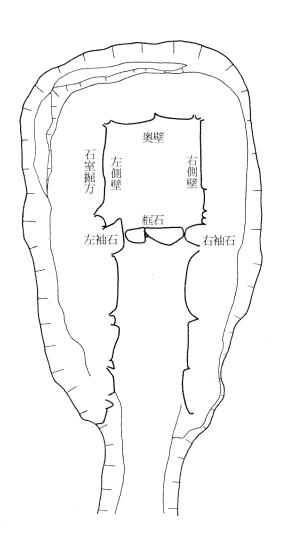
古墳の石室その他の各名称について、各報告書で違った呼び方が行なわれているが、観音山 古墳群中原 II 群の各古墳については、その当否は別として第4図に示すように統一することに した。墳丘と周溝の各地区名称については、石室主軸がほぼ南北にあるため、墳丘断面図が南 北断面と北側断面となり、この4分された墳丘をそれぞれ北東側・北西側・南西側・南東側墳 丘と呼んでいる。

墳丘規模の計測については、周溝を規準とし、墳丘径は石室を中心に周溝底部の内側の線間 の距離、墳丘高は周溝底部からの高さとした。

山陽新幹線関係の埋蔵文化財の発掘調査においては、可能なかぎり遺跡の全面調査の方針を 貫いてきた。古墳の調査においては、それが破壊されることが前提にあれば、墳丘断面図の作 成のみでなく、築造年代を決定するには墳丘盛土を除去し、盛土および地山直上の土器群を確 認することが常識となっている。また、このことは石室構築前の地山整形の調査にもつながる ことである。終末期古墳群になれば、古墳の周囲に小石室墳や石棺墓を営むことがあり墓道と の関連からも墓域全体の調査が必要になってくる。このことは昭和47年の予備調査でも痛感し

たことであった。

この調査方針は一応満足させることができたが、山陽新幹線 博多開業 は国鉄 にとって急務で、当方も造成地内の古墳群で当初の古墳予定数よりかなりオーバーしたため、石室の実測において片面を省略せざるをえなくなったところもある。しかし、全面調査の成果は大きく、小石室墳や石棺墓の発見に加えて、土壙墓群と長い墓道の検出は、古墳群構成を検討するよき資料となった。



第4図 古墳各部の名称



2. 調査の経過

昭和46年度の調査は、最初に用地交渉が成立したナショナル住建K.K.が宅地造成を行なった地域に含まれる第38・55地点を昭和46年8月17日から11月30日まで実施した。

第38地点は奥壁付近が露出している破壊墳として調査した。古墳は造成とその進入路により破壊され、墳丘はもちろん石室も天井部と奥壁を失なっていた。これが後で決定した2号墳である。周溝検出のための全面調査で、縄文時代の遺物や中世遺構も発見された。

第55地点は縄文時代遺物散布地であった。伐採から始め、表土剝ぎを行なった結果、表土下から縄文時代土器片や石器を発見したが、遺構としては4号墳とした破壊墳の周溝と墓道を検出したのが最初であった。

さらに南側に発掘区を広げたところ、墳丘を削平され石室を破壊された6号墳と造成で一部 天井石を失なっているが完全に埋没していた5号墳を発見した。

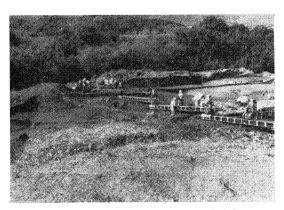
第38・55地点は調査着手の結果、調査なかばにして予期しなかった古墳の密集度と縄文時代遺物の出土量から、調査方針の再検討を余儀なくされたため調査を中止することになった。

第1号墳は、井手の原遺跡に含まれる第50地点の南端で発見された。墳丘は完全に削平され畑として利用されていたので、散布地として調査を始めたが、上部を破壊された石室が検出されたため、調査の主体は古墳に移った。第50地点の調査は、中止期間をはさんで昭和47年9月26日から12月26日まで実施した。

以上の教訓から、造成地内にはかなりの破壊墳が埋没していることが予想されると同時に全面に縄文時代遺構が存在する可能性があるため、確認されている古墳の調査だけでなく、全面の表土剝ぎを行ない、古墳も墳丘の調査後に盛土の除去まで行なうことにした。

この本格的調査は、昭和47年11月24日から昭和48年7月24日まで実施した。

- 11月24日 朝から発掘現場に発掘用具を運搬する。現場では、テント設営と48地点 東側の伐採を行なう。午後から55地点の 表土剝ぎを行なう。
- 11月27日 55地点の伐採と表土剝ぎを続行 する。
- 11月28日 55地点では大きな弧を描く細い 溝が検出されたので、この掘り下げにか かる。前年度発掘区南側に接して、小さ な横穴式石室が現われた。3号墳である。



第5図 ベルトコンベアーによる排土作業

- 11月29日 48地点付近は縄文関係の遺物が多く、また 4 号墳の周溝が半分未調査になっている ので、前年度の排土を除去して全面調査にかかった。
- 12月2日 調査を中断していた1号墳の実測を開始する。一方古墳群全体の伐採も続行。
- 12月4日 伐採を続行する。古墳群の範囲が限定できたので、古墳のない部分をブルドーザで表土剝ぎを開始する。
- 12月6日 1号墳の実測続行。5号墳の周溝検出と羨道部内の調査。
- 12月8日 5号墳の墳丘調査にかかる。石室に合わせて断面を残す。同時に墓道の検出も行ない、掘り下げを行なう。
- 12月11日 5号墳東側周溝の調査続行。4号及び6号墳付近の表土剝ぎも続行する。
- 12月16~20日 5・6号墳付近の表土剝ぎを行なう。7・8・9号墳付近の発掘前の墳丘撮影の準備を行なう。
- 12月21日 6号墳周溝検出のため、南側の表土剝ぎを行なう。 東側の 周溝から 鉄釘を 発見する。木棺墓があるのであろうか。
- 12月22日 6号墳の周溝発掘続行。5号墳の移動している天井石除去をクレーン車にて行なう。
- 12月23日 4・5・6号墳の周溝・墓道内の調査を続行。6号墳南側周溝から土師器鉢と須恵 器高杯が発見される。最近、盗難が続いているため、すぐに清掃して写真撮影を行ない、事 務所に持ち帰る。
- 12月25日 4・5・6号墳をほぼ掘り上げる。6号墳石室発見の大形平瓶は、完形の優品であり、さっそくスタンプを残し持ち帰る。同時に7・8号墳の表土剝ぎを開始する。
- 12月26日 7・8号墳の墳丘調査続行。8号墳は陥没した石室内を掘る。現場作業は年末につき本日で一応終了。
- 1月6日 本年の作業開始。11号墳から東側の地形測量を行なう。同時に5号墳の墳丘断面実 測を行なう。
- 1月9日 7号墳は周溝の検出,8号墳は 石室掘方の検出を行なう。さらに,10墳 の陥没した石室を掘り下げ,規模・方向 の確認を行なう。
- 1月10日 7号墳の周溝を完掘した。北東 側にこの周溝に墓道が続いている9号墳 を発見する。8・10号墳の調査も続行す る。5・6号墳石室の断面実測を行ない 完了する。
- 1月13日 7~10号墳の調査を続行。7~



第6図 8号墳の発掘調査

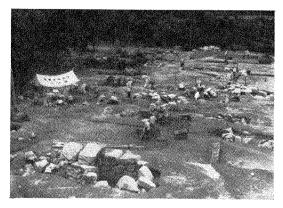
- 9号墳の周溝調査の結果、その切り合いの関係で、8号墳が古く次いで7号・9号の順に築 造されていることが判明した。11号墳の発掘前の写真撮影を終了。
- 1月15日 11号墳の発掘開始。陥没した部分ボーリングにより石室方向をたしかめ、墓道側から掘り始める。最初に墓道の石組を発見し、次に玄門らしき石が出てきた。
- 1月16日 11号墳の玄門の石と思っていたのは前室のものであり、複室の石室であった。墓道を南側に掘り進むと黒色土中から須恵器と共に鉄鏃を発見する。7~9号墳の写真撮影のため清掃を始める。
- 1月17日 11号墳南側の表土剝ぎを行ない墓道の発掘を続行する。10号墳の東側周溝と思われるところを掘ったところ、一部11号墳と周溝を共有しているらしい。11号墳の石室に合わせて残りの悪い墳丘断面を設定して、墳丘の除去を始める。
- 1月19日 7号墳の墳丘断面の写真撮影のため清掃を始める。写真撮影は22日までかかった。
- 1月23日 7号墳の墳丘断面の実測を行なう。8号墳の石室内の調査。床面は礫が敷いてあったらしいが、かなり攪乱されている。墳丘断面図の作成も行なう。
- 1月28日 8号墳の石室掘方を完掘し、写真撮影を行なう。
- 1月30日 9号墳の掘方を完掘した。閉塞部より横瓶・杯が出土する。写真撮影も行なう。
- 1月31日 14号墳の調査に主力を投入した。西側から15・16号墳の石棺2基を発見する。
- 2月2日 15・16号墳付近の表土剝ぎを終る。同時に20号墳の表土剝ぎも開始する。 3日から 21号墳の表土剝ぎを始めた。
- 2月4日 23号墳の墓道の発掘を行なう。閉塞部でかなりういた土師器杯を発見する。盛土は ほとんど削平されている。
- 2月6日 23号墳石室の掘方検出のため、わずかな盛土を掘り下げる。併行して周溝・墓道の 調査も行なう。
- 2月7日 23号墳の石室掘方の発掘を行なう。墓道は途中に断面を残し発掘を続ける。周溝は
 - 北側から東側だけ痕跡がある。25号墳石 室内落下の石材の除去を行なう。
- 2月8日 25号墳の石室・墓道の発掘を行 なう。石室主軸から 墳丘 断面 を設 定す る。23号墳は発掘を続行する。
- 2月10日 23号墳は墓道の追求をする。25 号墳は北東部の盛土の調査。西側は掘方 を確認し掘下げる。26号墳は石室内攪乱 土を除去し、石室のプランを出す。さら に西側は墳丘断面を残し、表土及び墳丘



第7図 11号墳と13号墳の発掘作業風景

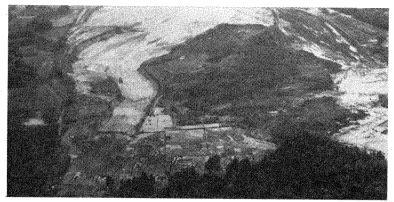
の発掘を行なう。

- 2月13日 25号墳の玄室及び羨道部を掘り 下げる。玄室から2個, 羨道部から1個 の土師器杯が出土, 掘方の発掘を続行。 26号墳石室北東部の表土・盛土・周溝の 発掘を行なう。
- 2月15日 23号墳墓道の断面を実測し、断面を除去した後、写真撮影のため清掃を行なう。25・26号墳は拡張して表土を剝ぐ。7・8号墳の断面を除去する。



第8図 25号墳から西側の発掘調査風景

- 2月18日 小雨であったが作業を強行する。7号墳は周溝を掘上げ、墳丘と周溝の関係の写真 撮影の準備をする。このため羨道部と閉塞部を掘り下げた。 墓道 追求のため 南側に 拡張す る。閉塞石の南側で杯と蓋と高杯が出土した。
- 2月19日 7号墳は羨道部の天井石が落ちかかっているため、排除する作業を行なう。23号墳 は移動した石を取り除き、さらに遺物を清掃し、写真撮影を行なう。25号墳は墓道の発掘を 続行し、閉塞石の清掃を行なう。26号墳は羨道と墓道の掘り下げを行なう。同時に南東部の 盛土、周溝の発掘を行なう。22号墳の発掘にかかる。
- 2月27日 22号墳の発掘続行。26号墳墓道追求の際発見した28号墳の露出にかかる。
- 3月1日 22号と28号墳の間の27号墳の表土剝ぎにかかる。
- 3月6日 22号墳の墓道の調査中に、29号墳の奥壁部分と30号墳とした破壊された石棺を発見する。29号墳は半分が予定地外になるが、石室部が全面露出できるまで拡張することにした3月1日以後は発掘の主力を同地点の縄文遺構のある深原遺跡におき、観音山古墳群は実測図の作成を主に行なった。また、古墳群の北側縁辺に土壙墓群を発見し、石室墳と別の番号を付けることになった。 (柳田康雄)



破壊されていく深原遺跡・観音山古墳群(南上空から)

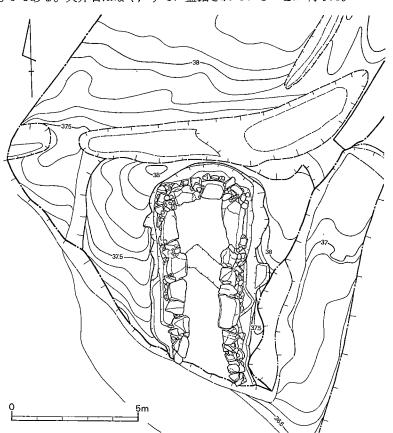
■各古墳の記録

1. 1 号 墳

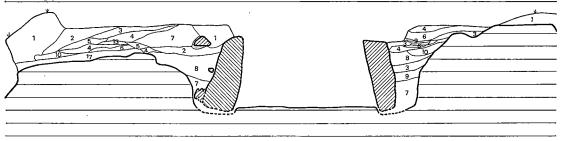
(1) 墳 丘(第9·10図)

中原支群の最北端部に位置する古墳である。墳丘は後世の道路・畑の開墾によって完全に破壊され削平されていたため、発掘前の時点では古墳の存在は知られていなかった。たまたま、中世の井手の原遺跡の調査中に、畑の崖面にわずかに露出していた墓道部の側石によってその存在を知り調査したものである。天井石はなく、すでに盗掘されていることが判った。

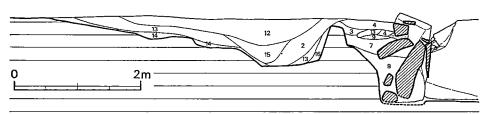
調査は盗掘坑の清掃から開始し、石室の主軸に直交して、 墳丘断面観察のためのベルトを残し、封土を除去した。



第9図 1 号墳地形実測図(1/150)



標高 38.70m



- 1. 表 土
- 2. 暗褐色砂質土層
- 3. 黒褐色班褐色砂層
- 4. 褐色砂層
- 5. 粘土混入黒褐色班暗褐色砂質
- 6. 黑色班暗褐色砂質
- 7. 褐色班暗褐色砂質
- 8. 褐色班黒色砂質
- 9. 黄褐色粘質
- 10. 黑色班褐色砂質
- 11. 茶褐色粘質
- 12. 淡暗褐色
- 13. 黒褐色砂質

16. 黑褐色班褐色

17. 旧表土

- 14. 暗褐色
- 15. 黒色砂質

第10回 1号墳墳丘断面図(1/60)

ることが判る(第10図)。

周溝は、周囲の破壊が著しいため、かならずしも明確ではないが、墳丘東側で、石室堀方か ら2.50m, 西側で1.90mの所に, 地山整形した傾斜変換がある。この変換点が, わずかに残る 西側の盛土の傾斜と一致することから、ほぼ東西墳丘の規模を知ることができる。約9mの円 墳であったろう。

(2) 石 室 (第11図)

墳丘中央部よりわずかに東側に偏して掘られた墓壙は東西約4.30m,南北7.30mの長方形を 呈し,深さは北壁側で1.20m,東壁側で1.40m,西壁側で85cmを測る。この墓壙の南小口部に 墓道が付設されているが,その大半は畑の開墾によりカットされているため不明である。

南に開口した両袖単室の横穴式石室である。主軸方位はN-31°20'-Eを示す。

現存する石室長は、東壁7.50m, 西壁6.60mを測る。玄室は長さ2.35m, 奥壁幅2.35mのほ ぼ正方形を呈す。東壁側は袖石が約50cm, 西壁側はわずか25cm張り出し羨道に続いている。玄 室奥壁は腰石に長さ約1.1m,高さ約1.3mの石材を2個用いて,わずかに内傾させ,持ち送り

気味にしている。東壁は1個, 西壁は2 個の大きい腰石を用いており、 奥壁と比 してより内傾させた持ち送り式のもので ある。

羨道部は幅約 1.6m, 長さ約 2.5 mあ り、玄室の石材に比べて小形の石材を使 用している。玄室と羨道部の仕切石は, 盗掘時の破壊もあって不明である。閉塞 石は、玄門より約2.5 mの所に設置され ていたようであるが保存の状態は悪い。

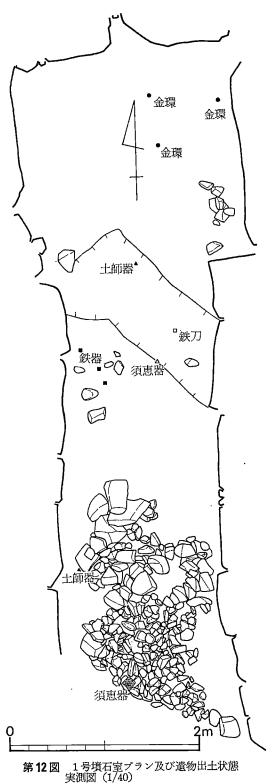
閉塞部付近から側壁が外方に広がり石 組の墓道となるが、他の古墳にみられる ような、それに続く素掘りの墓道は、畑 の開墾により破壊されているため不明で ある。石組墓道の最大幅は約2m,長さ 1.7mを測る。 西側の側壁 は羨道部とほ ぼ同形のものを1~3段使っているが, 東側の側壁はさらに小さな石を3~4段 積み上げている。

石室内の敷石の存在は明確でないが, 玄室内右袖石付近で検出された数個のこ ぶし大の石の存在や、石組墓道において かきだされたような状態で検出された河 原石から玄室内の敷石の可能性は高い。

(3) 遺 物 (第12図)

出土状態 (1)

石室内は盗掘を受け、すっかり荒らさ れていたが、床面に近い攪乱土中から金 環・須恵 器甕 片, 土師器 椀片が 出土し た。また、ヘラ切り・糸切り土師器杯と 青磁片が検出された。框石は完全に抜き



取られ、その付近は攪乱を受けていたが、羨道部はさほど受けておらず鉄刀・鉄斧・刀子・鉄 鏃・帯金具等の鉄製品、須恵器杯身・杯蓋・高杯、土師器椀が一括して出土した。またヘラ切 りの土師器杯も出土した。しかし、その大半が調査中の盗難によりなくなってしまったことは 残念であり、その数量は不明である。

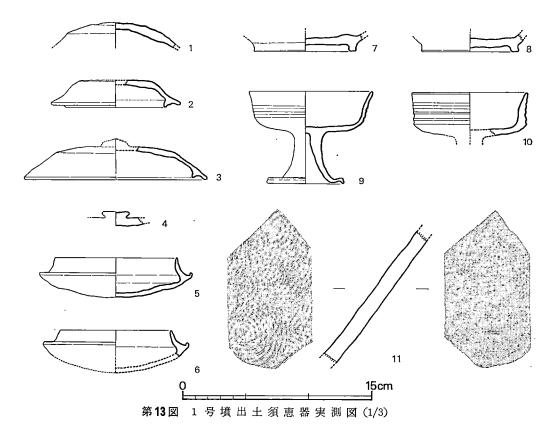
墓道・墳丘からも若干の須恵器杯身・杯蓋・高杯片・土師器甕・盤片が出土した。

② 須恵器(第13図)

杯 蓋 $(1 \sim 4)$ $1 \sim 3$ は羨道、4 は墳丘から出土した。

I類(1) 天井部の破片資料である。天井部外面は丸く,天井が深い杯蓋で,天井部外面はヘラ削り,内外面はヨコナデ・ナデで仕上げている。色調は淡灰青色を呈し,胎土・焼成とも普通。

 V_{b} 類(2) 復原口径7.8cm,器高2.2cmを測る小形の蓋である。身受けの立ち上がりは小さく,体部は扁平である。体部内外はヨコナデ,天井部外面は手持ちのヘラ削りで仕上げている。色調は暗赤紫色を呈し,胎土には砂粒を含むが焼成は良好・堅緻である。



Wb類(3・4) 3はつまみを欠く資料で、復原口径14.2㎝を測る。身受けの立ち上りは小さく、内側に入る。体部は若干丸味をもち、天井部は平坦である。天井部外面は右回転のヘラ削り、体部内外はヨコナデ・ナデで仕上げている。色調は外面暗褐色・淡褐色・内面灰青色を呈し、胎土・焼成とも良好である。4はつまみ部のみの資料で、つまみは扁平である。色調は黒味を帯びた灰色を呈し、胎土・焼成とも良い。

杯 身 $(5\sim8)$ 5・8 は羨道,6・7 は 墳丘から出 土した。5・6 が 1 類,7・8 は \mathbb{W}_a 類に属する。

5は復原口径9.5cm,器高3.1cmを測る。体部は若干扁平であるが,蓋受けの立ち上りは細く高い。底部は左回転のヘラ削り,内底部はナデ,体部内外はヨコナデで仕上げている。底部外面にはヘラ記号がある。胎土には比較的多くの細砂を含むが,焼成は良好で,色調は灰色を呈す。6は口縁部の破片資料で,復原口径8.5cmを測り5と比べ若干小さい。

7・8とも高台部の破片資料で、高台の畳付が外方にはねる特色を持っている。高台径は7が7.6cm、8が8cmを測る。 両者とも灰色を呈し、胎土・焼成とも良好・堅緻な土器である。

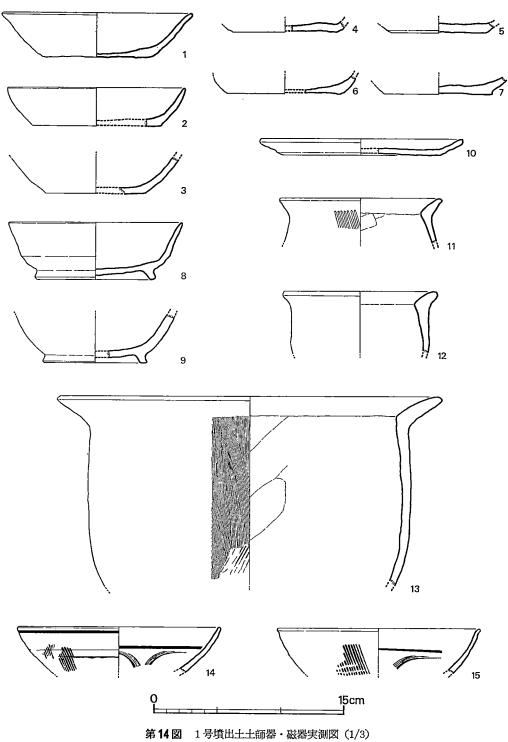
高 杯 $(9\cdot10)$ 9は墳丘、10は羨道から出土した。両者とも Nb 類に属する。9は復原 口径10cm、底部6.2cm、器高7.5cmを測る。杯体部外面には3本の沈線がめぐり、口縁部は薄く 仕上げられ、わずかに外反する。端部はやや尖がり気味である。脚部は細く、ゆるやかに外開 きし、裾部ではね上り段を作る。内外はヨコナデ、杯内底部はナデで仕上げている。外面は淡灰色を呈すが、杯部内面は灰黒色をなす。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。10は復原 口径9.2cmを測り、9と比べひとまわり小さい。杯体部外面には4本の沈線がめぐり、器肉の厚い作りの土器である。体部内外はヨコナデ、杯外底部は回転へラ削りで仕上げている。灰黒 褐色を呈する。胎土にはわずかに細砂を含むが精良で、焼成は良好である。

甕(11) 大甕の胴部破片である。外面は細かい格子目,内面は青海波の叩文を施している。青灰色を呈し,胎土には砂粒を含み,焼成は良い。

③ 土 師 器 (第14図10~13)

盤(10) 復原口径16cm,器高1.5cmを測る。器肉は均一で厚く,口縁端部は丸くおさまる。 底部の調整は回転へラ切りでわずかに上げ底気味である。内底部はナデ,体部内外はヨコナデ で仕上げている。色調は明憕褐色を呈す。胎土にはわずかに細粒を含むが良質で,焼成も良好 である。墳丘出土。

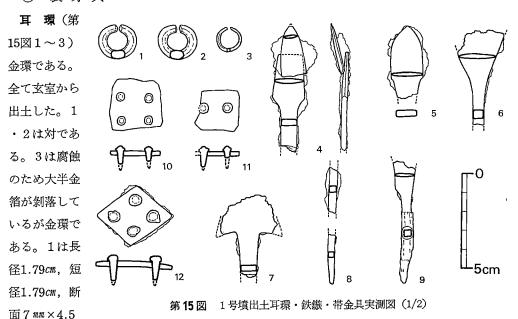
椀(11・12) 11は羨道,12は玄室から出土した。両者とも胴部下半を欠く資料で,復原口径は11が12.8㎝,12が12.3㎝とほぼ同じである。くの字形に外反する口縁部の屈折は11が強く,12は穏やかである。11は体部外面を粗い刷毛,内面はヘラ削りし,口縁部内外をヨコナデで仕上げている。12は体部外面の風化が著しく調整は不明であるが,内面はナデ上げで仕上げ



た器肉の厚い手揑的な 作りの土器である。 両者とも色調は 淡褐色をなし、 胎土は比較的良質で、焼成は普通である。

甕(13) 崩れた閉塞石の上から出土した。卵形の胴部に、強く「く」の字状に外反する口縁部がつく甕で、最大径を口縁部に持つ。復原口径30.4cmを測る。体部外面は縦位の刷毛、内面は左下方から右上方にかき上げた粗いヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡橙褐色を呈し、胎土には粗い細粒を多く含むが焼成は良好である。

④ 装身具



mmの楕円形,2 は長径1.97cm,短径1.76cm,断面 $7.1mm \times 4.5mm$ の楕円形,3 は長径1.35cm,短径1.26cm,断面1.8mmの円形である。

⑤ 鉄 器(第15図)

鉄 鏃($4\sim9$) 6 が本墳北側に接する中世の溝状遺構内出土の他は,全て羨道から出土した。 $4\cdot5$ が両丸造柳葉形式に属し,7 は両丸造三角形式に属する。他は全容を知り得ず不明。

帯金具($10\sim12$) $10\cdot11$ が玄室、12が羨道から出土した。 $10\cdot11$ は長方形を呈し、鋲頭は尖がるが小さい。鋲は10が 4 個、11が 2 個である。12は菱形を呈し、鋲は 4 個で鋲頭は扁平で大きい。

⑥ 歴史時代土師器 (第14図1~9)

杯($1\sim7$) 全て玄室から出土した。全て破片資料で、1 が全形を知り得る他は、胴下半及び底部のみの資料である。復原計測値は表2の通りである。底部の切り離し技法は $1\cdot3\sim5$ が ~7 切り、 $2\cdot6\cdot7$ が糸切り離しである。

高台付椀(8・9) 8が羨道,9は玄宰から出土した。復原計測値は表2の通りである。

8は穏やかに外反する体部 に,低くふんばる高台が付 く椀である。体部内外はロ クロヨコナデ,内底部はナ デ,外底部はヘラ切りで仕 上げている。色調は淡褐色

表 2 歷史時代土師器計測表									単位cm
No.	口径	底径	器高	備考	No.	口径	底径	器高	備考
1	(15)	(8.5)	(3.5)	ヘラ切り	6		(8.9)		糸切り
2	(14)	(10.1)	(3.0)	糸切り	7		(8.4)		
3_		(7.8)		ヘラ切り	8_	(13.7)	(9.5)	(4.5)	高台付
4		(8.2)		"	9	_	(8.2)	_	"
5		(7.3)	—	"					

を呈し、胎土は良質で焼成は普通である。9は8と比べ器肉が厚く、低くふんばる高台底面は 水平である。

青 磁(第14図14・15) 両者とも玄室から出土した。高台を欠く胴部上半の破片資料で、復原口径16㎝と同じである。14は口縁部内外に1条圏線をもち、体部内外を櫛歯文で飾っている。15は口縁部内面に1条の圏線、体部内外に櫛歯文を施している。釉は内外に施され、14が淡灰青色、15が淡緑色を呈する。胎土は両者とも淡灰色で精良である。いわゆる同安窯系のものである。

(4)まとめ

墳丘は後世の開墾・破壊によりその大半を消失していたが、わずかにのこる地山整形と盛土の状況から約9mの円墳であることが判った。石室は両袖単室の横穴式石室で、玄室内は後世の盗掘もあって完全に攪乱されていた。しかし、床面に近い攪乱土中から別の金環1個が検出されているため、最低2体分の埋葬が行なわれたことが考えられる。また、出土遺物からも3~4時期のものを含み、数次にわたる追葬が想定される。さらに、中世においても何等かの再利用が考えられる遺物が出土している。本墳の築造時期は出土遺物からして6世紀後半に比定されよう。追葬あるいは使用の最終時期は出土遺物からして6世紀末から7世紀前半の年代が考えられる。 (井上裕弘)

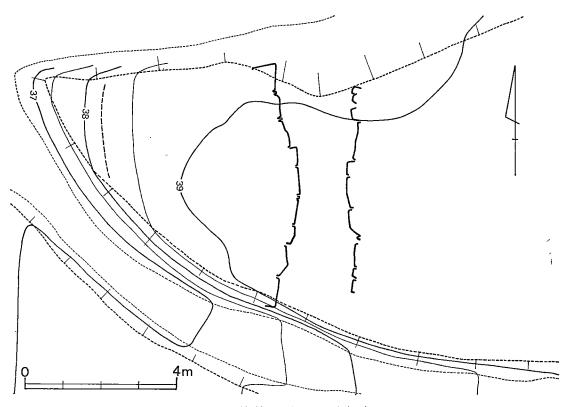
2. 2 号 墳

(1) 墳 丘

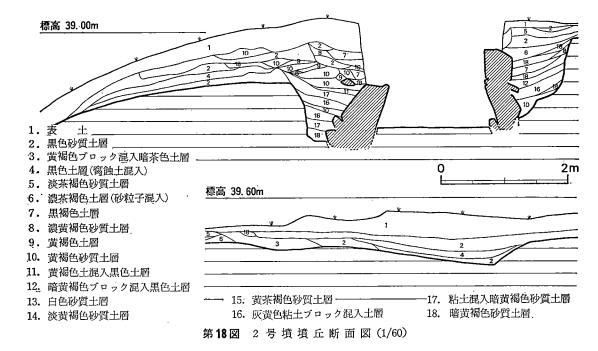
1号墳のすぐ南側にあり、観音山から派生する扇状地の北西端部に形成されている。墳丘は 後世の開墾や道路により完全に破壊、削平されていて、その存在すら明確でなく、わずかに道 路の崖面に露頭していた玄室側壁の石によって明らかになったものである。

調査は石室内の清掃から開始し、石室の主軸に直交して、墳丘断面観察のためのベルトを残し、封土を除去した。

墳丘は、南・北・西側の大半が道路により破壊され、わずかに東側が広く残っている程度であった。しかし、東側は削平がはげしく、封土はわずか20cm内外を残すのみで、かえって、西側の方が封土の残りは良好であった。



第16図 2号墳墳丘実測図(1/100)



封土は黄褐色粘質土を基盤にし、その上に旧表土と思われる暗茶褐色砂質土がのり、さらに 黒色土・砂粒混入黒茶色土・砂粒混入暗黄色土・暗茶褐色砂質土・砂粒混入黄色土が盛土され 厚い所で約50cmを残す(第18図)。

周溝は、石室掘方の東側約3 mの所で検出されただけで、北・南・西側は道路によりカットされ不明である。溝幅は広い所で2.50m、狭い所で1.40m、深さは深い所で39cm、浅い所で13 cmを測る。断面は内側にゆるやかに傾斜し、外側にやや直立気味に立ち上がるU字形をなす。東側に一部残存した周溝から、ほぼ内径12mの円墳であった可能性がある。

(2) 石 室(第19図)

両袖単室の横穴式石室で、主軸方位はほぼ南北を指し、南に開口する。

奥壁と側壁の一部が道路により破壊され、抜きとられ天井石もない。奥壁がないため玄室の長さは不明であるが、石の抜跡・掘り方等から考え、3.5m前後となろう。幅は約1.9mを測り若干胴の張った長方形の石室となる。袖石の突出しは20cmと小さく、左右がづれている。

玄室側壁の積み上げ方法が,東西異なり,東壁が幅約70cm,高さ約80cmの腰石を立てているのに対して,西壁は袖石側が,幅約1m,高さ約60cmの横長の石材を腰石として,その上に,少し小さ目の横長の石を2段積み上げ,奥壁側は,幅約80cm,高さ150cmの縦長の石材を立てている。

いわゆる羨道といわれる空間はなく、框石に隣接して閉塞石を積み上げている。石組の墓道は閉塞石の外側から、わずかに西側に曲りながら南に広がり、素掘りの墓道につづいている。 素掘りの墓道の大半は道路により破壊されていた。墓道側壁は、西壁側が玄室の石材と比べ小さ目の石を掘り方底面から横積みしているのに対して、東壁側は墓道底面より30cm高い、幅70cmのテラス上に小さ目の石材を横積みするといった違いがある。

(3) 遠 物

① 出土狀態

石室内は盗掘を受けていたが、中央よりやや南西側に偏した所の床面に接して金環1個が出土し、他の1個は床面より浮いた攪乱土中から出土した。墓道部からは須恵器甕・杯身・杯蓋・高台付椀・平瓶と鉄鏃片が出土した。また、墳丘から須恵器平瓶片、周溝から須恵器壺・杯身片が検出された。

② 須 恵 器(第20・21図)

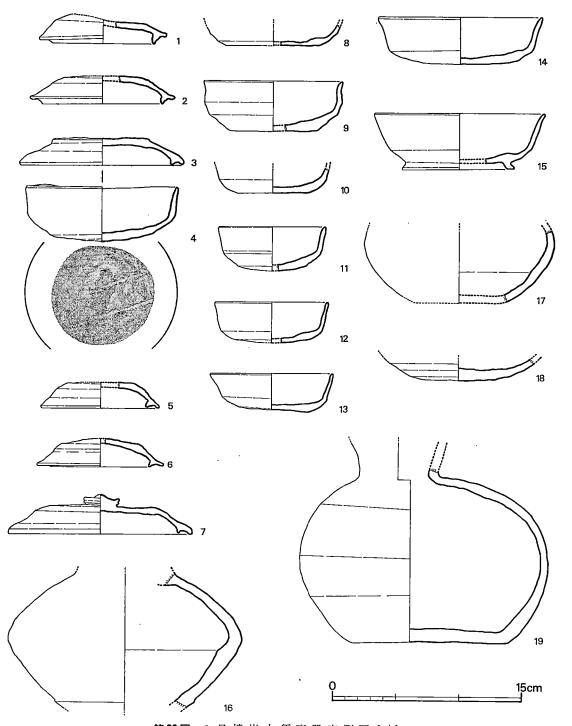
杯 蓋 (第20図1~3,5~7) 全て墓道から出土した。

 \mathbb{N} a類($1\cdot 2$) 1は復原最大径10cm, 2は<math>11.4cmを測り,器高は2cm強である。身受けの立ち上りは低く部厚い。また,器高が低く扁平な蓋である。調整は天井部外面を回転へラ削り,内面はナデ,体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は1が暗灰色,2が灰色を呈し,胎土には砂粒を含む。焼成良い。

Va類(3) 墓道から出土した。杯身4とセットをなすものである。最大径13cm,器高2.1cmを測る。天井部が平坦で、身受けの立ち上りは低く内側に入る扁平な土器である。天井部外面は回転へラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は黄灰色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は悪い。天井部外面に杯身4と同じへラ記号がある。

 V_b 類(5・6) 両者とも墓道から出土した。復原最大径は5が9.3cm,6が10cm,復原器高は5が2cm,6が2.3cmを測り、 V_a 類と比べひとまわり小形の蓋である。身受けの立ち上りも低く内側に入り、天井部は若干丸味をもつが扁平な作りの土器である。天井部外面は手持ちのへラ削りで、内面はナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は5が暗灰色、6が灰色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良い。5は天井部外面に2条のヘラ記号がある。

Wb類(7) 墓道から出土した。最大径14.6cm,器高2.3cmを測る宝珠形のつまみを持つ蓋である。天井部は平坦で、身受けの立ち上りは低く内側に入る。天井部外面は回転へラ削り、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は外面灰色、内面淡灰色を呈し、胎土にはわ



第20図 2号墳出土須恵器実測図(1/3)

ずかに砂粒を含み焼成は悪い。

杯 身(第20図4・8~15) 11が周溝の他は全て墓道から出土した。

■類(8) 復原底径7.4㎝を測る。体部下半の破片資料でかならずしも明確ではないが、 IVa 類杯身にみられる、体部が底部から直行して立ち上り、体部中央に沈線状の稜を形成する という特徴がみられず、むしろ■類の様相に近いことから分離した。体部外面はヘラ削り、内 面はロクロヨコナデで仕上げた器肉の薄い作りの良い土器である。色調は灰黒色をなす。

Ⅳ a 類 (9) 復原口径10cm, 器高 4 cmを測る。底部から直線的に外反した体部は中央で稜を作りさらに内彎気味に立ち上りわずかに口縁部にて外反する特色をもっている。底部は回転へラ切りのあと手持ちへラ削り、体部下半は回転へラ削り、体部上半と内面はロクロヨコナデで仕上げている。外面は茶灰色、内面は茶紫色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが、焼成は良い。

№ 類(10~12) 10は体部上半は破片資料で復原底径5.6cmを測る。体部下半と底部を手持ちのへラ削りで、内底部は不定方向のナデで仕上げている。色調は青灰色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成良好である。11は復原口径8.5cm、器高3.5cmを測る。底部は丸味をもち、体部中央に沈線状の稜を作り口縁部へゆるやかに外反する。底部は手持ちへラ削り、体部内外はロクロヨコナデ、内底部は不定方向のナデで仕上げている。色調は灰色をなし、胎土には多くの砂粒を含み、焼成は良い。底面に2条のヘラ記号がある。12は復原口径9cm、器高3.3cmを測る。11と比べ若干器肉も薄く、体部中央の稜は不鮮明である。調整方法は12と同じで、色調は外面が暗灰色、内面は灰色を呈し、胎土には多くの砂粒を含み、焼成は良い。底面に「ハ」の字形のヘラ記号あり。

 V_a 類($4\cdot 14$) 4は杯蓋 3とセットである。口径12cm,器高4.3cmを測り, V_a 類杯身と比べひとまわり大きく,底部からの立ち上りも緩やかで,体部中央の稜もほとんどない特色を持っている。体部下半から底部にかけては手持ちのへラ削り,体部上半 内外は ロクロ ヨコナデ,内底部はナデで仕上げている。色調は淡灰色で,胎土には砂粒を含み,焼成は悪い。外底面にはヘラ記号がある。14は口径13.1cm,器高 3.7cmを測る。調整方法,色調・胎土・焼成も4と同じ作りの悪い土器である。

V_b類(13) V_aが小形化したもので、口縁部付近で緩やかに外反する特色をもつ。底部を 手持へラ削り、体部下半を回転へラ削り、上半内外はロクロヨコナデ、内底部はナデで仕上げ ている。色調は暗灰色、胎土には多くの砂粒を含むが、焼成は良い。外底面に 2 条のヘラ記号 がある。

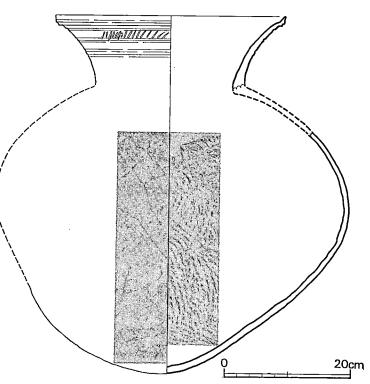
Wb類 (15) 復原口径13.5cm,高台径8.9cm,器高4.4cmを測る。杯部が深く,高台の畳付けが外方にはねる特色をもち,畳付けは水平である。体部内外はロクロヨコナデ,底部内外はナデで仕上げている。外面は茶褐色,内面は灰色を呈し,胎土にはわずかに砂粒を含み,焼成は

悪い。

平 瓶 (第20図17~19) 全て墓道から出土した。17は底部を欠く胴部下半の破片資料で,復原最大径15cmを測る。19と比べ小型のものである。胴部下半は回転へラ削り,内面はヨコナデで仕上げている。18は底部の資料で,底面に3条のヘラ記号がある。色調は両者とも青灰色を呈し,胎土には砂粒を若干含むが,焼成は良好である。19は口縁部を欠く資料である。底部は平坦で,最大径を胴中位にもち,19.7cmを測る。胴上半外面はロクロヨコナデ,下半と底部は回転へラ削りで仕上げている。色調は暗灰色を呈し,胎土には多くの砂粒を含むが,焼成は良い。

壺(第20図16) 周溝中から出土した。胴部の破片資料で、最大径を中に有し、胴部の屈折が強いソロバン玉状をなす。長頸壺になろう。胴部下半を回転へラ削り、上半はロクロョコナデ、内面はロクロョコナデで仕上げている。色調は灰黒色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好・堅緻である。

大 甕 (図版 第21図) 口径36.4 cm, 復原器高56.4cm を測る。強く張った 胴部に、大きく「く」 の字状に外反した口 縁部がつく。口縁端 部は軽く上外方につ まみ上げている。口 頸部には, 間隔をお いた数条の平行沈線 がめぐり、その間の 上方にヘラ描きの斜 条文を付している。 体部外面は細かい格 子目, 内面は青海波 のタタキを残してい る。胎土には多くの

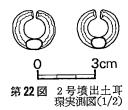


第21図 2号墳出土須恵器実測図(2)(1/6)

粗い砂粒を含むが焼成は良い。

③ 装身具

耳 環 (第22図1・2) 金環である。1・2とも玄室出土のもので、1が床面に密着して出土した。1・2とも、横径2.2cm、縦径2.1 cmを測るほぼ円形をなす。断面は1が8×5.7 mm、2が7.6×5.5 mmの 楕円形を呈する。



(4) まとめ

本墳も、その大半が道路により破壊されていた。東側に残る周溝とわずかに残る墳丘から直径12mの円墳で、周溝を加えると約14mとなることが判った。この古墳の一つの特徴は羨道部といわれる空間がなく、玄門部の仕切石に接して閉塞石が施設されていることである。出土遺物には時期差が認められ、数回の追葬が推定されるが明確でない。本墳の追葬ないしは使用の最終の年代は出土遺物からして、7世紀中頃から後半が考えられるが、築造時期は6世期末まで遡る可能性が大きい。 (井上裕弘)

3. 3 号 墳

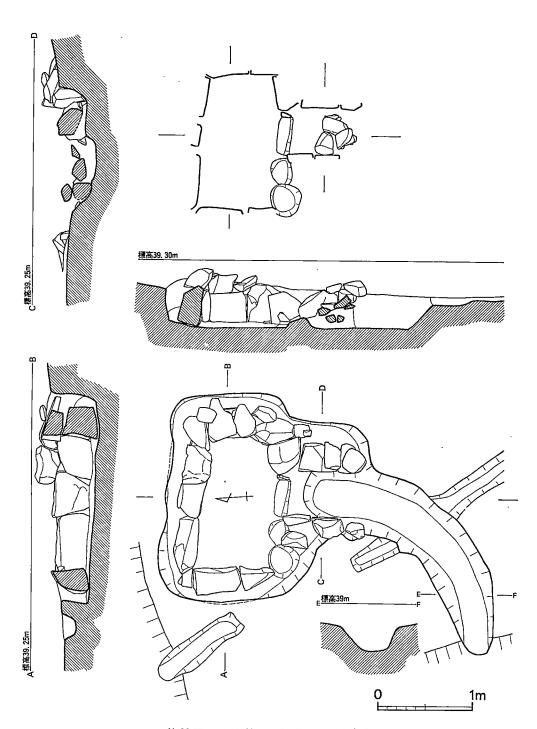
(1) 墳 丘(第17図)

3号墳は、2号墳の南側に隣接し、付随する形をとっている。墳丘は、後世の開墾等により 完全に破壊されていて、原形を復元することはほとんど不可能である。

(**2**) 石 室 (図版 18·19, 第 23 図)

小形の横穴式石室で主軸を $N-4^\circ$ —Eにとり、南に開口している。石室は、南北 $2.2\,m$ 、東西 1.65mを測る長方形の掘方に構築されている。奥壁の一部と右側壁でかろうじて 2 段目が残るほかは腰石を残すだけである。

奥壁腰石は,ほぼ同じ大きさの石を3石,両側壁腰石は,2石づつを立てて裾えている。したがって玄室の長さは右側壁で65cm,左側壁80cm,奥壁から玄門まで80cmを測り,幅は奥壁側で1.36m,玄門側で1.39m測り,幅の方が広い長方形を呈している。右側壁の積石は,わずかにせり出す様に裾えられている。これから推定して壁は $4\sim5$ 段の積石があったと考えられ,石室の高さは1.2mほどではなかろうか。



第23図 3号墳石室実測図(1/40)

玄門の幅は左側袖石が抜かれているため明確ではないが約45cmを測る。玄門框石は残存してないが、抜き跡から板状の石を使用した痕跡が認められた。

床面には敷石に使用したと思われる礫はなく痕跡もみられない。床面は大きな高底差はない が左側がわずかに高い。

石室には、羨道と墓道を付設している。羨道は、長さ65cm、幅45cmを測る。羨道と墓道は積み上げられた閉塞石によって区切られている。

石組の墓道は、長さ30cm、幅49cmを測り、閉塞石の外側からわずかに開き、南西に屈曲した U字形の素掘りの墓道につづいている。

遺物は石室内の攪乱土内から土師器片、墓道埋土中から須恵器片が出土した。

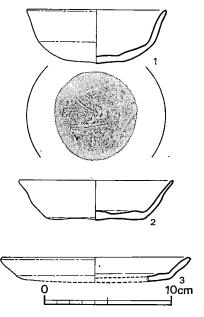
(3) 遺物

① 須 恵 器(第24図)

杯 身(1) 墓道埋土からの出土である。口径 11cm, 高さ4.2 cmを測る器壁は薄く仕上げられている。口縁部はわずかに外反し、端部丸く、横ナデされている。底部は丸味を持ち、外面はヘラ削り、内面は不定方向にナデられている。 胎土 は砂粒 が多く、焼きは軟かい。色調は茶褐色を呈する。

② 土 師 器 (第24図)

杯 身(2・3) 2は石室攪乱土内から出土した少片である。復原口径12.2 cm, 高さ3.1 cmを測る。器壁は薄く仕上げられ、口唇部端は丸くおさめられ、横ナデ調整される。底部は厚くヘラ切りされている。底部内面は横ナデされ、中心部はナデられている。色調は淡褐色を呈し、胎土は、砂粒を多く含み、焼成は良好である。3は墓道埋土中からの出



第24図 3号墳出土土器実測図 (1/3)

土少片である。復原すると、口径14.5cm,高さ2cmを測る。器壁の内外面は横ナデされ、口唇部端は丸くおさめられる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内外面ともに明赤褐色を呈す。 (池辺元明)

4. 4 号 墳

(1) 墳 丘(図版 20, 第 25 図)

3号墳と5号墳の間に位置する。すでに道路でほぼ全壊されていた古墳で,封土も完全に削平されていたが,残存していた周溝から南北約9m,東西約9.2mを測る方墳であることが判った。周溝は最も広い北東隅で,幅3.50m,深さ50cmを測る断面 \mathbf{U} 字状をなす。

(2)石 室(図版20,第25図)

完全に破壊され、わずかに石室の掘り方の一部と素掘りの墓道が残っているだけで、その構造・規模等は不明である。検出された素掘りの墓道は石室入口部と思われる所から約5m南側に延び、そこから強く西側に屈折して約5mつづき斜面できえる。墓道断面はしっかりした逆台形状を呈し、深い所で、1.40mを測る。

(3) 遺物

① 出土狀態

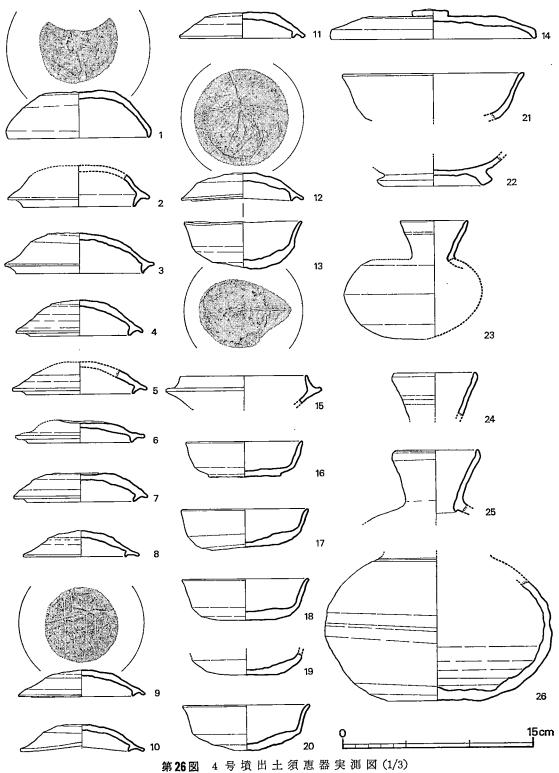
石室は道路により完全に破壊されていた。したがって出土遺物は墳丘(完全に墳丘はないが 周溝内側出土のものをあつかった。) 墓道・周溝内から検出されたものである。墳丘から須恵 器杯身・杯蓋・平瓶,墓道から須恵器杯身・杯蓋・高台付椀・平瓶・土師器高杯・手揑椀と鉄 鏃が出土した。また、周溝内から若干の須恵器片が検出された。出土遺物を列記すると次の通 りである。

② 須恵器(図版21,第26図)

杯 蓋 $(1 \sim 12)$ 1 · 2 が墳丘、3 · 4 · 6 ~ 12 が墓道から出土した。

I類(1) 口径11.2cm, 器高3.6cmを測る。口縁部はわずかに立ち上り, 丸味を持ちながら天井部に続く深目の蓋である。天井部外面はヘラ切りのあとヘラ調整し, 内面は不定方向のナデ, 体部内外はロクロョコナデで仕上げている。 色調は外面 暗茶褐色, 内面赤紫色と異なる。胎土には多くの砂粒を含み, 焼成普通である。天井部外面にヘラ記号がある。

 $II 類 (2 \cdot 3)$ 3は最大径11.9cm,器高3.2cm,立ち上りの長さ0.8cmを測り内傾する。天



第26図 — 27 —

井部外面はヘラ切りのあとナデ,内面は不定方向のナデ,体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈し,胎土には砂粒が多いが焼成は良い。天井部外面に「井」の字状のヘラ記号がある。2は復原最大径11.2cm,立ち上りの長さ0.9cmを測る。

 N_a 類(4~7) 天井部が丸味をもつ4・5と平坦な6・7の2種がある。身受けの立ち上りの長さは0.6~0.7cmと短く,わずかに顔を出す程度である。天井部外面はヘラ切り,内面は不定方向のナデ,体部内外はロクロヨコナデで仕上げた器肉の厚いずんぐりとした蓋である。5 は最大径10.1cm,器高2.3cmを測る。4 は復原最大径10.7cmを測る。色調は4が灰色,5 が黄灰色を呈し,胎土には砂粒を含み,焼成は良い。5 の天井部外面に1条のヘラ記号がある。6 は復原最大径10.2cm,器高1.7cm を測り,他と比べ器高が低く器形の歪みが著しい土器である。色調は濃い灰色を呈し,胎土には粗い砂粒を多く含むが焼成は良好である。天井部外面に2条のヘラ記号がある。7 は復原最大径10.6cm,器高2.2cmを測り,天井部外面はわずかに凹む。天井部外面はヘラ切りのあとヘラ調整し,体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。胎土は良質,焼成は良好・堅緻で灰色を呈す。

▼ b 類(8~12) 8 は最大径9.3cm, 器高2.1cmを測り、身受けの立ち上りは低く、内側に入る。天井部は丸く、扁平で IV a 類とくらべひとまわり小さい蓋である。 天井部外面はヘラ切りのまま、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデ仕上げである。色調は灰色を呈し、胎土の砂粒も少なく、焼成も良い。天井部外面に「ハ」の字状のヘラ記号がある。 9 は最大径10cm, 器高2.1cmを測る。 8 と異なり天井部外面はヘラ切りのあとヘラ調整で仕上げている。 色調は外面暗灰色、内面赤紫色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良い。 天井部外面に 4 条のヘラ記号がある。 10は天井部外面をヘラ切りのあとナデて仕上げている。 最大径9.9cm, 器高2.1 cmを測り、器形に歪みがある。 色調は灰色を呈し、胎土には砂粒を含み焼成は良い。 11は最大径10cm, 器高2 cmを測り、天井部外面はヘラ切り後ヘラ調整し平坦に仕上げている。 色調は暗灰色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良い。 天井部外面に「十」字状のヘラ記号がある。 12は杯身13とセットをなすもので、 天井部外面に 1 条のヘラ記号がある。 調整技法は 9 と同様で、最大径9.7cm、器高2.2cmを測る。 色調は赤紫色を呈す。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

▼ Ma類(14) 口径16.2cm,器高2.4cm(つまみ部含む)を測る。天井部は平坦で、口縁部先端を小さく折り曲げている。つまみも平坦だが中央がわずかに突き出ている。調整技法は器面の風化が著しいため不明である。色調は淡灰白色を呈し、胎土には砂粒を含み焼成は悪い。

杯 身(13・15~22) 15が墳丘から出土した他は全て墓道出土の資料である。

I類(15) 胴部上半の破片資料で、復原口径10cm、最大径12.4cm、蓋受けの立ち上りの長さ1.2cmを測る。器肉は薄く、立ち上りも細く高い。内外をロクロヨコナデで仕上げている。色調は赤紫色を呈し、胎土の砂粒は少なく焼成は良い。

Vb類 (13·16~20) 13は蓋12とセットをなすもので,底部外面に1条のヘラ記号がある。 丸味をもつ底部からゆるやかに立ち上り、体部中位にて稜を形成し、ゆるく外反する口縁部に 続く。口縁端部は細く丸くおさめる。口縁部内外はロクロヨコナデ,体部下半から底部にかけ てはヘラ切りのあと手持ちのヘラ削り、内底部は不定方向のナデで仕上げている。色調は赤紫 色を呈し、胎土は砂粒も少なく精良で、焼成も良い。口径9.3㎝、器高3.7㎝を測る。16は口径 9.3cm, 器高2.8cmを測る。底部は平坦で, 底部からの立ち上りは大きく中位にてヨコナデ, 体 部から底部にかけてはヘラ切りのあとヘラ調整で仕上げている。色調は灰色を呈し、胎土には 砂粒を含み焼成は良い。底部外面には縦位3条と横位1条を交差させたヘフ記号がある。17は 口径10cm,器高3.1cmを測り,底部は平坦である。体部内外の調整手法は13と同じであるが底 部外面は回転ヘラ切りのあとナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈し、胎土には多くの砂粒 を含み焼成は良い。18は丸味をもった平底からゆるやかに立ち上り,中位にてわずかに稜をな し、口縁部へとゆるやかに外反する。体部内外はロクロヨコナデ、底部外面はヘラ切りのあと ヘラ調整,内底部は不定方向のナデで仕上げている。色調は赤紫色を呈し,胎土には多くの砂 粒を含み焼成は良い。底部外面には1条のヘラ記号がある。口径10.1cm,器高3.3 cmを測る。 19は丸味をもった平底の破片資料で、外底部には2条のヘラ記号がある。外底部はヘラ切りの あとヘラ調整で、内面はナデて仕上げている。色調は灰色を呈し、胎土は精良で焼成も良好・ 堅緻である。20は尖り気味の丸底で、体部中位の屈折は強く、ゆるやかに外反する口縁部に続 く。調整手法・色調・胎土・焼成とも18と同様である。

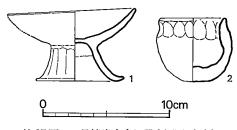
 W_a 類(21・22) 21は高台を欠く破片資料で復原口径14.4cmを測る。内外はロクロヨコナデで仕上げ、口縁端部はわずかに肥厚し、丸くおさめている。色調は濃灰青色を呈し、胎土には若干の細砂を含み焼成は良好である。22は高台の みの破片 資料で、 復原高 台径 9.1 cmを測る。高台は低く、外方に強くふんばった形状をなし器肉の厚いしっかりしたものである。高台部内面に「 \times 」印のヘラ記号がある。色調は濃灰青色を呈し、胎土には多くの細砂を含むが焼成は良好である。

平 瓶 (23~26) 23が墓道から出土した他は全て墳丘から出土した。平瓶には小形 (23)と大形 (24~26)の2種がある。23は口縁部が直線的に開く漏斗状をなすもので、扁平な体部は中位にてゆるやかに屈折し、丸底の底部に移行する。底部を回転へラ削り、他はロクロヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、胎土には多くの砂粒を含む。焼成は良い。24・25は直線的に開く漏斗状の口縁部であるが、端部をつまみ上げ気味に 内傾させた 特色をもっている。26は口縁部を欠く資料で胴部最大径17.8㎝を測る大型の平瓶である。底部は平坦で、頸部付近に2条の浅い沈線と胴中位に幅広い2本の凹線がめぐる。胴部上半をロクロヨコナデ、下半はヘラ削りで仕上げている。色調は暗赤紫色を呈す。胎土は良質で焼成は良好・堅 緻である。

③ 土 師 器 (第27図1・2)

墓道から出土した。

手捏椀(2) 復原口径5cm,器高5cmを測る。体部は球形をなし、底部は丸底で、口縁部はわずかにつまみ上げ気味に外反させている。 色調は淡褐色を呈し、胎土には粗砂を比較的多く含み焼成は良い。



第27図 4号墳出土土師器実測図 (1/3)

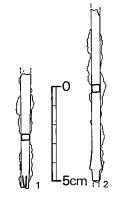
高 杯(1) 復原口径10.3cm,器高5.5cmを測る。小型のもので,杯部にくらべ脚部が太く短い高杯である。杯部内面と外面全体に赤色顔料が塗布されている。杯部内外と脚部内面はナデて,脚部外面はヘラ削りで仕上げている。胎土は精良で,焼成は良好である。

④ 鉄 器

鉄 鏃(1・2) 箆と茎を残すのみで、身の形は不明である。

(4) まとめ

本墳は道路で全壊されていた古墳で、石室の構造は不明である。墳丘も完全に削平され、わずかに残存した周溝から南北約9m、東西約9.2mの方墳であることが判った。築造時期は出土遺物から考えて6世紀末に比定されよう。また、墓道内出土遺物には明らかに時期差があり、数回にわたる追葬が推定される。本墳の最終追葬あるいは最終使用は7世紀末から8世紀前半頃の年代が与えられよう。 (井上裕弘)



第28図 4号墳出土鉄 鏃実測図 (1/2)

5. 5 号 墳

(1) 墳 丘

6号墳の北西側に隣接して形成されたものであるが、調査前にはすでに削平されていたこともあって高まりもなく判らなかった古墳である。調査は動いた天井石の除去後、石室内の土砂の取り除きを開始し、石室の主軸に直交して、墳丘断面用のベルトを残し封土の除去を行った。

墳丘はわずかに残るのみで明らかではないが、石室東側と西側とでは若干盛り土の仕方に差 異がみられ、西側があらく粗雑であるのに対して東側は細かく丁寧に盛っているのが判る(第 30図)。

周溝は石室の東側にのみ、みられるだけで、西側はわずかに地山整形したのみで、地形的に傾斜しているため当初から掘削されなかったものかもしれない。周溝の幅は最も広い北東隅で3.30m、深さ70cmを測り、石組墓道東側付近で急激に幅を狭ばめ、素掘りの墓道に入る。

周溝・地山整形からして、墳丘の規模は南北約9.70m、東西約7.30mを測る縦長の楕円形状を呈す円墳となる。

(2) 石 室(図版 22~25, 第 31 図)

墓壙は墳丘のほぼ中央部にあり、東西約4m、南北7.30mを測る。墓道側が若干狭い長方形を呈す。最も深い奥壁側で、1.10mを測る。

両袖単室の横穴式石室で、主軸方位はN-13°-Eを指し、南に開口する。

玄室は長さ1.8m,幅1.8mの正方形を呈す。天井石はすでに動いてはいたが、東側壁が原型を残している可能性が高いことからして、床面からの高さは約1.8mであろう。

奥壁は腰石に幅1.65m, 高さ1mの大きい石を1個すえ, その上に小さ目の石材2個を用い, 2段目の石を持ち送り式に積みあげている。側壁は, 東壁で大き目の石材2個を2段に重ね, 3段・4段目を小さ目の石材で積み上げている。西壁は腰石に大き目の石材2個を用い, 2段目も同様の石材1個を積み上げている。両側壁とも腰石は内傾気味であるが, 2段目から 顕著な持ち送り式に積み上げている。

床面は盗掘により荒されているが、奥壁両隅に残るわずかな角礫の敷石からして当初は全体に敷かれていたものと思われる。袖石は左側で側壁から45cm程、右側では30cm程突出させている。両袖石とも縦長の石材を立てて、その上に小さい石を東側で3段、西側で1段つみあげている。袖石間は幅90cmで、細長い石1個と小さ目の石2個で仕切石としている。

羨道部は長さ約1.7m,幅1.15mを測る。側壁は腰石に大きい石材1個をすえ,その上に東壁では小さ目の石材を3段積み上げている。

閉塞石は玄門より約1.7m南の所に設置され、高さ約80cm, 長さ1.8mを測る。

石組の墓道は閉塞石の外側からへの字形に開き、南西に屈曲した素掘りの墓道につづいている。素掘りの墓道の先端は道路によりカットされ不明である。石組墓道の側壁は、2号墳の東壁と同様、墓道底面より約 $20\sim50$ cm高いテラス上に小さ目の石材を $1\sim2$ 段積み上げている。素掘りの墓道は、最も広い所で幅2.2m、深さ約60cmを測り断面U字形を呈す。

(3) 遺物

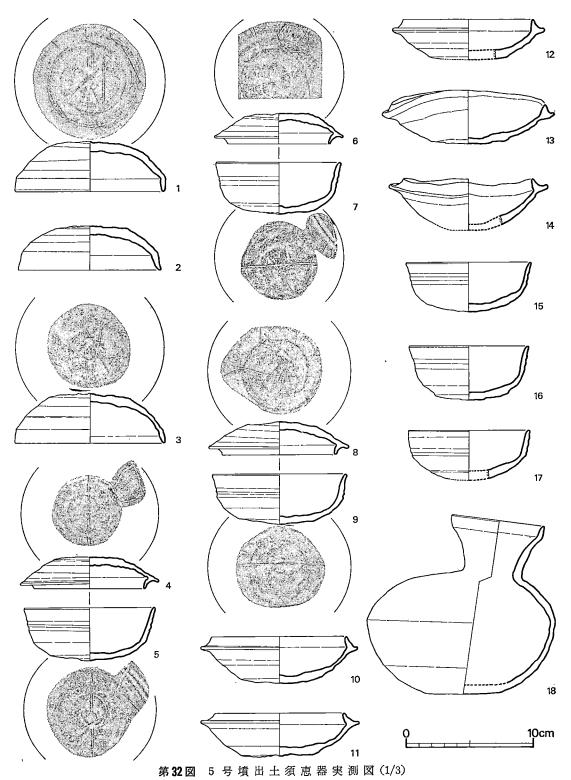
① 出土狀態

石室内は盗掘により、床面の大半が攪乱を受けていたが、わずかに残る南西隅付近の床面に接して刀子1個が検出された。また、攪乱土中から鉄釘3個も出土した。羨道部からは西壁に接して須恵器の杯身・杯蓋・平瓶がほぼ完形のまま、かさなった状態で検出された。墓道からは底面よりわずかに浮いた所で、人面・獣形土製品・手捏土器・土師器甑把手が一括して出土した。他に覆土中から須恵器杯身も出土している。墓道東側に接した墳裾と思われる付近からは須恵器杯身が、墳丘中からは数点の須恵器片が出土した。

② 須恵器(図版27・28,第32図)

杯 蓋(1~4・6・8) 全て羨道から出土した。

I類(1~3) 1は口径11.8cm, 器高3.9cmを測る。天井部は丸くゆるやかに 体部に移行し、直立した口縁部に続く。天井部外面は回転へラ切り、体部内外はロクロョコナデ、天井部内面は不定方向のナデで仕上げている。色調は外面が暗灰色、内面が青灰色を呈す。胎土には比較的多くの砂粒を含み、焼成は良い。天井部外面に3条のへラ記号がある。2・3は1の直立した口縁部とは異なり、ゆるやかに外開きしたもので、体部からの移行はなだらかである。調整手法は1と同様である。2は口径11.8cm, 器高3.5cmを測り、外面は暗青灰色、内面は青灰色を呈す。胎土には細砂を若干含み、焼成は普通である。天井部外面に1条のへラ記号がある。3は口径11.8cm, 器高4cmを測り、外面は暗灰色、内面は紫灰色を呈す。胎土にはかなりの細砂を含み、焼成は良好である。天井部外面にへラ記号がある。



— 33 —

杯 身(7・9・10~17) 12が墳裾, 13・17が墓道の他は全て羨道から出土した。

I類(10~14) 10は口径10.7cm, 最大径12.4cm, 器高3.7cm, 蓋受けの立ち上り高0.8cmを 測る。底部は丸味をもちつつも平坦で,ゆるやかに外反する体部に移行する。器肉は底部は厚 く,体部で薄くなり,再び立ち上り部で厚くなる。底部外面は回転ヘラ切りのあとナデ,体部 内外はロクロヨコナデ,内底部は不定方向のナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し,胎土 にはかなりの細砂を含み、焼成は普通である。天井部外面に3条のヘラ記号がある。色調・焼 成は異なるが、ヘラ記号が同じ蓋1とセットをなす可能性がある。11は口径 10.3 cm, 最大径 12.6cm, 器高3.4cm, 立ち上り高0.7cmを測り, 10と比べ立ち上りの内傾度が強い。底部は平坦 で,回転ヘラ切りのままである。体部内外はロクロヨコナデ,内底部は不定方向のナデで仕上 げている。色調は淡灰色を呈し,胎土には多くの砂粒を含み,焼成は良い。底部外面に縦位2 条・斜位2条を交差させたヘラ記号がある。12は破 片資料で復 原実測 したも のである。口径 10.3cm, 最大径12.1cm, 器高3.2cmを測る全体に器肉の厚い作りの 土器である。 底部外面は手 持ちのヘラ削り、体部内外はロクロヨコナデ、内底部はナデで仕上げている。色調は灰色を呈 し、胎土には砂粒を含み、焼成は良い。13・14とも歪みの強い変形した杯身である。13は底部 外面を回転へラ切りのあとヘラ調整し、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は灰 **黒色を呈し,胎土には細砂を含み,焼成は良好である。底部外面に1条のヘラ記号がある。14** は体部内外をロクロヨコナデ,内底部は不定方向のナデで仕上げた青灰色を呈す土器である。

Na類(5・7・9・15~17) 5は杯蓋4とセットをなすもので、口径10.4cm、器高4.1cm を測る。底部は丸く,体部はゆるやかに外反し口縁部に続き,端部を丸くおさめる。体部中位 には2条の沈線がめぐる。底部外面は回転ヘラ切り、体部内外はロクロヨコナデ、内底部は不 定方向のナデで仕上げている。外面は茶褐色、内面は赤紫色 を呈し、 胎土には 細砂を 若干含 み、焼成は良好である。底部外面に杯蓋4と同じへラ記号がある。7は杯蓋6とセットをなす もので,口径9.8㎝,器高4㎝を測る。体部中位に2条の 沈線がめぐる。底部外面 は回転ヘラ 切り,体部内外はロクロヨコナデ仕上げである。色調・胎土・焼成とも5と同じ堅緻な土器で ある。底部外面にヘラ記号がある。9は杯蓋8とセットをなすもので,口径10.6cm,器高4cm を測り、他と比べひとまわり大きい。調整手法は5と同様で、色調は暗赤紫色を呈し、胎土に は若干の細砂を含み、焼成は良好である。底部外面に杯蓋8と同じ1条のヘラ記号を持つ。15 は口径9.8cm, 器高3.9cmを測り, ほぼ7と同形で, 調整手法も同じである。 色調は灰 色を呈 し、胎土には多くの砂粒を含み、焼成は良い。底部外面に5・7とほぼ同様のヘラ記号を有 す。16は口径9.3cm,器高4.2cmを測り,他と比べ口径のわりに器高の高い土器である。体部と 底部の境には明瞭で、体部中位に2条の沈線がめぐる。底部外面は回転ヘラ切りのあとナデ、 体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は赤紫色を呈し、胎土には砂粒を含み焼成は 良好である。外底部には7と同様のヘラ記号を有す。17は復原口径9.6 cm,器高4 cmを測り、

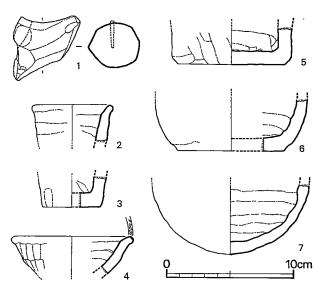
体部中位に若干不明瞭ではあるが2条の沈線がめぐる。調整手法・色調・胎土・焼成とも9と 同様で良好である。

平 瓶 (18) 羨道から出土した。口径7.4cm, 胴部最大径 14.8 cm, 最大器高 14.3 cmを測る。口縁部は漏斗状に開き、口唇部付近で上方に屈折し複合口縁状をなす。体部は扁平で、中位にてゆるやかに屈折し、丸味をもつ平底に移る。体部下半は回転へラ削り、上半はカキ目、口縁部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色で、胎土には若干細砂を含み精良である。焼成は普通である。

③ 土 師 器(第33図)

飯把手(1) 墓道から出土した。把手の内側に幅0.3 cm,長さ2.2 cmのヘラによる切り目が斜めにはいっている。接合を強固にするものかもしれない。把手はヘラによりていねいに面取りされている。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

手捏土器 $(2 \sim 7)$ 全て墓道 から出土した。 $2 \sim 6$ は椀と思われるが、7は小型丸底壺の可能性も持っている。椀には小形 $(2 \sim 4)$ と大形 $(5 \cdot 6)$ があり、器

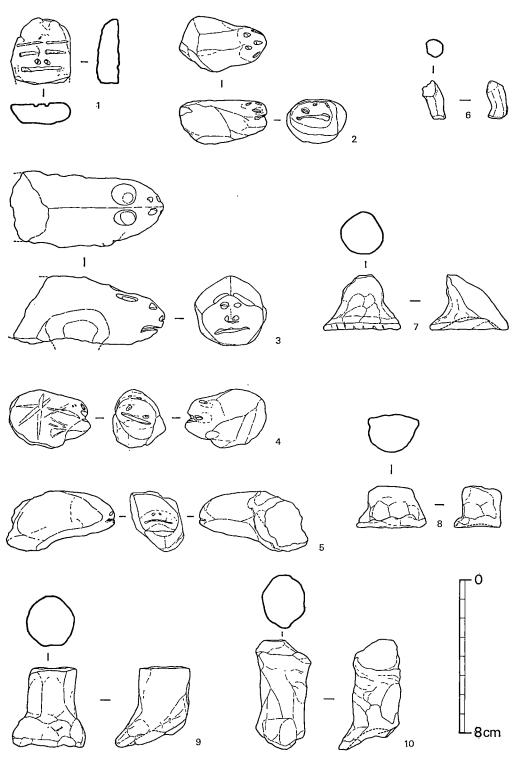


第33図 5号墳出土土師器・手捏土器実測図(1/3)

形上でも、平底の底部から直立気味に外反するもの(2・3・6), 大きく直線的に外反する もの(4),内彎気味に外反するもの(6)がある。調整手法は指に よるナデ,ヨコ ナデ,ナ デ上げ等で仕上げている。4の口縁端部には刺突状の キザミがみ られる。色調は 茶褐色 を呈 し、胎土には砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。5の底部外面一部に煤の付着がある。

④ 人面·獣形土製品(図版28-2, 第34図)

全て墓道から出土した土師質の土製品である。1は人面を思わせる土製品で、細い棒状工具による眉・目・鼻・口の筆致は幼稚ではあるが、人の顔をうまく表現している。 $2\sim5$ は犬を思わせる獣形土製品で、 $6\sim10$ はその足の土製品である。 $2\sim5$ の正面観はさまざまで、最もはっきりする3をみると、耳・目・鼻・口が描かれ、側面観は犬が吠える様を思わせる。足に



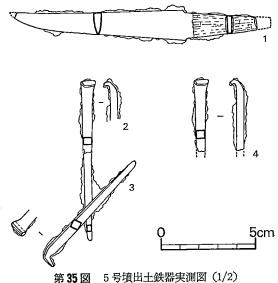
第34図 5号墳出土土製品実測図(1/2)

は6のような小さなものもあり、足の裏はわずかに凹み、土踏まずを思わせる。また、7のように爪を思わせるキザミを持つものもある。色調はほぼ暗褐色を呈し、胎土には若干の細砂を含む焼成普通の土製品である。

⑤ 鉄 器(図版28-1,第35図)

刀子(1) 切先端部と茎部の先端を欠く資料である。復原刃部長9.2 cm,中央部での刃幅1.2cm,背の幅0.4cmを測り,切先付近でわずかに上方に彎曲する。柄部断面は上がわずかに広い長方形を呈し,木柄を若干残している。玄室内出土。

鉄 釘($2\sim4$) 全て玄室から出土した。 $2\cdot3$ が完形、4が下半を欠く資料で、頭部を横からたたいて鍵状にしたものである。2は全長8.4cm、3は7cm を測り、断面方形を呈する。



(4) まとめ

調査の結果、わずかに残る墳丘と周溝から南北約9.70m、東西約7.30mを測る縦長の楕円形状を呈す円墳であることが判った。玄室内は大さく攪乱を受けていたが、攪乱土中から検出された鉄釘の存在は少なからず木棺が安置されたことを示すものと思われる。この古墳の特色の一つは墓道の底面より若干浮いた所から一括して出土した人面・獣形土製品と手捏土器である。とりわけ、獣形土製品については、西日本各地の祭祀遺跡ないしは古墳等から発見されるいわゆる土製馬とは明らかに異なり、犬を思わせる土製品である。本品に類似するものとしては静岡県浜松市都田町中津・坂上遺跡(註1)出土の犬形土製品があるが、細部において若干異なっている。坂上例はすでに大場磐雄氏により土製馬の一つの型式として獣形式と分類されている(註2)。しかし、前田豊邦(註3)・小笠原好彦(註4)両氏はそれを土製馬から分類する必要性を説かれているもので、当古墳出土例も明らかに土製馬と異なり、犬形土製品とする必要があろう。これらの土製品が何に使われたかという製作目的については、土製馬についての大場氏・前田氏・小笠原氏の研究でほぼつきる。いわゆる墓前祭祀・峠神祭祀・井戸祭祀・河川祭祀・祈雨祭祀等である。本例が明らかに古墳の墓道から出土したものであることからして、墓前祭祀であったことは明らかであろう。その解釈は、大場氏は墳墓築造後近親遺族等に

よって、追慕の祭祀が行われ、或いは忌日に祭具を奉献したもの、また、日本書紀天武紀元年条に見られる神武天皇陵に馬と兵器を奉献した記事から古墳から古墳の霊の祟りを和らめたことを推定されている。前田氏は魏志韓伝に記載された『牛馬に乗ることを知らず、牛馬は死を送るに尽すという記載例や、鳥桓鮮卑の葬礼で、馬に死者の霊魂を乗せ、犬にこれを導かせて彼等の間で死者の鎮魂の場所と信じられている赤山まで、道中を送りとどけさせ、その後の犬や馬を殺すという他界観念』に注目し、『埋葬者の霊魂を運ぶという観念上の依代として、古墳の墳丘とが近傍において行なわれたミタマ送りと称する呪術的儀礼行為の所産である』(註5)とされている。しかし、小笠原氏は、各形式に分類された土製馬の実年代から『畿内の場合では7世紀まで確実にのぼる例はなく、築成後かなり年代を経た8世紀以降のものがほとんどのようである。そして古墳から出土する頻度も高いものでない。したがって土馬がかかわったとすれば、被葬者に対する、近親者による追慕的な祭祀や忌日に祭具を奉献するというよりも、神武陵の祟りを除いた記事にみるような、かなり特殊な呪術的なものであった』(註6)とされている。以上が3氏の解釈でありここはその解釈に依拠しつつ、本例を解していきたい。

当古墳の築造時期は6世紀末で、墓道底面より若干浮いて出土したこの土製品は、築造期をさほど離れない時期のものと思われる。また、最終追葬の時期についても出土遺物からして7世紀初めから前半代の年代が与えられ、墓道の攪乱も認められず、極めて限定された時期が比定できる。このようなことから本例は大場氏のいわれる被葬者に対する追慕的な祭祀や忌日に祭具を奉献する呪術的行為であろうし、この土製品が犬を思わせるものであることは前田氏の指摘された鳥桓・鮮卑の葬礼の犬に当るともいえる。また、この犬形土製品がすべて破片資料で、胴部と足部が接合する資料をみいだせなかったことも、故意に欠いた行為ともいえるかもしれない。このような土製品を出土した遺跡としては、本遺跡の北約1.5㎞の所にある下白水大塚(前方後円墳)の前方部からも発見されている(註7)。 (井上裕弘)

註1 向坂鍋二「浜松市都田町中津・坂上出土の祭祀遺物」『考古学雑誌』50―1 1964

- 2 大場磐雄「上代馬形遺物再考」『国学院雑誌』67—1
- 3 前田豊邦「土製馬に関する試論」『古代学研究』53 1970
- 4 小笠原好彦「土馬考」『物質文化』25 1975
- 5 註3に同じ
- 6 註4に同じ
- 7 P 参照

6. 6 号 墳

(1) 墳 丘

5号墳と7号墳の間に位置する。当初完全に削平されていたためこの古墳は昭和46年の55地点の調査の折、トレンチに北側周溝の一部がかかり、はじめて古墳の存在が想定されたものである。今回、ボーリング調査により周溝の南約5mの所に石室の存在が明らかになった。調査はすでに天井石のない石室内の清掃から開始し、石室主軸に直交した墳丘断面用のベルトを残し封土の除去を行った。

墳丘はわずかに25cm~50cmを残すのみである。周溝は長方形状にめぐり、南西隅が切れて入口部を形成する。墳丘内は周溝内側肩部より幅約0.35~1 mの 地山整 形を行い テラス を形成し、2段築成状をなしている。また、わずかに残る墳丘盛土をみても、盛土のはじまりが、テラス肩部とほぼ一致することからも2段築成であることが判る。

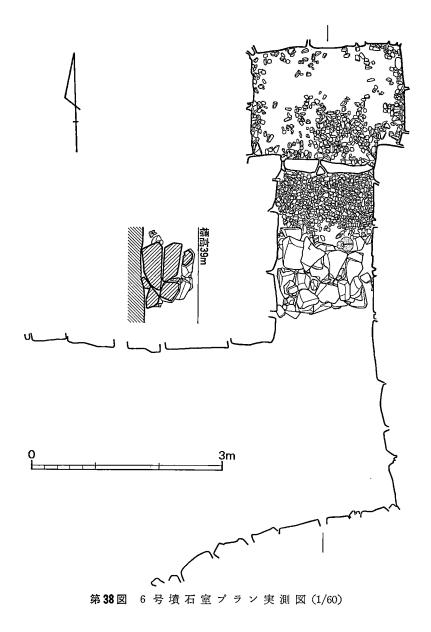
周溝は最も広い北側で、幅約3.80m,深さ0.44mを測る。断面低平なU字形をなす。また、東側周溝中に木棺直葬したと思われる土壙墓が検出された。時期は明らかでないが、上面での周溝との切り合い関係も確認できなかったことからしてほぼ同時期のものと思われる。墳丘の規模は、本盛土されていたと思われるテラス肩部から内側の規模は南北約16m、東西約10mを測る。周溝内側からの規模は南北約18.5m、東西約11.5mを測る長方形状をなす方墳である。盛土の状況を復原してみると、逆L字状に屈曲する墓道は当初からあいていたと思われ、上面観は特異な形状をなす古墳といえる。

また、墳丘内には本古墳と直接かかわりのない古い時期の敷石のある土壙墓と思われる敷石と祭祀遺構がある。

(2) 石 室(第37図)

墓壙は墳丘のほぼ中央部にあり、他の古墳とは異なり、逆L字状に掘削された特異なものである。南北長さ約9.5m、東西約6.5m、玄室部での幅4.5m、石組墓道入口部での幅5mを測る。

両袖単室の横穴式石室で、主軸方位は、 $N-2^{\circ}25'-E$ を指し、南西に屈折して開口する。 玄室の長さ1.75m、幅2.35mの横長の長方形を呈す。天井石はすでにない。奥壁は腰石に幅 約0.8m、高さ0.8mの中型の石材 3 個をすえ、その上に幅約0.7m、高さ0.2mの小さめの石材



を横積みして いる。腰石は 垂直である が, 2段目は 持ち送り式に 積みあげてい る。側壁は東 壁で腰石に中 形の石材 2 個 と小形の石材 1 個をすえ, その上に3段 小形の石材を 積みあげてい る。西壁は腰 石に中形の石 材 2 個を用 い, 2段目は 小形の石材を 使用してい る。東壁が腰 石から持ち送 り式に積みあ げているのに 対して、西壁 は垂直であ る。玄室床面

は盗掘によりかなり攪乱を受けているが、極めて小さい河原石が敷きつめられていたことがわかる。両袖石は側壁から約40cm程突出させている。袖石には縦長の石材を立てていて、袖石間は幅1.45mで、細長い石材 2 個と小さい石 1 個で仕切石としている。

羨道部は長さ約1m,幅約1.45mを測る。床面は玄室床面より1段さがり,玄室と同様極めて小さい河原石を敷きつめ敷石としている。側壁腰石は玄室と比べ少し小振の石材を用い,東壁には横長の小形の石材を1段つみあげている。

閉塞石は玄門より南約1mの所に設置され、高さ約0.8m、長さ1.1mを測る。

石組の墓道は閉塞石の外側から東壁で3.1m, 西壁で0.4m南に延び,それからほぼ直角に屈折し,西壁側で3.9m,東壁側で4m外方にハの字形に開きながら延びる。ハの字形に開いた石組墓道に,さらに素掘りの墓道がつづく。石組墓道の側壁は羨道部側壁とほぼ同形の石材を使用している。素掘りの墓道は幅4.5m,深さ約0.5mを測り,断面低平なU字形をなす。長さは未調査区を残すため不明である。

(3)遗物

① 出土状態

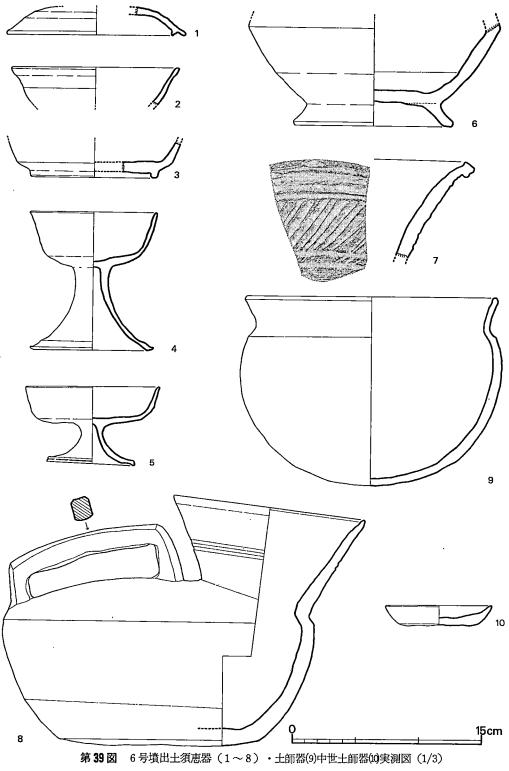
玄室内は盗掘により、かなり攪乱を受けていたが、南東隅付近の床面から土師器椀が出土した。しかし、調査時に盗難にあい現存しない。羨道部は盗掘を受けず、閉塞石に接した南東隅から完形の平瓶・高杯と刀子が検出された。墓道からは須恵器杯蓋・高台付椀・高杯・台付長頸壺・中世土師器皿・刀子片・鉄鏃片等が出土した。南西隅周溝からは須恵器高杯・土師器鉢が出土した。

② 須恵器(図版37,第39図1~8)

杯 蓋(1) 墓道から出土した。復原口径14㎝を測り、身受けの立ち上がりは小さく内側に入る。おそらく、扁平なつまみがつく天井部が平坦なものと思われる。 蓋 N_b 類に属する。 体部内外はロクロヨコナデで仕上げ、色調は暗灰色を呈す。胎土には砂粒を含み焼成は良い。

杯 身(2・3) 両者とも墓道から出土した。 2 は胴部上半, 3 は胴部下半の破片資料のためかならずしも明確でないが, 2 が \mathbb{N}_b 類, 3 が \mathbb{N}_a 類に属すると思われる。 2 は復原口径 13.9 cm を測り,口縁部はわずかに肥厚し,端部を丸くおさめている。色調は暗灰色で,胎土には砂粒を含み,焼成は良い。 3 は高台径 9.9 cm を測る大型品で,高台は垂直で断面ほぼ正方形を呈す。体部内外はロクロョコナデで,外底部は不定方向のナデ仕上げである。色調は灰色を呈し,胎土には砂粒を含み,焼成は良い。

高 杯($4\cdot 5$) 4は南側周溝内南西隅,5は羨道から出土した。4は口径 $9.9\,cm$,器高10cm,脚台部径9.6cmを測る。杯身 V_a 類の杯部に,外開きになる脚部がついたものである。脚端部はわずかに肥厚し,不明瞭ながらも段を形成する。調整手法は杯内底部を不定方向のナデ仕上げの他はロクロヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し,胎土には細砂を含み,焼成は普通である。5は杯身 V_b 類の杯部に短い外 開きの脚部がつくもので,脚端 部に段 を有する。外面は暗灰色,内面は茶褐色を呈し,胎土には多くの砂粒を含む。焼成は良い。調整手法は4と同じである。



— 42 —

台付長頸壺(6) 墓道から出土した胴部下半の破片資料である。強くふんばった高台に、直線的に外反する胴部がつき、中位にて強く内側に屈折し、稜をつくる。ソロバン玉状の胴部をなすものと思われる。高台の畳付は水平である。胴部内外は回転へラ削りのあとロクロヨコナデ、高台部はロクロヨコナデ、底部内外は不定方向のナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良い。

甕(7) 大甕の口頸部破片資料で、墓道から出土した。口縁部は大きく外反し、端部外面に帯状の貼り付け凸帯を有す。頸部には2条の凹線を上下2段にめぐらし、その間に斜位の櫛描き直線文を加えている。色調は暗灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

平 瓶(8) 羨道から出土した完形の把手付平瓶である。扁平な胴部に漏斗状に外開きした口縁部と、断面長方形に面取りされた「コ」の字形の把手がつく平底の平瓶である。口頸部中位に2条の沈線がめぐり、胴部最大径は中位よりやや上にあり屈折は明瞭である。底部に近い胴下半から底部は回転へラ削りのあとナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈し、胎土には砂粒も少なく焼成も良好、堅緻な逸品の平瓶である。口径15.2cm 胴部最大径24.5cm,最も高い所で器高19.5cmを測る。

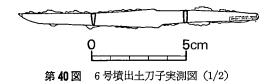
③ 土 師 器 (図版 37, 第 39 図 9·10)

鉢(9) 須恵器高杯4と一括して南側周溝内から出土した。口径19.7cm, 胴部最大径20.4 cm, 器高14.9cmを測る。球形の胴部に「く」の字形に外反する口縁部がつき, 底部は丸底である。口縁部内外はヨコナデ, 体部外面はヨコヘラ削りで仕上げ, 頸部と胴部の境に明瞭な稜を作る。胴部内面はナデ, 内底部はヘラ削りのあとナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈し, 胎土には砂粒も少なく焼成は良い。

中世土師器皿(10) 口径 8.3 cm, 底径6.2cm, 器高1.6cmを測る。体部内外はョコナデ仕上げ, 底部の切り離しは糸切りである。色調は黄褐色を呈し, 胎土には 多くの 砂粒と 雲母を含み, 焼成は良い。

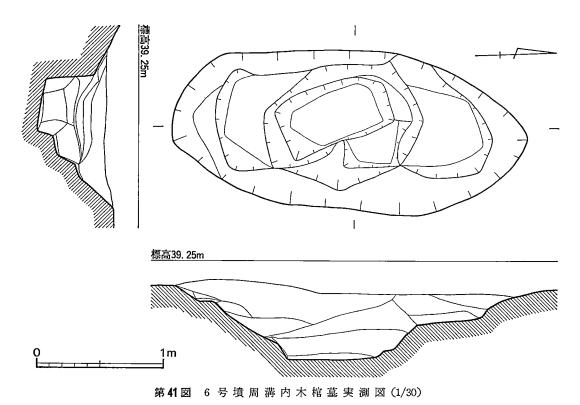
4 鉄器

刀 子(第40図) 羨道から出土した完形 品である。刃部長7.1cm, 茎部長5.2cm, 刃 部中央の刃幅0.7cm, 背の幅0.25cmを測る。 柄部断面は背がわずかに広い長方形を呈し, 木柄をわずかに残している。



(4) 付属遗構

① 木棺墓(第41図)



東側周溝南東隅で検出されたものである。周溝との切り合い関係は上面では認められず,出土した鉄釘が玄室内出土のものと同類であることなどからほぼ同時期の木棺直葬の土壙墓と考えてさしつかえなかろう。南北2.80m,東西1.25m,深さ約0.6mを測り平面楕円形を呈す。土壙の掘り方は南北側で3段,東側で3段,西側は素掘りとまちまちで雑である。底面は長辺約0.9m,短辺0.47mの長方形をなすが,上面プランと若干主軸を異にしている。出土遺物は鉄釘4本のみである。

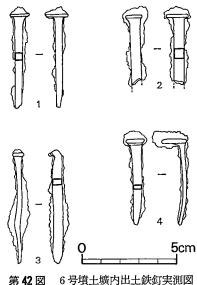
出土遺物

鉄 釘(第42図) $1 \cdot 2$ が土壙内床面より 若干浮いて、 $3 \cdot 4$ は覆土中より出土した。 頭部の形状から 2 種類に別れる。 $1 \cdot 2$ のような左右に張り出したものと、 $3 \cdot 4$ のように頭部を横からたたいて鍵状にしたものである。また $1 \cdot 2$ は断面正方形をなすのに対し、 $3 \cdot 4$ は

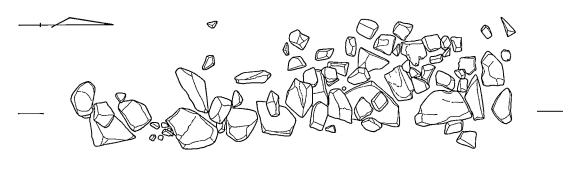
長方形を呈する。釘の長さは4.5~6㎝を測り、5号墳 のそれと比べ小形である。

② 配石遺構(図版40-2,第43図)

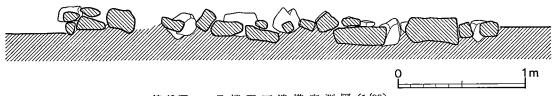
6号墳墳丘北東隅で検出された敷石遺構である。南北 約3.5m, 東西約0.9mの範囲に25×15cm前後の石と少し 大きめの石を長方形状に配石している。上面はほぼフラ ットな面をなし、東側は直線的に配石されている。配石 下には何等遺構はなく、むしろ、上面はすでにないが土 壙墓床面に敷かれた敷石と考えた方が妥当であろう。時 期は明確ではないがこの敷石遺構が6号墳の墳丘下にあ ることなどから少なくとも6号墳より古い時期の所産の ものであることがいえる。出土遺物はない。



第42図 6号墳土壙内出土鉄釘実測図 (1/2)



標高40m



第43図 6号墳配石遺構実測図(1/30)

③ 祭祀遺構(図版38·39,第44図)

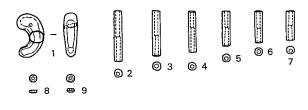
6号墳掘り方東側と西側の一部にわたり6号墳掘り方に切られた状態で検出された不整形な 竪穴遺構である。竪穴内には各所に火を焚いたと思われる炭化材・焼土の痕跡が残り、東側中 央部からは滑石製の管玉 6 個と勾玉 1 個等が出土した。また、堅穴の北東側肩部に接してU字 形の鉄製鋤先1個も検出された。本遺構についてはかって6号墳に伴う築造以前に行った祭祀 遺構であろうとした。しかし本遺構が明らかに掘り方により切られていること,また,出土し た滑石製の管玉・勾玉は一般に5世紀代の古墳から多く発見されるものと共通するもので,6 号墳の築造時期とされる7世紀代のものとは考え難い。むしろ,6号墳北東隅で発見された土 壙墓の敷石と思われる配石遺構が,明らかに6号墳より古い時期のものと考えられることなど からして,この祭祀遺構は配石遺構に伴う可能性の方が高いと考えた方がよかろう。

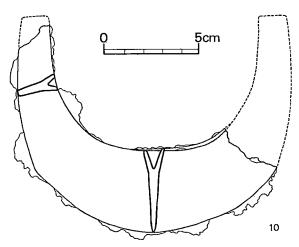
出土遺物 (図版 40-1)

遺構内東側中央壁付近から滑石製の勾玉1個・管玉6個・小玉2個が出土した。また、その 北側の壁に近い所から鉄製鋤先1個が出土した。他に細片のため実測しえないが手捏土器も検 出されている。

勾 玉(第45図1) 青灰色を呈した良質な滑石を材料としている。長さは2.3cm,厚さ0.6cm,重さ2.75g を測る。頭部は肉厚で,腹部・背部とも丸味をもち,さほど明瞭ではないが稜線を残している。尾部は細くなり丸く仕上げている。孔径は1.6cmと小さく,穿孔部の広がりはほとんどみられない。

管 玉(第45図2~7) 勾玉と同質の滑石を材料としたもので、大きさから大中小の3種





第45図 6号墳祭祀遺構出土装身具・鉄器実測図(½)

に別れる。2は最も大きく,長さ2.7 cm,径0.45cm,重さ1.1 g を測る。3 ・ 4 は中型のもので,長さ2.2~2.4cm,径0.4 cm,重さ0.65 g を測る。5 ~ 7 は小型のもので,長さ1.55cm~1.85cm,径0.4cm,重さ0.5 g を測る。g 発力は全て上下から行なったもので,孔径はほぼ2 mm を測る。

小 玉 (第45図8・9) 青灰色を 呈す滑石製のもので、勾玉・管玉と同 質である。径0.4cm、厚さ1.5~2 mmを 測る扁平のもので、穿孔はほぼ中央部 にあり孔径1 mm強である。

鉄製鋤先(第45図10) 左耳部先端 と右耳部を欠失したU字形の鋤先であ る。刃部幅12.7㎝, 復原推定全長11.3 ㎝を測る。刃は中央から両耳部の境の 屈折点まで付されている。木質部を挿入する部分は前・背二面に分かれ、V字状をなす。

(5) まとめ

調査の結果、南北約18.5m、東西約11.5m(周溝内径)を測る長方形状をなす2段築成の方墳であることが判った。本墳の特色は、古墳群中、最も規模が大きいこと、前記したように墳丘・石室構造・墓道のあり方等が他と比べ極めて特異であることである。また、本墳の占地の問題で、本墳の築造年代が周溝底面から出土した高杯によって、7世紀初めから前半に比定されることは、他の古墳の大半が6世紀末であるのに対して一時期遅く築造されたことになり、このことは、古墳群形成期においてすでに用意されていたことになり、重要な意味をもつものといえよう。出土遺物をみるかぎり最終追葬は8世紀前半であろう。

本墳とは直接かかわりをもたないが、墳丘内から検出された配石遺構と祭祀遺構は、出土遺物からの時期の限定は極めて困難であるが、滑石製の勾玉・管玉・小玉・鉄製鋤先等から考えて、5世紀代のものと思われる。 (井上裕弘)

7. 7 号 墳

(1) 墳 丘(図版41,第46図)

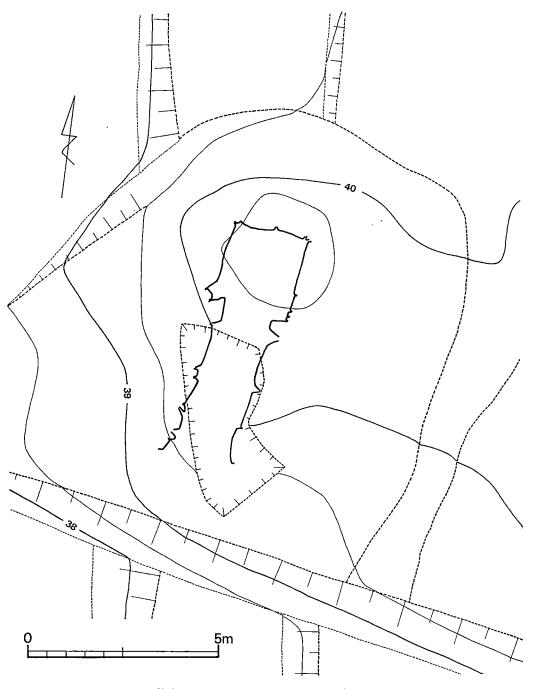
8・9号墳と近接し、中原古墳群の南西群を形成する古墳で、緩斜面に築造されている。

当古墳群中最もよく旧状を窺い得る古墳で、南に開口していた。墳頂部 40.67mを測り 40.5 mのコンタが墳丘を巡る。調査前は径10mほどの円墳と考えられたが、周溝全掘の結果、長径 11.5m、短径9.5mの方形墳であることが判明した。

墳丘は墓壙東側で標高39.5mの黄褐色土を基盤とし1.8mほど上り勾配で、そこから1.4mほど下り、幅1.8m、深さ0.4mの東側周溝に到る。西側は標高38.95 mを基盤とし、東側と比べ55cm低く、1.6mほど緩く下り、そこから25 cmほど地山を削り出し段を有す。墳丘の盛土は、その段上から始まる。西側では墓壙内充塡土を除いて4枚、東側で5枚、北側で7枚の土層が判別でき、いずれも色調は異なるが、砂質の土層をもって封土としている。墳丘の高さは床面から2.7m、東側で1.2m、西側で1.7mである。

周溝は墳丘の東・北・西を巡る。東側は後述の8号墳周溝を切って作られ深さ40cmと比較的深いU字状を呈す。そして北から南へ,直線的に延びる。一方,北側周溝は墳形に一致するが,7号墳北東に築かれた9号墳から延びる墓道として,北東隅に段を作り,改変されている。7号墳は9号墳より古く築造されたことの裏付けとなろう。西側は墳丘の1/3ほどのとこ

ろで消失する。これは、墳丘が東から西へ傾斜していることによるものであろう。

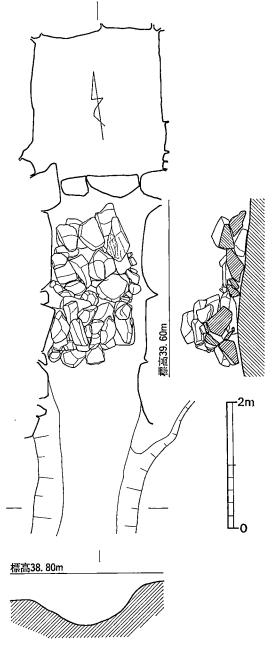


第46図 7号墳墳丘実測図(1/100)

(2) 石 室(図版44·45, 第49図)

主軸をN-7°-Eに置く,両袖単室の横 穴式石室で南に開口している。墳丘の西側 寄りに穿かれた墓壙内に石室は構築され る。墓壙は北側深さ1.4m,玄室中央東側 で1.4m,同西側で1mを測り,南側ほど 浅くなっていく。プランは短辺5m,長辺 7.85mの隅丸長方形を呈し,南側は開口し 墓道に続く。石室と墓壙間は腰石付近は花 崗岩の転石をもってし,それ以上は11~13 枚の並行する土層で充塡している。特に西 側墓壙内は最下部に粘土をもち,その土に も粘質の土を多く用いている(第47図)こ とは,掘方が浅いことと関連がありそうで ある。

石室全長は6.3 mで玄室は2.15m, 羨道 は4.15mと玄室と羨道の比は1:2に近い。 玄室は主軸で長さ2.15m, 右壁側 2.2 m, 左壁側2m,幅は奥壁側で1.95m,中央で 2.0m, 袖石側で2.0mとほぼ方形を呈す。 奥壁は高さ1.2m, 幅1m, 厚さ0.6mほど の石を二枚腰石とし, 立てるようにすえ, 底には根石を置き安定させている。その上 に長さ1.1mの石を腰石にまたがせ、両側 には小さな石材を配す。三段目は二枚で, 石材を横積みしている。腰石からは約8°ほ ど内傾させている。右側壁の腰石は四枚の 石材を用いているが奥壁に接するそれは, 長さ1.45m, 高さ1m, 厚さ0.6 mの角の ある石を横にすえ, 二枚目の腰石は立てて いる。この腰石の上は50㎝前後の石材を不



第50図 7号墳石室プラン実測図 (1/60)

規則に積んでいる。一方左側壁は一枚石と言ってよく,長さ 1.6~m,高さ 1~m以上の大石を横積みにし,袖石との間を小さな石材で充てている。二段目は二石,三段目は右側壁に比して,長方形の石材を配し,天井石を架構している。両側壁は右壁が 18.5° ,左壁 14° と持ち送りをし,天井部では幅 1~mと床面幅より 1~m減ずる。高さは床面から 1.8mで,框石の上部で 1.5mと下る。断面の形状は台形を呈す。

天井石は玄室を覆す二枚があり、厚さは $50\sim65cm$ 、幅は $1.9m\sim1.4m$ である。この天井石と側壁三段目の間は拳大の礫で埋め、さらに粘土で補塡する。

羨道は玄門部で幅1.25m,羨道入口で1.5mでややハ字状にひらく。長さは右壁が3.95m,左壁 4.2mと左壁の方が25cmほど長い。袖石は両壁とも立てて用い,右壁は4枚,左壁は5枚の石材で,袖石を含め3石までは $2\sim3$ 段最高部で床面より1.5mを測り,天井石があったと思われるが,残存していない。羨道と玄室床面は10cmほどの段差をもち,羨道の方が高い。

玄室と羨道は框石で区別される。框石は右壁の袖石とほぼ並行に置かれ、二石よりなる。みかけの高さは羨道側で15cm、玄室で27cmである。

閉塞は框石から30cmのところから始まり、2.7 mまでのの長さで認められた。保存状態がよかったのは、框石から1.5 mまでで、高さ90cmまで残る。比較的横に長い石材を多く用いているが積み方は不規則である。この閉塞は羨道部の入口の両壁石ほど達せず、この両壁の石が一段であり、また用いられた石材からみて、墓道と羨道を分けるものとも考えられる。

墓道は羨道から南へ真直に 2.5 mほど延び,それ以南は削平 され不明。 この墓道 のあり方は, $1\sim6$ 号が遺跡の西側を通る *道。に向ら西向きに対し 7 号から以東の古墳の墓道は南向きに変化する,その境の位置にあたり注目される。

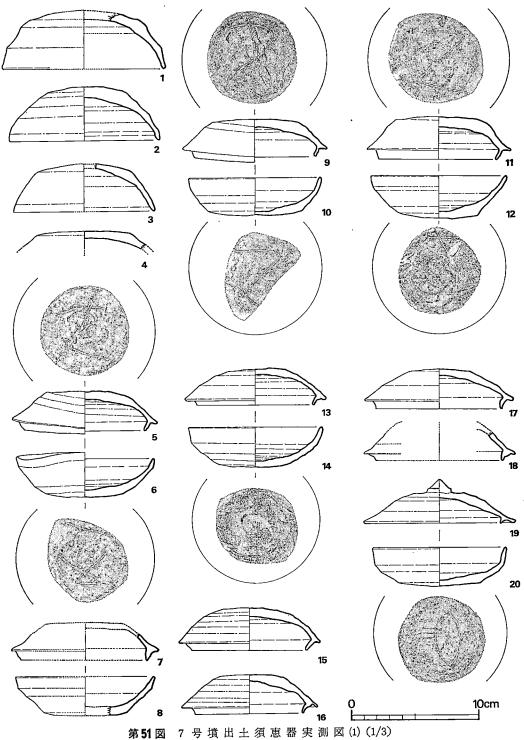
(3) 遺物

① 須 恵 器(図版47)

杯 蓋(第51図) Ⅰ・**Ⅱ・Ⅲ**類が検出された。

I類($1\sim4$) 身受けの返りを有さないもの。1は I 類中でも最大で口径 13~cm,器高4.7~cmを計る。丸い天井部から,内彎ぎみに口縁部に移行する。天井部は切り離し後,回転へラ削りで整形する。東側周溝出土。2も同様な器形だがひと回り小さい。天井部は1~cm前後と部厚い。南側盛土出土。 $1\cdot2$ とも黄灰色を呈し,焼成軟質。3は東側表土,4は石室内より出土した。

取類($5 \cdot 7 \cdot 9 \cdot 11 \cdot 13 \cdot 15 \sim 18$) 最大径は $160 \cdot 10.8 \, cm \sim 17011.8 \, cm$,器高は $1302.8 \, cm \sim 110 \, 3.4 \, cm$ 。ほぼ平坦な天井部から,軽い稜をもって体部へ移行し,外反した受け部になる。返りは細く内傾して立つもの $5 \cdot 9 \cdot 11$ と部厚く真直に延びる $7 \cdot 180$ 二者がある。 また,天井部を回転へラ削りをする $5 \cdot 13$ より切り離し後へラ調整で終るもの $9 \cdot 15 \cdot 160$ 方が



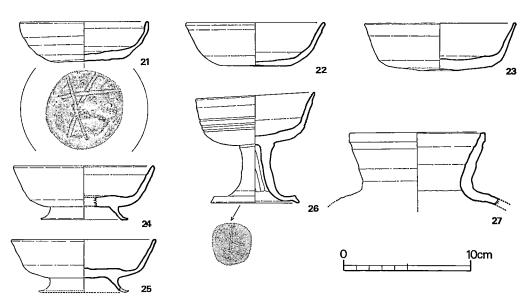
多い。杯身 I 類・I 類とセットになり、墓道より一括して出土した。ヘラ記号は「Z」を基調とした。3 組のセット6 個体5 一6 ・9 一10 ・11 一12 が特徴的で、他に3 組存在する。

■類(19) 杯身20と同一へラ記号を有し、セットになるもの。宝珠形のつまみを有す。最大径12cm、受け部径9.5cm、器高3.5cmを測る。返りは短く、内に入る。天井部は回転へラ削りで、体部は回転ナデを施こす。

杯 身(第51・52図) Ⅱ類・Ⅱ類・ Va 類・ Va 類が出土した。

Ⅲ類(20・21),19とセットになる。口径10.6cm,器高3.15cmを測る。底部と体部の境に回転へラ削りを施こし、体中部から屈曲して直角に近く立ちあがる。焼成硬く、黒褐色を呈す。21は羨道出土で、20と異なり、底部と体部の境に回転へラ削りを施さず、回転ョコナデ。淡い小豆色を呈し、焼成・胎土とも良好。

▼a 類(22・23) 底部から稜をもたずに、緩やかに立ちあがり、口縁部付近でかるく外反する。22は黄褐色を呈し、摩耗している。23は茶褐色を呈し、焼成普通。

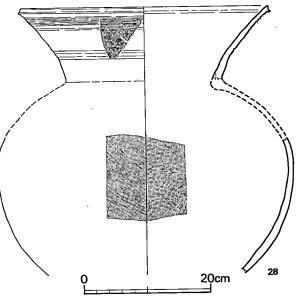


第52図 7号墳出土須恵器実測図(2)(1/3)

墓道出土。

高 杯 (第52図26) 杯 部 は 径 9.4cm, 高さ3.9cm。底部から稜をもたずに直線的に高く立ちあがり, 口縁部で若干外反する。杯体部に沈線状の稜を3条有す。 須恵器杯身 VI a 類と類似。脚部は高さ4.65cm, 脚開口部径 7.0 cm。脚中央部で膨らみながら L字状に屈曲し,脚端部は嘴状になる。暗青灰色を呈し,焼成良好。

壺(27) 壺形土器の口縁部の破 片。口径11.6 cm, 現高5.7 cm を測 る。外方に直口する口縁部は口唇部 で薄く尖る。頸部はゆるく屈曲し,



第53図 7号墳出土須恵器実測図(3) (1/6)

胴部に移行する。頸部は格子目叩きのあと回転ョコナデで消し、それ以下は格子目状叩き。内 面は同心円文の叩き。

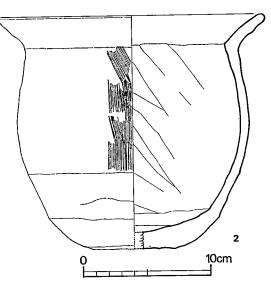
大 甕(第53図) 大甕の口縁部と 胴部破片からの復原実測図。口径37cm を測る。口縁中部には波状文を配し, その上下に稜を有す。胴部は外面が平 行条線の叩き,内面は同心円文の叩き を施こす。

② 土 師 器 (第54図) 杯・甕が出土した。

杯(1) 底部を欠損する資料。胴中央部ににぶい稜を有し、内彎ぎみに口縁部に移行。器壁は6mm弱で胎土良好だが、焼成もろい。口径14cm。全面丹塗り。

甕(2) 底部の一部を欠損するが ほぼ完形の甕形土器。口縁部21cm,器 高18.5cm。 *く、字形にくびれる頸部





第54図 7号墳出土土師器実測図 (1/3)

から外方に開く口縁部を有す。胴部は緩く膨らみ、平らな底部へ移行する。胴部上外面はタテ 方向の細かいハケ目調整を施こし、下部はヨコ方向を基調とするヘラ削り。内面は斜め方向の ヘラ削りで整形する。底部は部厚く 1.3 cmで底外面には櫛状の文様が同心円状に残る。焼成普 通、胎土に長石を含む。募道出土。

(4) まとめ

8号墳と東側で周溝を、9号墳墓道と北側で周溝を接する方墳で、当古墳群中では最もよく旧状を窺い得るものである。7~8号墳間に残した土層断面図(第56図)から8号墳の方が先行することが判る。また9号墳により北側周溝が改変されていることから、9号墳より古く築造されている。

石室は南に開口する単室の横穴式石室で,玄室は主軸で $2.15\,m$,中央部で2.0mとほぼ方形に近い。

玄室内は徹底的に荒され、遺物は何ら出土していないので、最終追葬時期は不明である。墓 道より須恵器・杯蓋・杯身・土師器甕等が出土するが、追葬時のかき出しであろう。

当墳の築造年代は東側墳丘出土の杯蓋 I 類より 6 世紀終末頃と思われ、7 世紀後半まで追葬が行われていたと考えられる。 (木下 修)

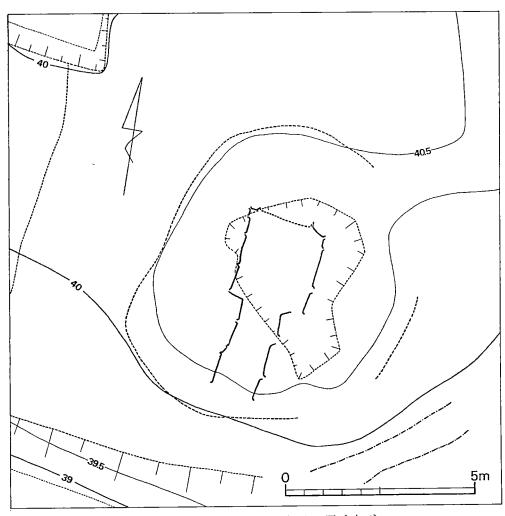
8. 8 号 墳

(**1**) 墳 丘(図版 49, 第 55·56 図)

中原支群の南西群を形成する古墳で、7号墳と周溝を接する。観音山から派生する扇状台地の 西端近くの緩斜面に形成され、最高所で標高40.7mを測り、40.5 mのコンタが墳丘裾を巡る。

発掘前の地形測量で,墳丘は東西 7 m,南北 8 mの円墳と考えられ,墳丘は削平され60cm程 しか残存していない。墳丘中央部には盗掘抗があり,かなり破壊されていることが推測された。 調査は盗掘抗の清掃から開始し,石室の主軸に直交して,墳丘断面用のベルトを残し,封土 を除去した。

墳丘は表土層を除去し、暗褐色土層を基盤にし、その上に黄褐色土をのせる(第56図)。墳丘東側は、石室掘方から 2.4 mで周溝に到る。西側の地山面は掘方から 1.8 mまでは若干下るのみであるが、それより西は 20°程の傾斜をもって、7号墳の周溝に入る。8号墳の西側周溝は7号墳東側周溝で切られ、断面図でも4層と5層の境としてそれが観察される。



第55図 8 号 墳 墳 丘 実 測 図(1/100)

なお、7号墳周溝の東肩から溝底に到る間に、緩いフラット面があり、これが8号墳の西側 周溝の底と考えられる。石室掘方から3.2mを測り、東側の溝底面との距離とほぼ一致する。

8号墳の周溝は,墳丘の北側が古墳築造時のもので,東側は10号墳からのびる墓道としての性格を持ち,西側は前述したように,7号墳東側周溝に切られている。北側周溝は幅2m,深さ15cmの浅いU字形を呈す。東側周溝は10号墳の墓道と共有するにしても,本来の周溝を改変したものとは考え難く,それから判断して,内径約 $9\times 10m$ の円墳である。

(2) 石 室(図版50,第57図)

墳丘中央部に地山から穿かれた墓壙は南北6.4 m, 東西約4 mの長方形を呈し、深さは北壁

側で0.98 mを測る。この墓壙の南小口部から墓道が付設される。石室根石と墓壙肩の間には下に黄褐色粘質土や粘性を帯びた黄褐色土が充塡され、さらに根石とその上横石の間には青灰色の粘土を用いている部分もある。

石室は主軸をN-9°-Eと略南北に指す両袖単室の横穴式石室で、南に開口する。

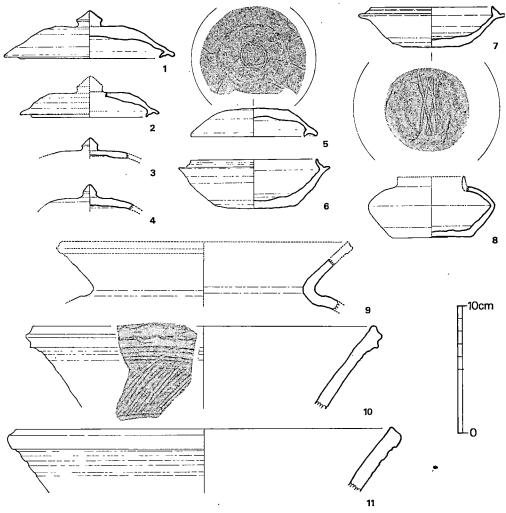
天井部は削平され、まったく残存しない。玄室の奥壁は、両側壁際に小さな根石があるのみである。この両根石の間は1.4 mで、左側壁の腰石からすると奥壁は1枚石であったと思われる。玄室長は両側壁際のプランを結ぶ線を基準として、中軸線で2.35 m、右側壁で2.2 m、左側壁で2.3 m、同じく幅は奥壁で2.1 m、袖石側で2 mを測り、方形に近い形状を呈す。右側壁は三石、一段のみで、左側壁は二石、二段で腰石は内傾ぎみに地山に埋め込まれ、二段目を持ち送りぎみにしている。両側壁とも奥壁側の一石が横方向を長辺とする石材を用い、その上に小形の石材を横積みしている。他の石材は縦方向で、いずれも花崗岩を用いる。玄室内は拳大の河原石を敷石としているが、框石側から左側壁ぎわのみに残存する。この敷石間に鉄釘2本が検出され、木棺を納めたことが推測された。

墓道は天井石を架構しない一段の石組墓道(約1m)から始まり 3.8m南側へ下りながら延びる。それ以後は近世の開墾の為削平されているが、他の古墳と同様、南へ真直ぐ延びるものであろう。幅は羨道部近くで $1.6\,m$ 、南端で $0.8\,m$ と狭くなり、深さは $50\,cm$ 内外でV字形を呈す。

(3) 遺物

① 須 恵 器 (第58・59図)

杯 蓋 (1~5)



第58図 8 号墳出土須恵器実測図(1)(1/3)

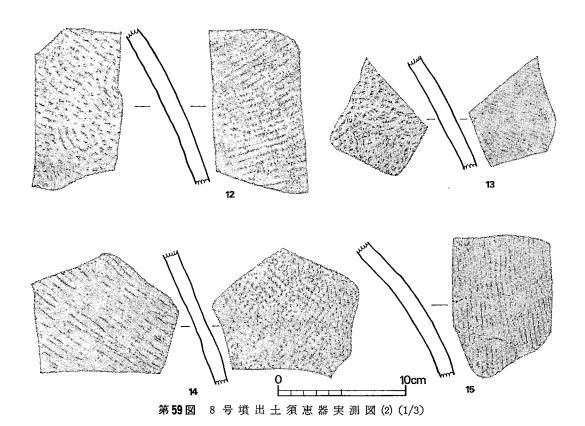
Wb類(3・4) 両者とも乳頭状のつまみ部を有す破片資料である。東側表土出土。

V_b類(5) 玄室床面出土。 口径 10.0 cm, 器高 2.2 cmを測る。 身受けが口縁端部より内側に入るもので、比較的丸みのある天井部から稜をもって体部へ移行する。天井部はヘラ切り離しのまま。

杯 身

I類($6\cdot7$) 6は最大径 11.9 cm,器高 3.9 cm e測る。底部から体部へ外方に延び,口縁端部は外反する。蓋受け部は上方へ細く立ちあがる。7 は若干小型で蓋受けは肥厚し,内傾ぎみである。両者とも墓道出土。

短頸壺(8) 口縁部を欠損する。胴中央部で〝く〟字形に屈曲し、胴上半部はゆるく膨ら

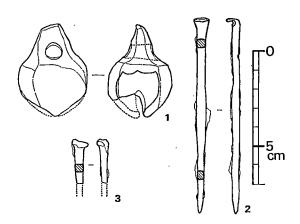


み,下半部は直線的に底部へ移行する。底部は平底で,径 6.1 cm。頸部上は前述のように欠損するが,直行する短かい口縁部が付くものと思われる。胴部は不定方向のナデ調整,底部はヘラ切り後ナデ調整を施こす。墓道出土。

甕(9~15) 9は頸部破片で玄室内 出土。比較的小型で頸部径は復原で17.6 cm を測る。10~15 は大甕の破片で10 は 復原口径27 cm, 11 は30 cm。14 の大甕 の胴部破片は内面が平行斜条線叩文,外 面が格子目叩文を施こす資料である。

② 土 製 品

土 **鈴**(第60図1) 南側拡張区出土。 紐受け孔を有し、全体は西洋梨形を呈 す。下半部ならびに丸を欠損する。桃褐



第60図 8号墳出土土鈴・鉄釘実測図 (1/2)

色を呈し、焼成良好。型態的には下白水大塚出土のものに類似するが胎土、焼成等に相異がみ られ、時期的には中世以降のものであろう。

③ 鉄 製 品

鉄 釘(第60図 $2 \cdot 3$) 玄室内に 安置 された 棺材に 用いられたもの。 2 は完形品で長さ 10.3 cm。 頭部は *L_x 字形に折りまげられている。 断面は方形を呈す。 3 は頭破部片。 両者 とも木質部は残存しない。

(3) まとめ

7号墳に西側周溝を切られており、東側周溝は 10号墳の墓道が入り込む。径 $9\sim10~m$ の円墳で、南に開口する単室の横穴式石室である。玄室の奥壁ならびに、天井石は存在しない。玄室内の框石側に床石が残存し、その間に鉄釘が検出されたことから、組合式木棺を納めたことが判る。

本墳は前述のように7号墳より古い時期に築造されたことは明らかであるが、出土遺物からすると6世紀終末頃で、7号墳とほぼ同時期の年代が与えられ、7世紀中葉頃まで使用されたと考えられる。 (木下 修)

9. 9 号 墳

(1) 墳 丘(第61図)

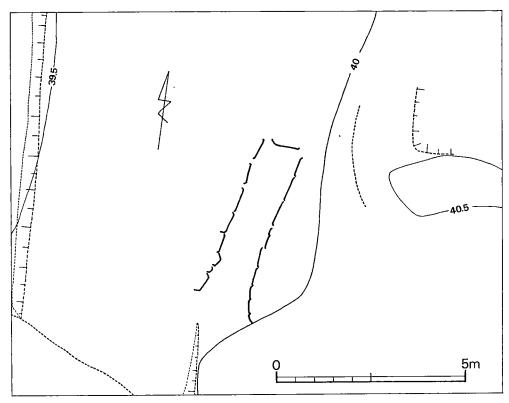
調査前の地形測量でも、墳丘の裾、コンタ等古墳が存在するとは考えられなかったが、7号墳の周溝の調査で、閉塞石らしきものが発見され、古墳の存在が推測された。

7・8号墳の北側、中間に位置し、周溝・墓道の切り合いからも、南西端の一群を構成する 古墳である。

周溝は墳丘の三方を巡り,幅は60~75cm,深さ10~20cmと浅いU字形を呈し,内径南北5.9m, 東西6.4mの円墳である。東側周溝は8号墳の北周溝へ続き,西側周溝は7号墳の北周溝に入る。

(2) 石 室 (図版 52·53, 第 62 図)

石室の上部はまったく削平されていたが、腰石はしっかり残っていた。主軸を N-17°-E



第61図 9 号 墳 墳 丘 実 測 図(1/100)

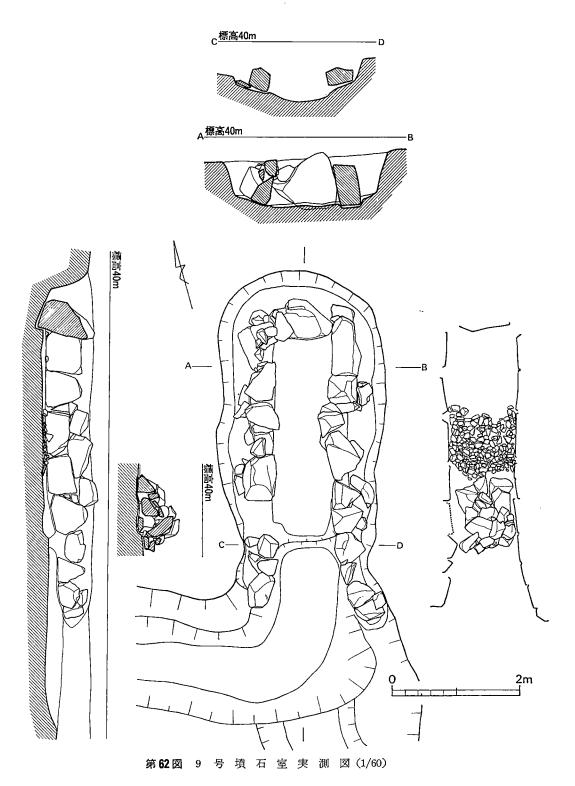
とり、南に開口する無袖の横穴式石室である。

墳丘のほぼ中央に穿かれた長辺5.3m, 短辺 $2\sim2.6m$ と扁長な墓壙内に石室が構築される。 墓壙の深さは北東側で80~cmと最も深く、南西側になると45~cmしか掘り込んでいない。

石室は全長3.3 mで玄室と羨道を分ける袖石,框石等の施設はないが,敷石と閉塞石より石室を分けられる。

閉塞石は奥壁から $2.3 \, m$ のところから始まり、その奥に河原石を用いた敷石がみられる。従って、この閉塞石より奥を玄室部とすれば、長さは $2.3 \, m$ 、幅は奥壁側で $1.1 \, m$ 、羨道側で $1 \, m$ 弱。 プランはゆるく狭まる羽子板状を呈す。 奥壁は $1 \,$ 枚石 を腰石とし、 内に $20 \, ^{\circ}$ 傾けて立て高さ $70 \, cm$ 。 東壁は $2 \,$ 枚で奥壁側 $2 \,$ 枚は $1 \,$ 段、他は $2 \,$ 段認められる。最高所で床面から $80 \, cm$ である。 床面は若干奥壁側に下る。 床面上には敷石が $1 \, m$ ほど残るが、 奥壁側にはまったくなかった。

閉塞石は1mほどあり,奥壁側は立てて積み,反対側は上部に覆いかぶせる様にしている。高さは65cm程である。この閉塞石の切れる部分の床面に10cm内外の段差があり,この段をもって石室と墓道に分けられるとすれば羨道部にあたる箇所は長さ1m,幅1.05mで東壁は二石,2段が残り,西壁はやはり二石であるが一石を欠く。床面は平担で,レベルは玄室部とかわらない。



— 61 **—**

墓道は石組墓道と素掘りの墓道にけられる。石組墓道は開口部で1.5 mと大きくラッパ状に開き、東壁で1.4 m、西壁で1 m続く。 前述のように羨道部より 10 cm程高くなる。素掘りの墓道は石組墓道からほぼ直角に南から西に向き、7号墳の北側周溝に入り込む。このさい7号墳の東北隅の周溝を掘り下げ墓道として改変している。従って9号墳の築造は7号墳より後出であると言える。

このように西向きの墓道は $1\sim6$ 号墳の梶原川に面す台地西麓の古墳に特色的に見られるものであるが、 $1\sim6$ 号墳が独立した墳丘—墓域を有するのに対し、9 号墳は $7\cdot8$ 号墳に制約された墳丘—墓域を形成している点に相異がある。

(3) 遺 物

① 須 恵 器 (図版 54, 第63 図)

杯 蓋 (第63図1~4)

I類(1) 丸みをもつ天井部から内彎ぎみに口縁部へ移行する。口縁上1cmほどで2.5 mm ほどにくびれ、口唇部は肥厚する。底部ヘラ切り離し後、ヘラ調整、西側周溝出土。

■類(2) ¼の破片。 ややへこんだ天井部から口縁部に移行する。 身受け部は若干内傾し、高い。天井部はヘラ削り。北側周溝出土。

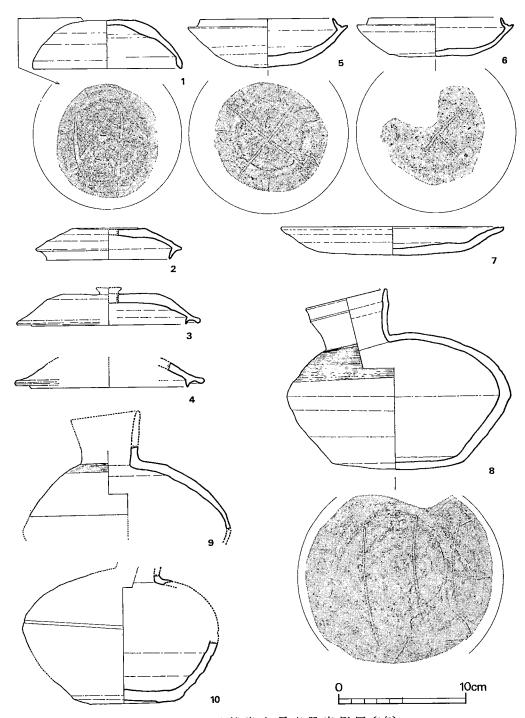
Wb 類(3・4) 3は天井部から稜をもたずに緩く口縁部へ移行する。身受け部は内側に 入り込む。天井部には扁平なつまみが付くと思われる。4は口端部の破片。

杯 身(5・6)

I類 5 は丸い底部から内彎ぎみに体部へ移行する。蓋受けのかえりは内傾ぎみだが、まだ高い。底部はヘラ切り離しのあとヘラ調整を施こす。最大径 $12.8\,cm$ 、器高 $3.9\,cm$ 。 暗灰色を呈し焼成良好。 6 は 5 と比べて平担な底部を有す。蓋受けのかえりは細く、直に近く立つ。最大径 $12.4\,cm$ を測る、胎土に細砂粒を含む。

盤(7) 盤というには小さいが一応ここであつかう。 口径 17.6 cm, 器高 2.2 cmを測る。 底部は比較的平らで,体部へは外方に外彎ぎみに開く。口唇部内側には浅い沈線が一巡する。 底部は回転へラ削りで体部は回転ナデ。内底面は中心方向への細かいハケ調整を施している。 閉塞石外に立てかけるように出土した。暗灰色を呈し,焼成良好。

平 瓶(8~10) 3個体出土した。8は胴部最大径17.7 cm,器高14.1 cmを測る完形品。口縁部は径6.7 cm,高さ3.7 cm。頸部から胴上半部はカキ目調整を施こし,胴下半はヘラ削りによる整形。底部は若干丸味をもち,三本線のヘラ記号を有す。墓道出土で,暗灰色を呈し焼成良好。9は口縁部と胴下半部を欠損する。胴部には粘土がかなりかわいた時期にカキ目調整が施こされ,内面は同心円文叩きを施こした後消している。10は胴下半部の破片で,胴部最大径



第63図 9号墳出土須恵器実測図(1/3)

の箇所には沈線を有す。底部はあげ底。胴下半部はヘラ削りの整形を施こす。西側周溝出土。

(4) まとめ

7号墳・8号墳の北側に位置し、全掘の結果古墳の存在が判明した。径約6m内外の円墳で南に開口する無袖の横穴式石室である。石室は閉塞石付近で若干狭まり、墓道部でラッパ状に広がる。石室と墓道は10cm内外の床面段差をもって分けられ、玄室部の閉塞側に床石が認められた。

石室から西へ直角にまがる墓道は、7号墳の北周溝へ入り込むが、墓道としての機能を具現 化させるために、7号墳東北隅の周溝を掘り下げ、北側周溝を利用する方法をとっている。

出土した遺物、7・8号墳との関係から当墳は7世紀初頭に築造され8世紀前半頃まで使用されたと考えられる。 (木下 修)

10. 10 号 墳

(**1**) 墳 丘(図版55-1,第64図)

本古墳は、発掘前の地形図でわかるように、50 cm間隔の等高線で標高 41 mの線が1本しか 廻らないほどに墳丘は完全に破壊されていた。したがって、中央の凹みからわずかに破壊され た石室の存在を予想できるにすぎなかった。墳丘土層図(第65図)を見ても、旧表土の上にた だ1層の盛土が残っているだけである。

周溝は北西側と東側に一部確認されるだけで、墳丘のプランは明確にできないが、復原すると東西径約8.5m、南北径約8.5mの円墳になる。

(2) 石 室(図版 55~60, 第 66 図)

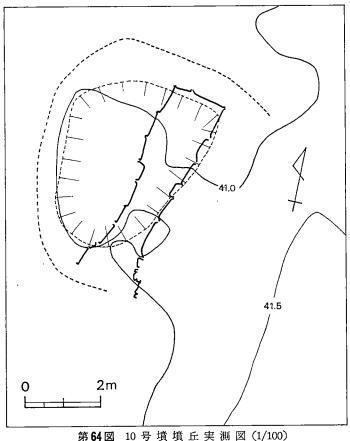
本墳の主体部は、主軸を $S-17^\circ$ —Wにとり、玄室・羨道と前庭部といえる「ハ」の字状に広がる石組の側壁を有する墓道から構成された両袖形横穴式石室である。石室は総て花崗岩で構築されているが、すでに上半分を破壊され、腰石とその上に2、3段の石組が残っているだけである。

石室掘方は、部分的に 2 段掘りにしながら旧地表から 1 m掘り下げて床面を造り、さらに石室腰石の部分は奥壁で20cm、側壁で $0\sim10cm$ 掘り下げて腰石を安定させている。羨道部は玄室

より床面が10cm程度高く, それから側壁の腰石は20cm 程掘り下げて安定させてい る。石組墓道部分は次第に 外の素掘墓道に向って地山 が下っているが, 結果的に は羨道と同レベルに埋めそ ろえている。側壁の石組は 閉塞石の外側から次第に床 面より高くなり, 石材も小 さくなってくる。

石室全長は、石組墓道を 加えて右壁で 5.55 m, 左 壁で5.35 mあり、 両壁ほ ぼそろっている。

玄室は, 奥幅 1.4 m, 前 幅 1.2 m, 右壁長 2.3 m, 左 壁長 2.15 m の 大きさであ る。壁面の構築法を見ると、 玄室から羨道まで腰石は面



の広い側を内側にして石材を立てて並べるが、石組墓道からは直接横積みにしている。腰石は 垂直ではなく、9°~12°に傾斜しており、2段目からはレンガ積式の横積みにしてさらに持ち 送っている。3段目が残っているのは玄門部の右壁のみで,天井の高さは不明であるが,玄門 は3段目の上に天井が架構されると思われる。したがって、玄室の天井は4段目、あるいは部 分的に5段目の上に架構されるのではなかろうか。

玄門は、右袖石を13 cm、 左袖石を20 cm内側に配し、 その間に最大幅40 cmの框石を渡して 玄室と羨道を区切っている。したがって、玄門幅は 0.9 m, 高さ約 1.2 mとなる。

羨道は、玄門内側から 1.35 mのところに内側をそろえて閉塞石があるので、右壁は 2.15 m, 左壁は1.7 mの長さとなり、この上部まで天井石が架構されるものと思われる。 羨道幅は0.9 mの玄門幅とほとんど変わらずに石組墓道に続くが、右壁で袖石の次の石が一部広がりを見せ ている。

前庭部といえる石組墓道は、最大幅1.75 加まで広がって切れる。壁面の石材は小さくなり、 2段目以上が残っていないが羨道部から次第に縮小されていくものと思われる。

玄室の床面は掘方床面直上に花崗岩礫を一層だけ敷き詰めているが、奥壁の方が5cm程玄門側より低くなっている。羨道には一部敷石が存在した可能性があるが、むしろ埋土によって奥壁部床面より10cm程高くしている。 閉塞石ははこの埋土の上に小ぶりの花崗岩で積み上げている。閉塞石の積方は、一応内側の面をそろえているものの、不規則で雑な積上げといえる。

素掘墓道は、石組墓道端が最大幅で2.35 mあり、次第に狭くなって、8 号墳東側周溝に合流している。素掘墓道は、石室主軸と同方向に延び、11 号墳を西側に 避けた形で一部湾曲するが、直線距離で8 号墳周溝まで16.1 mある。

10号墳は、素掘墓道の関係から8号墳と11号墳より新しいといえる。

(3) 遗物

① 出土状態(図版58-2・61-1)

玄室内は敷石がよく残っていたのであるが、遺物がまったく発見されなかった。完壁な盗掘である。しかし、羨道の右壁寄りに須恵器の長頸壺と杯身の完形品各1個が置かれていた。原位置であろう。

石室外では周溝内から須恵器の高杯・杯蓋・杯身が発見されている。石組墓道では,須恵器の杯のセットが床面近くで出土したが,素掘墓道では石組墓道端から6mの地点で,墓道が半分程埋没した黒色土の中層に完形の土鍋が1個伏せて置かれていた。また土鍋を取るとその下には土師器杯が2個重ねてあった。 (柳田康雄)

② 須 恵 器 (図版 61-2・62, 第 67 図)

杯 蓋(1・3~5)

Ⅱ類(1・3) 1は杯身2と同一へラ記号を有し、セットになるもので、墓道より出土。 口径10.4 cm、器高3.3 cmを測る。天井部は平坦で稜を有し、体部へ移行する。身受け部に1 条の沈線を有し、立ち上がりは内傾する。天井部は切り離し後へラケズリ。3 は南東周溝より 出土し、復原口径8.8 cm、復原器高3.2 cmを測る。体部は内側面ともロクロヨコナデ調整。底 部内面はナデで仕上げている。色調は1が褐色、2 は灰黒色。胎土は細砂を含み、焼成は良好・竪緻。

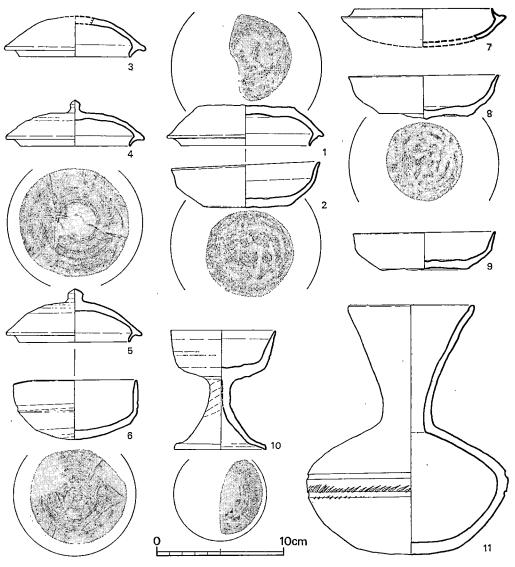
Wb類(4・5) 両者とも乳頭状のつまみを有し、南東周溝より出土。4は破片資料で、復原口径8.6 cm、復原器高3.6 cmを測る。5は杯身6と同一へラ記号を有し、セットとなるもので、口径8.8 cm、器高4.2 cmを測る。天井部はやや丸味をおびて緩やかに身受け部へ移行する。天井部は回転へラケズリ後につまみをつけ更に、カキ目調整を加えている。つまみの接合部はヨコナデ仕上げ、天井部内面はナデ、その他は総てロクロヨコナデで仕上げている。色調

はともに暗灰色を呈し、胎土に細砂を含む、焼成は良好・堅緻。

杯 身(3・6~9)

I類(7) 西側くぼみ出土の破片資料で、復原口径 10.8 cm、復原器高 3.0 cmを測る。受け部に凹線を有し、内傾する立ち上がりの端部は細く尖る。調整は内外面ともロクロヨコナデで仕上げている。胎土・焼成は良好・堅緻。色調は褐色を呈する。

I類 $(2 \cdot 8)$ 2例とも墓道出土。 2は口径 11.7 cm, 器高 $3.0 \sim 3.5$ cm と歪んでいる。 8は口径 11.8 cm, 器高 3.4 cmを測る。 2は杯蓋 1 とセットとなる。体部は内彎して立ち上がり,



第67図 10号墳出土須恵器実測図(1/3)

僅かに外反する口縁部へと移行する。底部外面は粗いヘラ切り、内面はナデ調整。体部は内外面ともロクロヨコナデで仕上げている。胎土に細砂を含み、焼成は良好。

■類(9) 羨道より出土し、口径 11.2 cm, 器高 3.0 cmを測る。口縁部は体部中位から屈曲して、わずかに外反しながら直線的に立ち上がる。底部外面に粗いヘラケズリで 8 と類似した「×」の字状のヘラ記号を有する。内面はナデ。体部はロクロョコナデで仕上げている。胎土・焼成は良好・堅緻。

№a 類(6) 杯蓋5とセットで、南東周溝より出土。口径9.8 cm, 器高4.8 cmを測る。口縁部は体部中位から屈曲してほぼ直角に立ち上がり、端部は丸くおさめている。底部外面は粗い回転へラケズリ、内面はナデ、体部は内外面ともロクロヨコナデで仕上げている。胎土に細砂を含み、焼成は良好・堅緻。色調は暗灰紫色。

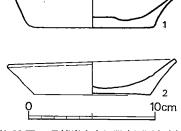
高 杯(10) 北西周溝より出土。杯部口径 8.3 cm,器高 9.5 cmの小形である。杯部底部内面はナデ、その他は総てロクロョコナデで仕上げている。杯部底部外面は脚部を取り付け、脚柱状部に左方向のしぼりを加えた後に、ロクロョコナデで仕上げている。色調は暗灰黒色で、脚部内面は暗茶褐色を呈する。胎土は細石を含み、焼成は良好・堅緻。

長頸壺(11) 羨道右壁付近より出土し、僅かに口縁部の一部を欠く。口径 9.6 cm, 頸部最小径 3.9 cm, 胴部最大径 15.8 cm, 器高 19.8 cmを測る。口頸部は緩くラッパ状に外反するが、口縁端部は丸く、わずかに内彎する。胴最大部に二条の凹線を巡ぐらし、その間にヘラによる右上方から左下方の鋭い斜行刻みを施こしている。凹線下位は粗い回転ヘラケズリを施こし、その他は総てロクロヨコナデで仕上げている。頸部基部にはしぼりの痕がみられる。胎土に砂粒を含み、灰色を呈す。焼成は良好・堅緻。

③ 土 師 器(図版62,第68図)

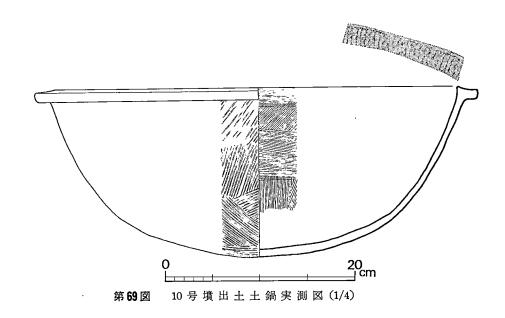
杯 身($1\cdot 2$) 2例とも 墓道の土鍋下より出土し、1は口径 $12.5\,cm$ 、 器高 $3.7\,cm$ 、 2は口径 $13.2\,cm$ 、 器高 $2.8\,cm$ を測る。体部 は直紡的に外反し、口縁端部は丸くおさめている。底部外面は糸切り後板目痕、2はわずかに上げ底ぎみである。底部内面はナデ、その他は総て

ロクロヨコナデで仕上げている。胎土に細砂を多く含むが, 焼成は良好。 色調は橙褐色を呈する。



第68図10号墳出土土師器実測図(1/3) み、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。(小林義彦)

土 鍋(第69図) 墓道上層出土の口径 42.0 cm, 器高 17.7 cmを測る大形の資料である。外面は粗い刷毛により整形し、口縁部から体部上位は更にヨコナデで仕上げている。 内面上位は細かい刷毛、下位はナデで仕上げている。 体部 10cm 外面中位は全体に煤の付着が顕著である。 胎土に砂粒を含



(4) まとめ

墳丘西側の攪乱されたくぼみから I 類の小片が出土しているが、これでは時期の決め手にならない。石組墓道発見の I 類と羨道内発見の I 類は同時期のものであるから、7世紀初頭ごろには最初の埋葬が行なわれたであろう。 築造年代は墓道の関係から、8号墳と11号墳よりは新しいといえる。

素掘墓道の埋土中層にあった完形の土鍋や杯から、素掘墓道は中世にはまだ完全に埋没していなかったことを現わしているし、この時代に古墳の盗掘なり、別途利用が考えられる。

(柳田康雄)

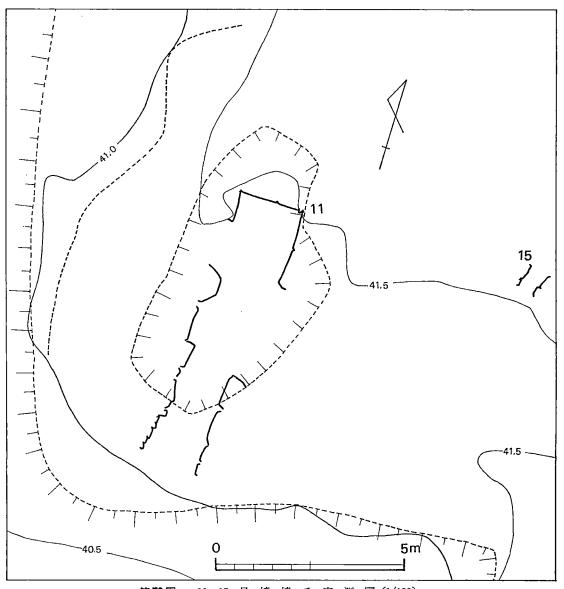
11. 11 号 墳

(1) 墳 丘(図版 63, 第 70~72 図)

本古墳は、とくにひどく破壊された古墳である。発掘前は石室部分が大きく陥没し、墳丘もほとんど失なっていたが、標高 41 mの等高線が西側の墳丘裾をめぐり、その存在が知れた。

墳丘の盛土は、地山面から高さ 0.5 mだけ残り、地山と同質の黄褐色の花崗岩バイラン土や バイラン土を含む暗茶褐色土で版築状に積まれている。

周溝は、現状で溝として残っているのは北側の一部だけであるが、東側には存在したものと思われる。第71図の土層図でわかるように、東側周溝がある程度埋った後に、13 号墳墓道が掘られているため、溝としては残っていないが、西側の地山整形と同様に墳丘の裾としては判断できる。したがって、墳丘の規模は南北径 $11\ m$ 、東西径 $8.2\ m$ の隋円形プランで石室を覆うだけのものである。



第70図 11・15 号 墳 墳 丘 実 測 図 (1/100)

(2) 石 室(図版64~66, 第73図)

本墳の主体部は主軸をS-4°-Wにとり玄室・前室・羨道から構成された複室の横穴式石室である。石室は総て花崗岩で構築されているが、玄室の左壁の一部、玄門右袖石と前室右壁を完全に失っており、その外も玄室と前室は腰石を残すだけである。

石室掘方は、石室が破壊されて腰石の一部まで抜かれているので、荒されて不整形になり原形をとどめていない所が多い。掘方は、2段掘りで東側の地山からすると、1.3 m掘り下げて玄室の床面を造っている。玄室から羨道までの腰石部分は、さらに20 cm程掘り下げて石室外側に根石を配し安定させている。玄室・前室・羨道の床面の高さは、地山面では一定している。

石室全長は、右壁で7.5 m、左壁で7.3 mあり、左右で20 cmの違いである。

玄室床面は、奥幅 1.73~m,復原前幅 1.65~m,右壁長 2.1~m,左壁長 2.15~mの大きさである。玄室の腰石は一部を失なっているが,各壁面共 2 個の石を使用して 5° から 7° 内側に傾斜させて立てている。 左壁や右袖石の抜き取られた跡を見ると,腰石の裏面は 根石で固定している。

玄室は、 右袖石を失なっているので明らかでないが、 左袖石のように玄室から約 25 cm突出させると、幅約 1.15 mとなる。框石は一部残っているが主体は抜き取られている。

前室は右側が壁面・袖石共抜き取られているので不明な点が多い。残っている左側で計測すると,長さ $1.1 \, m$ になるが,玄室袖石の石材が面取りされたかっこうになっているため,長さ $1.4 \, m$ とも受取れる。左壁は,玄室袖石から $30 \, cm$ 奥まり,前室袖石は前室壁面から $25 \, cm$ 突出させている。前室右壁も同様であったとすると,前室奥幅約 $1.75 \, m$,前幅 $1.65 \, m$ となり,幅においては玄室とほぼ同じになる。

前室左壁は1枚石で,腰石のみが残っている。腰石は内側に 12° 傾斜させて立て,外側には根石や詰め石によって固定させている。

前室の袖石も左側が残っているだけである。前門の復原幅は約1.1mとなるが、前門框石も抜き取られ、一部が残るだけである。

閉塞には最下部に2個の石が使用され、その上に小ぶりの石がわずかに残っていただけで、 荒されて2段目以上の積上げは不明である。 石組墓道は、閉塞石の外側からわずかに広がり始め、小ぶりの石を横積みにしている。基底部の石も外側になるほど床面より高くなり、床面も U字形に なってくる。 石組墓道最大幅は1.5 mとなり、羨道幅より30 cm広くなっているだけである。

玄室床面は花崗岩礫を敷石にしていたらしいが、全面荒らされていた。前室床面も大半荒らされ低くなっているが、左壁の部分が残っているだけで、敷石は不明である。 羨道床面は残っているが敷石はない。

素掘墓道は,石組墓道端から3.4mを確認したが,その先は障害物があるため発掘できなかった。墓道はU字形断面をして,南側ほど床面レベルが下がり排水溝の役割もはたしたと思われる。

(3) 遗物

① 出土状態(図版66-2・67-1第74図)

石室内は盗掘を受け、完全に荒らされていたが、残っていた遺物は大きく他の場所に移動していないようだ。玄室の荒らされた床面には、金環2個と多数の鉄釘や人骨片・須恵器片・陶磁器片・寛永通寶が残っていた。これらは原位置のものではないが、玄室には木棺に埋葬された遺体があったのは間違いない。

前室の左側壁にわずかに荒らされていない 床面があり、 完形の須恵器 \mathbb{N}_b 類杯 \mathbb{N}_a 類 杯片が発見された。

閉塞石外側の石組墓道には、黒色土が推積しているが、その下層から床面で須恵器の坩・長 頸壺・Ⅵb 類杯が出土した。追葬時か、墓前祭のものであろう。

素掘墓道では、花崗岩礫に混じって床面近くから鉄鏃と須恵器 I 類杯・土師器の高杯・浅鉢が出土した。鉄鏃が混入しているところから、石室内から出されたものと思われるが、鉄釘が混入しておらず、玄室内にも鉄鏃は 1 片もない。これは、前室にあったものが盗掘で出されたか追葬時に玄室のものを出してその後に木棺が埋葬されたのであろう。

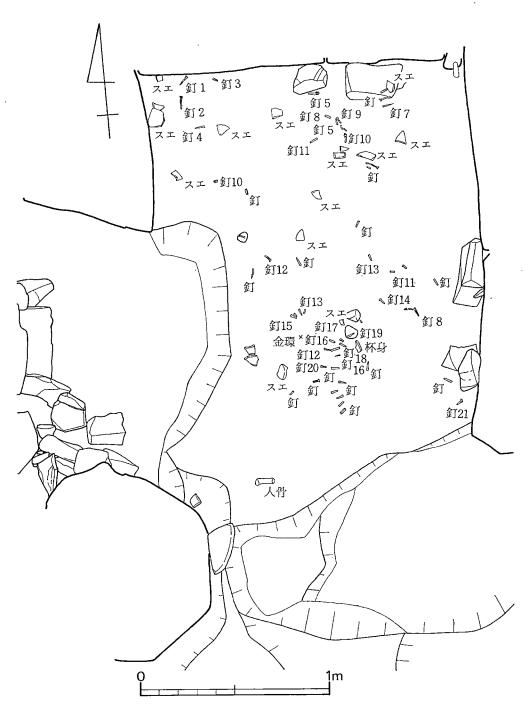
墳丘付近の表土から、須恵器Ⅰ類と№ 類の杯や坩が検出されているが、周溝内からもⅠ類 杯が多く出土しているので、Ⅰ類は古墳築造時のものが墳丘にあったのではなかろうか。周溝 からは、『類杯や平瓶も発見されているが、Ⅰ類杯のセットが盗難にあったのは残念である。

(柳田康雄)

② 須 恵 器 (図版 67-2・68, 第75~77 図)

杯 蓋 (1・2・4~8)

I類(1・2・4~7) 1は西側周溝, 2・7は墓道, 4・6は石室内, 5は西側墳丘内



第74図 11号墳玄室内遗物出土状態実測図(1/20)

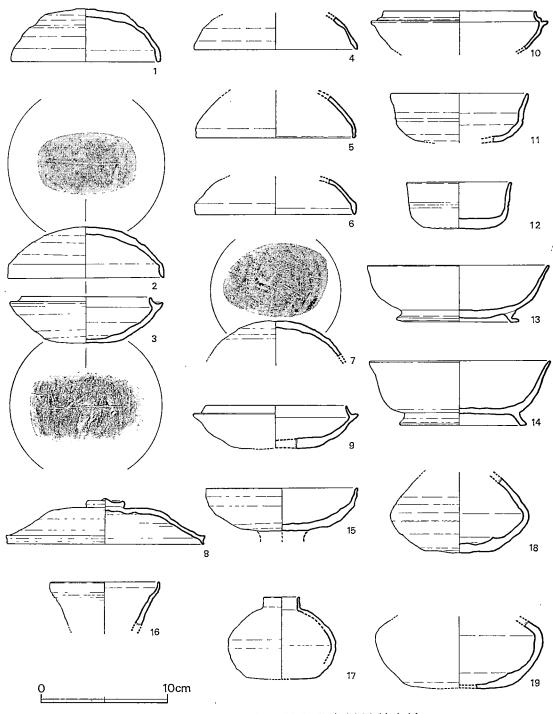
から出土した。天井部は丸味をもち、体部は内反気味に開く。口縁部で直立するものと、4のようにそのまま開くものがある。端部は丸くおさめている。2・7は天井部外面へラ切り後手持ちのヘラケズリ、1は器面摩滅のため調整不明である。天井部内面・体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。1は口径11.9 cm、器高4.2 cmを測る。色調は黄灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は悪い。2は杯身3とセットをなすもので、口径12.4 cm、器高4.0 cmを測る。色調は外面黒色、内面橙灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は悪い。天井部にヘラ記号あり。4は天井部を欠く破片資料で、復原口径13.0 cmを測る。口縁端部のつくりが他の「類と違っている。色調は黄灰色を呈し、胎土に細砂を含む焼成は普通である。5も天井部を欠く破片資料で、復原口径12.7 cmを測る。色調は外面緑灰色、内面橙褐色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は良好である。6も天井部を欠く破片資料で、復原口径12.7 cmを測る。色調は黒灰色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は良好である。6も天井部を欠く破片資料で、復原口径12.7 cmを測る。色調は黒灰色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は普通である。7は口縁部を欠く資料である。色調は黄灰色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は悪い。天井部にヘラ記号あり。

杯 身(3・9~14)

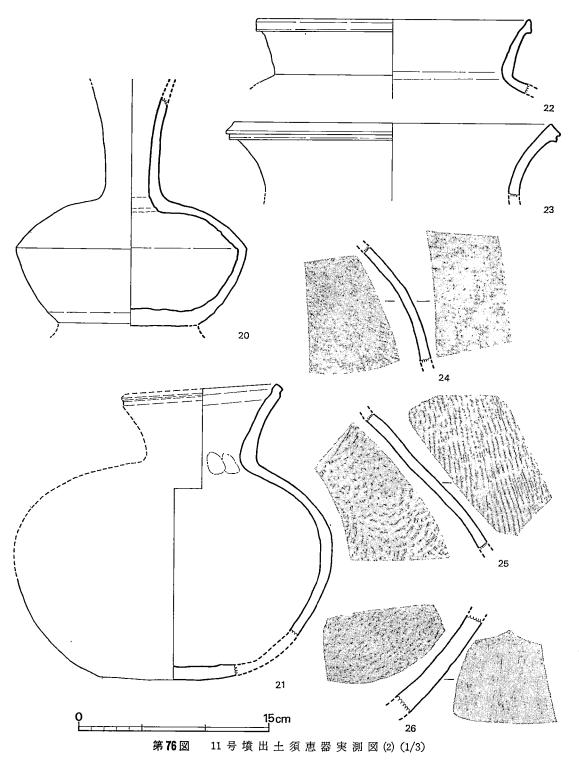
I類(3・9・10) 3は墓道、9は石室内、10は西側墳丘内から出土した。3・9は底部外面やや平担である。体部は内反しながらゆるやかに立ちあがる。蓋受けの立ち上がりは3は厚く、9・10は細い。調整技法は、底部外面は摩滅のためはっきりしない。その他はロクロョコナデで仕上げている。3は杯蓋2とセットをなすもので、口径12.2 cm、器高3.6cmを測る。色調は黄灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は悪い。底部にヘラ記号あり。9は底部を欠く資料で、復原口径13.1 cm、器高3.5 cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は悪い。10も底部を欠く破片資料である。復原口径14.0 cmを測る。色調は黄灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

■類(11) 前室内から出土した底部を欠く破片資料である。体部は内反しながら立ち上がり、口縁部で外開きになる。端部はとがり気味である。体部に沈線気味の横線が1条はいる。底部外面は回転へラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。復原口径10.8 cmを測る。色調は外面赤褐色、内面橙茶色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。

Ⅳ b 類(12) 南側墳丘から出土した。底部は部厚く、体部は直立する。体部に横線気味の 沈線が2条はいる。底部外面は回転へラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面ともにロクロ ョコナデで仕上げている。口径8.2 cm、器高3.6 cmを測る。色調は黒灰色を呈し、胎土に細砂



第75図 11号墳出土須恵器実測図(1)(1/3)



— 76 **—**

を含む。焼成は良好である。

 W_b 類($13\cdot 14$) 13 は墓道から, 14 は前室内から出土した。 深い杯部に高台が付つもので,高台の畳付けが外方にはねる。特に 13 は,するどく大きくつき出る。 体部は内反気味に立ち上がる。端部は丸くおさめている。高台部はロクロヨコナデ,底部外面回転へラケズリ,その他はロクロヨコナデで仕上げ,14 の底部内面には不定方向ナデがみられる。13 は口径14.3 cm,高台径 9.7 cm,器高 4.4 cmを測る。色調は緑灰色を呈し,胎土に砂粒を含む。焼成は普通である。14 は口径 14.3 cm,高台径 10.2 cm,器高 5.0 cmを測る。色調は白灰色を呈し,胎土に砂粒を含む。焼成は普通である。

高 杯(15) 北西周溝内から出土した。脚部を欠く資料で、杯部は杯身 I 類に属する。底部外面は回転ヘラケズリ、内面・体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。

長頸壺(16) 墓道から出された口縁部のみの破片資料である。2条の横線をめぐらし、内外面ともにロクロョコナデで仕上げている。復原口径8.6 cmを測る。色調は外面白灰色、内面黒緑色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

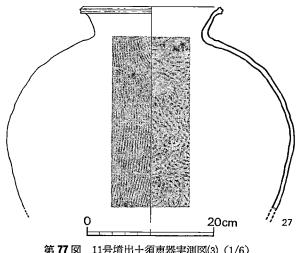
有蓋短頸壺(17・18) 17 は閉塞部黒色土層内,18 は墓道から出土した。底部は平底をなし,胴部最大径は中位にある。口頸部は17 のように直立する。17 は底部の一部を欠く。底部外面はヘラ切り後手持ちのヘラケズリ,他はロクロョコナデで仕上げている。口径2.8 cm,底径5.7 cm,器高6.4 cmを測る。色調は黄灰色を呈し,胎土に細砂を含む。焼成は良好である。18 は口頸部を欠く資料である。底部外面と最大径付近まで回転ヘラケズリ,他はロクロョコナデで仕上げている。底径5.6 cmを測る。色調は外面黒灰色,内面青灰色を呈し,胎土に細砂を含む。焼成は良好である。

台付長頸壺(20) 墓道から出土した。高台と口縁部を欠く資料である。胴部は厚手の底部から外開きし、最大径で明瞭な稜をなし口頸部に移行する。口頸部は直立し、上位で外開きする。口頸部内外面ともにロクロヨコナデ、口頸部と胴部の接合部の内面は指押え、胴部外面下位のみ回転ヘラケズリ、底部外面は回転ヘラケズリの後ナデ調整、その他はロクロヨコナデで仕上げている。最大径 18.2 cm を測る。色調は黒灰色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。 焼成は良好である。

平 瓶 (19・21) 19 は西側墳丘、21 は北側周溝から出土した。19 は口頸部と底部を欠く資料である。底部は平底で胴部最大径の内面に稜をもつ。底部外面は回転ヘラケズリ、その他はロクロョコナデ。胴部上位外面は、ロクロョコナデ後カキ目調整。色調は黒灰色を呈する。外面に釉がかかっている。胎土に細砂を含むが、焼成は良好である。21 は口頸部・体部の一部を欠く資料である。底部は丸底気味で、胴部最大径は中位にある。口頸部は外反しながら立ち上がり、端部は平担をなす。口縁部と端部の境は、横線気味にへこむ。底部外面はヘラ切り後

ナデ調整, 内面不定方向ナデ, 胴部外面の最大径付近は叩きの後粗い ヘラケズリ を施してい る。その他はロクロヨコナデで仕上げている。

口頸部と胴部の接合部内面は指押え後ロクロヨコナデ。復原口径 12.0 cm, 復原器高 22.5 cm \sim 23.4cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は良好である。



第77図 11号墳出土須恵器実測図(3) (1/6)

甕 (22~26・第77図27) 22は石 室攪乱土から出土した口縁部の破 片資料である。外反しながら立ち 上がり、端部は直立する。内外面 ともにロクロヨコナデ。復原口径 21.7 cmを測る。 色調は外面黒色, 内面黄灰色を呈し、胎土に細砂を 含む。焼成は良好である。23 は玄 室内から 出土 した 破片資料 であ る。外開きに立ち上がり、端部は 平担である。端部下に1条の凹線 がはいる。内外面ともにロクロヨ

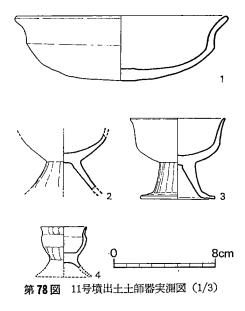
コナデ。復原口径 25.0 cmを測る。 色調は外面黒色, 内面緑灰色を呈し,胎土は細砂を含む。 焼成は良好である。 24~26 は胴部の 破片資料で,外面格子目状叩き,下内面同心円文 の叩きを 施す。24 は叩きの後ナデ調整を施す。 色調は青灰色を呈し, 胎土に細砂を含むが, 焼成は良 好である。27 は素掘墓道から出土 した底部を欠く資料 である。胴部は 張りがつよく球状をな す。口頸部は外開きし,端部は若干へこむ。端部下に1条の凹線がはいる。胴部外面は格子目 状叩きののち部分的にロクロヨコナデで仕上げ、内面に同心円文の叩きを施こす。口頸部内外 面ともにロクロヨコナデで仕上げている。口径 21.8 cmを測る。 色調は緑灰色を呈し, 胎土に 細砂を含むが、焼成は良好である。

③ 土 師 器 (図版 69-1, 第78 図 1~4)

浅 鉢(1) 墓道から出土した。厚手の底部からゆるやかに内反しながら立ち上がり、体 部で直立し,更に口縁部で外開きする。端部は丸くおさめている。底部と体部の境に明瞭な稜 をもつ。底部外面は回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面ともにロクロヨコナデで 仕上げている。 体部外面はロクロヨコナデ後, 横方向のヘラミガキを施す。口径 16.7 cm,器 高 5.1 cmを測る。色調は淡赤褐色を呈し,胎土に細砂を含むが,焼成は良好である。

高 杯(2~4) 2・3は墓道から、4は北西墳丘から出土した。2は口縁部と脚裾部を

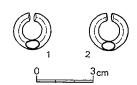
欠く資料である。 杯部は内反気味に立ち上がり、脚部は外開きする。脚部内面へラケズリ、内面はヘラケズリ後ヘラミガキ。脚部外面の面取りは16回で行なっている。 杯部は外面へラケズリ、内面ナデ調整で仕上げている。色調は赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。3は完形資料で、口径7.5 cm、底径5.9 cm、器高6.4 cmを測る。杯部は脚部の高さより深く、内反気味に立ち上がり、体部は外開きする。端部はとがり気味である。脚部は裾部で「L」字状に外開きする。杯部は内外面ともにロクロヨコナデ。脚部の筒部外面はヘラケズリの後ココナデ仕上げであ脚部内面はヘラケズリの後ココナデ仕上げであ



る。色調は赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。4は脚部を欠く資料で、口径3.7cm を測る。杯部は内反しながら立ち上がり、口縁部付近で稜をもち外反する。端部は丸くおさめている。杯部内面には外面の稜に対応する稜がはいる。脚部はゆるやかな外開きである。杯部下位は縦ヘラケズリ。口縁部外面は指押え、他はナデ調整で仕上げている。色調は赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。 (小田雅文)

④ 装 身 具(図版69-1, 第79図)

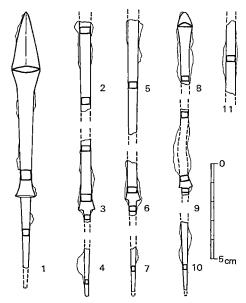
耳 環 1 セットの金環である。銅地に金箔を張ったものであるが,金箔が割合厚いらしく保存状態が良好である。しかし,輸の切れ口には多少曲げ込んだ金箔があるが,本来金箔を張っていないらしい。 1 は縦外径 19.2 mm, 横外径 20.5 mm, 重さ 10.1 g である。断面径は,中心部で 7.10 $mm \times 4.75$ mm の隋円形をしている。 2 は縦外径 19.6 mm, 横外径 20.9 mm, 重さ 10.4 g である。断面径は 7.25 $mm \times 4.7$ mm の隋円形をしている。



第 **79** 図 11号墳出土金環 実測図(1/2)

⑤ 鉄 器 (図版 69-2·70, 第80·81 図)

鉄 鏃(第80図) 鉄鏃は総て素掘墓道から出土したが、1は墓道の肩の地山に接して、他の破片は床面から浮いた 黒色土層中から 出土した。1は関無両丸造鑿箭式で現在長 13.4 cmであるが、形式と同時に他の鉄鏃と錆の具合も違っている。2~11は同形式と思われるので、先端のある8から関無片丸造鑿箭式であろう。



第80図 11号墳出土鉄鏃実測図 (1/2)

鉄 釘(第81図) 総て荒らされた玄室内から出土した。破片が多いので、実数は不明であるが、 完形品と頭部のある ものは 23 本ある。 さらに頭部に近いものを加えると26本以上ということになる。

釘の長さは5.2 cm (4) から7.3 cm (18) のものがあり、大きさで分類すると、大差はないが長さ7 cm以上になるもの($5 \cdot 8 \cdot 10 \cdot 18 \cdot 24$)と6 cm以下のもの($1 \cdot 4 \cdot 7 \cdot 11 \cdot 15 \cdot 16$)の2 種類になる。

次に, 頭部の形状で分類すると, 次の3タイプに分けられる。

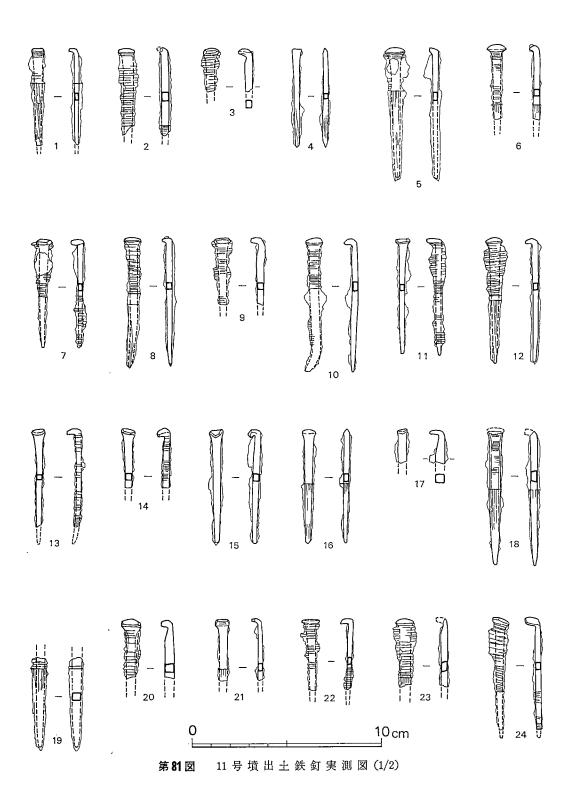
- ① 頭部を身より薄くすると同時に幅広く圧延した後,一方に折り曲げるもの(3・9・12・14・17・20・23・24)
- ② 頭部を圧延して幅広くするが、身との厚さを変えずに一方に折り曲げたもの($1 \cdot 2 \cdot 5 \sim 8 \cdot 10 \cdot 11 \cdot 13 \cdot 15 \cdot 18 \cdot 21 \cdot 22$)
 - ③ 頭部を圧延して幅広くするが、折り曲げないもの(4・16)

釘とは2枚以上の木板に打ち込むことによって固定する役目をはたすのであるから、鉄釘には錆着した木質があり、その木目の方向によって分類すれば棺材の組合せも検討できる。したがって、3番目に木質の付着状態によって分けること、これも3つタイプに分類できる。

- 函 上下両板材共に、釘身に対して横方向に合わせるもの(9~11・13)
- B 上下両板材共に、釘身に対して横方向に合わせるが、木目が90° ずれるもの(2・7・22・24)
- © 上方板材の木目は横方向で、下方板材は釘身に平行に合わせるもの(1・5・6・8・12・16・18・19・21・23)

鉄釘が玄室内の原位置にあれば、木板の組合法と釘の位置が明らかになるが、11 号墳の場合は不可能である。しかし、板材の厚さは計測できる。板材の厚さは、1 の 1.65 cm から 24 の 3.55 cm のものまであり、これも 3 分類できる。①は 2 cm 以下のもの($1 \cdot 5$)、②は 2.3 cm から 2.85 cm の厚さのもの($6 \sim 8 \cdot 11 \cdot 12 \cdot 16 \cdot 18 \cdot 21 \sim 23$)、③は 3.5 cm 以上の厚さがあるもの($2 \cdot 24$)である。

以上を総合しても、攪乱された鉄釘であるから、3枚以上の厚さの違った板材を使用した木棺に、板材の厚さに応じた鉄釘が利用されていたとしか説明できない。



— 81 —

(4) まとめ

墳丘は削平され、石室の腰石まで抜き取られていたので、石室の床面も完全に攪乱されていた。しかし、鉄釘・耳環・人骨は玄室のみ発見されたことから埋葬や副葬の状態も推測できた。 石室内から近世陶磁器片や寛永通寶が発見されたことから、江戸時代に盗掘や他目的の使用が行なわれ、石室内の遺物が墓道上層に放出されている。

古墳の時期は、 I 類の杯があることから7世紀初頭以前の築造で、 W 類の杯から8世紀前半 ごろまで追葬か、供献が行なわれていたと思われる。 (柳田康雄)

12. 12 号 墳

(**1**) 墳 丘(図版71, 第72·82·83図)

本古墳は、破壊がひどく墳丘の一部が段畑状に残っていた。しかも、南西側の半分は大きく陥没し、石室石材の存在もあやぶまれた。50cm間隔の等高線では、墳丘北東側に標高41.5mの線が1本めぐる。

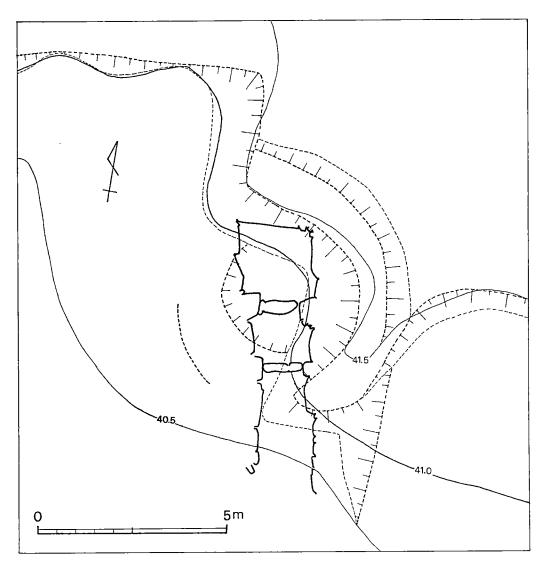
墳丘の盛土は、地山整形面から高さ約1.0 mだけ残り、花崗岩粒を含む砂質褐色土と暗褐色土を積み上げて墳丘としている。

周溝は、馬蹄形にめぐり墳丘の地山整形もかねている。北側の地山が高いから、地山整形をして墳丘の墓壇を造ろうとすれば、周溝が馬蹄形になるのであるが、地山の高い北側も地山をさほど深くは掘っていない。周溝の幅と深さは一定しないが、底部のレベルは南側ほど低くなり、雨水は流失してしまう。この周溝底の内側の線から墳丘の規模を計測すると、東西径13.0m、南北径約13mの大きさの円墳となる。

(2) 石 室(図版71~74, 第84図)

本墳の主体部は、主軸をS-8°-Eの方向に向け玄室・前室・羨道・墓道を設えた複室の横 穴式石室である。石室の石材は総て花崗岩であるが、天井と壁面の上部3分の1程を失なって いる。

石室掘方は、石材取り出しのために西側の一辺が攪乱されているが、プランは南側が狭まくなる不整長方形をしている。掘方は、部分的に段をつけているが、玄室付近は石材の裏に余裕



第82図 12号墳墳丘実測図(1/100)

をもっていない。掘方東側の旧表土が残っている面からすると、旧表土から1.7 m掘り下げて 玄室の床面とし、この地山面に直接敷石を置いたようだ。当古墳石室の腰石は、本古墳群中で は割合大きな石材を使用している。腰石は、石室内床面より掘り下げて固定しているが、あま り深くはない。

石室全長は、右壁で6.9mで、左壁で6.8mあり、大差がない。

玄室床面は,奥幅1.9m,前幅1.83m,右壁長1.7m,左壁長1.9mの大きさの不整方形である。奥壁は1枚岩,側壁は各2枚の石材を腰石とし,奥壁と左壁は内側に約4°傾斜させ,右壁は外側に約4°傾斜させて立てている。奥壁の2段目は,同じ傾斜で持送って小口積みし,

左壁と右壁は各々同角度で小口積みしているが、持送っていない。

玄門は、右袖が43cm、左袖が41cmそれぞれ玄室側壁から突出させている。したがって、玄門幅は1.0mとなり、その間の床面に半分埋め込んだ框石がある。両袖石の上には、小口積みした2段目の石材が残っているが、左右の高さがほぼ一致するところから、玄門の天井は玄室と前室より1段低く架けられた可能性が強い。そうすると、玄門の上幅0.85m、框石の上からの高さは約1.2mとなる。

前室は、奥幅1.65m,前幅1.52m,右壁長0.93m,左壁長0.97mの大きさの不整長方形である。この歪は、奥壁のずれがここまで影響しているのである。側壁には、3段目まで小口積みした石材が残っているが、羨道の側壁の残りからいっても、3段目の上に小石を狭む程度で天井石を載せたものと思われる。両壁共8° \sim 10°内側に傾斜させ、段違いに持送ることなく積上げているので、天井の幅は約0.95mとなる。

前門は、 右袖は20cm、 左袖は31cm前室側壁より張り出して立てられ、 幅を1.0mとしている。前門にも半分埋め込んだ框石がある。袖石の上には3段から4段の石材が小口積みしてあるところから前室とあまり違わない高さの天井石があったものと思われる。前室から羨道の側壁はレンガ積方式の積み方がうかがえる。

羨道は右壁で72cm,左壁で90cmのところで閉塞されている。したがって,両壁共前門袖石から2番目の石までが羨道側壁で,その長さは右壁1.4m,左壁1.8mとなる。このことは,3番目の石から小ぶりになり小口積みしていることでも説明できる。

石組墓道は、右壁で2.05m、左壁で1.4mの長さになり、最大幅1.8mである。石組の先端基底部は床面より40cm程高くなり、床面も平坦でなくなってくる。

石室床面は、玄室が最も高く、前室・羨道・墓道と外側ほど低くなっている。玄室床面は著しく荒らされているので、確実ではないが、割合保存のよい前室床面より5cm以上は高かったものと思われる。前室はこの地山の床面直上に花崗岩礫を並べて敷石としているので、玄室も同様であろう。羨道床面は、前室よりさらに7cm程低くなり、敷石はなかったようだ。

閉塞石は、羨道床面をわずかに掘りくぼめて積み上げているが、最下部は羨道幅にぴったり の石を1個使用している。2段目以上は小ぶりの石を雑に積み上げている。

素掘墓道は,右石組端から3.75mで用地外となるため,これ以上は確認できなかった。確認できた範囲内では,床面レベルは同一で,幅2.1m,深さ1.1mのりっぱな墓道である。南側は谷に落ちていくものと思われる。

(3) 遺物

① 出土状態(図版75,第85図)

玄室・前室・羨道の床面は完全に荒らされていた。玄室・前室の敷石も原位置のものはほと

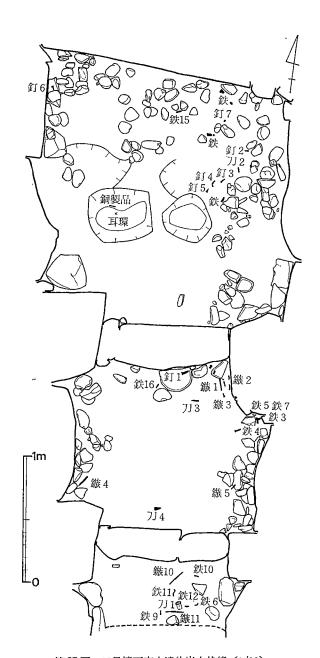
んどなく、ここから出土した遺物 も破片が多く原位置のものはないといってよい。 さらに床面からは中世の遺物も多く発見された。

玄室内では、金環・ガラス丸 玉・刀装足金具・鉄釘・鎹状鉄製品・楔状鉄製品・キセル吸口状銅 製品・須恵器小片・土師器小片・ 中世陶磁器片が出土した。

前室では、鉸具・鞍引手金具・ 鎹状鉄製品・刀子・鉄刀片・鉄 鏃・楔状鉄製品・須恵器片・中世 土師杯・鉄庖丁が出土した。右側 壁下で発見された鉸具や鞍引手金 具などは原位置に近いものであろ う。

羨道では、鞘尻・鉄鏃・不明鉄製品・須恵器片が出土した。不明 鉄製品5個が羨道のみから出土したことは、この金具を使用したものがこの場所にあった可能性があるが、鞘尻は、鉄刀片が前室、足金具が玄室で出土しているので同一物とはかぎらないが原位置は不明である。

石室全体の出土状態を見ると, 鉄釘は玄室のみ,鉄鏃と馬具類は 前室と羨道から出土し,分離でき る。



第85図 12号墳石室内遺物出土状態(1/30)

石組墓道には、移動した閉塞石が黒色土に混って氾濫していた。この黒色土は素掘墓道上層に続くもので、石組墓道付近では中世の石鍋・土師器と共に鉄鏃・ 鞍引平・須恵器の杯・横瓶・平瓶などが含まれていた。中世に石室内が攪乱された際に取り出されたものであろう。素

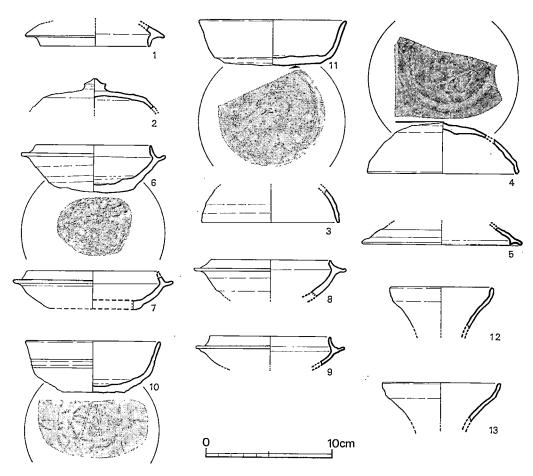
掘墓道床面では、つぶれた須恵器大甕・壺・台付壺などの破片が散乱していた。これらは埋葬 時か墓前葬に関係あるものであろう。

墳丘攪乱層や付近の表土からも須恵器の杯や壺が出土しているが、周溝出土など築造当時の ものと思われるものはなかった。

② 須 恵 器(図版76・77-1,第86~89図)

杯 蓋($1\sim5$) $1\cdot3$ は墳丘表土と攪乱土中から、2は墓道黒色土上層から、 $4\cdot5$ は前室床面から出土した。

I類(3・5) 3は小片で、内外面共にヨコナデ仕上げをし、緑灰色の焼成良好な蓋である。4は天井部外面をヘラ切りにしているだけで、調整を行なわず凹凸の著しいものである。 他の内外面はヨコナデ・ナデで仕上げて、色調は外面が灰黒色をしているが、内面と胎土は茶



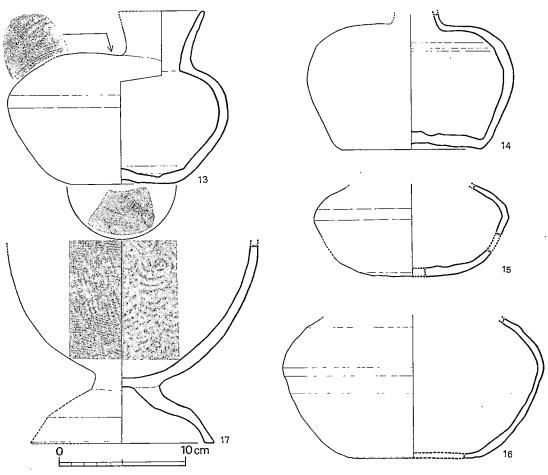
第86図 12号墳出土須恵器実測図(1)(1/3)

紫色を呈し、良好な焼成である。

Ⅱ類(1) ヨコナデ仕上げされた小片で、淡灰色の焼成良好な杯蓋である。

杯 身(6~11) 6・10・11は墓道の黒色土層中,7は羨道床面,8・9は墳丘表土と攪乱土中から出土した。

I類 $(6\sim9)$ 6のみが完形品で、他は小片である。 6 は最大径11.5cm、器高3.7cmの杯身で、底部外面はヘラ切り後、わずかにナデているようであるが、切り残しの土片が付着している。他の部分はロクロョコナデで仕上げるが、その後に内面底部のみナデている。底部外面にはヘラ記号がある。色調は灰紫色を呈し、胎土に砂粒を含んだ良好な焼成である。 $7\sim9$ の各部は6 と同じ調整を行なっている。



第87図 12号墳出土須恵器実測図(2)(1/3)

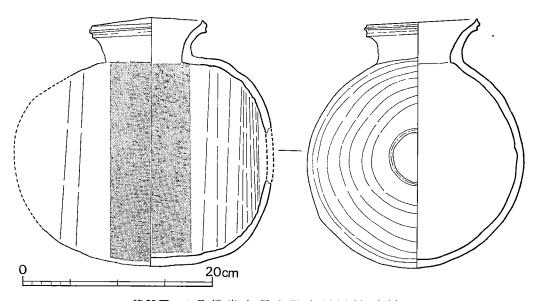
 \mathbb{N} a 類(10) 半分の資料で,口径10.7cm,器高 4cmの大きさである。底部外面は左回転へ = 5切りのままで,へ= 記号を入れている。他の内外面は,ロクロョコナデ調整をし,その後外面体部にへ= による回転沈線施文を行ない,内面底部はナデを行なっている。色調は灰紫色,胎土には砂粒を含む良好な焼成である。

V類(11) 半分の破片資料で、口径11.8cm、器高3.6cmの大きさである。底部外面は左回転へラ削りで平坦に仕上げているが、指紋が付着しているだけで調整はない。外の内外面はロクロヨコナデ仕上げである。色調は青灰色で、胎土に砂粒を含む良好な焼成である。

長頸壺(12・13) 2 例共に前室床面で発見された長頸壺と思われる小片である。内外面共 にロクロヨコナデされた, 灰黒色の良好な焼成である。

台付壺(17) 素掘墓道床面近くで出土した上半分を欠く資料である。台部を取ると広口壺といえる底部と胴部で、内面は同心円叩き目、外面には斜行平行叩き目の上からカキ目調整状に荒いハケ目調整がある。台部は後から取り付けられ、内外面共にヨコナデ仕上げが行なわれている。胎土は若干の砂粒を含み、灰青色の賢牢な焼きである。

細頸壺(14・16) 14は東側と北東側盛土及び墓道黒色土層内から分散して出土した破片が同一個体であった。最大径16.4cmの胴部に径 4.5 cmの頸部が付く壺というより底部が内湾しているところから瓶といった方がよいものである。胴部最大径以下をロクロへラ削りし、上部をロクロココナデ仕上げしている。底部外面は、ロクロヘラ削りした後、簡単にナデている。胎土には砂粒割合多く含み、灰色の良好な焼成である。



第88図 12号墳出土須恵器実測図(3) (1/4)

16は素掘墓道床面から破片で出土した資料で、平瓶の可能性もある。内外面共にロクロョコナデ仕上げであるが、底部外面はロクロヘラ削りであったらしい。胎土は砂を含まず、灰黒色の良好な焼成である。

壺(15) 羨道攪乱土から出土した短頸壺と思われる小片である。肩部外面にカキ目調整, 胴部外面はロクロョコナデ,底部外面はロクロヘラ削りに後ナデが行なわれているが,内面は ロクロョコナデ仕上げである。

平 瓶 (13) 墓道上層から出土した完形に近い資料である。最大径 17.5 cm, 口径6.8 cm の大きさで,胴部上半はカキ目調整,下半はロクロヘラ削り後にカキ目調整を行なっているが下方ほど粗になり,底部付近以下はヘラ削りが残っている。 頸部と内面 はヨコナ デ仕上 げである。肩部と底部に同様なヘラ記号がある。胎土に砂粒を含む,赤茶色の良好な焼成である。

横 瓶 (第88図) 素掘墓道上層から散乱して出土したが、ほぼ完形に復原された、口径 12.3cm、胴長27.2cm、胴径22.7cmの大きさの資料。図面右側を上にした長胴形に内面は同心円叩き目、外面は平行叩きで整形し、上部をカキ目状のロクロヨコナデで口を小さくし、円盤で密閉する。底部付近(図面左の部分)は、叩き目の上からロクロヘラ削りで丸く仕上げている。長胴を横にし、中央に穿孔して口頸部を取り付けている。口頸部は内外面共ヨコナデ仕上げである。胎土には細砂を含み、灰青色の良好な焼成である。

甕(第89図) 石組墓道から素掘墓道床面に散乱していたが、1個体に復原された口径35.3 cm, 胴最大径61.7cm, 器高67.9cmの大きさのものである。外面は平行叩き、内面は同心円叩きで整形した胴部に、外反した口頸部を付けている。頸部外面上半にはヘラガキ斜行線、下半はカキ目調整を行なっている。頸部内面はヨコナデ仕上げである。

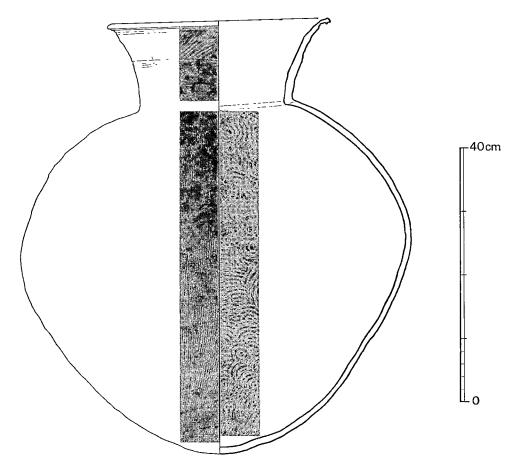
③ 土 師 器(第97図)

坩(7) 古墳南東部表土直下出土の口縁部を欠いた半分ほどの資料。胴中央よりやや上に わずかに段を有し、肩部を形成する。これより下の外面は荒いハケ目調整を行ない、調整痕を 残さない肩部と異なる。内面はヘラ削りのままである。胎土は砂を含まない赤褐色の良好な焼 成である。

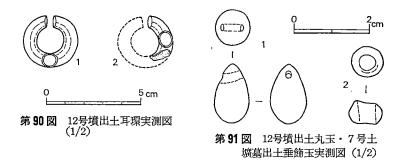
④ 装 身 具

耳 環(図版77—1,第90図) 攪乱された玄室床面から出土した一対分である。中空銅地 に金箔が張ってあったらしいが,大半は剝落している。完形の1は横外径29.8mm,横内径15.1mm,中央部の断面径 $7.45 \times 8.25mm$,重さ $4.5 \, g$ である。

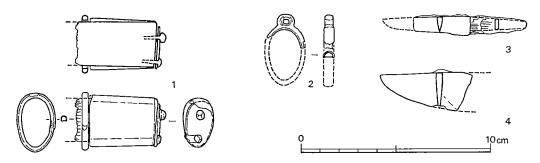
ガラス丸玉(図版77-1, 第91図 2) 玄室攪乱土内出土。径8.0mm, 厚さ6.2mmの表面が風化し, 茶褐色を呈する。



第89図 12号墳出土須恵器実測図(4)(1/6)



⑤ 武 器 (図版77-2· , 第92図)



第92図 12号墳出土武器実測図(1/2)

鞘 尻(第92図1) 羨道床面から出土した。鞘尻は厚さ0.55mmの銅板を最大のところで長径2.7cm,短径1.6cmの断面卵形の筒にし,一方の小口を絞って同じ卵形の鉄板に鉄釘2本を打って芯の木鞘に留めている。鞘尻には,外形で長径3.1cm,短径2.05 cmの断面卵形の銅製責金具も付属している。責金具の断面形は,内側が平らな蒲鉢形をし,厚さ2.4 mm,幅3.2 mmである。側面に継目がある。

足金具(第92図2) 玄室床面から出土した破片。鉄地に外側のみ銀張りしたもので、復原外形の長径3.3cm,短径2.2cmの卵形に、孔径3 mm×2.5mmの鉛が付設する。足金具の幅は5.5mm,厚さ3.5mmである。

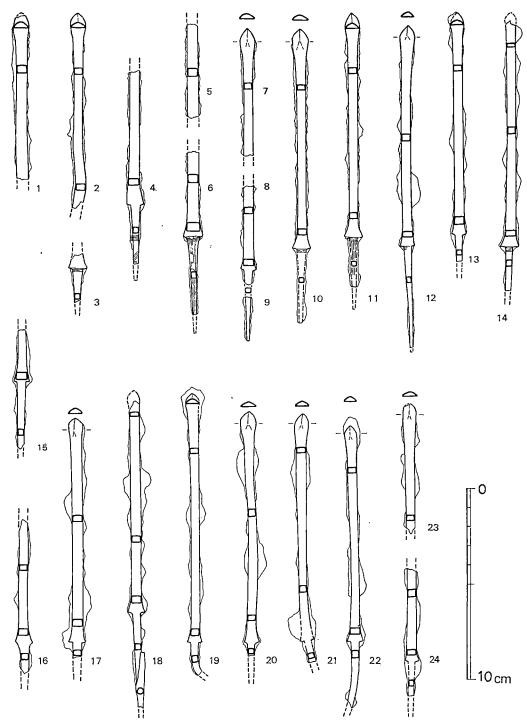
刀 子(第92図3) 前室床面から出土した現長6cmの切先を欠く資料である。茎の長さ3cm, 関幅1.0cm, 復元身長4.6cmの鉄刀子である。

刀切先(第92図4) 前室床面から出土した,現長5cm,幅2cm,厚さ0.4cmの小鉄片である。

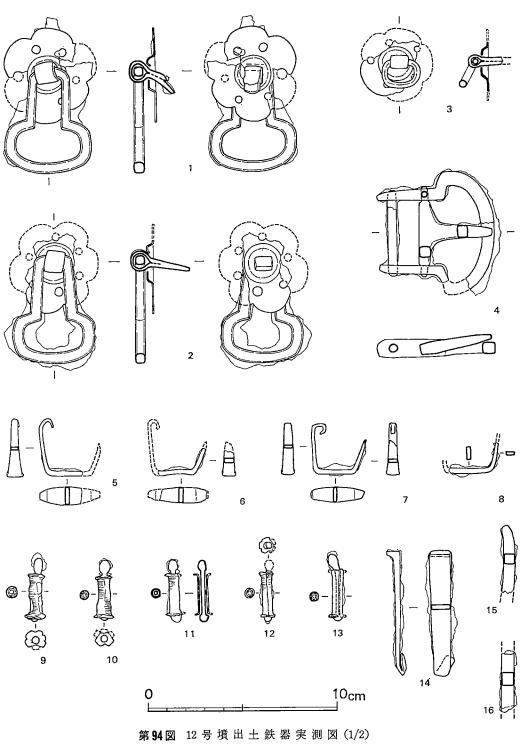
鉄 鏃(図版78,第93図) $1 \sim 9$ は前室床面出土, $10 \cdot 11$ は羨道床面出土。 $12 \sim 24$ は素掘 墓道黒色土下層出土のものである。関部の数から18本以上あったことになるが,総て同一形式 の関無片丸造鑿箭式というものであろう。 完形に近いものから, 刃部を含めた身の長さは,11.4cmから13.1cmのものがあり,12cm以上のものは $14 \cdot 19 \cdot 20$ の3 本だけである。茎は12の5.5cmが最も長い。

⑥ 馬 具(図版79,第94図)

座金付引手金具 $(1 \sim 3)$ 1 \cdot 2 は素掘墓道黒色土中,3 は前室床面から出土した。1 の最大径4 \cdot 9 cmの六葉形鉄座金には径 $4 \sim 5$ mmの透し孔が 6 個ある。引手は長さ5.5cm,最大幅4.6 cm,断面径0.6 cmの大きさで,座金に通した幅 1 cm,厚さ0.2 cmの鉄板の留金で留められている。 2 も同様なもので一対のものである。3 は小形で,座金の最大径約 3.9 cmの五葉座で 5 孔



第93図 12号墳出土鉄鏃実測図(1/2)



の透しがある。引手は長径2.1cm, 短径1.5cmの楕円形である。

鉸 具(4) 前室床面で分離して発見された。長さ6.1cm,最大幅6.4cm,帯幅3.3cmとなる大きさである。帯を留める芯棒は断面円形であるが他は隅丸方形をしている。

⑦ 鉄 器(図版79, 第94・95図)

用途不明, 鉄器と鉄釘を含む。

鎹状鉄製品($5\sim8$) 5 と 7 は前室,6 は羨道,8 は玄室から発見された。7 の完形品で代表すると,最大幅8mm,厚さ2.3mmの両端が細く尖がった鉄小片を鎹状に曲げたものである。細い一端はさらに折曲している。木質の付着はない。木棺か馬具に使用したものであろう。

留具状鉄製品(9~13) 総て羨道床面から出土した。用途は不明であるが,本例は細部が明らかになった。両端を釘頭状に丸くした径約2.5 mmの鉄芯を,厚さ約1 mmの鉄板を径約5 mmの筒にして包み,筒の両端を花びら状に広げている。筒の中の芯は,両端の頭で筒を固定しているのではなく,上下に移動することが可能のようである。筒外面には軸と直交した木目に似た付着物がある。全長3.1 cmから3.3 cmの大きさである。

楔状鉄製品(14) 前室から出土した。頭部は逆L字状に曲がり、上面は平坦である。現長 6.6cm、最大幅1.2cmで、先端は折曲している。15・16の鉄片は不明。

鉄 釘 (図版80
-1, 第95図) 1
のみ前室で, 他は
玄室内出土であ
る。1は木質も付
着していないので
楔かもしれない。
長さ6.3 cm, 頭幅
1.6 cmである。2
~9の鉄釘は木質
の付着も少なく,
小形のものであ
第95図 12 号墳出土 鉄 釘 実 測 図 (1/2)

る。頭部の形態で2種類に分けられる。板材の厚さは不明。

⑧ 歴史時代金属製品 (図版80-2, 第96図)

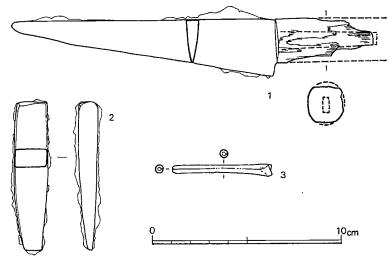
鉄包丁(1) 前室攪乱土中出土。現在長19cm, 刃最大幅2.9cm, 刃長13.9cm, 刃厚0.6cmの 大きさで, 茎に木柄が残っている。錆具合からしても後世のものである。

鏨状鉄器(2)

玄室内攪 乱 土 中 出 土。長7.7cm,幅1.7 cm, 厚さ1cmの先端 が刀状を呈する。錆 から後世のもの。

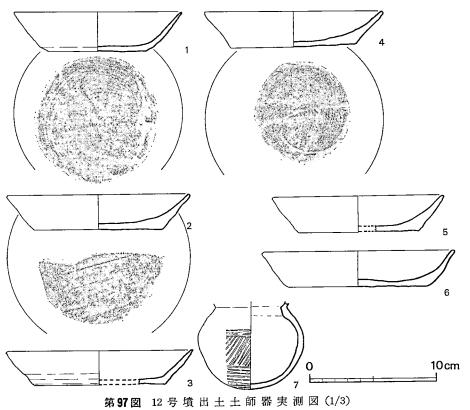
煙管吸口(3)

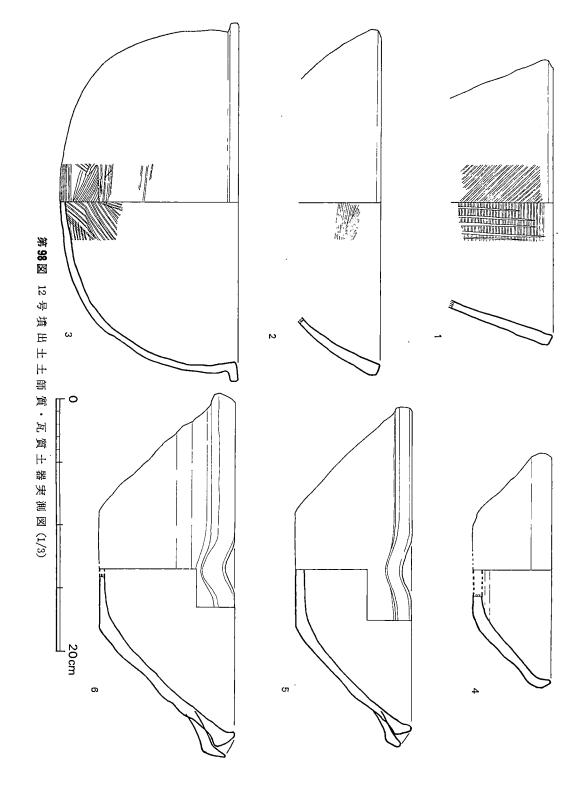
玄室攪乱土中出土。 長さ 5.2 cm, 最大径 0.6cm, 中央部径0.4 cm, 先端径0.44cmで ある。銅板を筒状に 合わせたもので,合 わせの継目は銀で接



第96図 12号墳出土鉄器実測図(1/2)

合している。後世の混入物であろう。





⑨ 歴史時代土器

杯(図版81,第97図 $1\sim6$) 5は前室床面出土。6は素掘墓道黒色土下層出土。 $1\sim4$ は素掘墓道黒色土上層出土である。これら6点は総て底部外面には糸切りの後に板目状の圧痕を残し,他の外面はヨコナデ,内面はナデ仕上げである。1は径13.3cm,2は14.6cm,3は14.8cm,4は14.2cm,5は13.6cm,6は15.3cmの大きさである。

土 鍋(図版81-3,第99図 $2\sim4$) 石組墓道から素掘墓道の黒色土上層から出土した土 師質土器である。2は小片,3はほぼ全形で口径28.1cm,4は半分程の資料でそれぞれ外面に 煤が付着している。3は鍋らしいが,4は鉢を利用したものであろう。

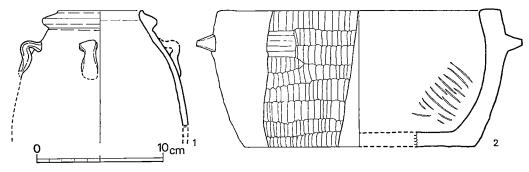
① 瓦質土器 (図版 81, 第 98 図 1 · 5 · 6)

擂 鉢(1) 上半部の破片資料で素掘墓道上層から出土した。内外面共ココナデ後に外面 は斜行八ケ調整,内面はココハケ調整後さらにタテに条溝を施している。

土 鍋(5・6) 共に素掘墓道上層から出土した半分程復原できた資料。5は口外径26cm, 器高9.2cm, 6は口外径28cm, 器高10.7cmの大きさで、片口を有する。両資料共に内外面はココナデ調整であるが、内面下半は削りのように荒れている。底部外面はナデ、外面上半には煤が付着している。

⑪ 青磁四耳長胴帯(図版81-1,第99図-1)

前室床面から出土した口内径 6.4 cmの上半分の破片資料。内外面共にロクロヨコナデ調整している。胎土は茶白色で、表面は内外面共に酸化炎のために黄色になっているがこれもかなり 剝落している粗製品である。



第99図 12号 墳 出 土 青 磁・石 鍋 実 測 図 (1/3)

⑫ 石 鍋(第99図-2)

素掘墓道黒色土上層から出土した破片資料で、口外径22.5㎝、器高10.8㎝になる。外面はノ

ミ状刃物で削り、内面は荒削りの後に磨き上げている。外面には取手が1ヵ所残っているが大きさ不明。破片になった後に、割れ口の1面を削っているので再利用を考えたらしい。外全面に煤が付着している。

(4) まとめ

破壊墳であるため時期の決定は困難である。 攪乱されず遺物 があるのは 素掘墓道床面のみで周溝や墳丘には築造当時の遺物は発見されなかった。しかし、攪乱された石室内や墓道上層には遺物が多く、土器類の外に武器・馬具・装身具が副葬され、玄室には木棺埋葬が行なわれたらしい。土器類からは追葬が考えられるが、他の副葬品からは考えられない。石室内や墓道上層から中世の遺物が発見され、これも攪乱された状態であるから、この時代に盗掘されたか、他の目的に使用されたことを表わしている。

須恵器から築造年代を考えてみると、I類の杯があるところから、6世紀末から7世紀初頭に築造され、7世紀後半ごろまで追葬あるいは供献されたと考えられる。 (柳田康雄)

13. 13 号 墳

(**1**) 墳 丘(図版 82, 第 100 · 101 図)

本古墳は、発掘前の地形図が示すように、標高41.5mの等高線が一部湾曲するだけで、表面観察では古墳は感じられなかった。しかし、疑わしい所はボーリング棒によって石材の確認を行なっており、そのために発見された古墳である。

墳丘には、土層図(第 101 図)を見ても盛土はまったく残っていないが、周溝というよりも 地山整形によってわずかに墳丘を浮き上げさせている。地山整形は東西径 8.5 m、南北径約 8 mの隅丸方形状のプランに削り出しており、完全な円墳ではないようだ。

(2) 石 室(図版 82~86, 第 102 図)

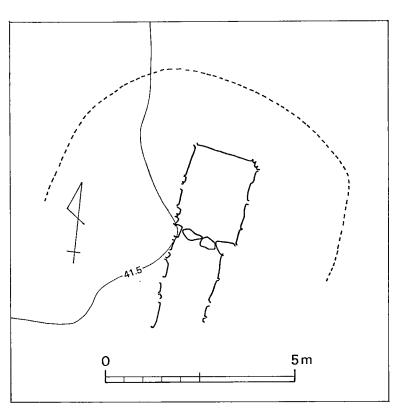
本墳の主体部は、主軸を S-10°-Wにとり、玄室・羨道・墓道を有する単室両袖形横穴式石室である。石室は、総て花崗岩で築かれているが、玄室は腰石のみを残し、羨道は2段目以上に横積みされた側壁を2・3段残しているだけである。

石室掘方は、幅3.5m, 長さ6.1mの隅丸長方形のプランで、玄室床面までの深さ75cm掘り下げている。掘方は一部2段のところもあるが、腰石の部分もあまり掘り下げることなく造られている。

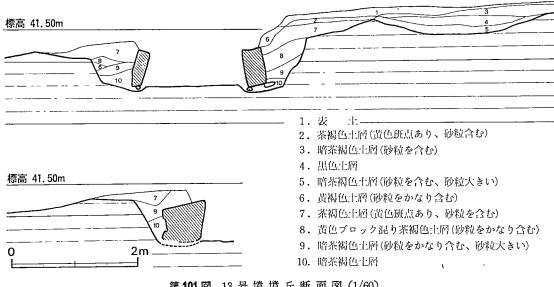
石室全長は、右壁で4.4m、左壁が4.95mあり、左壁を45cm長くしている。

玄室は, 奥幅 1.7 m,前幅1.65m,右 壁長 2.2 m, 左壁長 2.15mの大きさであ る。奥壁の腰石は1 個で, 内側に8°傾斜 させて立てている が, 高さ63cmの低い 石材である。右側壁 の腰石は3個で、こ れも約8°の傾斜を持 たせて並べている。 左側壁の奥の石は 17° に傾斜している が, 本来は右側壁と 同様であろう。

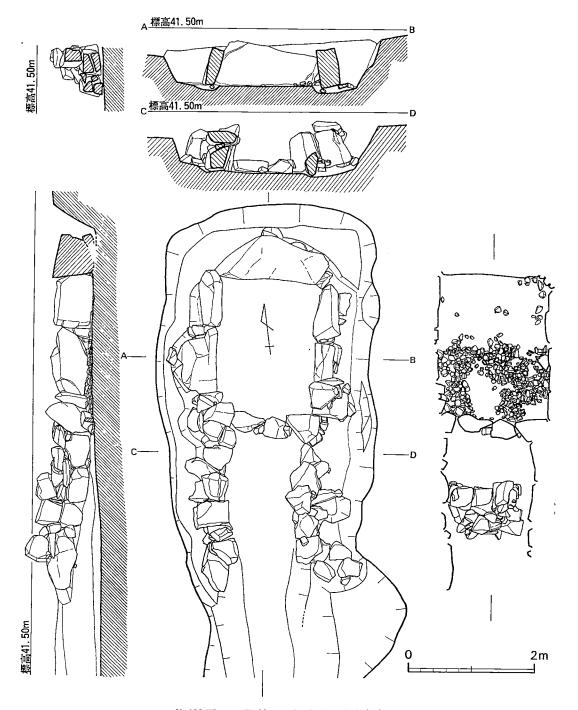
玄門は, 右袖石を 50cm, 左袖石を20cm 内側に配置し, その



第100図 13号墳墳丘実測図(1/100)



第101図 13号墳墳丘断面図(1/60)



第102図 13号墳石室実測図(1/60)

間に2個の不整形の石で框石として玄室と羨道を区切っている。玄門の幅は92cmであるが、袖石が小さく2段目以上がないので高さは框石の上から60cmほどしか残っていない。

羨道は、右袖石の内側から1.15mのところで閉塞石があるので、両側共袖石から3番目の石までとなる。右壁長1.6m、左壁長1.45mである。腰石の上は、3段目まで横積みされた壁面が残っているが、天井の高さは不明。羨道幅は最大1.35mとなり、玄門より43cm広くなり、石組墓道幅より20cm広くなっている。これは、閉塞が割合外側で行なわれているところから、羨道が前室の用をたしているものと思われる。

石組墓道は、本来袖石から3番目の石からと思われるが、閉塞が外側寄りに行なわれているため4番目の石からにしておく。右壁長0.55m、左壁長1.35mで、幅は1.15mとなっている。 墓道床面と石組先端の基底部の差は45cmと大きくなっている。

玄室床面は、地山直上に丸味のある花崗岩礫を密に並べて敷石としている。 羨道には敷石がなく、玄室よりわずかに低くなり、さらに墓道に向って下がっていく。

素掘墓道は、11号墳の東側周溝を切って深くし、さらに12号墳の西側周溝に合流する形で消えている。12号墳の周溝に達するまでの長さが14.5mあり、細いが深い断面V字型に近い墓道である。玄室床面が最も高く、南側に行くほど低くなることから、排水溝の役も充分にはたしている。

(3) 遺物

① 出土狀態 (図版 86-2・87-1)

完全に荒された玄室内からは、鉄釘7・須恵器小片・鉄滓小片1が出土した。原位置をとどめるものはない。

前室のように広くとられた羨道は、東壁側が荒されずに須恵器が集積されていた。ここには 小形の須恵器の平瓶 I をはじめ杯のセットになるものなど約20個体があったが、一晩のうちに 盗難にあい、平瓶 1 と蓋と杯の 2 セットを前日に持ち帰っていたものだけ残った。羨道の中央 部にあった耳環の破片も盗難にあった。

閉塞部は割合に荒されずに残っていた。しかし、上半と南側には閉塞石が散乱し、その間と 墓道の黒色土層中から須恵器の高杯・聴片・杯片や土師器の甕片・椀片・鉄滓多数が発見され た。荒された閉塞石と墓道の黒色土を取ると、閉塞石から墓道床面にかけて完形に近い須恵器 の高杯・杯身・甕片や土師器の椀が発見された。埋葬時か墓前祭のものであろう。

北東側周溝からも須恵器の杯が発見されている。

② 須恵器(図版87-2~89-1,第103~105図)

杯 蓋($1 \cdot 3 \sim 5$) $1 \cdot 4$ は身とセットで羨道の須恵器 群中から、3 は 北東側 周溝から、5 は墓道の黒色土中から出土した。

 \mathbb{V} c 類(1) 宝珠つまみのある径9.1cmの蓋である。天井部外面はロクロヘラ削り,天井部内面はナデ,その他はロクロョコナデ仕上げである。灰色の良好な焼成である。

 V_a 類(3・4) 4は径10.8cm,器高2・6cmの大きさで,黄褐色の焼成不良の資料である。天井部外面は,ヘラ切りの後ヘラ記号を刻んでいる。他の部分はヨコナデ仕上げである。3も同様な仕上げであるが焼成は良好。

 V_{b} 類(5) 小片で焼成は良好で、ヨコナデ仕上げである。

杯 身(2・6~16) 2は1とセットで、12などと羨道出土、11は北東側周溝、10・13~15は閉塞部から墓道床面、その他は墓道黒色土層中の破片資料である。

I類(6) 小片でヨコナデ仕上げされているだけであるが、復原径12.8cmになる。

▼a類(7・8) 小片で底部外面はヘラ切りされ、ヘラ記号がある。

 \mathbb{N}_{b} 類($2 \cdot 9 \sim 15$) 径8.2cmから9.2cmのもので,底部外面はヘラ切りのままでヘラ記号を入れ,底部内面はナデ,他の部分はロクロヨコナデ仕上げである。15のみが胴部にヘラによる2条の沈線をめぐらしている。無キズの完形品が多い。

Va類(16) 破片資料で、調整具合も不明なところが多い。ヘラ記号がある。

高 杯(17~20) 18・19は素掘墓道の黒色土上層,20は閉塞石上出土。

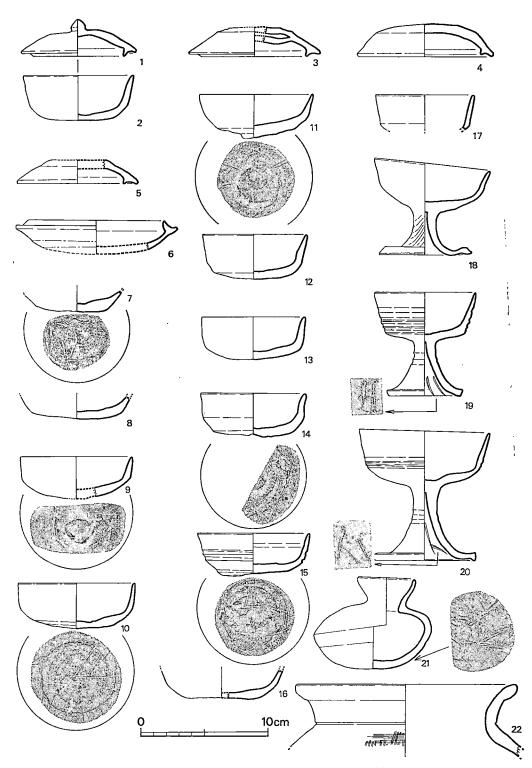
17は小片で摩滅が著しく、ヨコナデ仕上げされている淡赤褐色の資料である。

18は杯部径9.2cm, 器高7.2cmの小形で, 杯部底部内面はナデ, その他の部分はロクロヨコナデ仕上げされているが, 柱状部にはねじりがある。杯部底部外面はヘラ切りの後, 脚を取り付けヨコナデされている。胎土に砂を含む灰黒色の良好な焼成である。

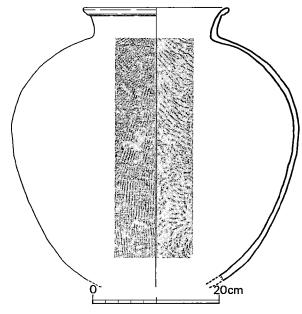
19は杯部径約8cm,器高8.2cmの小形品。杯部底部外面はヘラ切りの後,脚を付けョコナデ調整をし、杯部底部内面のナデ以外は、総てロクロョコナデ仕上げがされるが、杯部外面に4本,脚柱状部に2本の凹線をめぐらしている。砂粒を含む灰青色の多少悪い焼成である。

20は杯部口径10.3cm,器高10.3cmの大きさ。杯部は、内面底部のみナデ、その他はロクロョコナデ仕上げである。脚部も内外面共ロクロヨコナデされているが、柱状部はねじれがある。杯部と柱状部には不規則な凹線を2、3本めぐらしている。青灰色の良好な焼成である。

平 瓶(21) 羨道の須恵器群の最上段にあった,口径4.6cm,胴最大径9.2cm,器高7.3cm の小型の完形品。胴部最大部以下はロクロヘラ削り,その他はロクロヨコナデ仕上げである。 上半部には灰をかぶり,口縁は歪んでいる。胎土に砂粒を多く含む,灰黒色の堅固な焼成である。



第103図 13号墳出土須恵器実測図(1/3)



第 104 図 13号墳出土須恵器実測図 (1/6)

壺(22) 玄室内出土の小片。 口径約17.5cmで,胴部内面は同心 円,外面は平行叩きが残ってい る。口縁部は内外面共ロクロヨコ ナデ仕上げされ,胴部も外面は叩 きの後ヨコナデされている。

聴(第105図23) 閉塞部黒色土層中から出土した,いわゆる赤焼きの破片資料。頸部径3.2 cm,胴径8.8 cmあり,胴の下半はロクロへラ削り,上半はカキ目と2本の沈線間を貝殻状文で飾り,頸部はココナデである。胎土に砂を多く含む,赤褐色のもろい焼成。

甕(第104図) 閉塞部から墓道

の黒色土下部に散乱していた。口径23cm, 胴最大径45.3cmの大きさ。胴内面は同心円の叩き, 口縁部は内外面共ロクロヨコナデ, 胴部外面は平行叩きの後にカキ目状ハケによるヨコナデ仕上げである。胎土は良質で, 灰色の堅固な焼成。

③ 土 師 器 (図版89-2, 第105図)

椀(1・2) 1は墓道黒色土中出土, 2は墓道床面出土である。

1は摩滅した破片資料。外面下半はヘラ削り、上半はヨコナデ仕上げ、内面もヨコナデ仕上げである。胎土は精密な淡褐色の良好な焼きである。

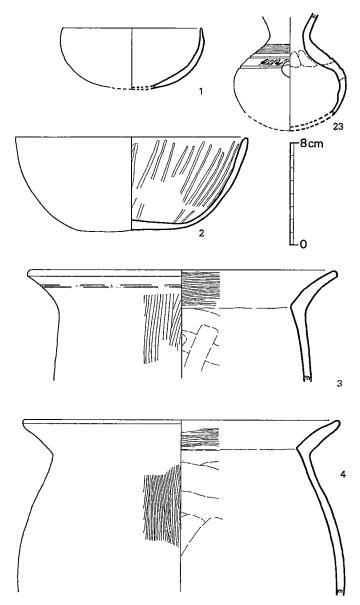
2は口径18.4cm,器高7.4cmの大形で完形に近い資料。胴部外面はヨコナデ後にヨコヘラ磨き,底部外面はナデ仕上げである。内面は底部がナデ,胴部はヨコナデ後に斜行のヘラ先条線暗文を施している。胎土に若干砂を含み、赤褐色の良好な焼成である。

甕(3・4) 墓道黒色土中から発見された破片資料。3は口径約24.6cm, 4は25.2cmの大きさである。2例共,外面は口縁から胴部をハケ仕上げ後,口縁のみョコナデしてハケ目を消している。内面の胴部は下から上にヘラ削り,口縁近くはヨコに削り,口縁部はハケのョコナデ仕上げである。胎土に砂を含み,黄褐色の良好な焼成である。

④ 鉄 器(第106図)

不明鉄器(1) 墓道黒色土出土。断面径 6 ㎜で,馬具の一種であろう。

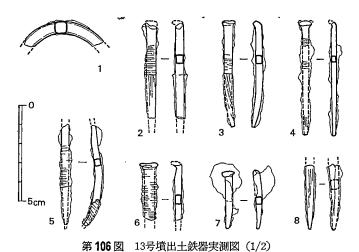
鉄 釘(2~8) 玄室 内出土で木棺のものであろ う。完形品は3と7で、3が長さ5.5cm、7が3cmの 小形である。2と3から板 材の厚さは2.6cmのものも あったことがわかる。



第105 図 13号墳出土須恵器・土師器実測図 (1/3)

(4) まとめ

羨道一括出土の須恵器群の盗難は残念であった。この須恵器群は、Ⅳ・Ⅴ類の1時期のもので、閉塞部から墓道床面のものと一致する。墓道の黒色土中には時期の異なるものがあるが小片で、追葬の可能性はあるが、Ⅳ・Ⅴ類が多量に副葬されたことは明らかである。 鉄滓は総



て、荒された土中から出土した。しかし、この古墳では他の例のように荒された層に中世の遺物を含んでいないので、鉄滓を古墳期のものと考えることも可能である。

古墳の時期は、 I 類の小片が含まれているが、これは混入の可能性が強いので、完形品が多量にある IV・ V 類の時期の7世紀前半と考えた方がよいであろう。

(柳田康雄)

14. 14 号 墳

(**1**) 墳 丘(図版90,第107·108図)

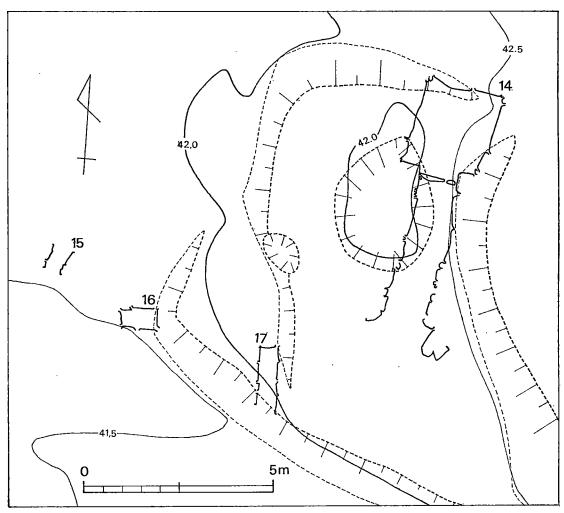
本古墳は、発掘前から墳丘のわずかな隆起があり、石材も露出していたので、割合早くから 古墳として確認していたものである。しかし、50cm間隔の等高線では、標高42mの線が1本西 側の裾をめぐるだけである。土層図 (第108) 図を見ると、墳丘には盛土は残っておらず、地山 整形の降起が確認されるだけである。

地山整形は、あまり深く行なわれなかったらしく、北側と 西側に一部 周溝として 残っている。しかし、その北西側も後世の石材抜き取りのために破壊されている。墳丘の推定規模は、東西約9.5m、南北10mの大きさの円墳であったろう。

(**2**) 石 室 (図版 90~93, 第 109·110 図)

本墳の主体部は、主軸をS-10°-Wにとり、玄室・羨道・墓道を設えた単室両袖形の横穴 式石室である。石室は、総て花崗岩で構築されているが、すでに天井石と壁面の上半部を失なっている。

石室掘方は、石材取り出しのために北西側が破壊されているが、全体に不整形をしたものである。掘方は、地山面から玄室床面の深さを1.2 mにし、腰石の部分はさらに10cmから20cm掘



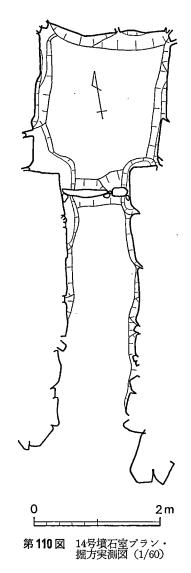
第107図 14・15・16・17 号 墳 墳 丘 実 測 図 (1/100)

り下げている。

石室全長は、右壁で7.1m、左壁で6.6mあり、両壁の長さの差は50cmである。

玄室は、奥幅2.0m,前幅1.95m,右壁長2.1m,左壁長2.2mの大きさである。壁面にはそれぞれ2個の腰石を組合せて立てている。腰石は、奥壁が 7° ,右壁が 12° ,左壁が 1° 内側に傾斜を持たせているが、左壁は傾斜がなくほとんど垂直であるため、2段目の石を持ち送って横積みしている。奥壁は腰石が残っているだけで,両側壁も奥壁側は腰石のみで前部は2段目まで残っている。

玄門は、玄室側壁から右袖石を45cm、左袖石を40cm内側に立て、幅を1.08mとしている。玄門床面には、2個の細長い石を半分埋め込んで立てた框石がある。袖石の上には、横積みされ



た2段目の石が残るだけで、天井石は3段目以上に架けられたであろう。

羨道は、玄門左袖石の内側から65cmのところで閉塞されているので、袖石から2番目の腰石までということになるが、3番目まで腰石と同様に立てられているため、天井石は3番目の腰石付近まであったが、閉塞が奥まったところで行なわれたのであろう。側壁には、腰石上に2段目、3段目の横積みされた石が残ってるが左壁の腰石には三角形状の石材が使用されているため、三角形の空間を小石で充填して2段目以上を積み上げている。羨道の右壁長は2.47 m、左壁長は2.55 m、前幅は1.05 mである。

閉塞石は、框石から26cmしか離れておらず、羨道に 副葬品などを置く余裕を残していない(第109図)。 閉塞石は一応内側をそろえているが外側ほど雑に積み 上げている。

玄室床面は完全に荒されていたために敷石が原位置 にとどまっているものはなかったが、花崗岩礫の敷石 があったものと思われる。羨道には敷石がない。

石組墓道は、右壁長2.5m,左壁長1.7mあり、最大幅1.6mまで広がって切れる。基底部には割合大きな石材を使用しているが、2段目には小石が多い。墓道床面が下がってゆくと同時に基底部の石も高くなり、先端で25cmの差がある。

素掘墓道は、石組墓道端が最大幅で3.0 加あるが、

長さ3.3mほどで後世の削平で1段落ちるため、幅0.8mほどになってしまう。素掘墓道は、石室主軸と同方向に延び、長さ7.5mで12号墳東側周溝に合流する。12号墳周溝との土層の切り合いで新旧関係は不明であるが、14号墳墓道の先端がカーブして12号墳周溝に合流する形をとっていることから14号墳が新しい可能性が強い。

(3) 遺物

① 出土状態(図版94)

墳丘と石室は、かなり破壊されていたが、墳丘の表土下からⅠ類と Ⅵь 類の杯、盛土から Ⅴ類、周溝から坩のいずれも破片が出土している。石室掘方内からは、Ⅰ類の杯身、壺の 2 分の 1 ほどの破片が出土している。築造時のものである。

玄室内は攪乱されていたが、左袖石に接して須恵器の 台付長頸壺 の完形 品が 1 個立っていた。攪乱土からは、 V_b 類杯蓋の破片も出土した。石組基道には、黒色土が推積しているが、攪乱されている上層から中層には須恵器の $I \cdot \mathbb{I} \sim V$ 類の杯と高杯・壺・甕や土師器の高杯・手揑土器の破片が多く出土した。

石組墓道の閉塞石に接したあたりでは、黒色土下層と床面に完形に近い須恵器群が発見された。それは IV・V類の杯と坩・聰・壺・甕や土師の高杯で、追葬か墓前祭のものであろう。

② 須 恵 器 (図版95-2~97-1,第111~114図)

杯 蓋($1\sim6\cdot8\cdot9$) $1\cdot3\cdot4$ は石組墓道黒色土上層出土。 $2\cdot5\cdot6$ は石組墓道 床面出土。8は玄室、9は墳丘東側表土直下出土である。

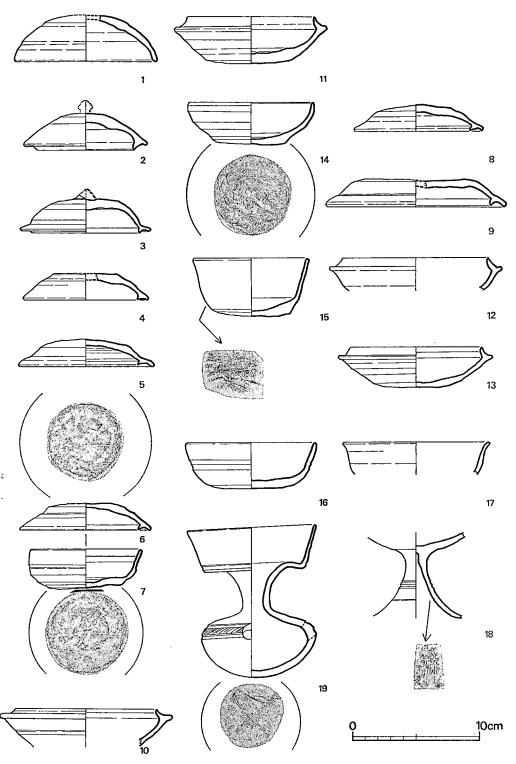
I類(1) 口径約11.2cm, 器高約3.7cmの半分ほどの破片資料。天井部外面はヘラ切り後へラ記号, 体部内外面はロクロヨコナデ, 天井部内面はナデ仕上げされている。

 V_b 類($4\sim6\cdot8$) 調整法は 4 例共に共通しているので、7 とセットになる 6 で代表する。最大径10.3cm、器高 2.2 cmの大きさで、外面天井部はロクロヘラ切り後にヘラ記号を入れるだけ、内面天井部はナデ、その他はロクロヨコナデ仕上げである。外面の体部から身受け部に折曲があるもの($5\cdot8$)とないものがあるが、内側のカエリと身受けの境には総て沈線がある。

WIb 類 (9) 最大径約14.2cmの破片資料。

杯 身(7・10~17) 7・15は石組墓道床面出土,10・11・14・16は石組墓道黒色土上層から中層出土,12は墳丘南表土下出土,13は石室西側掘方内出土,17は墳丘東側盛土内出土である。

Ⅰ類(10~13) 12は小片であるが、この中では立ち上りや、立ち上りと蓋受けの境がする



第111図 14号墳出土須恵器実測図(1)(1/3)

どい沈線になるなど、最も古い様相を呈している。その他は同様な調整法で、完形に近い11で代表すると、最大径11.3cm、器高3.7cmの大きさで、底部外面はロクロヘラ切り後へラ記号を刻むのみ、内面底部はナデ、その他はロクロョコナデ仕上げである。11のみ胎土に多く砂を含むが、他はあまり含まない。

Ⅳ類(14) 4分の1ほど欠く,口径10.1cm,器高3.3cmの資料。台状を呈する底部外面は へ > 切り後にへ > 記号,内面底部はナデ,その他はロ ρ Γ ココナデ仕上げである。胎土に砂を 含む赤褐色の良好な焼成。

 V_a 類(15・16) 15は口径 9 cm,器高4.5cmの大きさで,この類に入れるのは適当でないかもしれない。底部外面はロクロヘラ切りのまま,内面底部はナデ,その他はロクロョコナデ仕上げである。16は半分ほどの破片で,底部外面はロクロヘラ削り後 ヘラ 記号, 内面底 部はナデ、その他はロクロョコナデ仕上げをしている。

収類(7・17) 7は6と同じへラ記号であるが、3分の2ほど歪んだ資料で、セット関係は不明。底部外面はロクロヘラ切り後へラ記号、内面底部はナデ、その他はロクロヨコナデ仕上げで、この類のものであろう。

高 杯(18) 石組墓道黒色土上層出土の破片資料。杯部内面底部のみナデ仕上げで,他は ロクロヨコナデ仕上げをし,柱状部に2本の凹線をめぐらしている。茶灰色の焼成。

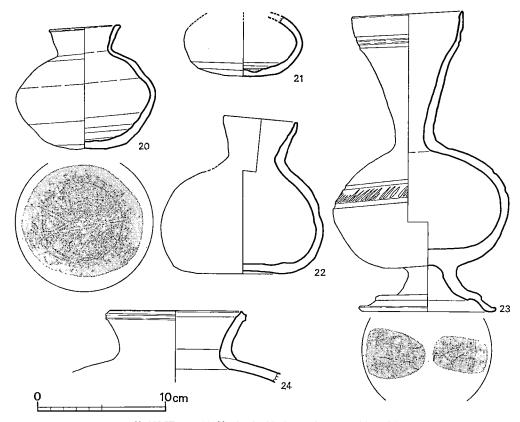
限(19) 石組墓道床面出土の完形に近い資料。口径約10.2cm,頸部最小径 2.4 cm,胴部最大径 9.3 cm,器高11.3cmの大きさ。胴部最大部以下はロクロヘラ削りの後にナデ仕上げをし,ヘラ記号を刻む。胴には2本の沈線をめぐらし,その間に貝殻状施文具による斜行刻みを施こした後に上向きの径 1.4 cmの円孔を穿つ。これ以外は総てロクロヨコナデ仕上げであるが,頭部にはシボリのためにねじれが残る。頸部から口縁に移るあたりは,大きく外反した後にたるみを持たせて口縁部に直行している。このあたりの外面に1本の沈線もめぐらしている。胎土には多少砂を含み,灰黒色の堅固な焼成である。

坩(20~22) 20は石組墓道黒色土中層出土,21は北側周溝黒色土中出土,22は石室北側掘 方内出土である。

20は口径5.6cm, 胴最大径11cm, 器高9.6cmの完形に近い資料。胴部外面下の3分の1から底部にかけてはロクロへラ削り後にへラ記号, その他はロクロヨコナデ仕上げである。胎土に砂を多く含む, 灰褐色の良好な焼成である。

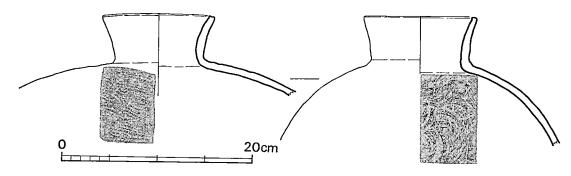
21は破片資料で、胴下半から底部はロクロヘラ削り、その他はロクロヨコナデであるが、外面肩部にカキ目が残る。

22は半分ほどの破片資料で、底部外面をナデた後に 角のみをヘラ 削りして丸 みをつけている。その他の部分はヨコナデをした後にカキ目状の条痕が 部分的 にある。器面 は凹凸 が著しい。胎土に砂を多く含み、表面は灰黒色を呈するが中味は茶褐色の焼成である。



第112図 14号墳出土須恵器実測図(2)(1/3)

台付長頸壺(23) 玄室左袖石に接して発見された完形品。口径8.8cm, 頸部最小径3.1cm, 胴部最大径13.9cm, 台部最小径3.8cm, 台部最大径10.9cm, 器高23.4cmの大きさ。胴最大部の上には2本の沈線をめぐらし、その間に貝殻(状施文具による斜行刻みを施す。その上部はカキ目状ハケによるロクロョコナデ、下部はハケによるロクロョコナデ仕上げをしている。頸部

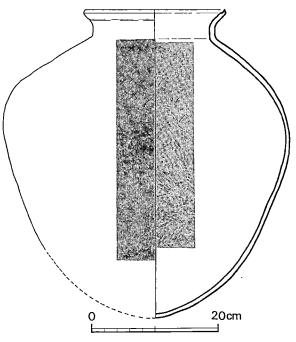


第113図 14号墳出土須恵器実測図(3)(1/4)

と台部は内外面共に、胴部ほど目立たないロクロヨコナデ仕上げである。口縁部近くの外面には3条の沈線し、このあたりから口縁部がわずかに内彎する。台部は、重さのためか多少歪むが突帯状に段を有する。器面の3分の1は灰をかぶり、その他の部分は光沢のある灰黒色である。

横 瓶 (24・第113図) 石組 墓道黒色土下層出土の破片。胴部 の張り方が部分によって違うとこ ろから横瓶にした。胴部外面は格 子叩き,内面は同心円叩き,口縁 部はヨコナデ仕上げである。

第13図は口径11.9㎝の大型の資



第 114 図 14号墳出土須恵器実測図(4) (1/6)

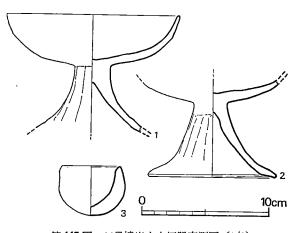
料。胴部内面は同心円叩き、外面は斜行平行線叩きの後荒いナデ仕上げをしている。口縁部先端を立ち上り状にしたヨコナデ仕上げである。

甕(第114図) 石組墓道黒色土下層に散乱して出土した。口径22.5cm, 胴最大径45.5cm, 器高48.5cmの大きな甕である。口頸部は、口縁先端が内彎して立ち上がり、全体をロクロヨコナデ仕上げをしている。胴部内面は同心円叩き、外面は平行叩きの後、カキメ状ハケで荒くヨコナデしている。

③ 土 師 器(図版97-2,

第115図)

高 杯(1・2) 2例共石組墓道 黒色土下層出土の半分ほどの資料であ る。1は外面の摩滅が著しく調整不明 な所が多い。杯部内面はヨコナデ,脚 部の外面はタテのへラ削り,内面はヨ コのへラ削りであるらしい。2は脚の 柱状部外面はタテのへラ削り,内面は ヨコへラ削りで、裾部内外面はココナ



第115図 14号墳出土土師器実測図(1/3)

デ仕上げである。

手捏土器(3) 墓道黒色土中から発見された資料。口径4.5cm, 器高3.9cmのもの。

(4) まとめ

破壊墳であったが、石室掘方内に須恵器があり、築造当時のものと思われるところから、他にも破片資料として出土している I 類の杯を第1次埋葬の副葬品とすることが出来る。したがって、14号墳の築造の時期を6世紀末から7世紀初頭とし、周溝と墓道の関係から12号墳より多少新しくしたい。 (柳田康雄)

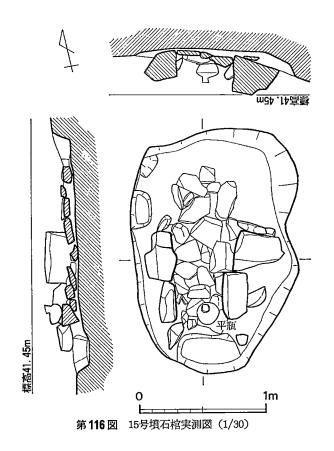
15. 15 号 墳

(1) 墳 丘

11号墳, 12号墳, 13号墳, 14号墳の大型の横穴式石室に囲まれた位置に構築されたものである。墳丘はすでに上部を削平され, 詳細は不明であるが, 若干の盛土があったものと考えられる。

(**2**)石 室(図版 98・99— 1,第116 図)

長さ1.9m,幅約1.2mの不整長 方形の基擴に,花崗岩の石材を用いて,長方形に組合せた石棺墓である。主軸方向は N—13°—Eを示す。いちじるしく破壊されて,東壁と西壁に2石ずつを残しているだけであった。腰石は立ててやや内傾するように裾られている。 蓋石は破壊されているためなんと

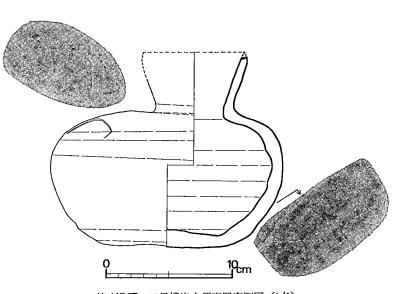


もいえないが、腰石上面は高さ不揃いのため 蓋石との間に数段の積石がされていたものと考えられる。

石室の床面には大きさ10cmから20cm内外の角礫を使用している。 床面 はかなりの 凹凸 がある。石室の内法は,敷石と南小口石の抜き跡から判断して,長さ約1.3m,幅は中心で0.45m,南側で0.4mである。 側壁の高さは現状で $15\sim20~cm$ を測る。 南側床面に平瓶 1~cm 個が副葬されていた。

(3) 遺物(図版99-2,第117図)

外面はナデ調整さ



第117図 15号墳出土須恵器実測図(1/3)

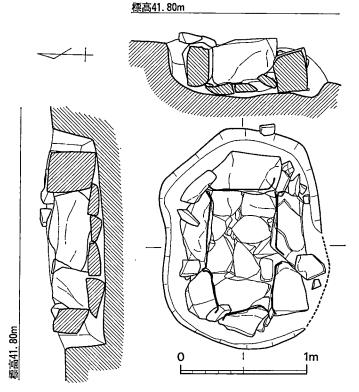
れる。底部は厚く1.4~1.8cm幅のヘラを使用し削られる。左回りの回転が観察される。胴部上位と下位にヘラ記号がある。器形は全体に歪む。胎土には砂粒を含み、色調は灰黒色を呈し焼きは硬い。高さ15.3cm、復原口径8cm、胴最大径18.4cmである。 (池辺元明)

16. 16 号 墳

(1) 墳 丘

15号墳の東側で検出された。墳丘はすでに削平され、詳細は不明である。

(2) 石 室(図版100,第118図)



第118図 16号墳石棺実測図 (1/30)

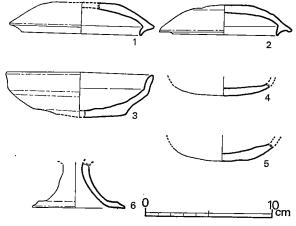
長さ1.7m,幅1.25m,深さ約47cmの墓壙内に花崗岩の石材を使用して長方形に組合わせた石棺墓である。蓋石はすでに失われているが他はよく残っている。主軸方向はN-88°-Eを示す。長さは、北側壁で97cm,

長さは,北側壁で97cm, 南側壁で91cm, 中軸で 94cm, 幅は西側小口52 cm, 東側小口43cm, 中心で55cmを測る。

石組は、南北両側壁 2石、東西両小口1石 を用い、その上に側壁 と蓋石の空隙に使用し たと思われる小さな石

が残存する。石棺内の残高は約30cmである。

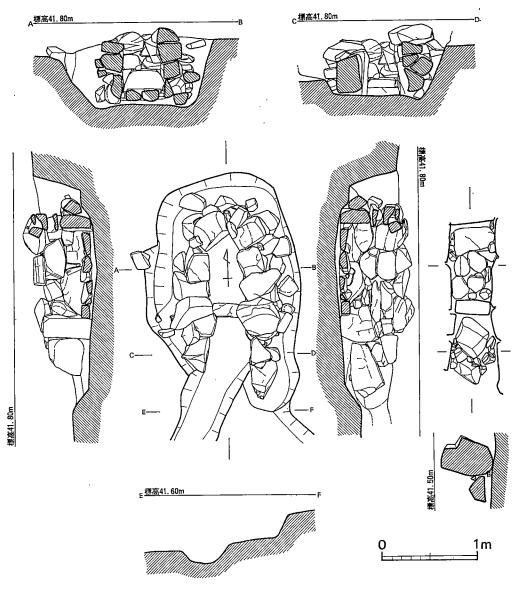
床面は大きさ30cm内外の角礫を 用いて敷石とし、水平に保ってい る。副葬品等の遺物は発見されな かった。 (池辺元明)



第119図 16・17号墳附近出土須恵器実測図 (1/3)

17. 17 号 墳

(1) 墳 丘



第120図 17号墳石室実測図(1/40)

複室の横穴式石室をもつ14号墳の西側に、附随する様に発見された。墳丘は、上部を削平されており、詳細は明らかではないが、石室の大きさ、掘方等から判断すると、盛土は1m内外で、墳丘径3mほどではなかろうか。

(2) 石 室(図版101~106,第120図)

長さ2m,幅1.6m,深さ0.75m,の不整長方形の墓壙内に構築された超小型の横穴式石室である。発見された時はすでに天井石が失なわれていたが割合保存のよい石室である。主軸はほぼ南北を示し、南に開口している。

玄室の長さは,右側壁で85cm,左側壁で79cm,中軸線で80cm,幅は奥壁で45cm,玄門側で40 cmを測る。

基部は壙底をわずかに掘り下げて、奥壁1枚、左右両壁2枚のほぼ同じ大きさの石材を用い腰石を立てて裾えている。そして奥壁腰石の外側には、腰石を支えるための頭大の角礫が裾えられている。

2段目以上は横積みして、次第にせり出す構築法をとっている。現状では、奥壁と左側壁が3段、右側壁で4段目まで積まれている。天井石は、ほぼこの4段目上に載るものと思われる。2段目以上の石の積み方は粗雑で、石の大きさも一定しない。床面からの高さは約60cmを測る。

玄門には2本の柱状の石材が用いられている。

玄門幅は、41cmを測る。玄室床面は、奥壁側に幅の広い板石、他は20cm前後の礫を敷石として、床面を水平に保っている。玄室内から副葬品等の遺物は発見されなかった。

羨道と玄室は、長方形の框石によって区切られ、羨道部には 閉塞 石が残る。 羨道は 長さ30 cm, 幅30cmを測る。閉塞は、まず50cm前後の大きな石で塞いだ後に、礫を用いて支えている。 閉塞石の外側から長さ50cm, 幅50cmの石組の墓道がつづく。さらにU字形の素掘りの墓道がゆるやかに傾斜してつづき、端部は12号墳の周溝に達している。 素掘りの墓道は長さ 2.4m, 幅約0.55mを測る。

なお本墳は、那珂川町立安徳小学校に移築した。

(池辺元明)

18. 18 号 墳

(1) 墳 丘(第126図)

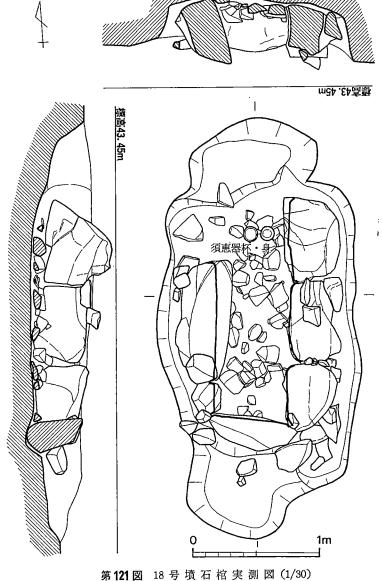
本古墳は,発掘前 にはまったく存在を 予想できなかった小 石室墳である。表土 剝ぎの結果発見され たために,盛土は確 認できなかったが, 地山整形によってわ ずかな高さの墳丘を 造っており、 周溝は 伴なわない。したが って地山整形は南北 径 5.5 m, 東西径約 5 mの円形の台を形 造っている。

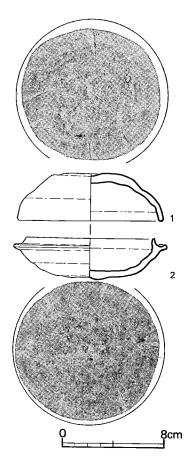
(2)石 室

(図版 107,

第121図)

本墳の主体部は, 主軸をS-4°--Wの 方向にとる石棺形小 石室である。小石室 は全て花崗岩が使用 され,すでに蓋石と 壁面の上半部を失な っている。





第122 図 18号墳出土須恵器実測図 (1/3) (3) 遺

石室掘方は、両小口付近が荒されているが、隅丸の長 方形であったと思われる。掘方床面の深さは50cmであ るが、南側小口壁の腰石は1段深く下げられている。

石室は、北側の小口壁を完全に失なっており、他の 3壁も腰石の上に2, 3の小口が残っているだけであ る。石室床面の大きさは、長さ約1.75m、南幅0.58m であり、北側幅も同様であろう。東側壁の北端の腰石 が他の腰石より高く突出しているところから、現状の 壁面の上に直接蓋石が置かれるものでないことは確実 である。側壁の腰石の上にいくらかの小石が残ってい るところから,腰石の上には小ぶりの石を小口積みか 横積みにして2,3段目を築いて蓋石を置くものであ ったろう。石室構築法としては、腰石を内側に傾斜さ せ,2段目以上を横積みするので横穴式石室のそれに 通じるところがある。

床面は、部分的に埋めたところがあるが、原則的に は地山 真上に 花崗岩礫を 並べて 敷石としいてたよう だ。石室南側の墳丘 (第121図) には, 一見墓道状の くぼみがあるが、これは後世の攪乱である。

物

① 出土狀態(図版108-1)

破壊された小石室であったが,北側小口近くの床面敷石上に完形の須恵器杯が2個ふせてあ った。この2個は蓋と身になる一対のものである。その外には遺物は発見されなかった。

② 須 恵 器 (図版 108-2, 第122 図)

I 類の蓋と身。

杯 蓋 (1) 天井部外面は、ロクロヘラ切りの後に色々な傷痕があるが調整はされず、 ヘラ記号を刻んでいるだけである。天井部内面はナデ、その他の内外面はロクロヨコナデ仕上 げである。

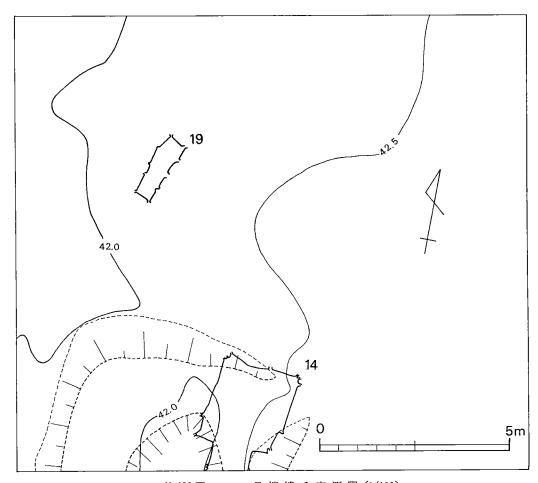
杯 身(2) 1の身となるもので、調整法は同じで、底部には丸味がある。立ち上がりと 蓋受けの境は沈線状に段が付き、外面も体部から蓋受けに移るところに段を付けている。1・ 2 共に胎土に砂を含む青灰色の良好な焼成である。

(4) まとめ

破壊されていたが、完形の須恵器杯が残されていたことで時期の決定が可能である。石棺状の小石室であるところから、追葬の可能性は少なく、副葬須恵器の時期が築造年代となるであるう。したがって、 I 類の須恵器から 6 世紀末と思われる。 (柳田康雄)

19. 19 号 墳

(1) 墳 丘(図版109-1,第123図)



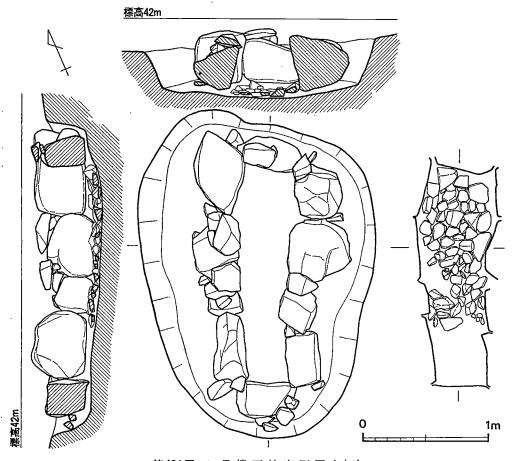
第123図 19・14号墳墳丘実測図(1/100)

古墳群のほぼ中央部に位置し、13号墳と14号墳に周溝が接している。墳丘は、すでに削平されているため復元は不可能であるが、周溝と地山整形状態から見て、東西3.4m、南北4.6mを測る長方形に近い方墳であったと推定できる。東側は周溝がとぎれる。北側の周溝は、2号土墳墓を削っており、本墳の方が新しい。13号墳、14号墳との新旧関係は明らかでない。

(2)石 室(図版109~111,第124図)

内部主体は花崗岩を組合せた石棺で、主軸方向は $N-23^{\circ}-E$ を示す。上部削平のためにすでに蓋石を失っている。

長さ約2.6m, 幅約1.8mの不整形の 墓壙内に構築されている。 棺の長さは, 東側壁で1.68 m, 西側1.75m, 中軸線で1.71m, 幅は北側小口で52cm, 南側小口で39cm, 最大幅65cmを測る。 両側壁 4 枚, 両小口 1 枚を立てて組み合せるが, 棺の内法が示す通り立て方が粗雑で, 石



第124図 19号墳石棺実測図(1/30)

の大きさ、高さも一定しない。したがって壁高を合わせるために、人頭大の石を用いて横積みにしている。棺の残高は約45cmを測る。

床面は、大きさ10cm内外の花崗岩の礫を敷石として利用しているが 1 部に 川原石が 見られる。石敷方は粗雑である。ただ南側に敷石がないところがある。床面を水平に保つためであろうか。

石棺内からは副葬品などの遺物は発見されなかったが、北側周溝より須恵器の杯蓋が1点出 土している。

(3) 遺 物(第125図)

杯 蓋 口縁部をわずかに欠失する須恵器。口径10.0~10.4 cm, 高さ1.9 cmを測る。肩はゆるやかに下り,先端は身受部となり,反転して反りを有する。天井部は,回転へラ削りの後ナデている。肩部から口縁部にかけては横ナデされ,内面上部は,ナデ,身受部は横ナデされている。胎土には少量の砂粒を含み,焼きは硬い。色調は外面が暗灰色,内面は灰色を呈す。全体に歪みが著しい。天井部にヘラ記号がある。

|面上部 |砂粒を |全す。 0 10cm |第125 図 19号墳出土須恵器 |実測図 (1/3)

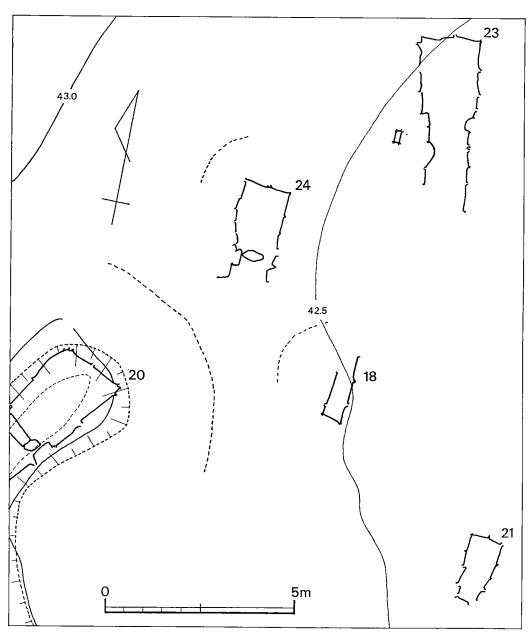
(池辺元明)

20. 20 号 墳

(1) 墳 丘(図版 112, 第 126~128 図)

本古墳は、発掘前にはまったく墳丘は感じられなかったが、石室の陥没のみが大きく目立っていた。墳丘土層図(第128図)を見ても旧表土の上には地山のバイラン土を含む褐色系土層が2層残っているだけであった。

周溝は、馬蹄形にめぐり墳丘の地山整形もかねているが、残りのよいのは北西側だけで、一見残りがよく見える東側から南東側は24号墳の墓道によって削られたものと思われる。これは石室の大きさの割に、東側の周溝が石室に近ずきすぎることで証明されると思う。墳丘の大きさは、本来南北径10.5m、東西径約10mあったと思われるが、現状では東西径 8.5mの楕円形墳になっている。



第126図 18·20·21·23·24 号 墳 墳 丘 実 測 図 (1/100)

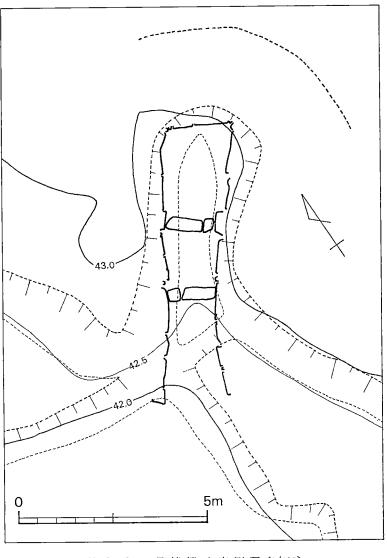
(2)石 室

(図版 113~119,

第130図)

本墳の主体部は, 主軸を S-35°-W の方向に向けた複室 の横穴式石室である。石室の石材は総 て花崗岩を使用しているが,すでに天井 部と壁面上半部を失 なっている。

石室掘方は,不整 の長をつけて掘かられ でいる。旧地で加力床面 は,大室で1.4 m り, 腰 掘りである がかにける。内は がかだける。内に もるをから10cmのの を置いる 数石を並べている。



第127図 20号墳墳丘実測図(1/100)

石室全長は、右壁で7.1m、左壁で7.2mあり、両壁の差は小さい。

玄室床面は,奥幅1.65m,前幅1.6m,右壁長2.3m,左壁長2.1mの大きさの不整長方形である。玄室の壁面は3壁共に2枚組の腰石が立てられ,2段目を小口積みにしているが,3段目以上は残っていない。玄室腰石の傾斜は,奥壁が12°,左壁が8°,右壁が1°であり,2段目の石も持ち送ることなく積み上げている。

玄門は右袖が28cm,左袖が10cm玄室のそれぞれの側壁から突出させている。幅1.25mとなった玄門の床面には,半分埋め込んだ割合大きな框石がある。袖石の上には,それぞれ2段目の

石が積んであるが、3段目はない。2段目の上に天井がくるのでは、少し低すぎるように思える。

前室は奥幅1.45m,前幅1.2m,右壁長1.25m,左壁長1.5mの大きさである。石室平面プランを見ると、框石は2ヵ所にあるが、前門といえる袖石がない。これだけであれば、羨道に框石があるだけであるが、側壁に目を転じると外側の框石横には両壁共玄門と同様に積み方の違った岩が立ててある。これは、幅においては羨道と変わりがないが、明らかに袖石の工法と同じで、前室を意図したものである。つまり、前室側壁は、腰石も前門袖石より小さく、2段目以上を小ぶりの石で小口積みしている。

前門は幅は,框石の中心で1.28mで,前述のように前室幅と変わりなく,かえって8cm広くなっている。前門の框石も割合大きく,床面に半分埋め込んである。両框石間の長さは1.46mである。

閉塞石は、前門框石の上に雑な積み方であった。羨道は、西側壁の積み方から前門袖石から 2番目までであり、 閉塞が多少奥まって行なわれただけであろう。 羨道の 長さは、 右側壁が 1.6m、 左側壁が1.75mあり、幅も多少広くなっていくだけである。

石組墓道は横積みされた2段目しかなく、残りがよくない。最大幅は1.6 mまで広がり、床面との高さの差も45cmになっている。

石室床面は、掘方地山面が玄室が最も高く、前室・羨道と外側ほど低くなっていくが、それぞれ埋土によって床面を上げ、 前室と羨道は同レベルにし、 玄室は前室より10cm高くしている。玄室は、さらにその上に丸味のある花崗岩小石を並べている。

素掘墓道は、石組墓道南側から後世に削平されているために、幅も狭く、浅く残っているが、長さ13.5mで用地外になるまで確認した墓道は、石組墓道から急に深くなり、排水の用を充分にはたしている。

石組墓道から素掘墓道にかけて、床面から浮いた状態で、玄室敷石と同様な礫が集積されていた。これは、追葬か中世の攪乱の時に、玄室の敷石を集めたものであろう。

(3) 遺物

① 出土状態(図版119-2)

石室内は総て攪乱されていた。玄室には敷石があったらしいが,原位置のものはほとんどなく,攪乱土中から発見された遺物は須恵器の I 類と V a 類の破片・鎬蓮弁青磁片・鉄滓小片だけであったが,羨道床面にあった須恵器鉢片が北東側盛土内出土内破片と接合できるものもあった。

羨道部には、閉塞石が残っていたが、上部の攪乱された部分の黒色土中には、 須恵器の Na

と Wb 類や坩が混入していた。 これに続く石組墓道の攪乱された上層には, 須恵器の II 類蓋や 三耳壺と土師器高杯も含まれていた。

移動した閉塞石を除くと、石組墓道床面には完形品や完形に近い¶類の須恵器が置かれてあった。追葬か墓前祭の時期のものと思われる。

素掘墓道には、石組墓道端から $2\sim3$ mのところまで須恵器大塾片が散乱していた。素掘墓道内には入らないが、古墳南側の表土下では須恵器高杯も発見された。

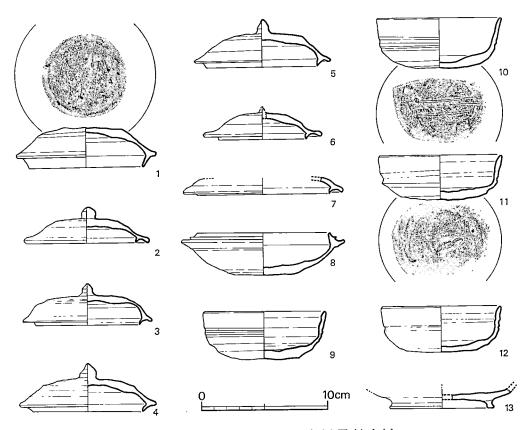
周溝内では、北側で須恵器高杯、北西側上層では土師器甕片も発見されている。

(柳田康雄)

② 須恵器(図版120・121,第131~133図)

杯 蓋(1~7)

■類(1) 墓道より出土し、口径9.0cm、器高3.2cmを測る。天井部は平坦で、緩やかな稜を有して体部へ移行し、身受けの立ち上がりは直線的に内傾する。天井部外面はヘラ切り後ナ



第131図 20号墳出土須恵器実測図(1)(1/3)

デ整形。天井部内面はナデ、その他は総てロクロョコナデで仕上げている。胎土に若干の砂粒を含み焼成は良好。色調は茶灰色。

W。類(6) 墓道床面より出土の破片資料である。復原口径 7.0 cmの小形で、つまみを欠損する。体部は丸味をおび、身受けの立ち上がりは短かく細い。天井部外面はヘラケズリ、内面はナデ。その他は総てロクロヨコナデで仕上げている。灰色を呈し、胎土は細砂を含む。焼成は良好・堅緻。

▼a 類(7) 石室床面より出土し、復原口径 10.6cmを測る破片資料である。全体に扁平で身受けの立ち上がりは短かい。調整は内外面ともロクロョコナデで仕上げている。暗灰色を呈し、胎土・焼成は良好・堅緻。

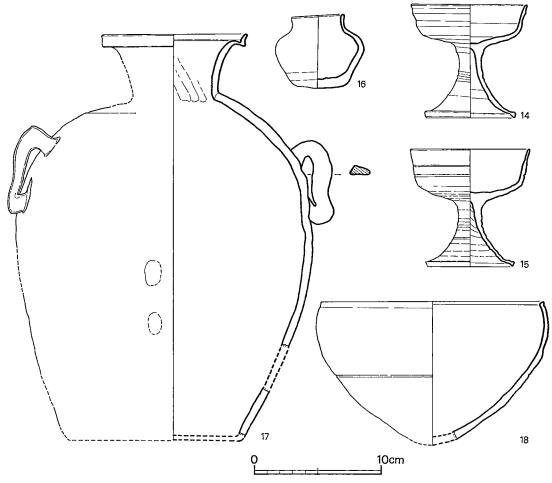
杯 身(8~13)

I類(8) 石室攪乱土下層より出土し、口径10.6cm,器高3.4cmを測る。体部はなだらかに内彎して受け部へ移行し、厚く内傾する立ち上がりは、端部で細くなる。立ち上がりには、焼成時に付着した蓋の口縁部の一部が残存する。底部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整、その他は総てロクロョコナデで仕上げている。底部外面には 不鮮明 ではあるが $\Gamma-$ 」の下に $\Gamma \times$ 」を配したへラ記号を有する。全体に自然釉がかかり、灰色を呈する。 胎土に 砂粒 を含み、焼成は良好・堅緻。

 \mathbb{N} a 類(9~12) 口径9.5~9.7cm,器高3.5~4.0cmの大きさで,9~11は閉塞部南黒色土中,12は基道床面より出土した。口縁部はわずかに外反して,直線的に立ち上がり,端部は丸くおさめている。いずれも口縁下に1~2条の凹線を巡らす。底部外面は10が回転 ヘラケズリ、9・11・12はヘラ切り後ナデ調整,底部内面はナデ,体部は内外面ともにロクロョコナデで仕上げている。12は \mathbb{N} b 類に類似し,両者の中間に位置するものと思われる。色調は9・10が灰色,11・12は灰黒色を呈し,胎土に砂粒を含む。焼成は良好・堅緻。

Wb 類 (13) 北側表土より出土した破片資料で、復原高台径は 8.2 cm を測る。 付高台を有し、畳付は平坦である。底部内面はナデ、外面はロクロヨコナデで仕上げている。底部外面に平行する 4条の凹線を施すへラ記号を有するが、欠損しているためにその全容は知り得ない。色調は灰色。胎土・焼成は良好・堅緻。

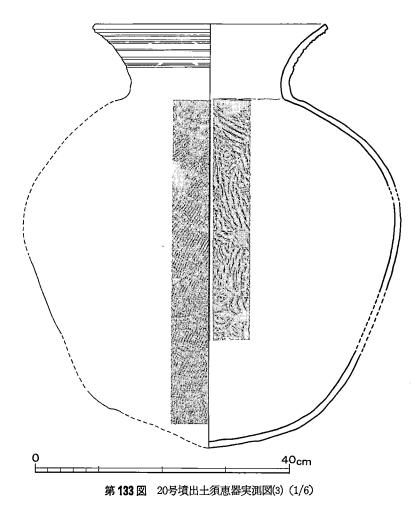
高 杯(14・15) 14は南側地山上,15は北側周溝内より出土。14は杯部径9.0cm,器高8.9 cmを測る小形の高杯である。杯部底部外面は回転ヘラケズリ後,脚を取り付けョコナデ調整を



第132 図 20 号 墳 出 土 須 恵 器 実 測 図 (2) (1/3)

施している。 杯部底部内面はナデ, その他は総てロクロヨコナデで仕上げている。 脚柱状部には, 2条の不鮮明な凹線が巡り, 内面には「川」の字状のヘラ記号がある。胎土に砂粒を含み,灰色を呈する。 焼成は良好。 15は杯部口径9.4cm, 器高9.2cmを測る。 杯部底部内面はナデ, その他は総てロクロヨコナデ仕上げされているが, 脚柱状部には更に, ねじりが加えられている。 杯部・脚柱状部には各々2条の平行凹線が巡るが, 柱状部はやや不鮮明である。 胎土に砂粒を含み, 焼成は良好。 色調は灰黒色。

坩(16) 閉塞部南黒色土中より出土し、口径4.1cm, 器高5.8cmを測る完形品。口縁部はほぼ直角に立ち上がり、端部は丸味をもつ。底部は丸味をもち、外面は手もちの粗いヘラケズリ、内面はナデ、その他は総てヨコナデで仕上調整。胎土に砂粒を多く含み、灰色を呈する。焼成は良好・堅緻。



壺(17) 墓道より出土し、口径11.5 cm、復原器高31.9cm を測る。底部は欠損するが平底である。 口頸部は緩く外反し、口唇部はほぼ直角に強く屈曲し、わ

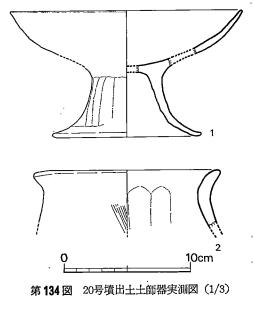
ずかに外反してのびる。胴部外面は粗いヘラケズリ後ロクロヨコナデ,内面はロクロヨコナデで仕上げている。口頸部はロクロヨコナデで仕上げ、しばりの痕がみられる。頸部内面下位は更に指頭押圧によるナデ上げを加えている。肩部には、一対の把手を有するが、非対称位にあるため、安定性を欠く。この把手間の中央よりやや左寄りの胴部中位にも不明瞭ながら把手痕がみられる。胎土に細砂を含み、焼成は良好・堅緻。色調は灰黒色を呈し、体部上位は焼成時に灰をかぶっている。

甕(図版121,第133図) 口径36.2cm,胴最大径59.5cm,器高66.4cmの大きさである。口縁部はやや肥厚して段をなし、体部は肩が張った後、ゆるく内傾して丸底の底部をなす。胴部外面は平行叩き、内面は同心円叩きで整形。頸部は内外面ともヨコナデ調整し、内面基部は指頭押圧調整を行っている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成は堅固。色調は内面が灰色、外面は灰青褐色を呈する。

③ 土 師 器 (図版121, 第134図)

高 杯(1) 墓道より出土し,口径18.2cm,器高10.0cmを測る破片資料である。器面の風化が著しく調整の不明瞭な所が多い,脚部は杯部に較べて太く短い。杯部内外面はヨコナデ。脚部内面は横位のヘラケズリ,外面は縦位の粗いヘラケズリ後にナデで仕上げている。胎土に粗砂粒を含み,赤褐色を呈する。

甕(2) 西北周溝上層より出土し、口径は14.5cmを測る。口縁部は緩く「く」の字状に外反し、端部は丸味をもつ。体部外面は斜行する刷毛、内面は粗いヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデで仕上げている。胎土に細砂・雲母を含み、橙褐色を呈する。焼成は良好。



(小林義彦)

21. 21 号 墳

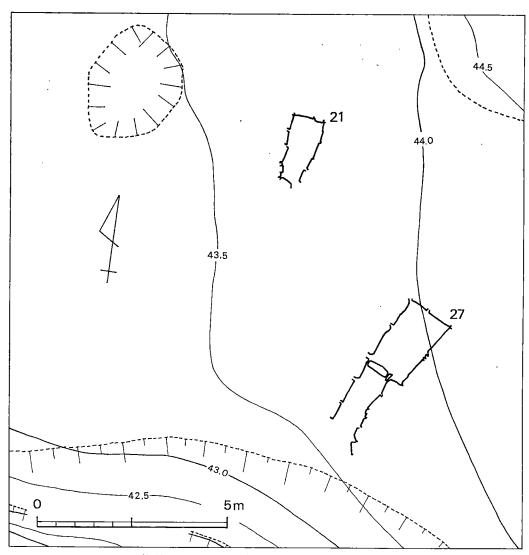
(**1**) 墳 丘(図版122-1,第135図)

発掘前には墳丘を確認することができなかったが、表土剝ぎの結果18・22・27・25号墳に囲まれた中で発見された。同じくこれらの古墳の築造後にわずかなスペースを利用して21号墳が造られている。

墳丘の盛土は全く認められなかったが、石室を復原すると当然盛土がなくては、石室を覆いきれない。周溝は周囲の古墳の周溝をそのまま利用し、北側のみ21号墳の周溝として 幅約0.9 mの弧状の溝が掘られている。周溝から墳丘を計測すると、南北径5m、東西径4.9mの不整六角形墳になる。

(2) 石 室 (図版 122—2,第 136 図)

本墳の主体部は、主軸をS— —Wにとり、玄室、羨道を有する 小型単 室横穴 式石 室である。石室の石材は、総て花崗岩が使用されており、玄室はほとんど腰石しか残っていないが、

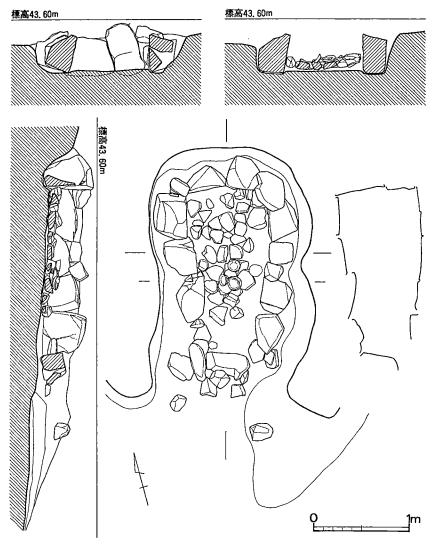


第135図 21・27号墳墳丘実測図(1/100)

部分的に2段目の石材が残っているところがある。

石室掘方は、幅約1.7m,長さ約2.6mの略隅丸長方形プランで、玄室床面までの深さ約35cmである。発見当初主体部は、石棺形のものであると思われたが、床面上に少し浮いて置かれた南小口壁に対して北壁は2枚の石が使用され、さらに床面より深く腰石としてすえられていることから、北壁は奥壁で南壁と思ったのは閉塞石であることが判明した。

奥壁は2個の石材が使用されているが、高さがそろっていないところから、これが腰石となり2段目以上が積まれていたことがわかる。右側壁には、2段目の石材が一部残り、腰石との積み方の区別がわかるが、左側壁には2段目が残っていない。

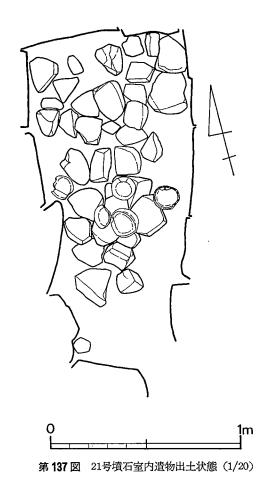


第136図 21号墳石室実測図(1/40)

石室には際立って袖石といえるものがなく、徐々に閉塞のある羨道に向って幅を狭ばめているといった感じで、しいて言うなら両壁共に4番目の腰石が玄門となる可能性が強いが、閉塞石の大きな1個の石は框石をかねていると考えられるので、閉塞石の両側の石から羨道とし、玄門とすることができる。

石組墓道の石材は現状では残っていないが、両壁共に離れて1個残っているものが素掘墓道の状況からして、それぞれの壁の先端の石材と考えられるので、両隣りの古墳の墓道を利用した周溝に応じた長さとカーブをもった石組であったようだ。

以上の石室の観察から、石室全長は右壁で2.63m、左壁が2.25mあり、右壁が0.38m長い。



玄室の奥幅0.82*m*,前幅0.48*m*,右壁長1.56*m*,左壁長1.35*m*,玄門幅0.41*m*,の大きさである

(柳田康雄)

(3) 遺物

① 須 恵 器

(図版 123, 第 138 図)

杯 蓋(1・3・4) 1は石室内か ら、3・4は周溝肩より出土した。

Va類(1) 歪みが大きいが復原口径13.5cm,器高2.3cmを測る。天井部は平坦で、身受けの立ち上がりは低く内側にはいる。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面はロクロョコナデで仕上げている。色調は外面灰黒色、内面暗灰色を呈し、胎土には粗い砂粒を含み、焼成は良好である。杯身2とセットである。

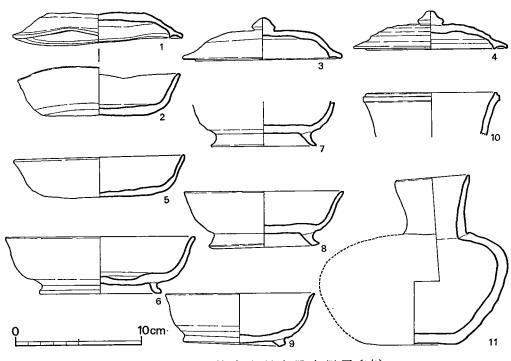
Wa類(3・4) 3は口径12.7cm, 器高3.3cm, 4は口径12.2cm, 器高3.0cm

を測る。天井部は若干平坦で、ゆるやかに身受け部へと移行する。 身受 けの立ち 上が りは低い。高さ $1.1\,cm$ ほどの乳頭状のつまみを有する。天井部外面は回転へラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面はロクロヨコナデで仕上げている。色調は $3\cdot 4$ 共に灰白色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は 3 は悪く、 4 は良好である。

杯 身 $(2 \cdot 5 \sim 9)$ 7が周溝肩から、他は石室内より出土した。

Va類(2・5) 2は歪みが大きいが、復原口径12.4cm、器高3.8cmを測る。5は口径13.6cm、器高3.2cmを測る。平坦な底部よりゆるやかに立ち上がる。2は底部外面は回転 ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面はロクロヨコナデで仕上げている。5は底部外面をヘラ切り後へラ調整、内面不定方向ナデ、体部内外面ロクロヨコナデで仕上げている。色調は2が外面暗赤褐色、内面暗灰色、5は灰白色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は2が良好、5は悪い。

₩ь類(6~8) 付高台を有する杯身で、杯部は深く、ゆるやかに外傾する。高台の畳付



第138図 21号墳出土須恵器実測図(1/3)

が外方にはねる特色をもっている。底部外面はヘラ切り後ナデで、内面は不定方向ナデ、体部内外面はロクロョコナデで仕上げている。口径は6が15.0cm, 8が12.6cm, 高台径は6が9.7cm, 7が8.4cm, 8が8.7cm, 器高は6が4.5cm, 8が4.3cmを測る。色調は6・8が青灰色、7が紫灰色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

壺 (10) 口縁部の破片資料で、復原口径10.2cmを測る。ロクロヨコナデで仕上げている。 色調は赤黒色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

平 瓶 (11) 胴部の一部を欠く資料で、最大径は測りえないが、口径 6.0 cm, 器高12.9~13.3cmを測る。底部は平坦で、最大径は体部上位にある。頸部はわずかに外反し、ほぼ直立する。口頸部・体部上位は内外面共にロクロヨコナデ、体部下位外面は回転ヘラケズリ、底部端から体部下位の境は手持ちのヘラケズリ、底部中央は不定方向ナデで仕上げている。色調は灰白色と灰黒色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は良好である。 (小田雅文)

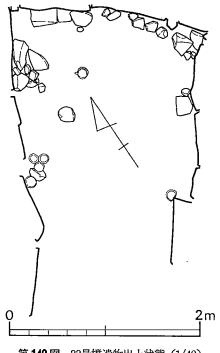
22. 22 号 墳

(1) 墳 丘(図版124-1)

墳丘は完全に削られており、発掘前には確認はできなかった。周溝は石室を円形にめぐっているが、南側は傾斜が急になり認められず、馬蹄形の周溝を呈している。周溝断面は、U字形を呈する浅い溝である。墳丘の高さについては不明であるが、周溝の底部から底部を測ると、径約7.5mの円墳であると思われる。

(2) 石 室(図版124-2,第139・140図)

石室は上部を欠失し,腰石のみを残した全長約3.1 mをはかる単室の横穴式石室である。玄室は長さ約1.75m, 奥壁幅約2.2 mを測り,若干不整な長方形を呈する。玄室と羨道部を画する玄門は特にみられず,東側壁においては玄室の壁より,若干腰石が内側に張り出している。



第140図 22号墳遺物出土状態 (1/40)

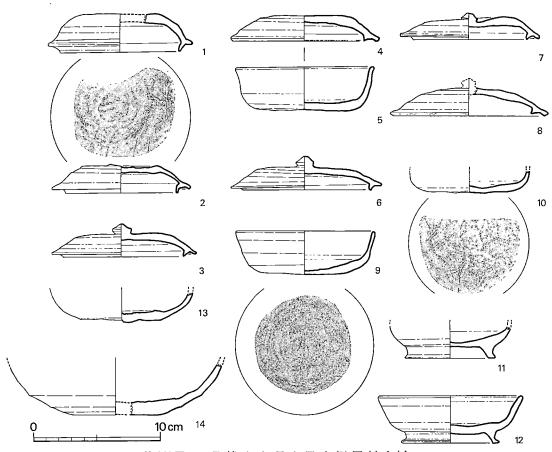
一方西側壁は、奥壁から徐々に内側に張り出し 羨道部に続く。 羨道部は、 幅約1.35 m, 長さ 約1.2mを測る。 羨道部には閉塞石が一部残存 しており、閉塞石の外側から墓道が掘り込まれ ている。石室内の床面には敷石はほとんど残っ ておらず、壁際にその一部を残しているにすぎ ない。 遺物は、玄室の中央より把手付盌や、玄 室入口の両壁際から須恵器の蓋杯、杯身が出土 した。 (櫻井康治)

(3) 遺物

① 須 恵 器

(図版 125・126─1,第 141~143 図)

杯 蓋(1~4・6~8) 1~3は墓道か ち,4・6は石室内,7・8は南西周溝から出 土した。



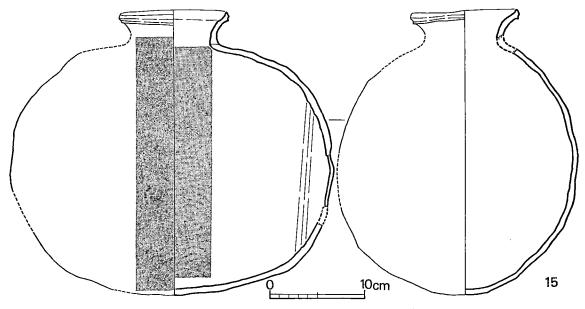
第141図 22号墳出土須恵器実測図(1)(1/3)

- I類(1) 天井部を欠く資料で、復原口径11.5cm、復原器高3.0cmを測る。天井部は平坦面をつくり、体部はなだらかに身受け部へと移行する。身受けの立ち上がりは、高さ0.5cmで若干厚い。天井部外面は回転ヘラケズリ、他の部分はロクロョコナデで仕上げている。色調は灰黄色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成はあまり良くない。
- ▼a 類(2) 口径11.0cm,器高2.1cmを測る。天井部は平坦になり体部との境が明瞭で,器壁の薄い体部は,部厚い身受けの立ち上がりになだらかに移行する。蓋Ⅱ類に比べて器高が低いのが特徴である。天井部外面は回転ヘラケズリ,内面中央部は不定方向ナデ,体部内外面はロクロョコナデで仕上げている。色調は灰褐色を呈し,胎土に若干の砂粒を含む。焼成は普通で,天井部から体部上位にかけてヘラ記号を有する。
- Va類(4) 口径11.7cm,器高1.9cmを測る。全体的に器壁が厚く、扁平である。天井部は若干平坦面となり、体部はゆるやかに立ち上がる。天井部外面はヘラ切り後ヘラナデ、内面不定方向ナデ、体部内外面はロクロヨコナデで仕上げている。色調は赤褐色を呈し、胎土に粗い

砂粒を含む。焼成は悪い。杯身5とセットである。

杯 身(5・9~12) 5・9は石室内から,10~12は南西周溝から出土した。

 V_a 類($5 \cdot 9 \cdot 10$) 底部からゆるやかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。底部外面は、5がヘラ切り後ヘラナデ、 $9 \cdot 10$ は回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面はロクロヨコナデで仕上げている。口径は11.0cm,器高3.4cmを測る。色調は $5 \cdot 9$ が赤褐色、10が灰黄色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は、 $5 \cdot 9 \cdot 10$ ともに悪い。

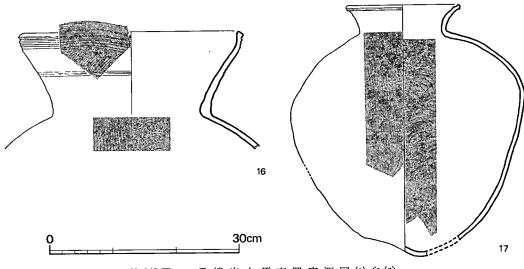


第142図 22号墳出土須恵器実測図(2)(1/4)

壺(13・14) 13は南西周溝から、14は墓道上層から出土した底部破片の資料である。13と14は大きさが違うが長頸壺の底部と考えられる。底部は平底で、外面回転ヘラケズリ、内面ロクロココナデ、胴部下位内外面ともにロクロココナデで仕上げている。底径は13が6.5 cm、14が6.6 cmを測る。色調は13が緑灰色、14が外面黒色、内面青灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。

横 瓶 (15) 北西周溝付近から出土した。口径11.2cm,器高29.7cm,胴部最大径34.1cmを測る。口頸部は直立してのち短かく外反し、端部に扁平凸帯を貼りつけている。胴部は俵状をなす。胴部の円形貼りつけ部分は明瞭で、その径は5.5cm前後を測る。口頸部は内外面ともにロクロョコナデ、胴部外面は格子目状の叩きの後部分的にロクロョコナデ、内面は青海波文叩きの後貼りつけ部を中心に部分的にロクロョコナデで仕上げている。胴部に部分的に自然袖をうけている。色調は青灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。

大 甕 (16・17) 16は南西周溝及び南西表土下より出土, 17は墓道上層から出土している。16は胴部・底部を欠く資料である。復原口径34.5cmを測る。口頸部は外反しながら立ち上がり、端部付近で内反しながら立ち上がる。口頸部上位に3条の、下位に2条の沈線を入れる。その間は櫛描きによる斜線状の文様を施している。胴部外面は格子目状叩き、内面は青海波文の叩き、口頸部内面はロクロヨコナデで仕上げている。色調は青灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。17はほぼ完形の資料で、口径17.6cm、器高39.7cm、胴部最大径37.0cm前後を測る。口頸部は直立して外反し、端部に凸帯を貼りつけている。端部は丸くおさめている。胴部の最大径は上位にあり肩がはる。底部は変形しているが丸底である。口頸部内

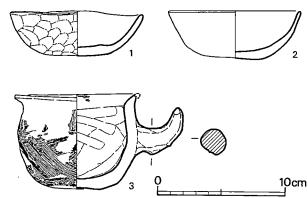


第143 図 22 号 墳 出 土 須 恵 器 実 測 図 (3) (1/6)

外面ともにロクロヨコナデ、胴部外面は格子目状叩きの後部分的にロクロヨコナデ、内面は青海波文の叩き、底部外面は叩きの後不定方向ナデ、内面は不定方向ナデで仕上げている。色調は口頸部・胴部上位は緑灰色、下位は黒灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。

② 土 師 器 (図版 126—2, 第 144 図 1 ~ 3) 石室内から出土した。

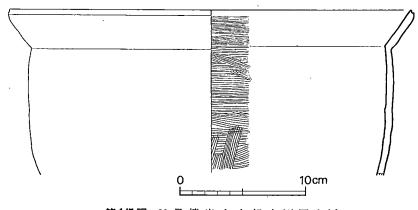
杯 身(1・2) 底部からゆるやかに外反しながら立ち上がり、端部は丸くおさめている。1は外面へラケズリの後、内外面ともにへラミガキを施す。ヘラミガキは口縁部から底部にむけてへラ右まわりで行なわれている。2は内面のみヘラミガキ。外面は粗いヘラケズリで、口縁部付近のみその後ナデ仕上げを行なっている。



第144図 22号墳出土土師器実測図 (1/3)

1は色調淡赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好で、口径10.4cm、器高3.5 cmを測る。2は色調赤褐色を呈し、胎土に若干の砂粒を含む。焼成は普通。口径10.4cm、器高3.7 cmを測る。

把手付椀(3) 口径9.8㎝, 器高7.4㎝を測る。椀形をなす体部片側に把手の付くジョッキ形の土器である。体部外面は横位・縦位・斜位の細かい 刷毛整形で, 内面は粗 いヘラ ケズリで,底部は細かい刷毛整形。色調は外面赤褐色,内面淡褐色を呈し,胎土に多くの細砂を含むが,焼成は良好である。 (小田雅文)

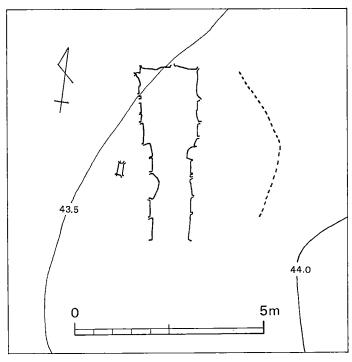


第145図 22号墳出土土鍋実測図(1/3)

23. 23 号 墳

(1) 墳 丘(図版127-1,第146図)

墳丘は完全に削平されており、発掘前は奥壁の石材の上部が一部みえていた。 周溝は北・東側に地山に切り込んでおり、西側は、24号墳の北側で消滅している。墳丘の高さは不明であるが、周溝から推測すると約7.5 mの円墳であると思われる。



第146 図 23号墳墳丘実測図 (1/100)

(**2**) 石 室 (図版 127·128, 第 147 図)

石室は、腰石のみを残した全長約5.2 mの単室の横穴式石室である。石室は、東側壁には玄門として、特に一石を張り出して立てているが、西側壁は、玄室の壁も、それに合わせている。玄室は長さ約2.0 m、奥壁幅約1.5 mを測り長方形を呈する。

玄門の幅は約90mを測る。羨道部は長さ約0.85m,幅約0.8mあり,玄門から約0.38 mのところに閉塞石があり,残存状態はひじょうに良いようである。さらに石室は羨道部から墓道に続く,墓道は長さ約1.6m,幅約0.8mを測る。石室内の敷石の存在は不明であるが,地山面に数個の石がみとめられる。また玄室と羨道部を画する框石は,玄門のところに小形の石が2個並んでいるのみで詳細は不明である。石室は全長約5.2mであるが,さらに素掘りの墓道が21

号墳の周溝までのびている。石室の掘り方の西側に、地山に掘り込んだ内法の長さ約20cm幅約15mの小形の石棺がみられる。この石棺は、23号墳と同時期かまたはそれより以前に造られたものである。遺物は、玄室、羨道部から須恵器の蓋杯が出土し、遺物の多くは素掘りの墓道から出土した。 (櫻井康治)

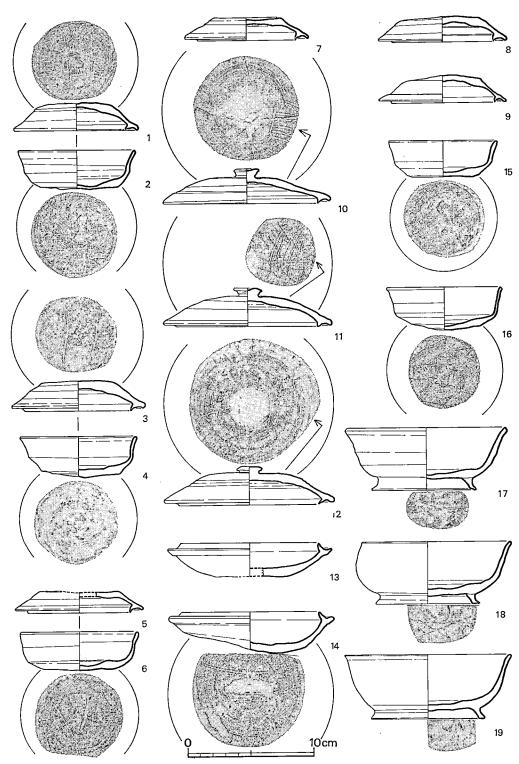
(3) 遗物

① 須 恵 器 (図版 130・131, 第 148・149 図)

杯 蓋 $(1 \cdot 3 \cdot 5 \cdot 7 \sim 12)$ 8 · 9 が石室内から、他は墓道より出土した。

Vь類(1・3・5・7~9) 1は杯身2とセットをなすもので,口径9.9cm,器高2.2cmを 測る。 平坦な天井部に部厚い体部が付く。 身受けの立ち上がりは低く, 内側にはいる。 天井 部外面は手持ちヘラケズリ,体部外面上位はヘラ調整を施す。天井部内面は不定方向ナデ,体 部内面はロクロヨコナデで仕上げている。天井部外面にヘラ 記号あり。色調 は暗 茶灰 色を呈 し,胎土に小レキを含む。焼成は良好である。3は杯身4とセットをなすもので,口径10.6㎝ 器高 2.4 cmを測る。身受けの立ち上がりは低いが内側にはいらない。調整技法は1とほぼ同じ であるが,体部は内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。 天井部外面 にヘラ 記号 を有 す。色調は赤茶色を呈し,胎土に若干の小レキを含む。焼成は 良好で, 天井部 にヘラ 記号あ り。5は杯身6とセットをなすもので天井部中央を欠く資料である。復原口径10.2cm,復原器 高1.7 cmを測り、1・3 に比べで扁平である。天井部は平坦面をつくり、薄手の体部が付く。 天井部と体部の境が明瞭である。調整技法は1と同じである。色調は外面暗灰色、内面暗茶色 を呈し、胎土に若干小レキを含む。焼成は良好である。7は口径9.9cm、器高1.8cm測り、扁平 である。形態・調整技法ともに5と同じである。色調は茶灰色を呈し,胎土に小レキを含む。 焼成は良好である。8・9は形態は3と同様である。天井部外面はヘラ切り後ヘラ調整,内面 不定方向ナデ,体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。8は口径10.2㎝,器高2.0 cmを測り、色調は暗茶灰色を呈し、胎土に小レキを含む。 焼成は良好である。 9 は口径 10.2 cm,器高 2.2 cmを測り,色調は外面黒灰色,内面茶灰色を呈し,胎土に小レキを多く含む。焼 成は良好である。

 W_b 類($10\sim12$) 宝珠形のつまみを持つもので、つまみの中央部が若干へこむ。天井部からゆるやかに身受け部へと移行し、立ち上がりは低い。 調整は、天井部 外面は 回転 ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。 10は口径13.3cm、器高(つまみ部を含む) 2.7cmを測る。色調は黄灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好で、天井部肩にヘラ記号あり。 11は口径13.4cm、器高(つまみ部を含む) 3.1cmを測る。色調は白灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良くない。 天井部肩にヘラ記号あり。 12は口径



第148図 23号墳出土須恵器実測図(1)(1/3)

13.5cm, 器高(つまみ部を含む) 3.1cmを測る。色調は黄灰色を呈し,胎土に小レキを含む。 焼成は良好で,天井部にヘラ記号あり。

杯 身(2・4・6・13~19) 墓道から出土した。

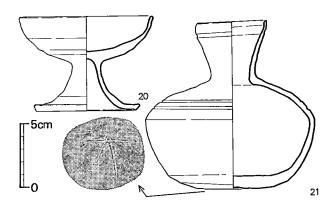
I類(13・14) 13は底部を欠く資料で、若干丸みをもつ底部からゆるやかに立ち上がり、蓋受けの立ち上がりは高く、厚い。底部外面は回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。14は歪みがあるが、形態・調整技法は同じである。13は復原口径13.0cm、復原器高2.7cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。14は最大口径13.1cm、最大器高3.3cmを測る。色調は外面黄灰色、内面灰色を呈し、胎土に小レキを含む。焼成は良好で、底部にヘラ記号あり。

 $V_{\, b}$ 類($2 \cdot 4 \cdot 6 \cdot 15 \cdot 16$) 底部から外反気味に 立ち上がり, 端部 は丸く おさめ てい る。底部と体部の境付近が最も厚く、体部の器壁は薄い。2は杯蓋1とセットをなし、口径 9.3㎝, 器高3.0㎝を測る。底部外面は手持ちのヘラケズリ, 内面不定方向ナデ, 体部と底部の 境は内外面ともにヘラ調整,口縁部はロクロヨコナデで仕上げている。色調は暗茶灰色を呈し, 胎土に小レキを含む。焼成は良好で、底部にヘラ記号あり。4は杯蓋3とセットをなし、口径 9.2cm, 器高3.2cmを測る。底部外面はヘラ切り後手持ちのヘラケズリ, 内面不定方向ナデ, 体 部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。色調は外面赤褐色、内面暗灰色を呈し、胎土 に小レキを含む。焼成は良好で,底部にヘラ記号あり。6は杯蓋5と セットをなし,口径9.4 cm,器高9.4 cmを測る。底部外面はヘラ切り後調整なし。底部内面は不定方向ナデ, 体部内外 面ともにロクロヨコナデで仕上げている。色調は外面暗茶色、内面赤茶色を呈し、胎土に多く の小レキを含む。焼成は良好で、底部にヘラ記号あり。15は口径8.6cm、器高2.9cmを測る。調 整技法は4と同様である。色調は黒灰色を呈し,胎土に小レキを含む。焼成は良好で,底部に ヘラ記号あり。16は口径9.2cm,器高3.3cmを測る。底部外面はヘラ切り後調整なし。底部内面 は不定方向ナデ、体部外面にヘラ調整あり、その後内外面ともにロクロヨコナデで仕上げてい る。色調は外面茶灰色,内面暗茶色を呈し,胎土に若干の小レキを含む。焼成は良好で,底部 にヘラ記号あり。

▼16 類(17~19) 付高台を有し、杯部が深い椀形を呈するもので、体部はゆるく外反しながら立ち上がり、端部は丸くおさめている。高台の畳付けは外方にはね、水平のものと、内側が上るもの(17)がある。17は口径12.2cm、器高4.9cm、高台部径8.2cmを測る。全体にロクロョコナデで仕上げ、底部と体部の境の内面はヘラ調整を施す。色調は暗灰色を呈し、胎土に多くの小レキを含む。焼成は良好で、底部にヘラ記号あり。18は若干歪みがあるが、最大口径11.3cm、器高5.0cm、高台部径8.2cmを測る。底部内面は不定方向ナデ、その他はロクロョコナデで仕上げている。色調は黒灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好で、底部にヘラ記号あり。19は口径13.1cm、器高5.0cm、高台部径8.9cmを測る。調整は18と同じである。全体に灰をかぶっ

ている。胎土に多くの小レキを含み、焼成は普通、底部にヘラ記号あり。

高 杯 (20) 墓道から出土した。口径10.6cm,器高8.4cm,底径8.4cmを測る。杯部と脚部の高さがほぼ同じであり,杯部はゆるやかに内反しながら立ち上がり,端部は丸くおさめている。土師高杯の杯部に似ている。脚部はゆるやかに外開きし,裾部で水平になる。脚部内外面ともにロクロョコナデ,杯部は底部外面は回転へラ



第149 図 23号墳出土須恵器実測図 (1/3)

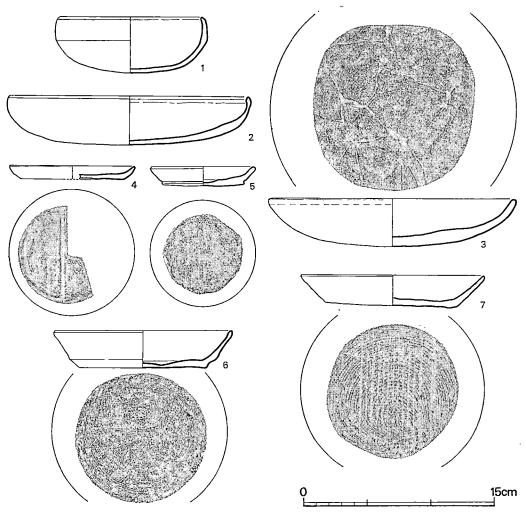
ケズリ, その他内外面はロクロヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈し, 胎土に若干の 小レキを含む。焼成は良い。

平 瓶(21) 墓道から出土した。口径 5.6 cm, 器高13.2cm前後,最大径13.3cmを測る。口 頸部はやや斜めに接合し、外反しながら立ち上がり口縁部で直立する。端部は丸くおさめ、口 縁部に1本の沈線がめぐる。胴部の最大径はほぼ中位にあり、その上に2本沈線をめぐらし、 底部は平底である。底部外面は手持ちのヘラケズリ、胴部、口頸部内外面ともにロクロヨコナ デで仕上げている。色調は灰色を呈し、胎土に細砂を多く含む。焼成は良好である。底部にヘ ラ記号あり。

② 土 師 器 (図版 132, 第 150 図 1 ~ 3) 墓道から出土した。

杯(1) 口径11.3cm,器高4.4cmを測る。丸味をもつ底部から内反しながら立ち上がり,口縁部付近で直立する。端部は丸くおさめ、器壁は底部より厚い。口縁部と底部との境に稜があり、底部は回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、口縁部外面はヘラミガキ、内面ロクロヨコナデで仕上げている。色調は外面赤褐色、内面黄褐色を呈し、胎土に若干の小レキを含む。焼成は良好である。

大 皿(2・3) 2は口径19.0cm, 器高3.8 cmを測る。底部からゆるやかに内反しながら立ち上がり、口縁部がやや直立気味に立ち上がる。端部は丸くおさめている。底部外面は回転ヘラケズリの後手持ちのヘラミガキ、内面はナデ、口縁部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。3は口径19.2cm, 器高3.8cmを測る。底部は2と同様な形態をなすが、器壁が2より厚く、口縁部は直立しない。端部はやや平担面をなす。 外面は全体に回転ヘラケズリの後手持のヘラミガキ、 内面ヘラミガキで仕上げ、底部中央にヘラ先回転の暗文を施す。色調は外面黄褐色、内面赤褐色を呈し、胎土に小レ



第150図 23号墳出土土師器実測図(1/3)

- キ・金雲母を含む。焼成は良好である。
 - ③ 歴史時代土師器 (図版 132, 第 150 図 4~7)

すべて墓道から出土した。

杯($6\cdot7$) $6\cdot7$ ともに糸切り離しである。6は口径14.0cm,器高 2.9cm,底径10.0cmを測る。白褐色を呈し,胎土に小レキを含む。焼成は良好で,糸切り痕を明瞭に残す。7は口径14.4cm,器高 3.4cm,底径10.4cmを測る。外面黒褐色,内面黄褐色を呈し,胎土・焼成ともに良好である。糸切り痕・板目を明瞭に残す。

小 皿 (4・5) 4・5ともに糸切り離しである。4は復原口径9.8cm, 器高1.1cm, 復原

底径8.0cmを測る。 5 は口径8.2cm, 器高1.5cm, 底径6.4cmを測る。 4・5 ともに茶褐色を呈し, 胎土に金雲母を含む。焼成は良好で,糸切り痕・板目を目瞭に残す。

(小田雅文)

24. 24 号 墳

(1) 墳 丘(図版133-1)

本古墳は、発掘前には完全に削平されて、墳丘の形はまったくなく、表土剝ぎの結果発見された。墳丘の盛土はなかったが、地山整形による地山の盛り上りと周溝の一部から、墳丘の平面プランと大きさは計測できる。周溝は、北側から北西側にかけてと南東側に残っている。本墳は、18号と20号墳より後に造られたらしく、南東側の周溝は18号墳の墳丘を一部削り、西側の周溝は20号墳の周溝を削っている。墳丘の大きさは、東西径約5.5 m、南北径約6 mあり、小型の円墳であったろう。

(2) 石 室(図版133·134,第151図)

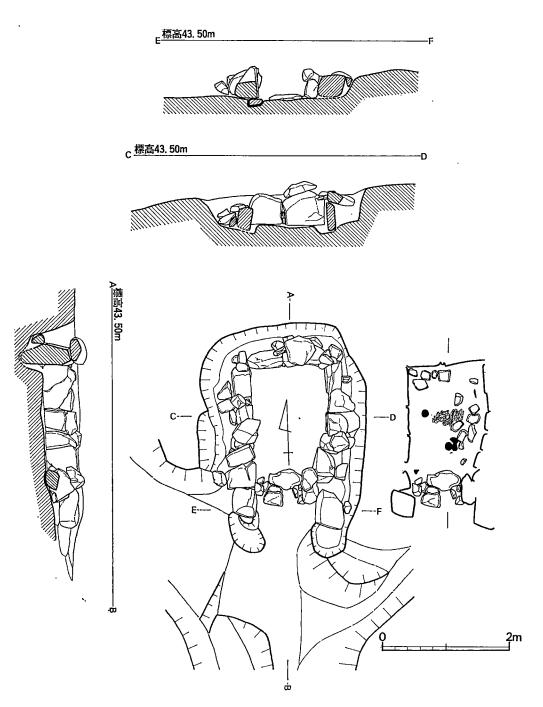
本墳の主体部は、主軸をS-2°-Wの方向に向けた単室片袖形横穴式石室である。石室の石材は、すべて花崗岩を使用しているが、すでに大半を破壊されて、腰石と一部に2段目を残すだけである。

石室掘方は、幅2.65m, 長さ約3.7mの不整隅丸長方形であったと思われるが、南西側が攪乱されている。掘方の深さは、地山上面から石室床面まで60cmある。

石室全長は、現状で右壁で2.68m、左壁で2.37mあるが、両壁共に石組墓道先端の石材を1個抜き取られているようだ。

玄室は、奥幅1.19m,前幅1.04m,右壁長1.8m,左壁長1.65mの大きさである。壁面の構築は、奥壁が腰石を2個使用して、床面から35cm深く掘り下げ、ほぼ垂直に立てている。右側壁は4個の腰石を約4°内側に傾斜させて立てているが、平面プランは直線でなく胴張形に彎曲させている。左側壁は胴張りがなく、3個の腰石を約8°内側に傾斜させて並べている。両壁共に腰石の上には、小口積された2段目の石が部分的に残っている。

玄門には、右袖石が玄室側より18cm内側に配置されているだけで、左壁には袖石らしきものがなく、いわゆる片袖形の石室である。玄門幅は79cmあるが、床面には確実に框石といえるも



第151図 24号墳石室実測図(1/60)

のがない。玄門床面にある石組は、床面に半分埋め込んでないところから、むしろ閉塞石のな ごりであろう。

玄門の外側には羨道がなく,直接石組墓道になっている。右側壁は、袖石より20cm広げて配置され、墓道床面より5cm高くなっている。墓道床面が、玄室床面より7cm高くなっているので、玄室腰石基底部との差が大きく、構築法の違いが明らかである。石組墓道の奥幅は95cmで、長さは先端の抜かれた石を復原すると、右壁約85cm、左壁約95cmとなる。

玄室床面は、現状で径10cmから20cmの礫が残っているが、土器や人骨の出土状態からして、 敷石とするには不自然で、敷石は当初からなかったのであろう。

素掘墓道は、石組墓道から直接20号墳の北東側周溝に開口しているため、20号墳東側周溝を 利用しているかに見える。しかし、20号墳の石室の位置を見ると東側周溝に片寄りすぎている。 これはむしろ、24号墳の墓道が20号墳墳丘を削っているものと見た方がよいのではなかろうか。

(3) 遺物

① 出土状態(図版134-2)

石室の石材は、腰石と2段目を部分的に残していただけであるが、玄室の床面の中央には集積された人骨が残り、完形の須恵器4個と刀子が伴なっていた。人骨は、東側に足部の骨をそろえ、その西側につぶれた頭蓋骨とその下に腕部の骨が木箱にでも納めたかのような状態で出土した。

須恵器は、人骨の南側に杯身完形3個・杯蓋半分、人骨の西側に杯蓋完形1個が置かれていた。

鉄器は、刀子2本分と小鉄片が出土した。刀子の完形品は、人骨の北東側床面にあり、盗難にあった刀子片は玄室床面南側にあった。小鉄片は人骨南側の高台付杯底部に付着していた。

人骨南側にあった高台付杯1個と刀子片は,残念ながら盗難にあって紛失した。

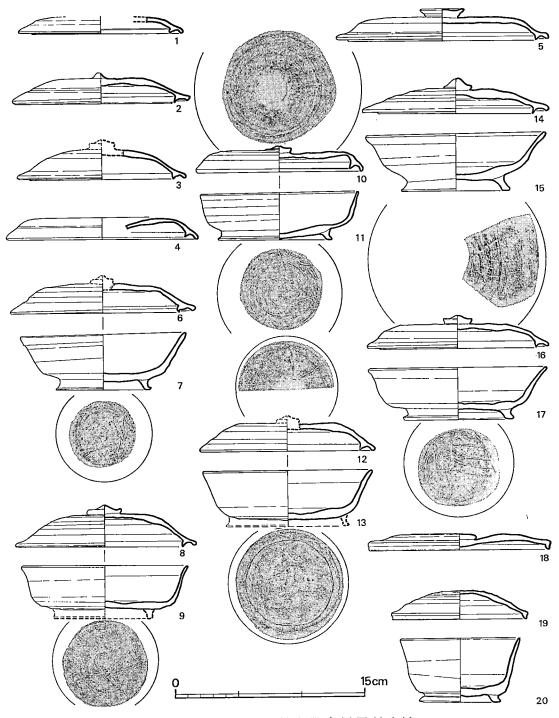
石組墓道床面から素掘墓道黒色土層には、須恵器が多量に出土したが、石組墓道より素掘墓道の方が量が多く、それも墓道の東側に片寄って発見された。須恵器群は、素掘墓道からさらに南東側の幅の狭い周溝に続いて発見された。すなわち、横瓶のように墓道・南東側周溝・東側周溝に破片が分散し、墓道から南東側周溝の須恵器は群が別のものではなく一群のものである。

② 須 恵 器 (図版 135~137, 第 153~155 図)

杯 蓋($1 \sim 6 \cdot 8 \cdot 10 \cdot 12 \cdot 14 \cdot 16 \cdot 18 \cdot 19$) 1は北西周溝内, $2 \cdot 3 \cdot 5 \cdot 10 \cdot 14 \cdot 16 \cdot 18$ は南東部周溝内, $4 \cdot 6 \cdot 12$ は墓道黒色土層中, $8 \cdot 19$ は玄室床面出土である。



第 **152** 図 24号墳石室内遺物出土状態(1/20)



第153図 24号墳出土須恵器実測図(1)(1/3)

Wh 類($1 \sim 6 \cdot 8 \cdot 10 \cdot 12 \cdot 14 \cdot 16$) 最大径は1 が最も小さくて13.1cm, 5 が最も大きくて16.8cmの大きさであるが,この両者を除いた平均は14.2cmとなり,5 のみ大きいことがわかる。しかも,5 のみツマミと身受け外面の折曲が強く,全体の形態が多少違っている。

調整法は総て同様で、内面天井部はナデ、身受け部付近の内外面はロクロヨコナデ仕上げを し、天井部外面はヘラ切りの後、平坦になった外面の角を面取り状にロクロヘラ削りで天井部 に丸味をつけている。最後に扁平な宝珠ツマミを付けてヨコナデ仕上げしている。2のツマミ は、一度扁平宝珠ツマミを付けた後に、手控状に摘み取った形をしている。

6は7と、8は9と、10は11と、12と13は、ヘラ記号や焼成具合が同様なところからセットになるものと思われる。16と17は同様なヘラ記号があるが、14と15と同様に焼成具合などからセットになるものではない。

Wa類(18) 最大径14.4cmの大きさで、カエリが先端にきて、ツマミがボタン状の扁平なものになる。内面天井部がナデ仕上げ、内外面の体部とカエリはロクロヨコナデ仕上げをし、 天井部外面はロクロヘラ削り後にツマミを付けている。胎土に砂を含む,灰褐色の焼成である。

№ 類 (19) 最大径10.7㎝の小型で、ツマミがない。内面天井部はナデ仕上げ、内外面の体部とカエリ付近はロクロヨコナデ仕上げ、天井部外面はロクロヘラ切りの後に角のある部分をロクロヘラヨコナデをして丸味を付けて仕上げをしている。胎土に砂を含む、灰黒色の良好な焼成である。

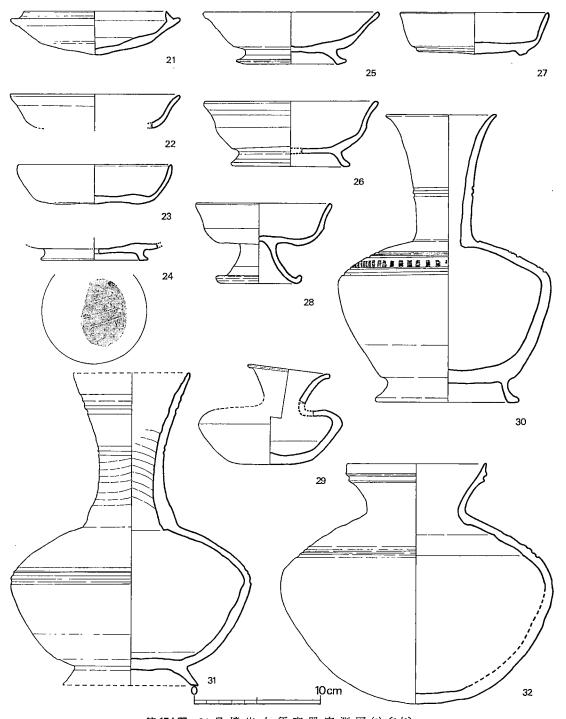
杯 身(7・9・11・13・15・17・20~27)7・9・13・22・23は墓道黒色土層中, 11・15・17・21・24~26は南東周溝内, 20・27は玄室床面出土である。

I類(21) 3分の1程の破片。底部外面はロクロヘラ切りの後、角張ったところをロクロヘラ削りで丸味をつけている。底部内面はナデ仕上げ、その他の内外面はロクロヨコナデ仕上げをし、立ち上りと蓋受けの境は明瞭に角をつけている。

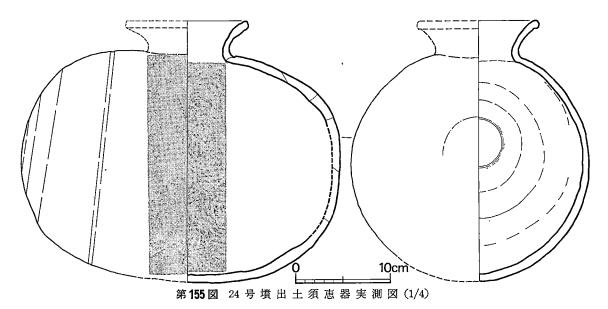
 V_a 類($22 \cdot 23$) 2 例共に破片資料。底部外面のみへラ切りの後、部分的にナデ、その他は内外面共口クロヨコナデ仕上げである。

Wb 類($7 \cdot 9 \cdot 11 \cdot 13 \cdot 15 \cdot 17 \cdot 24 \sim 26$) 調整法は総て,底部内面はナデ仕上げ,体部内外面はロクロヨコナデ仕上げ,底部外面はロクロヘラ切りの後に高台を付け,高台とその付近をロクロヨコナデで仕上げているが,底部中心部にはヘラ切りの痕が残っている。口径は11が最も小さく12.6cm,最も大きいのが15で14.3cmで,平均13.7cmの大きさである。高台は割合に高いが,低いもの(11)もあり,体部から口縁の広がりも, $9 \cdot 11$ のようにあまり広がらないものもある。

№ a 類(27) 口径11.8cm,器高3.3cmの完形資料。底部内面はナデ,体部は内外共ロクロョコナデ仕上げ,底部と体部の変換点は角を有し,底部には扁平な高台を付けている。高台の内側もナデ仕上げされ,ヘラ切りの痕跡がない。胎土に砂を含む灰褐色の焼成である。



第154図 24号墳出土須恵器実測図(2)(1/3)



WLb類(20) 口径9.4cm,器高4.9cmの大きさの完形資料。内部底面はナデ,体部内外面はロクロョコナデ仕上げ,底部外面はヘラ切りの後,高台を付けてヨコナデ仕上げをしている。胎土に砂を含む灰青色の良好な焼成である。

高 杯(28) 東南側周溝黒色土層出土。口径約10.8cm,器高6.3 cmの小型品で全体に多少歪んでいる。杯部内部底面はナデ,体部内外面はロクロヨコナデ仕上げ,底部はヘラ切りの後に脚を取り付けロクロヨコナデ仕上げしている。脚部末端は、凸帯を付けたようにはね上がっている。胎土に砂を含む灰黒色の堅固な焼成である。

平 瓶(29) 墓道の黒色土層中出土の口径 6.6 cm, 胴最大径11.4cm, 器高約 7.4 cmの小型品, 口縁はラッパ状に広がって外反し, 胴部は稜線から上は急激な丸味をもって上部を平坦にしている。胴部下半はロクロヘラ削りで丸味のある底部に仕上げている。

台付長頸壺(30・31) 30は南東周溝黒色土層,31は墓道黒色土層中出土である。30は口径 8.7cm,頸部最小径4.3cm,胴部最大径16.8cm,器高22.6cmの大きさ。口頸部は最小径が胴部との接点近くにあり,それからシャープに延びて口縁近くで外反し,中位に2条の凹線をめぐらす。胴部は上位に肩を有し,肩部には上下各2条の凹線をめぐらし,その間に切断櫛目状の文様を施している。胴部下位はロクロヘラ削りの後に高台を付け,その付近のみロクロヨコナデ仕上げをしている。胴部以下には砂を含む青灰色の堅固な焼成である。

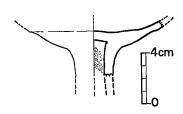
31は口径約9.2 cm, 頸最小径5 cm, 胴最大径19cm, 器高約24.8cmの大きさ。口頸部はシボリのためねじれて歪み, 最小径が中位よりやや下にあり, 2条2対の凹線もシャープさがない。 胴部の最大径は中位よりやム上にあり3条の凹線をめぐらすが, これも歪んでいる。 胴部下半はロクロヘラ削りの後に高台を付けている。 胎土全体に砂を含む灰黒色の良好な焼成。

壺(32) 口径11.1cm, 頸径7.8 cm, 胴最大径21.4cm, 器高19.1cmの大きさ。口縁部は外面に凸帯状の段を有し、内面にわずかに彎曲する。胴部の最大径は、中位よりやや上にあり、肩部には2条の凹線をめぐらす。胴部中位以上はロクロョコナデ仕上げであるが、下半はロクロヘラ削りで丸味を出し、その後簡単にナデ仕上げをしている。青灰色の良好な焼成である。

横 瓶 (第155図) 墓道から東側周溝にかけて散乱した状態で発見された。口径12.8cm, 胴長33.4cm, 胴径25cmの大きさ。胴部は内面同心円叩き, 外面平行叩きで縦長に整形し, 上部の孔を2回に分けて塞ぎ, 横にして口頸部の孔をもうけて短い口頸部を付けている。胴部外面の平行叩きは, 櫛目状のハケで斜方向にナデてある程度消されている。胎土に砂を含み黒斑のある灰色をした堅固な焼成。

③ 土 師 器 (第156図)

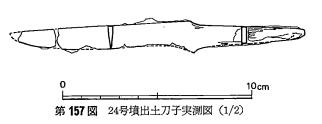
高 杯 杯部と脚部の接合部分の破片資料である。



第 **156** 図 24号墳出土土師器実 測図 (1/3)

④ 鉄 器(第157図)

カ 子 2本分玄室床面で発見
 されたが、一方は盗難にあい粉失
 した。現在長15cm、茎長 5.9 cm、
 関幅1.7cm、刃帳 1.2 cm、刃厚0.3
 第 157 図 24号墳出
 cmの大きさ。茎には木質が付着し、刃は著しく研ぎ上げている。



CMの人ささ。全には小貝が竹有し、がは有して明さ上げている

(4) まとめ

破壊墳であったが、遺物の残りはよかった。玄室内の須恵器から追葬が行なわれたらしく、人骨も整理された可能性があるが、それにしては追葬の人骨がないので、盗掘時の人骨整理も考えなくてはならない。 N_b 類のセットで蓋8が玄室内、身9が墓道で発見された例があるがこれはへラ記号や焼成具合から明らかにセットになるので、追葬の時に蓋が残され、身が墓道に出れたと見られるので、墓道の東寄りや南東側同溝出土の須恵器は追葬の時点で石室内のものがまとめて出されたものが多いのではないだろうか。

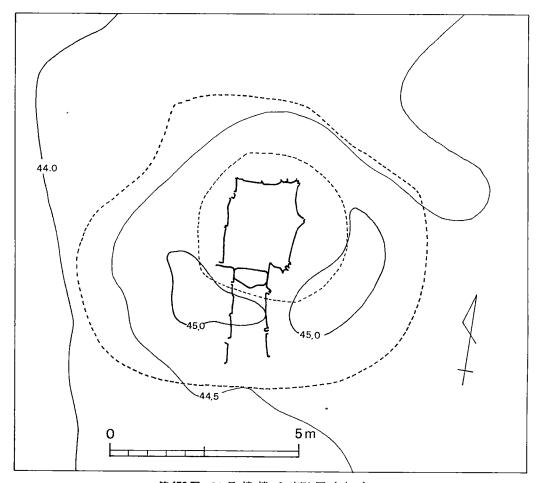
この古墳の時期は、 I 類や V 類の破片はあるが、石室の規模からいっても主体となったのは Wb 類の時期であり、 W 類の時期まで追葬されたと見るのが妥当ではなかろうか。

(柳田康雄)

25. 25 号 墳

(**1**) 墳 丘(図版138,第158·159図)

発掘前は羨道部の天井石の上部が露出し、玄室部は陥没していた。墳丘は地山整形を行ない二段築成で構築されており、地山面より約1 mほど残存している。周溝は、馬蹄形に造られており、東側は途中で消滅しており、西側は墓道につながっている。墳丘の高さは正確には不明であるが、推定高約1.5 m以上と思われる。また墳丘の径は約10.5 mを呈する。墳丘の発掘中に、盛土内から若干の須恵器片や土師片が出土した。



第158図 25号墳墳丘実測図(1/100)

(2) 石 室(図版139~141,第160図)

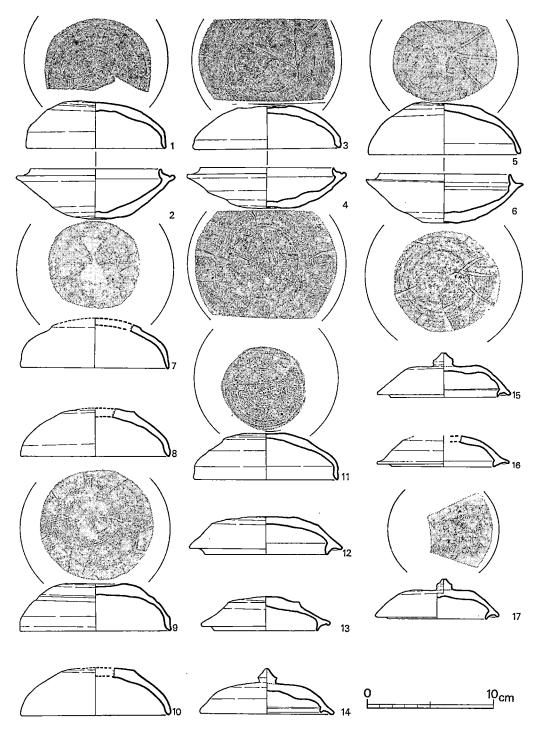
石室は、玄室の上半分と羨道部の一部を欠失したのみで、残存状態がかなり良く、羨道部には2個の天井石を残している。全長約6mを測る単室の横穴式石室である。石室は、両壁に玄門を立て玄室と羨道部を画している。玄室は長さ約2.3m、奥壁幅約1.56mの長方形を呈しているが、やや歪みをもっている。玄室は約1.5mほどの石材を2個並べているが、奥壁は、西側に一石を立てて裾えつけ東側は、他と同様に積みあげている。玄門は、玄室両壁より張り出しており、幅約0.9mを測る。羨道部は長さ約1.65mを測り、幅は玄門の内法に合わせており両袖式を呈している。また羨道部は天井石が残っており、高さは床面より約1.2mを測る。石組の墓道は、平行な羨道から若干八の字に開きながら約2mを測る。石組の墓道のやや内側から素掘りの墓道が掘り込まれ、上字形に曲がり27号墳の北側周溝を通り、22号墳の周溝にぬけている。石室内部の床面は、玄室や羨道において、敷石らしき石材はみられるが、攪乱がひどく確証はない。また玄門においては、幅約45cm程の框石を発見し、原形を保っている。石組の墓道に閉塞石を発見した。これは保存状態がよく、内側をやや大きめの石材をもって積み上げ、それをささえるように外側に小形の石材を置いている。遺物の大半は、石組墓道から須恵器杯類、玄室からは奥壁際と玄門際より須恵器杯、高杯が出土した。 (櫻井康治)

(3) 遺物

① 須 恵 器 (図版 142~144, 第 161~163 図)

杯 蓋(1・3・5・7~17~19)

Ⅰ類(1・3・5・7~11) 1・7・8・10・11は墓道から、3・5は石室内から、9は北西周溝床面より出土した。天井部は丸味をもち厚く、深い。口縁部付近で直立気味に立つのが特色であるが、5のようになだらかに開くものもある。端部は丸くおさめている。調整技法は天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は不定方向ナデ、体部内外面はロクロョコナデで仕上げている。3・5は天井部外面回転ヘラケズリで中央部のみヘラ切り後ナデ。10は天井部外面手持ちのヘラケズリである。1は杯身2とセットをなし、口径11.0cm、器高3.7 cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。天井部にヘラ記号あり。3は杯身4とセットをなし、口径11.8cm、器高3.4 cmを測る。色調は外面褐色、内面灰色を呈し、胎土は良質で焼成は悪い。天井部にヘラ記号あり。5は杯身6とセットをなし、口径12.0cm、器高4.1 cmを測る。色調は褐色を呈し、胎土に多くの細砂を含む。焼成は良好で、天井部にヘラ記号あり。7は天井部を欠く資料で、復原口径11.6cmを測る。色調は緑灰色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は良好である。8も天井部を欠く資料であるが、復原口径11.8cm、復原器高3.8 cmを測る。



第161 図 25 号 墳 出 土 須 恵 器 実 測 図 (1) (1/3)

色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。9は口径11.9cm、器高3.7cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。天井部にヘラ記号あり。10は天井部を欠く資料であるが、復原口径11.8cm、復原器高3.7cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。11は口径11.5cm、器高3.7cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土に多くの細砂を含む。焼成は良好で、天井部にヘラ記号あり。

Ⅱ類(12) 北西周溝床面から出土した。杯身Ⅰ類と比べて扁平であり天井部が若干平坦気味で厚い。体部はゆるやかに開き、身受けの立ち上がりは杯身Ⅰ類のそれと比べて厚い。天井部外面は手持ちのヘラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。口径12.1cm、器高3.0 cmを測る。色調は外面灰黒色、内面灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

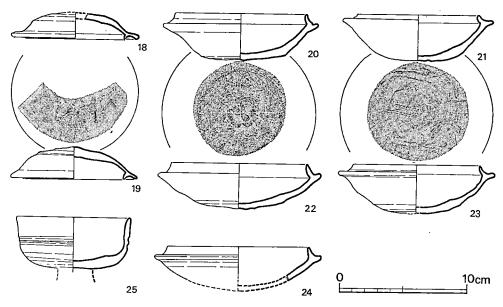
Ⅳ a 類(13) 東南周溝から出土した。天井部が体部に比べて非常に厚く,その境は明瞭である。身受けの立ち上がりは細い。天井部外面は回転へラケズリ,内面不定方向ナデ,体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。色調は外面に灰釉がまだらかにかかっており,内面灰色を呈する。胎土・焼成ともに良好である。

 V_b 類(14~17) すべて 東南周溝から出土した。 乳頭状の つまみを有する。 天井部は若 干平坦になり,体部はゆるやかに開く。身受けの立ち上がりは低く,厚い。立ち上がりが内側にはいるもの14もある。比較的天井部の器壁が厚く,扁平である。 天井部外面は回転へラケズリ,内面不定方向ナデ,15は外面へラ切り後ナデ,内面ロクロョコナデで仕上げている。体部内外面は,すべてロクロョコナデで仕上げている。14は口径10.6cm,器高(つまみ部を含む)3.6cmを測る。 色調は外面に若干灰釉がかかっているが 灰色を呈する。 胎土・焼成ともに良好である。 15は口径10.5cm, 器高(つまみ部を含む)3.5 cmを測る。 色調は褐色を呈し,胎土に細砂を含む。 焼成は普通。 16はつまみを欠く資料であるが,復原口径10.4cmを測る。 色調は灰色を呈し,胎土・焼成ともに良好である。 17は口径9.7cm,器高(つまみ部を含む)3.1cmを測る。 色調は灰色を呈し,胎土に多くの細砂を含む。 焼成は良好で,天井部にヘラ記号あり。

 V_b 類($18 \cdot 19$) 18は墓道から,19は東南周溝から出土した。18は天井部を欠く資料で, 九味をもつ天井部をもち,身受けの立ち上がりは低く,細い。身受け部は水平になる。天井部 外面は回転へラケズリ,内面不定方向ナデ,体部内外面はロクロヨコナデで仕上げている。復 原口径10.0cm,復原器高 2.1cmを測る。色調は灰色を呈し,胎土・焼成ともに良好である。19は身受け部が水平にならない。天井部外面は手持ちのヘラケズリ,その他はロクロヨコナデで 仕上げている。口径9.9cm,器高2.5cmを測る。色調は灰色を呈し,胎土・焼成ともに良好である。天井部にヘラ記号あり。

杯 身(2・4・6・20~24)

I類(2・4・6・20~24) 2・20・22・24は墓道から、4・6は石室内から、21は東側盛



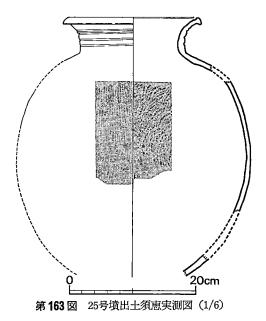
第162図 25号墳出土須恵器実測図(2)(1/3)

土内、23は東南周帯から出土した。底部は丸く、器高は3cm以上と深い。蓋受けの立ち上がりは高く、厚い。器壁も全体に部厚い。底部、外面は回転へラケズリ、内面不定方向ナデで仕上げているものが多い。20は底部外面へラ切り後へラ調整で仕上げている。体部内外面はロクロヨコナデで仕上げている。2は杯蓋1とセットをなし、口径12.5cm、器高3.9cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土に若干細砂を含む。焼成は良好で、底部にヘラ記号あり。4は杯蓋3とセットをなし、口径12.6cm、器高3.2cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土に若干細砂を含む。焼成は良好で、底部にヘラ記号あり。4は杯蓋3とセットをなし、口径12.4cm、器高3.8cmを測る。色調は褐色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は良好で、底部にヘラ記号あり。20は口径12.3cm、器高3.7cmを測る。色調は暗褐色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は普通で、底部にヘラ記号あり。21は口径11.9cm、器高3.6cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土に多くの細砂を含む。焼成は良好で、底部にヘラ記号あり。21は口径11.9cm、器高3.6cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。23は、底部をわずかに欠く資料で、復原口径12.3cm、器高3.8cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。底部にヘラ記号があるが、器面の磨滅で不明である。24は底部を欠く破片資料で、復原口径13.2cmを測る。色調は青灰色を呈し、胎土に若干細砂を含む。焼成は良好である。

高 杯(25) 石室内から出土した。脚部を欠く資料で、杯部は Wa 類に属する。杯部の底部は部厚く、口縁部は直立し、端部は丸くおさめている。体部に横線気味の沈線が 2 条はいる。底部外面は回転へラケズリ後櫛目状ナデ、内面不定方向ナデ、その他はロクロョコナデで仕上

げている。色調は黒灰色を呈し、外面の一部 に灰釉がかかっている。胎土・焼成ともに良 好である。

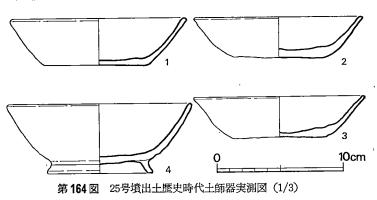
甕(26) 東南周溝内から出土した。底部を欠く資料で,胴部最大径は中位にある。口頸部は直立し外反する。端部はわずかに平坦になる。口頸部に4条の沈線がはいる。口頸部内外面ともにロクロヨコナデ,胴部外面は格子目状の叩きの後ョコ刷毛仕上げ,内面は青海波文の叩きを施す。口頸部と胴部の境の内面は,一部に指頭状の押圧痕がみられる。口径20.4cmを測る。色調は灰色を呈し,胎土に多くの細砂を含む。焼成は良好である。



② 歴史時代土師器 (図版 144-2, 第 164 図)

杯 身(1~3)

1は羨道から、2・3は 石室内から出土した。1 ~3ともにヘラ切り離し である。底部は平坦で、 端部は丸くおさめてい る。底部内面不定方向ナ デ、体部内外面ともにロ クロココナデで仕上げて



いる。1は口径13.9cm,器高3.8cm,座径8.2cmを測る。色調は褐色を呈し、内面に一部煤の付着がみられる。胎土に若干の細砂を含むが、焼成は良好である。2は口径13.3cm,器高3.3cm,底径7.2cmを測る。色調は暗茶褐色を呈し、全体的にヘラミガキを施している。胎土・焼成ともに良好である。3は口径13.5cm,器高3.3cm,底径は7.4cmを測る。色調は暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

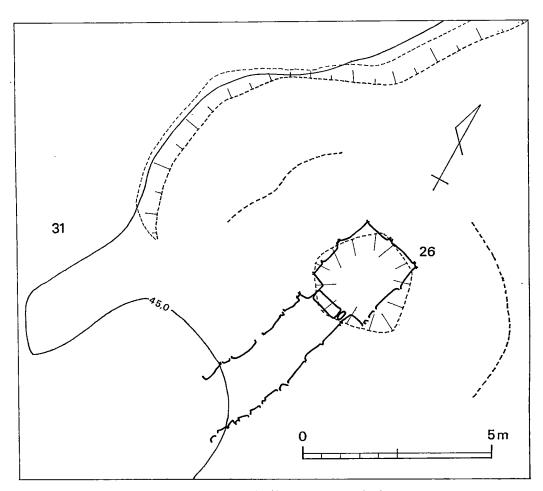
高台付椀(4) 付高台を有し、内面内黒の資料である。復原口径14.5cm,復原器高5.5 cm 高台径8.3 cmを測る。高台の畳付けは水平である。端部は丸くおさめている。全体的にヘラミ ガキを施している。底部外面中央部のみ不定方向ナデ、その他はロクロョコナデで仕上げてい る。色調は外面赤褐色、内面黒色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は良好である。

(小田雅文)

26. 26 号 墳

(**1**) 墳 丘(図版145—1,第165·166図)

発掘前は、確認できずやや窪みがみられたにすぎない。墳丘はほとんどみられなかった。地山整形が行なわれて構築されている。周溝は馬蹄形にめぐり深さは浅い、東側は途中で終り、西側は自然に消滅している。周溝から推測して墳丘の径は約8.9mを測る円墳と思われる。



第165図 26・31号 墳 墳 丘 実 測 図 (1/100)

(2) 石 室(図版145~150—1,第167図)

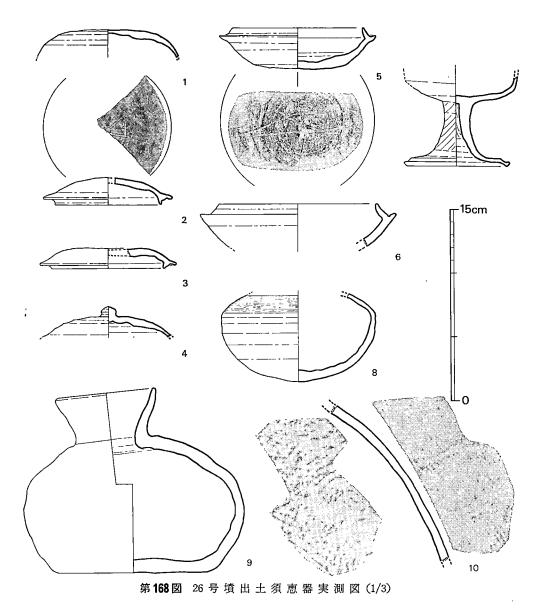
掘り方が約1 mと深いので、石室の残存状態も良いが、上部が欠失した単室の横穴式石室で全長約6.15mを測る。石室は、両壁に玄門を立てて玄室と羨道部を画している。玄室は長さ約2.15m、奥壁幅約1.7 mを測りほぼ長方形を呈している。玄門は玄室両壁より張り出して置かれ、幅約1.05mを測る。羨道部は長さ約1.6m、幅約1.2mを測るが、東側壁は玄門の内法面に合わせており、西側壁は若干引込めている。羨道からさらに石組の墓道が約2.4 mほど八の字状に開きながら西寄りに造られている。石室の床面には敷石が敷きつめていた。玄室には、北西と南東の隅に残っており、羨道部は中央の一部を欠失しているのみで一面に残っている。また玄門の間には框石が置かれている。閉塞は石組墓道において行なわれており、保存の状態はひじょうによい。閉塞石の外側から素掘りの墓道が地山に掘り込まれ、西に彎曲しながら約17.6m続き、25号墳の南東で南に屈曲し、27号墳の周溝に至っている。遺物は墳丘内からも須恵器が若干出土しているが、玄室床面より金環や鉄製品、石組墓道床面から須恵器の大甕片などを出土している。

(3) 遠 物

① 須 恵 器 (図版 150-2, 第 168 図)

杯 蓋(1~4)

- I類(1) 石室攪乱土層より出土した口縁部を欠く資料である。天井部外面回転ヘラケズリ,内面不定方向ナデ,体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。色調は赤褐色を呈し,胎土に砂粒を含む。焼成は悪い。
- №a類(2) 南東部墳丘内より出土した天井部を欠く破片資料である。天井部は丸く,身受けの立ち上がりは部厚い。天井部外面はヘラ切り後ヘラ調整,内面不定方向ナデ,体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。復原口径10.2cm,復原器高2.1 cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は悪く,天井部にヘラ記号あり。
- **Ⅳ**_b 類(4) 南側墳丘内から出土した身受け部を欠く破片資料である。乳頭状のつまみをもつもので、 杯蓋 ■類より小型化している。 調整技法は2と同じである。 色調は黄灰色を呈し、胎土に粗い砂粒を含む。焼成は悪い。
- **Vb**類(3) 墳丘内より出土した天井部を欠く資料である。天井部は平坦で、身受けの立ち上がりも低く扁平である。天井部外面回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。復原口径10.7cm、器高1.6cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は普通である。



杯 身(5・6)

I類(5・6) 両方ともに墳丘内から出土した。5は完形資料で、部厚い器壁をなし、蓋受けの立ち上がりも高い。底部は若干丸味をもつ。底部外面は回転ヘラケズリ、その他はロクロヨコナデで仕上げている。口径12.4cm、器高13.2cmを測る。色調は明茶褐色を呈し、胎土に若干の砂粒を含む。焼成は悪く、底部にヘラ記号あり。6は底部を欠く資料であるが、形態・調整技法等は5と同じである。復原口径15.6cmを測る大型品である。色調は灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は普通である。

- 高 杯(7) 墓道から出土した杯部口縁を欠く資料である。杯部は直立気味に立ち上がるもので V 類が付くであろう。脚部は下位で大きく外開きし端部は一旦さがり更にはね上がる。脚部内外面ともにシボリが明瞭である。杯部底部外面はカキ目調整,その他はロクロョコナデ,内面はその後一定方向のナデを施す。脚体部外面はシボリ後カキメ調整,脚裾部は内外面ともにロクロョコナデで仕上げている。脚部径は 8.4 cmを測る。色調は灰色を呈し,胎土に若干の砂粒を含む。焼成は良好である。
- 壺(8) 墓道から出土したもので、口頸部を欠く資料である。底部は丸底で、胴部最大径が中位にある。 胴部外面上位は ロクロヨコナデの後カキ目調整、 底部外面は回転 ヘラケズリで、 その他はロクロヨコナデで仕上げている。 色調は灰色を呈し、 胎土・焼成ともに 良好である。
- 平 瓶(9) 墓道から出土した。底部は平底をなし、胴部最大径は中位にある。口頸部の接合部分の径は大きく、口頸部は内反気味に立ち上がる。底部外面はヘラと指による調整を施し、内面不定方向ナデ、胴部と底部の境は手持ちのヘラケズリ、その他胴部・口頸部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。口径7.6 cm、底径11.7 cm、器高13.8~14.6 cm、最大径17.5 cmを測る。色調は外面緑灰色、内面紫灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良い。
- **甕**(10) 墓道から出土した破片資料で、外面格子目状の叩き、外面青海波文叩きを施す。 色調は青白色を呈し、胎土は精質で焼成は悪い。

② 土師質土器

杯 身(第169図) 南東部墳丘内から出土した底部を欠く資料である。底部は平底をなし、体部は内反気味にゆるく立ち上がり、口縁部で直立する。端部は丸くおさめている。底部外面手持ちのヘラケズリ、その他はロクロョコナデで仕上げている。復原口径12.2cm、復原器高は3.6 cmを測る。色調は黄褐色を呈し、胎土に粗い砂粒を含む。焼成は普通である。



第 **169** 図 26号墳出土土師質土器 実測図 (1/3)

③ 装 身 具

耳 環 (第170図) 金環である。 石室床面から出土した。 金箔の剝落はなく, 芯は空洞である。径23.35mmのほぼ円形をなす。断面は5.20mm×7.15 mmの 楕円形で、厚さ0.6mmである。重さ2.6 g を測る。



(小田雅文)

第 170 図 26号墳出土金環 実測図 (1/2)

27. 27 号 墳

(1) 墳 丘(図版151-1)

墳丘は完全に削られており、築成状態は不明であるが、地山整形を行ない周溝はほぼ円形を保っているが、南側が谷の傾斜になるので馬蹄形を呈している。周溝の範囲から径約7 mを測る小型の墳丘である。

(2) 石 室(図版151~153,第171図)

石室は、破壊により腰石のみが残存した単室の横穴式石室で全長約4.9 mを測る。石室は、玄門を有せず、東側壁を張り出して構築している。玄室は長さ約1.8 m、奥壁幅約1.15 mの不整長方形を呈しているが、羨道側の幅は約1 mを狭くなっている。羨道部は長さ約1.1 m、幅0.7 mを測る。羨道の西側壁は、玄室の西側壁と一線に合わせているが、東側壁は玄室の東側壁より約30 cmほど張り出しており、片袖式の様相を呈している。石組の墓道は、長さ約1.0 mを測り、素掘りの墓道に続く。素掘りの墓道は地山の傾斜により、自然に消滅している。石室内部の床面は、玄室においては敷石らしい石材が、北半分に散在している。羨道においては原形を保っている。また、東側壁が張り出した部分に框石が置かれている。閉塞は羨道部において設けられており、羨道内部が約0.5 mと狭くなっている。遺物は、玄室内や羨道から金環、鉄鏃、須恵器平瓶、高杯、墓道からは多くの須恵器類が出土した。 (櫻井康治)

(3) 遗物

① 須 恵 器 (図版 155・156, 第 173・174 図)

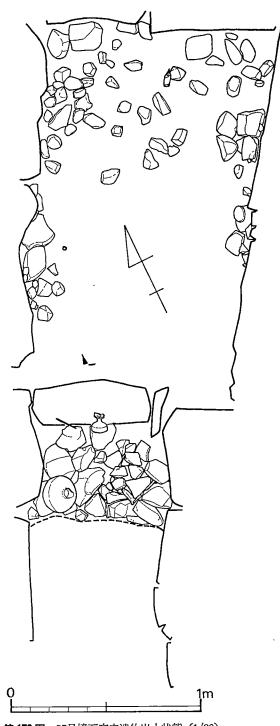
杯 蓋(1・3・5・7~9)

I類 $(1 \cdot 3 \cdot 5 \cdot 7 \sim 9)$ すべて墓道から出土した。天井部が丸くなるもの $(1 \cdot 5 \cdot 8)$ と平坦気味のもの $(3 \cdot 7 \cdot 9)$ とがある。天井部の厚さに比べて体部の厚さが薄く,身受けの立ち上がりは比較的高くて細い。しかし,杯身 I 類と比べると小型化している。天井部外面はヘラ切り後手持ちのヘラケズリ,内面不定方向ナデ,体部内外面ともにロクロョコナデで仕上げている。 1 は杯身 2 とセットをなすもので,口径 10.4cm,器高 3.0cmを測る。色調は褐色を呈し,胎土は精質で,焼成は普通である。天井部にヘラ記号あり。 3 は天井部の一部を

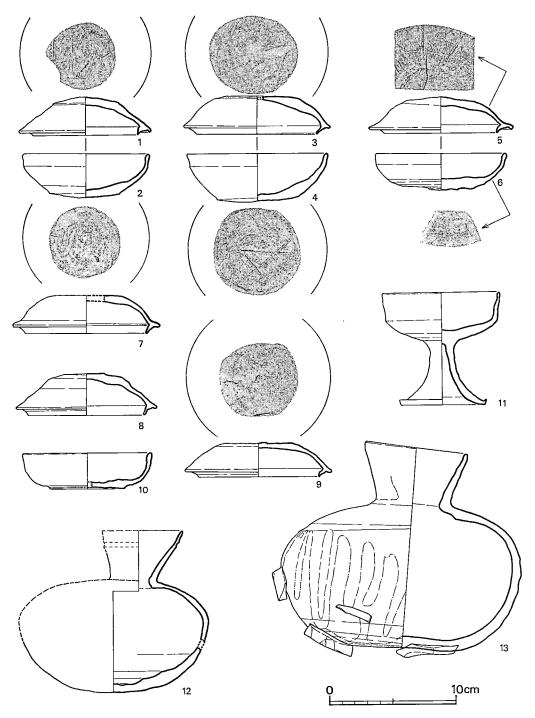
欠く。杯身4とセットをなすもの で,復原口径11.6cm,器高3.0cm を測る。色調は灰色を呈し, 胎土 に細砂を含む。焼成は悪い。天井 部にヘラ記号あり。5は杯身6と セットをなすもので、口径11.4 cm, 器高 2.9 cm を測る。色調は灰 色を呈し、胎土・焼成ともに良好 である。天井部と体部の境にヘラ 記号あり。7は天井部を欠く資料 で, 復原口径 11.6 cm, 復 原器 高 3.0cmを測る。色調は灰色を呈し, 外面に部分的に灰釉がかかってい る。胎土に多くの細砂を含み、焼 成は良好である。 8 は口径 11.1 cm, 器高 3.3 cm を測る。色調は褐 色を呈し、胎土に若干の細砂を含 む。焼成は普通である。9は口径 11.6㎝, 器高2.8㎝を測る。色調 は黒灰色を呈し, 胎土に多くの細 砂を含む。器壁には風化がみら れ, 焼成は良くない。 天井部にへ ラ記号あり。

杯 身(2・4・6・10)

I類(2・4・6・10) すべて墓道から出土した。底部は若干平坦面をつくり、特に10のように高台気味のものがある。体部は内反気味に立ち上がり、口縁部で直立気味になる。端部は丸くおさめている。杯蓋 I 類と比べると、小型化している。2・4・6は、底部外面へラ切り後手持ちのヘラケ



第 172 図 27号墳石室内遺物出土状態 (1/20)



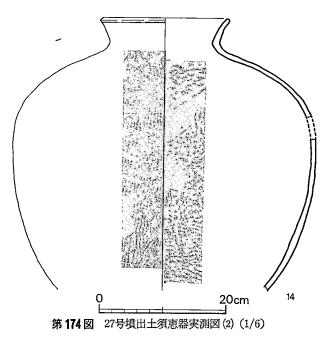
第173図 27号墳出土須恵器実測図(1)(1/3)

ズリ、内面不定方向ナデ、体部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。10は底部外面へラ切り後ナデ調整、内面ロクロヨコナデで仕上げている。2は杯蓋1とセットをなすもので、口径9.8cm、器高3.4cmを測る。色調は褐色を呈し、胎土は精質であるが、焼成は悪い。底部にへラ記号あり。4は杯蓋3とセットをなすもので、口径11.0cm、器高3.8cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は普通で、底部にヘラ記号あり。6は杯蓋5とセットをなすもので、口径10.2cm、器高2.9cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土は精質である。焼成は良好で、底部と体部の境にヘラ記号あり。10は底部の一部を欠く資料である。復原口径10.0cm、器高2.9cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

高 杯(11) 羨道から出土した。杯部はやや厚めの底部から直立するように立ち上がり,端部は丸くおさめている。底部と体部の境に明瞭な稜がはいる。杯部は杯身 Va 類に属する。脚部はゆるやかに外開きに端部ではね上る。器壁は厚い。杯部底部外面は回転へラケズリ,内面不定方向ナデ,体部内外面はロクロヨコナデで仕上げている。脚部は内外面ともにロクロヨコナデでシボリはみられない。口径9.1cm,底径6.6cm,器高8.8cmを測る。色調は黒灰色を呈して,胎土に若干の細砂を含む。焼成は良好である。

平 瓶(12・13) 12は破片資料である。底部は丸底で,胴部の最大径は中位にあり,口頸部は左右の立ち上がりが違う。一方は直立し,他方は外開きしながら立ち上がる。口頸部には1条の横線がはいる。端部はとがり気味である。底部外面は手持ちのヘラケズリ,胴部下位は粗いヘラ調整,その他はロクロヨコナデで仕上げている。復原口径6.3 cm, 復原器高12.8 cmを

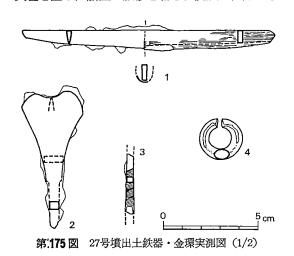
測る。色調は橙褐色を呈し, 胎土に細砂を含み、焼成は出土 好である。13は羨道から焼成出出最 大径は中位にあり、口の 大径は中位にあり、がる。 大径は中位にあり、がる。 である。 である。 である。 では中位にあり、がる。 ではれたいないがけて、 ではれたいる。 ではいる。 の破片がいていないがはいる。 にいる。 のはいる。 にいる。 にい。 にいる。 にい



-169 -

器高は $15.6cm\sim16.7cm$ を測る。色調は灰色を呈し、胎土に多くの細砂を含む。焼成は良好である。

甕(第174図14) 北東周溝から出土した。底部を欠く1/2ほどの破片資料である。胴部最大径はやや上位にあり、口頸部は外反しながら立ち上がる。端部は平坦であり、端部下は横線気味にへこむ。胴部外面は格子目状叩き、内面は青海波文の叩きを施している。口頸部内外面ともにロクロヨコナデで仕上げている。復原口径19.2cm、復原最大径45.8cmを測る。色調は淡青灰色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は良好である。



② 装 身 具(図版156-4)

耳 環 (第175図 4) 金環である。石室から出土した。わずかに金箔の剝落がみられる。長径23.35mm, 短径21.90mm, 断面5.40mm×8.00mmの楕円形をなす。重さは13.6gを測る。

③ 鉄器(図版156)

鉄 鏃 (第175図2・3) 2・3共に 石室から出土した。2は変形の雁股式の 鉄鏃であろう。刃部の断面は銹のために 明瞭でなく,厚さも計測できない。現存

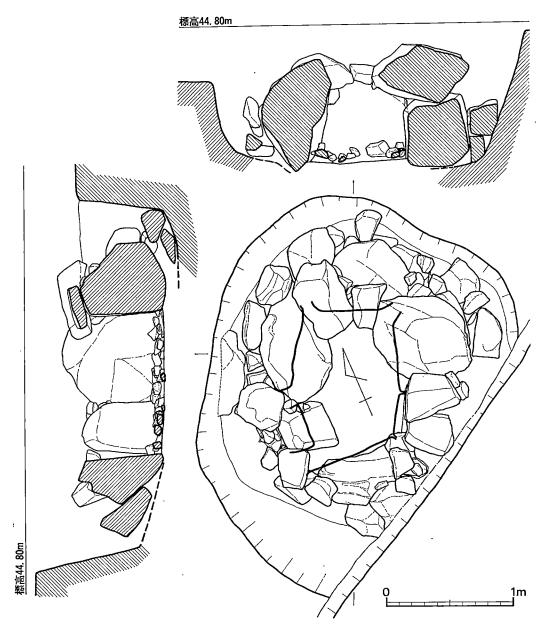
長7.2cmを測る。3は現存長3.1cmを測る茎部の資料で、両面に斜行する木質が付着している。

刀 子(第175図1) 全長13.3cm,身長6.4cm,身幅0.9cm,身厚0.3cm,茎長6.9cmを測る完 形品である。片関で,関部に縁金具が残存している。背は若干外に反り気味である。茎部には 両面ともに木質が付着している。 (小田雅文)

28. 28 号 墳

(1) 墳 丘

26号墳の南西側で検出された。26号墳の長い墓道が本墳を意識して作られ、26号墳より古い 時期の築造と考える。墳丘は、完全に削平を受けている。両側に地山を整形した痕跡がわずか に認められるが、南側が未調査のため規模、築成状態の詳細は不明である。

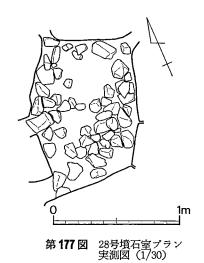


第176図 28号墳石室実測図(1/30)

(**2**) 石 室 (図版 157, 第 176·177 図)

不整形の墓壙内に、石棺の様に長方形に石を立てて組合せ、 2 段目以上は横積みし横穴式石室の形態をとって構築している。主軸方向は、 $N-24^\circ-E$ を示す。

石室の長さは、東側壁で1.01m, 西側壁で1.25m, 中軸で1.12m, 幅は北側で0.72m, 南側



で0.63m,最大幅0.82mを測る。

北側小口の腰石には、厚みのあるどっしりとした石を立てて使用している。南側小口の腰石は、大きな石を立てさらにこれを支える様に根締の石が存在する。 両側壁の腰石は、2石の割合大きな石を立てて裾えられている。天井石は、失なっているため詳細は明らかではないが、積み石は腰石と天井石との間隙を埋める様に不定形の石を横積みしたらしい。石室の高さを復元すると約80㎝程になる。

床面には、大きさ10~20cmの 礫の 敷石が みられるが、攪乱を受けている様である。副葬品等の遺物は発見されなかった。 (池辺元明)

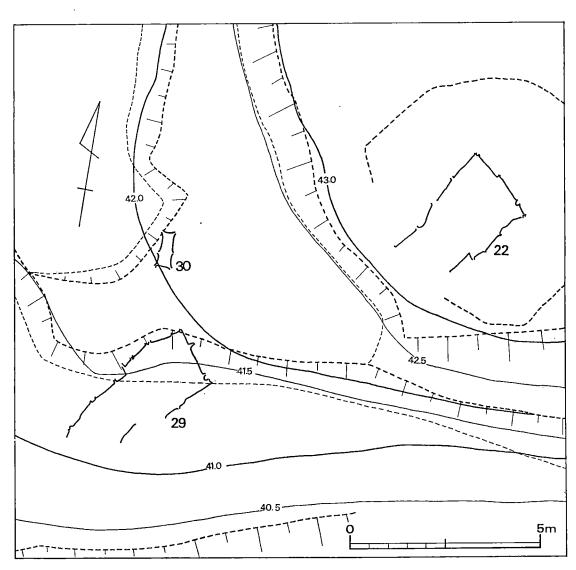
29. 29 号 墳

(**1**) 墳 丘(図版 158—1,第 178 図)

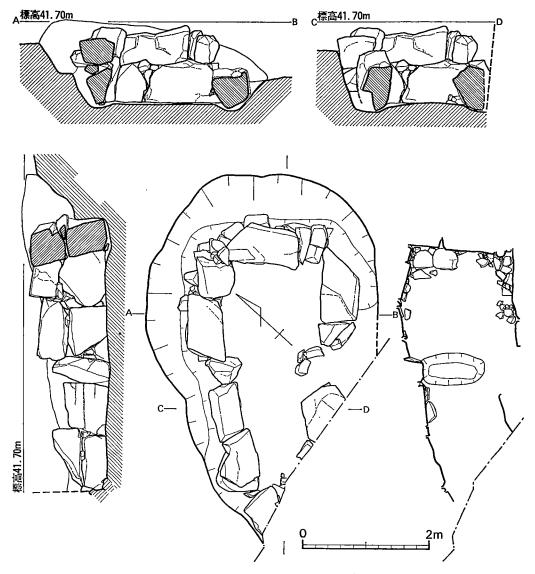
墳丘は、すでに破壊・削平を受けており、規模等は不明である。

(2) 石 室(図版158·159, 第179図)

石室は、南側が調査区域外であるために、正確な長さや墓道の状態は解明できなかったが、全長は約3.5 m以上の単室の横穴式石室である。石室は上半分以上と、東の玄門を抜き取られている。玄室は長さ約1.8m、奥壁幅約1.6mを測る。長方形を呈している。玄門は、西側壁には一石を立てているが、東側壁は抜取られている。しかし 床面に 根石が 残っており、 幅は約1.13mを推測できる。羨道部の長さは約1.85mであるが、幅は両側壁とも玄門の内法面に合わせており、両袖式の様相を呈している。羨道はやや東寄りに構築されている。石室内部の床面は、玄室の壁際に一部敷石が残っているが、羨道部ではほとんどみられない。また、框石も抜取られていたが、 框石の抜跡を玄門の間で確認した。遺物は、 玄室の床面より須恵器大甕片が、 框石の抜跡から土師器が出土しただけであり、 石室内の埋土からは土師器が発見されている。



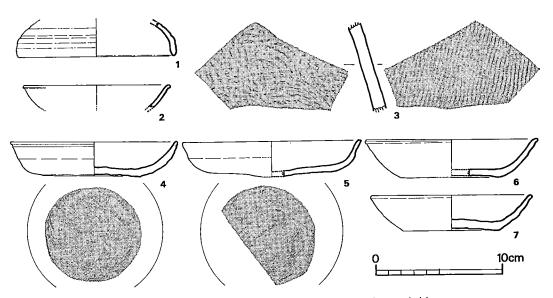
第178図 22・29・30 号墳墳丘実測図 (1/100)



第179図 29号墳石室実測図(1/60)

(3) 遗物(第180図)

石室内の攪乱土中より須恵器・中世土師器が検出された。



第 180 図 29号墳出土須恵器 (1~3),中世土師器実測図 (1/3)

① 須 恵 器(第180図1~3)

杯 蓋(1) 口縁部の小破片,復元口径12.4cmを測る。体部はヘラ削りによる整形,灰褐色を呈す。蓋 I 類に属するか。

杯 身(2) 口縁部の小破片で、灰褐色を呈し焼成は良好。

甕(3) 甕の同部破片で外面は細かい平行線文叩き、内面は同心円文叩き。

- ② 中世土師器 (第180図4~7)
- 4・5は底部糸切り離し痕を残す。ロクロ回転は右廻り。6・7は焼成不良の為判然としない。 (木下 修)

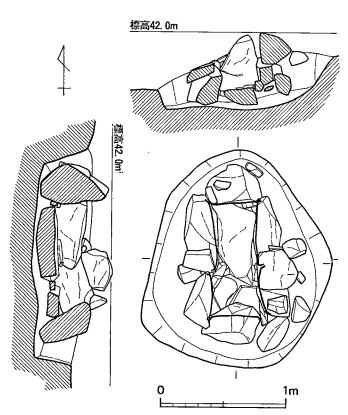
30. 30 号 墳

(1) 墳 丘(第178図)

29号墳の掘方の北側に隣接して発見された。墳丘は、すでに削平されており、詳細は不明であるが、北側と南西側、東側に認められる地山整形状態から判断して、墳径約3mであったと推定できる。盛土は1m内外であろう。

(2) 石 室(図版160,第181図)

長さ約1.7m, 幅1.4mを測る不整形の墓壙内に構築された小型の石棺墓である。花崗岩の石



第181 図 30号墳石室実測図 (1/30)

材を用いた、長方形に組合 わせた石棺である。主軸方 向は $N-1^\circ-E$ でほぼ南北 を示す。

棺の長さは,東側壁で90 cm, 西側壁で90cm, 中軸で 87cm,幅は北側小口で37cm, 南側小口で44cmを測る。

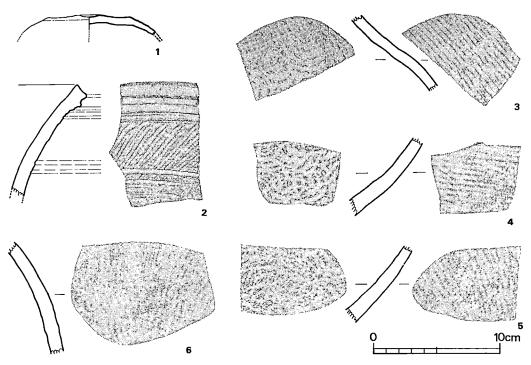
両側壁は、2石ずつ使用されやや内傾気味に立てて裾えられている。北側の小口の板石は内側に倒れている。石の大きさは一定しておらず高さも不揃いである。したがって東側壁でみられる様に壁高を合せるために人頭大の石を数段横積みしたと考えられる。棺の残高は約40cmを測る。

床面には,大きな板石を

利用しており、敷石の上面はほぼ水平である。石棺内からの遺物の発見はないが、表土直下から須恵器の破片が出土している。 (池辺元明)

(3) 遺物(第182図)

石棺周辺より若干の遺物が検出された。いずれも須恵器の破片である。



第182図 30号墳出土須恵器実測図(1/3)

蓋(1) I類に属すと思われる。比較的凹凸のある天井部の破片で、回転へラ削りにより整形。胎土・焼成とも良好。

(木下 修)

31. 31 号 墳

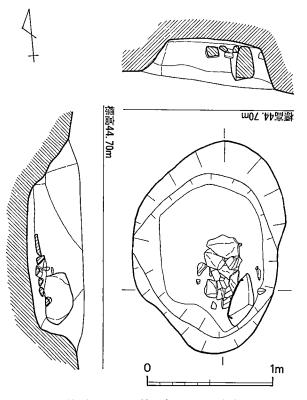
(1) 墳 丘

墳丘は、削平されており確認できなかった。周溝の痕跡もない。

(2) 石 室(図版161,第183図)

著しく破壊されて、東壁の1石と敷石を残しているだけであった。石の抜き跡も検出できず石棺の大きさは明確にとらえられないが、不整形の墓壙と敷石から判断して、内法は、長さ約70cm、幅約40cmほどの小型石棺墓と推定される。副葬品等の遺物は発見されなかった。

(池辺元明)



第183 図 31号墳石室実測図 (1/30)

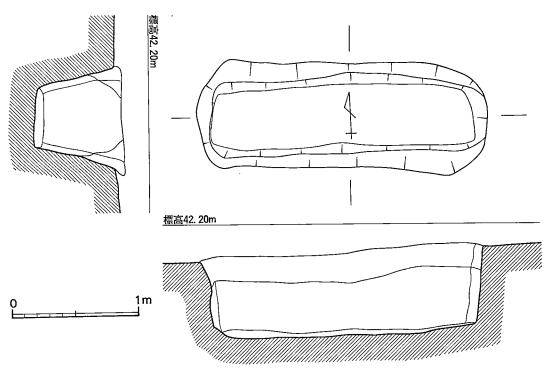
IV 土壙墓群

土壙墓は、B7区で1基、C7区で4基、D6区で1基、D7区で2基、F5区で1基の計10基を検出した。標高45m~40mの西南向きの緩斜面上に立地する。以下各土壙墓について若干の説明を加える。また土壙墓から遺物及び副葬品は極めて少なかったので、その遺構と共に説明を行なう。

1. 1号土壙墓

(図版 162-1, 第 184 図)

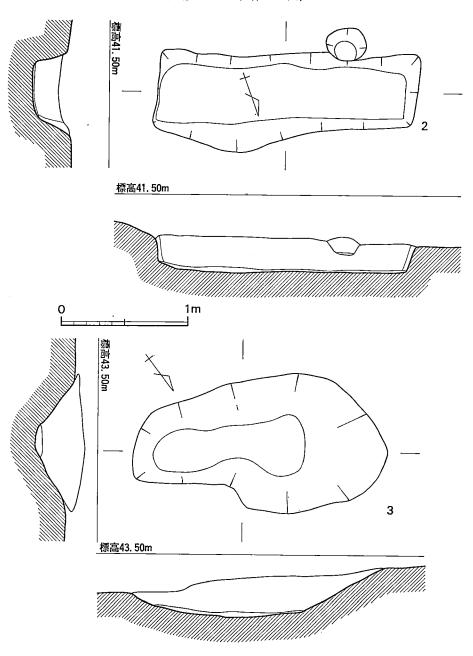
黄褐色土層の地山に掘り込んだ素掘りの墓壙で、長さ 2.3~m,幅約 0.8~mの隅丸長方形を呈し、深さ 0.6~mを測る。上位から約20cmのところで稜線が入るがそこから底面まではほぼ垂直である。底面は東側が若干高く,頭部と考えられる。主軸方位は $N-87^\circ-W$ とほぼ東西方向を示す。木棺等の痕跡は見られない。



第184図 1 号土 壙墓 実 測 図 (1/30)

2. 2号土壙墓

(図版 162-2, 第 185 図)



第185図 2・3号土 擴 墓 実 測 図 (1/30)

長さ2.07m, 東側幅0.65 m, 南側幅0.55m, 深さは 現状で0.25mを測り長方形 を呈する。東側が多少幅広 いので頭部と思われ, 主軸 の方位は N─70°─W とほ ぼ東西方向を示す。この土 壙墓は19号墳の周溝によっ て上部を削平されており, 古墳より古いことが判った。 副葬品は発見されなかった。

3. 3号土壙墓

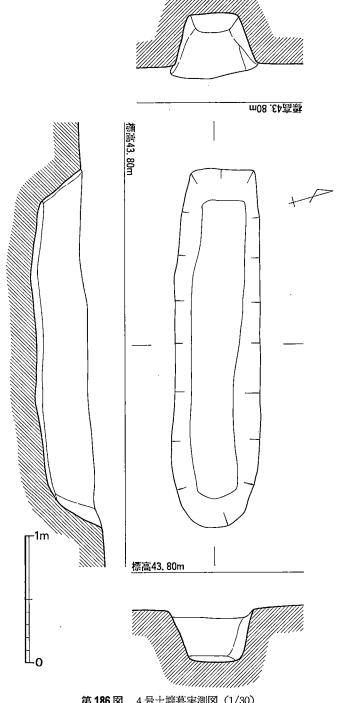
(図版 163-1,第 185 図)

長さ1.85m, 最大幅 1.1 m, 最小幅0.65m, 深さ30 cmを測る。土壙壁はすべて 斜めに掘り込まれプランは 不整形を呈する。主軸方向 は N-53°-W を示す。副 葬品は発見されなかった。

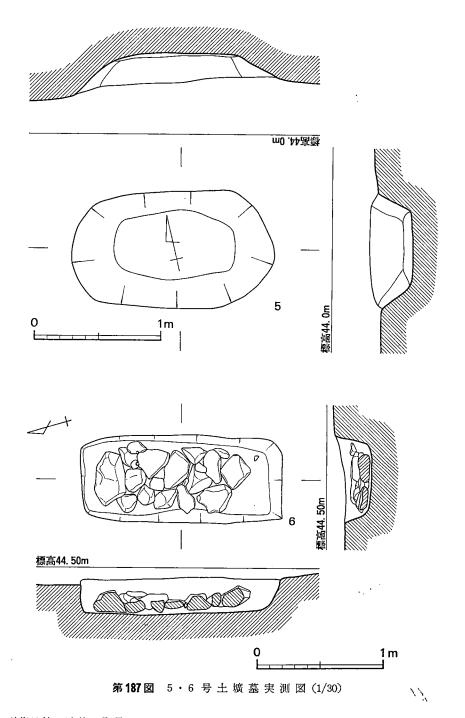
4号土壙墓 4.

(図版 163-2, 第 186 図)

長さ2.85m,幅0.67m, 深さ 0.4 mを測り, 主軸方 向は N-74°-W を示す。 長方形プランを呈する土壙 墓である。土壙壁は角度を もって掘り込んでいる。床 面は 東側が 高く なってい



第 186 図 4 号土壙墓実測図 (1/30)



る。副葬品等の遺物の発見はない。

5. 5号土壙墓

(図版 164-1, 第 187 図)

主軸方向は $N-77^\circ-W$ を示す。隅丸長方形プランを呈し,長さ1.6m,幅0.9m,深さ0.25mを測る。黄褐色土の地山に斜めに掘り込まれている。床面の高低差は少ないが,若干西から東に傾斜している。遺物は発見されなかった。

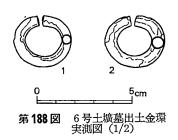
6. 6号土壙墓

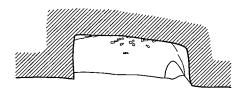
(1) 遺 構(図版164-2,第187図)

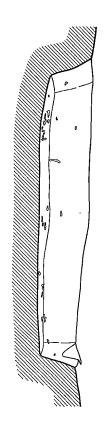
主軸方向は $N-16^\circ-E$ を示し,長方形プランを呈する土壙墓である。床面には敷石がある。まず,長さ1.6m,幅0.7m,深さ約0.2mの墓壙を掘り,底面に $2\sim5$ cmの厚さに土を貼り,その上に大きさ20cm内外の角礫を用いて床面としている。北側端の石は中央が窪んだ石を用いて,枕石として使用しており,頭部は北にまちがいないだろう。副葬品として耳環2個が,敷石の間にすべり落ちた状態で発見された。

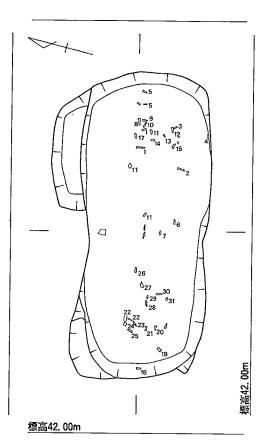
(2) 遺 物(図版165-3,第188図)

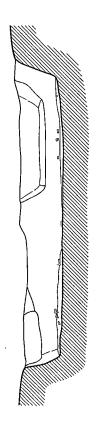
耳 環 $(1 \cdot 2)$ 1 \cdot 2 ともに銅芯銀張りの耳環である。表面はほとんど破損し、銀張りは1部にしかみられない。銅芯も腐蝕して、縁錆がふいている。1 は外径が 28×31 mm、断面径 6×7 mmを測る。











第189図 7号土壙墓実測図(1/30)

7. 7号土壙墓(木棺墓)

(**1**) 遺 構 (図版 166·167—1,第 189 図)

鉄釘の出土により木棺墓であることが判明した。墓壙は、黄褐色土層の地山に掘り込まれている。プランは隅丸長方形を呈し、長さ2.45m、最大幅1.03m、最小幅0.95m、深さ0.35mを測る。両壁はほぼ垂直に、小口部は斜めに掘り下げられている。床面は西側に若干低くなっている。墓壙内の棺材は腐ち、その痕跡はまったく残っていない。また発見された鉄釘も、調査が雨季にかかった為、墓壙内に数度にわたり水が流れ込み原位置を失ったものが多い。その内出土状態から木棺の大きさを示すと考えられる、1・3・5・6・8・11・12・15・17・19・22・24・25によって復原すると、長さ約1.8m、幅0.4mの長方形で、棺の高さは墓壙の深さから推定して20cm以上あったと思われる。しかしそれを裏付ける墓壙内の土層の変化はとらえることができなかった。

副葬品は、床面中央から刀子、鉄錐、土師器小片、西側から鉄利器、東側から水晶製垂飾玉が出土した。

(2) 遗物

① 装 身 具(図版167-3, 第91図1)

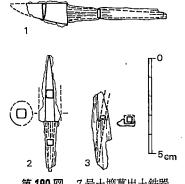
水晶製垂飾玉(1) 棺内東側中央床面より出土した。雫形を呈する垂飾玉で透明度の高い水晶を素材に使用している。表面は丹念に研磨されている。穿孔は細く両側から行っている。 長さは15.45mm,最大径は,8.95~9.40mmを測り,断面はほぼ円形に近い。

② 鉄 器(図版167-2,第190図1~3)

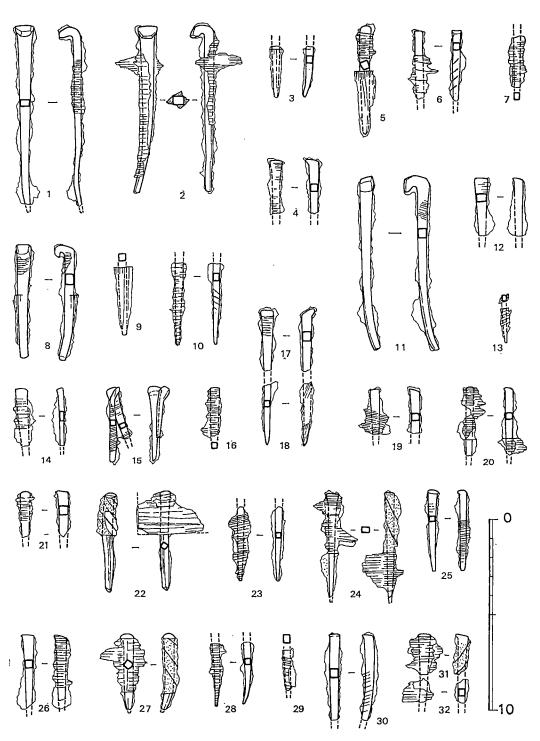
調査時に鉄釘として取り上げたが整理の段階で刀子・鉄 錐・鉄製利器であることが判明した。すべて棺内からの出 土である。

刀 子(1) 刃部の1部を欠損する。刃部と茎の境に、明瞭な段がつく。茎部には木質が付着している。復原全長約8cmで刃部は3cmと短い。

鉄 錐(2) 断面は方形を呈し、先端は鋭く尖ってい



第 **190** 図 7 号土壙墓出土鉄器 実測図 (1/2)



第191図 7号土 漿 墓 出 土 鉄 釘 実 測 図 (1/2)

る。茎部には木質が残る。また中央の錆の状態から判断して、キャップ状の鞘が付いていたと 思われる。全長は6.1cmを測る。

鉄利器(3) 木質の中に、断面方形を呈する鉄が残存していた。木質をよく観察すると、 鉄利器の茎をさし込むための穴が加工されていることが判った。

③ 鉄 釘(図版168, 第191図)

鉄釘は全部で32点出土した。内訳は、完形品6点、頭部を欠くもの7点、先端を欠くもの15点、破片のもの4点である。この内15は2本の釘が錆で結合したもので、17・18、31・32は1本の釘の可能性がある。出土状態は、東側から16点、西側から14点、中央から2点で、両端に集中して出土した。

釘の形についてみると、頭部の形状は次の3つに分類できる。

- ① 頭部を身より薄くすると同時に幅広く圧延した後,鍵状に折り曲げるもの-1・2・8・11。
- ② 頭部の一端を身との厚さを変えずに折り曲げたもの—4・12・14・15・17・19・20・21・25・26・30・31。
 - ③ 頭部を叩いているが、折り曲げないもの $-16 \cdot 22 \cdot 24 \cdot 27$ 。 長さは完形品が 6 点しか出土していない為に明確ではないが次の 4 つに分類できる。
 - ① 8.7cm~9.7cmのもの、1・2・11。
 - ② 7.1cmのもの、17・18。
 - $3 \quad 5.0 \text{cm} \sim 5.9 \text{cm} \circ \text{b} \circ \text{o}, \quad 4 \cdot 5 \cdot 8 \cdot 20 \cdot 22 \cdot 24 \cdot 26 \cdot 28 \cdot 30 \cdot 31 \cdot 32$
 - (4) $3.9cm \sim 4.6cm \circ 4 \circ 12 \cdot 14 \cdot 15 \cdot 19 \cdot 21 \cdot 23 \cdot 25$

釘の断面は1・13・14が長方形を呈し、他は方形である。頭部近くで厚さ5 mm前後を測る。 釘には棺材の腐蝕した木質が付着している。よく観察すると、釘身の上半分と下半分で木質 の付着状態が異なっており、3 つに分類できる。

- ④ 上下両板材ともに釘身に対して横方向に合せたもの、1・2・6・11・15・19・23・26。
- B 上下両材とも横方向であるが、木目が90°ずれるもの、20・24・25・28。
- ◎ 上方板材の木目は横方向で、下方板材は釘身に平行に合わせもの、3・5・8・9・17・18・22。

また釘身に付着した木目の長さで、板材の厚さも推定できる。

- ① $1.0cm \sim 1.4cm \circ 60$, $12 \cdot 17 \cdot 21 \cdot 25$ 。
- ② $1.9cm \sim 2.7cm \circlearrowleft \circlearrowleft \circlearrowleft$, $4 \cdot 5 \cdot 8 \cdot 14 \cdot 19 \cdot 20 \cdot 22 \cdot 26 \cdot 27$.
- ③ 3 cm以上のもの、1・24。

以上の分類で得た相違点は棺材の厚さを示すと同時に、木棺の組合せ方法による使用場所、 また木目の方向を示しているわけであるが、調査中、雨水の流入によって原位置が攪乱されて いる為に、木棺の組合せを復原するところまで達しない。

釘(22・24・27) に付着した木質の鑑定を九州大学農学部木材理学研究室 松本勗教授に依頼した。

8. 8号土塘墓

(図版 169, 第192 図)

長い隅丸長方形のプランを呈する土壙墓である。主軸方向は N-25°-E を示す。しかし上部は削平を受けていると思われその形状については不明である。また土壙内にも木棺、粘土等の痕跡もない。遺物も出土していないため時期は決定できないが、古墳の内部主体としてとらえた方が妥当かもしれない。長さ約3.86cm、最大幅70cm、最小幅60cmを測る。

南側小口部の壁はほとんど残っていない。中央部で深さ22cmを測る。舟底状を呈する。床面全面には礫が敷石上面から高さは約17cmである。敷石を北側から4段回ほどで敷かれたと考えらたる。中心から北側1mほどが最も密で5cm内外の礫が多く用いられ,南側にいくにしたがって敷き方が粗雑で,石の大きさも10cm内外のものが多くなる。石の総数は543個を数えた。

9. 9号土塘墓

(図版170-1,第192図)

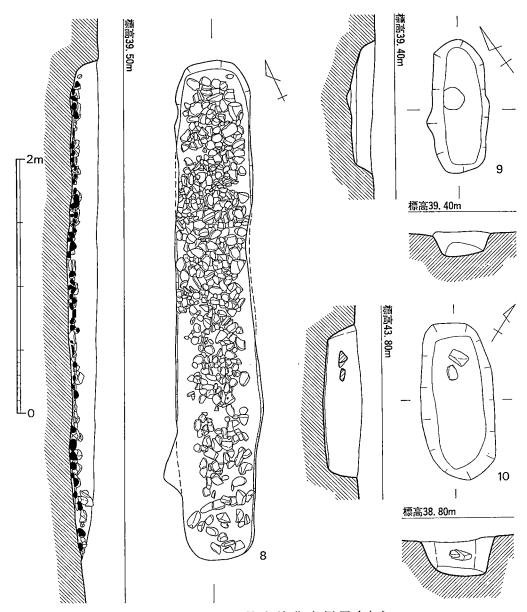
長さ1.1m, 幅0.55m, 深さ0.2mを測る小型の土壙墓である。プランは隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-36°—Eを示す。副葬品等の遺物の発見はされなかった。

10. 10 号土壙墓

(図版170-2,第192図)

長さ1.2m,幅0.55m,深さ0.3mを測る。隅丸長方形のプランを呈する小型の土壙墓である。主軸方向は $N-33^\circ-W$ を示す。北側埋土の中位から10cm内外の角礫を検出したが,石組や敷石等の痕跡が発見できないため,使用目的は不明である。遺物も発見されなかった。

以上,検出した土壙墓10基について簡単に記した。近年の古墳群の全面発掘調査で次第に明らかにされてきた様に,観音山古墳群でも墳丘と石室が割合大きな古墳を中心として,小形の横穴式石室や石棺を主体部とする小古墳,さらに土壙墓が付随する状態で発見された。今回調査した土壙墓の内これに該当するものは,第1号,2号,3号,4号,5号,10号土壙墓のグ



第192図 8・9・10 号土 壙墓実 測図(1/30)

ループがこれにあたる。3号・4号・5号・10号土壙墓は,23号・25号に接して検出された素 掘りの土壙墓で副葬品等の遺物は発見されていないが,遺構配置の状態から考えても古墳群の 時期と大差ない古墳時代終末期,7世紀後半と考えられる。

6 号土壙墓は,26号墳の北西側に接して検出された。 副葬品として 銀環 1 セット が発見され,これも古墳時代終末期のものである。

7号土壙墓は他の土壙墓から離れて存在している。鉄釘が検出されたことから木棺墓であることが判明した。副葬品は刀子・鉄錐・水晶製の垂飾玉が出土した。土師器片も発見されたが図示できないほどの細片である。垂飾玉は他に類例を見ない為時期決定には不安が残るが、平安期にかかる時期の所産ではなかろうか。

最後に5号墳の東北側7mに独立した形をとっている8号土壙墓がある。上部はかなり削平を受けていると思われ、その形状については、不明である。また墓壙内にも木棺や粘土等の痕跡もなく遺物も出土していない為、時期の決定はできない。他の土壙墓とは、墓壙の掘方や内部施設が異なる為、古墳の内部主体としてとらえた方が妥当かもしれない。木棺敷床の類に属するものだろうか。 (池辺元明)

Ⅴ 後 論

1. 観音山古墳群成立の環境

観音山古墳群中原支群は、筑紫郡那珂川町大字中原字深原を中心に分布する。那珂川町は福岡平野の南西側にあたり、福岡平野の2大貫流の一方である那珂川の中流から上流沿岸の自然的条件にめぐまれた地域である。さらに、2大貫流に挟まれた地域には、通称春日丘陵とよばれている花崗岩のバイラン土から成る洪積台地が発達し、古代人の生活条件を十分に満たしている。

この春日丘陵の先端から那珂川に面した西側と那珂川左岸には古くから中山平次郎氏の調査 などでいくつかの遺跡が知られていた。奴国の中心地といわれる岡本遺跡は有名で、青銅器出 土地やその鋳型発見地が密集している。

古墳時代になっても遺跡は多く、古くから知られていた日拝塚古墳(註1)・下白水大塚に加え昭和35年の竹ケ本遺跡の調査(註2)から昭和42年以後の炭焼古墳群(註3)・油田古墳群(註4)・老司古墳(註5)の調査をきっかけに、春日市と那珂川町には前方後円墳12基、前方後方墳2基のほかに低墳丘の方形周溝墓など古式古墳から横穴式石室を持った新しい群集墳が多数発見され地図に記入されて公表(第193図)された(註6)。

観音山古墳群とは、先に述べたように観音山山麓に群集する古墳群の総称で、中原支群の II 群は春日丘陵の南西の根本近くの標高38mから45mの間に所在する。横穴式石室は総て山側の南方に開口するが、北側は平坦な丘陵からすぐに低地が広がり、生活環境の豊さを思わせる。

観音山古墳群成立の歴史的環境を見てみると、古式古墳としては前方後円墳の安徳大塚古墳が南西側1.5 ㎞の丘陵尾根線にあり、その北側の同一尾根線上には箱式石棺や木棺直葬の主体部を有する炭焼古墳群がある。また北側にも前方後方墳を命主とし、尾根線上に並ぶ低墳丘のウトロ古墳群やその丘陵先端にあたる平坦な丘陵上には原古墳群(註7)がある。これらは4世紀後半から5世紀前半のもので、横穴式石室採用前のものである。観音山とは那珂川を挟んで対岸になり直接の関係はないが、大型古墳で横穴式石室の最も古いものといわれている老司古墳は5世紀前半のものである。観音山古墳群のある那珂川右岸では古式の横穴式石室が、新幹線関係の調査で発見されている。それは観音山の北側1.5㎞の丘陵の先端にある上白水辻田古墳群である。辻田古墳群は古式横穴式石室2基、竪穴系小石室1基、単室横穴式石室1基の合計6基からなる。これは5世紀後半から6世紀後半の古墳群で、小さな谷を隔てた門田にも

2基の6世紀後半の横穴式石室墳がある。門田2号墳は埴輪を持つた円墳で、辻田古墳群と同一古墳群と見てよいもので、同時期に築造されたものではなく、約1世紀の間に1基づつ築造されていったもので、石室の形式に年代の差が現われている。このように春日丘陵の先端から中ほどにかけて点在する古墳群は短期間に築造された群集墳ではなく、狭い地域の実力者が数代にわたって築造した1基ごとに年代をたどれるような小古墳群である。この時期までの前方後円墳は近くでは北側1.3kmのところにある天神山古墳が最後であろう。

那珂川流域では,一般に群集墳といわれている数十基を単位とする後期あるいは終末期古墳群は,前述のような低丘陵上にはなく,山麓にあたる標高40m前後以上の地域に集中する。これらは山腹や山麓の傾斜面に群をなし,尾根線上に並ぶ古式のものから次には平坦な丘陵上に数基が点在する古墳群へと移り,観音山古墳群のように数十基以上が密集するものと前2者とは顕著な違いを見せている。

中原支群中においても前述したように、東側の I 群は高低差が著しい尾根線上に並ぶ数基の横穴式石室墳や大徳寺周辺の I 群のように同規模のものが10基前後点在するものなどがある。これは低丘陵上の数基の古墳群に似た群構成をしているものもあり、また逆にこれと同様な性格の古墳群が低丘陵上にもあると思われるが、中原 I ・ II 群は同時期かあるいは近い年代に一度に築造された後期古墳から終末期古墳といわれている過渡期の古墳群といえるもので、本報告の中原 II 群成立に密接な関係があると思われるが、残念なことに横穴式石室墳であるというだけしか判明していない。これは中原 II 群の南側に断続的に続く古墳群も同様である。

観音山古墳群の西側には狭い谷を隔てて炭焼古墳群のある丘陵があるが、この丘陵の先端から東側斜面には北からエゲ山古墳群・カクチが浦古墳群・瀬戸古墳群とよばれる数基で構成される横穴式石室墳群がある。1974年に日本窯業史研究所によって瀬戸古墳群の4基が調査されたが、報告されていないので詳細は不明であるが、複室の横穴式石室で須恵器などが発見されており6世紀後半のものである。これは谷を隔てていることもあって直接の関連は少ないと思われるが、この地域に密集しているところに関連性を見いだせると思う。

番号	遺	跡	名	月	r 7	E	地	立地	時期	遺	構	内	容		出	土	遺	物	註
1	卯 内	尺	古 墳	福岡市	可区	老司	卯内尺		前期	円墳,	粘土机	郭		三角	自縁和	獣釒	竟, 釒	洞鏃	5
2	老司	Jī	占 墳	"	"	"	大谷	丘陵	"	前方後 石室(円墳, 4基)	古艺	横穴式	鏡, 石,	玉紫土岩	夏, 金	失器, [玉,	櫛, 7	£ 5
3	老松和	Þ社ī	占墳群	"	"	// 老	松神社	"	"	低墳丘									4
4	野口	古	墳群	那珂川	町片	縄野	П	"	"	低墳丘									4
5	観音	堂	古 墳	"	"	観	音堂	"	"	前方後	方墳								4
6	権現	塚	古 墳	"	"			"	後期	装飾古	墳,F	円墳,	周堤	須恵	慧器 ,	消滅	戟		4

表 **3** 春日·那珂川地区古墳時代遣跡地名表

7	浦ノ田古墳群	那珂川町片縄浦ノ田	丘陵	後期	前方後円墳,円墳,横穴 式石室	4
8	大牟田古墳群	—————————————————————————————————————	"		円墳,方墳,横穴式石室 須恵器,鉄器	
9	浦ノ原東古墳群	 那珂川町片縄浦ノ原	"	"	円墳,横穴式石室	8
10	浦ノ原西古墳群	" " "	"		円墳,横穴式石室	8
11	小丸古墳群	——————— 那珂川町片縄小丸	"	—— 後期	一 前方後円墳(2基)円墳 <mark>埴輪</mark>	4
12	うめぼし山古墳	—————————————————————————————————————	—— 丘陵	—— 後期	円墳,横穴式石室 伝よろい,鎧,刀剣,馬具	9
13	下原古墳群	" "	"	"	円墳	8
14	井河古墳群	———————————— 那珂川町片縄井河	 丘陵	前期	低墳丘	4
15	白石古墳群	// 後野白石	"	 後期	円墳29基, 3 基道路にて 新池東側は造成にて全壊	8
16	若山古墳群	那珂川町恵子若山	丘陵	前期	円墳,方形周溝墓 鏡,土飾器	10
17	荒平池古墳群	"	"	—— 後期		8
18	妙法寺古墳	那珂川町恵子妙法寺			前方後円墳,横穴式石室	4
19	油田古墳群	〃 道善油田	"	—— 前期	円墳,方墳,木棺直葬, 鏡片,鉄器,土師器 石棺	4
20	大万寺前古墳	〃 後野大万寺前			前方後円墳,横穴式石室	4
21	大万寺北遺跡	" "	扇状瓜	"	散布地 須恵器, 土師器	8
22	イボリ古墳	〃 後野イボリ642	丘陵		方墳?段築	11
23	国太子古墳群	〃 〃 国太子	"	後期	円墳 4 基一部削平	8
24	堂の前古墳	〃 西隈堂の前	"	"	円墳	11
25	熊本古墳群	″ ″ 熊本	"	"	横穴式石室,墳丘裾列石	4
26	古畑古墳	那珂川町後野古畑	"		円墳	8
27	松尾古墳	〃 松尾	山裾	後期	円墳,複室 現在は玄室のみ残る。	8
28	風早古墳	那珂川町安徳風早	台地		円墳	8
29	風 早	那珂川町安徳風早	台地		散布地 土器	8
30	安徳大塚古墳	// // 大塚	丘陵	前期	前方後円墳,礫床,葺石埴輪,鉄器,土師器	12
31	平蔵古墳群	""平蔵	"	"	円墳,横穴式石室	11
32	平 蔵	那珂川町上梶原平蔵	台地		散布地 土師器,須恵器	8
33	大 戸	" 下梶原大戸	丘陵	後期	散布地 土器	8
34	梶 原		山裾		散布地	8
35	内河	// // 内河	段丘	後期 	散布地	8
36	瀬戸古墳群	// 下梶原瀬戸			円墳,横穴式石室	11
37	ツタガ尻古墳群	〃 松ノ木ツカダ尻	丘陵	後期	円墳,横穴式石室	8
38	平石古墳群	那珂川町松ノ木瀬戸	丘陵	後期	円墳,横穴式石室	8

		· -			(t		
39	炭焼古墳群	那珂川町仲炭焼	丘陵	前期	方形周溝墓,石棺,木棺 石蓋土壙		3
40	瀬戸古墳群	〃 松ノ木瀬戸	丘陵	後期	円墳,横穴式石室	須恵器, 鉄器	13
41	カクチガ浦 古墳群	ル 松ノ木カクチ ガ浦	丘陵	後期	円墳,横穴式石室		8
42	エゲ山古墳群	〃 松ノ木エゲ	丘陵	後期	円墳,横穴式石室		14
43	観音山古墳群	ル 中原深原	山裾	終末	円墳, 方墳, 横穴式石室 石棺, 土壙墓	鉄器,金環,須恵器,土 師器	
44	合 政	〃 松ノ木合政			散布地	土器	8
45	油 田	〃 中原油田	微高地	称生~ 古墳	鄭棺墓,溝状遺構	消滅	15
46	潮井川古墳	// 中原	段丘			須恵器	16
47	宗 石	那珂川町今光宗石			散布地		8
48	瀬 戸 口	〃 松ノ木瀬戸口	台地		散布地		8
49	大堤古墳群	春日市上白水大堤	"	"	横穴式石室		14
50	ウト口古墳	〃 上白水ウトロ	"	前期	前方後方墳		11
51	ウト口古墳群	春日市上白水ウトロ	台地	前期	低墳丘, 甕棺墓		11
52	原古墳群	春日市上白水原	"	"	円墳,堅穴式石室,木棺	短甲,鉄剣,勾玉,小玉, 土師器	17
53	門田古墳群	ル ル 門田	" 1		円墳2基,横穴式石室	埴輪,鉄刀,鉄斧,轡, 勾玉,管玉,丸玉,小玉	
54	門田	// // 門田	"	"	堅穴住居跡		18
55	辻田古墳群	// // 辻田	台地	前期	円墳4基,堅穴式・横穴 式石室	勾玉,管玉,丸玉,鉄鏃 鉄斧	19
56	辻 田	// // 辻田	台地自	前期	堅穴住居跡	土師器	19
57	天神山古墳	春日市上白水天神山	丘陵征	後期	前方後円墳,横穴式石室		11
58	千 足 古 墳	〃 下白水千足	"	"	円墳,横穴式石室		14
59	日拝塚古墳	ル ル 日拝塚	台地征	後期	前方後円墳,横穴式石室	鏡,鉄製垂飾付耳飾,単竜 環頭柄,武器類,輪鏡,轡, 雲珠,馬鈴,須恵器等	1
60	古 水	〃 〃 古水	微高地		散布地		14
61	一 の 谷	〃 〃 一の谷	丘陵	前期	方形周溝墓		20
62	下白水大塚古墳	// // 下の原	微高地名	後期	前方後円墳	土製人形	4
63	須玖古墳群	春日市須玖野藤	"	_		埴輪	4
64	熊野神社古墳	〃 岡本町	" 1	後期	円墳(2基),横穴式石室		14
65	竹ヶ本古墳群	〃 小倉竹ケ本	丘陵	後期	前方後円墳,円墳	鏡	2
66	ケ ケ 本	〃 小倉竹ケ本	〃 前	前期	住居跡		2
67	伯玄社古墳	〃 〃 伯玄町	// E	前期	礫床	鉄刀	14
68	円 入	〃 春日円入	fi fi	後期	散布地		11
69	惣 利 古 墳	// // 惣利	丘陵	"	 円墳	須恵器	21
		72.13					



第193図 春日・那珂川地区の古墳時代遺跡分布図(1:25000)

70	塚	原	古	墳	群	春日市春日塚原	丘陵	後期	前方後円墳,円墳,横穴 式石室	須恵器	11
71	浦		1		原	"	段丘		散布地	須恵器 	11
72		1	元	古	墳	大野城市牛頸胴ノ元	丘陵	後期	円墳,横穴式石室		
73	中	通	古	墳	群	〃 牛頸中通	丘陵	後期	円墳,横穴式石室	須恵器, 玉類, 鉄器	22

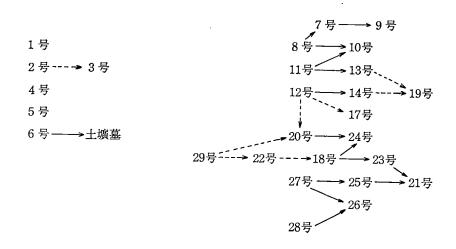
- 註1 中山平次郎・玉泉大梁・島田寅次郎「日拝塚」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書』5 1930
 - 2 渡辺正気「筑紫郡春日町竹ケ本遺跡調査報告」『福岡県文化財調査報告書』22 1961
 - 3 宮小路賀宏・柳田康雄「炭焼古墳群」『福岡県文化財調査報告書』37 1968
 - 4 渡辺正気・柳田康雄「油田古墳群」『福岡県文化財調査報告書』42 1969
 - 5 森貞次郎他「老司古墳」福岡市教育委員会 1969
 - 6 柳田康雄「Ⅲ原古墳群の調査―春日市・那珂川町地区の古墳時代遺跡分布図及び地名表」『山陽新 幹線関係埋蔵文化財調査報告』 2 1976 福岡県教育委員会
 - 7 靏久嗣郎・柳田康雄・木下修「原古墳古墳群の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』 2 1976 福岡県教育委員会
 - 8 那珂川町教育委員会『那珂川町文化財遺跡調査』 1970
 - 9 1975年福岡県教育委員会実測
 - 10 岩崎二郎編「恵子若山遺跡」恵子若山遺跡調査会 1975
 - 11 1975年福岡県教育委員会実査
 - 12 井上裕弘「安徳大塚古墳の発掘調査」『教育福岡』 No. 260 1971
 - 13 1974年国士館大学調査
 - 14 春日市公民館長亀井勇氏教示
 - 15 佐々木隆彦「油田遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3 福岡県教育委員会 1977
 - 16 1976年那珂川町教育委員会調査にて、周溝のみ確認された。墳丘は消滅。
 - 17 木下修編「原古墳群の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』 2 福岡県教育委員会 1976
 - 18 福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1・2 1976
 - 19 柳田康雄編「昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1975
 - 20 宮小路賀宏編「一の谷遺跡」『春日町文化財調査報告書』2 1969
 - 21 肥山正秀氏教示
 - 22 小田富士雄・柳田康雄編「野添・大浦窯跡群」『福岡県文化財調査報告書』43 1970

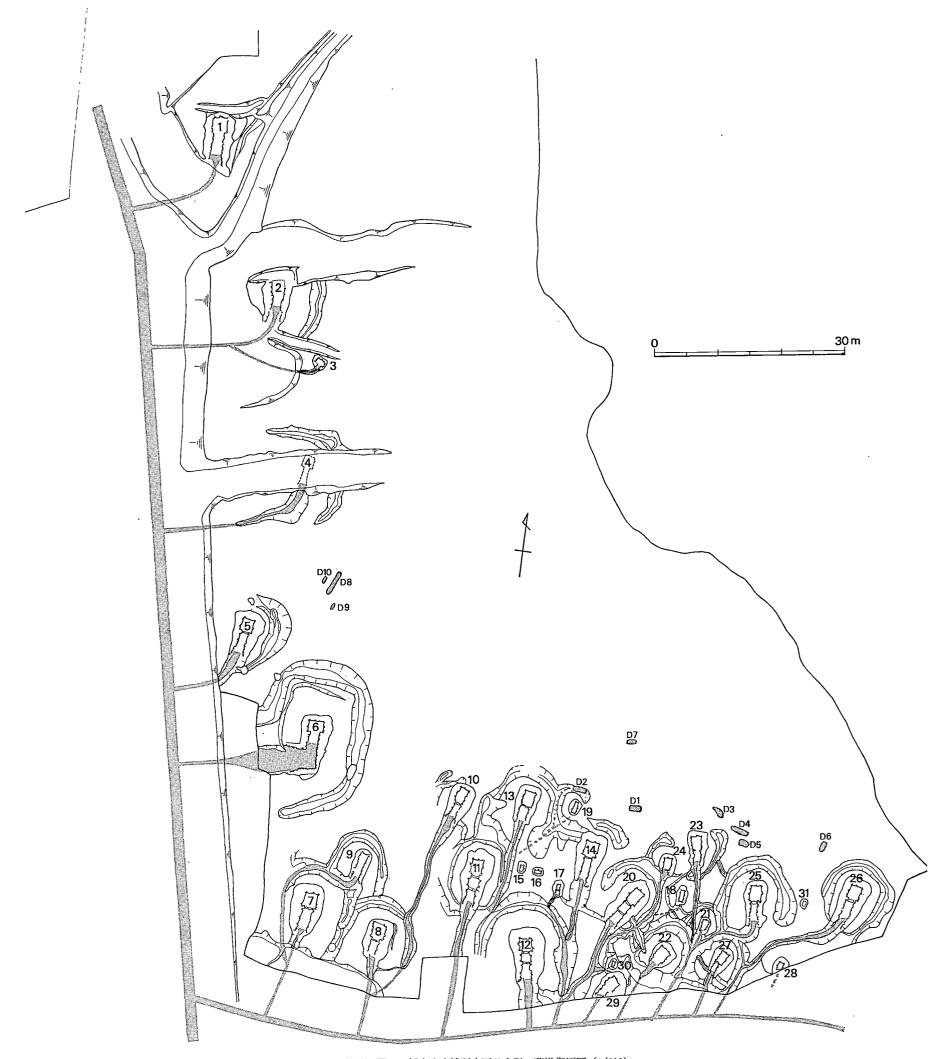
2. 古墳群の配列

終末期古墳といわれる群集墳は、なるほど古墳の規模が小さく、数度の盗掘によって遺物が皆無に近いものが多く魅力にとぼしいものである。さらに7世紀代から8世紀にかかるものとなればこの地域であれば、遺物の年代は大宰府跡やその須恵器生産地の牛頸窯跡群を無視するわけにはゆかない重要な問題がある。

この古墳群調査の成果は、31基もの古墳を調査できたこともさりながら、何といっても全面 表土剝ぎの結果、石棺など小規模古墳の発見や群集墳の群構成の研究に重要な墓道の検出にあ るといえるのではなかろうか。

近年の群集墳の研究の内、群構造と墓道を復原することによって小支群を摘出し、「単位集団」(註1)や「単位群」(註2)として群集墳の構成から各家族の歴史、さらに氏族構造や政治構造を読み取る研究が行なわれている。観音山古墳群中原Ⅲ支群はこの研究に最も適した古墳群であるが、実際には全面発掘せず幹道や枝道などが検出されていない机上の操作と違って、12号墳から31号墳のように密集してくると小支群の摘出は簡単ではない。しかし、深くて長く続く枝道や茎道(註3)といえる墓道は、古墳築造の前後関係を明らかにし、従属関係も明らかにできるところに利点がある。盗掘墳は遺物の年代のみで古墳の築造年代を推定できないこともあって、周溝や墓道の切り合い関係や墓道が隣接した古墳を迂回していれば迂回している墓道をもつ古墳が新しいということを前提にして作成したのが次の各古墳関連表である実線矢印は前後関係が確実なもので、破線矢印は可能性があるものを示す。





第**195** 図 観音山古墳群中原Ⅲ支群の墓道復原図(1/600)

1号墳から6号墳までは、古墳分布図を見れば素掘墓道の曲り具合から、現在すぐ西側にある南北の山道を根道とすることもできるほど説明が容易である。しかし、実際はあとで判明したことであるが、昭和51年度の深原遺跡の追加調査で現在の山道より15m西側に南北に延びる幅2.9m、深さ0.7mの断面逆梯形の溝を検出している。この溝の埋土は古墳群墓道と同じく上層に火山灰質の真黒色土があり、時期は明確でないが須恵器の大甕片が出土している。これは中原支群から南側、つまりは観音山西麓古墳群全体を根道となりうるものである。

7号墳から31号墳までは各古墳で隣接する古墳との関係を述べているので、ここでは省略するが、可能性のあるものや従属関係を述べながら補足してゆきたいと思う。

7号墳から11号墳の南側には谷までの間にいくらかの空間があり、確実に石室が露出している古墳が1基あることから数基の古墳の存在を考えなければならない。したがって、6号墳までは根道から直接枝道や茎道に移っており、またそれだけ有力な占地をもっていたが、7号墳以後は完全に占地の点や規模に制約があり、ここに幹道が存在することが明らかである。この幹道は、7号・8号・11号・12号墳の南側を通って谷の肩に出て谷に沿って古墳群の南側を東進し、各枝道を分岐させている。7号・8号墳の南側の古墳群は、その南側に谷に沿った幹道があり、各古墳を枝道・茎道でつなぐものと考える。谷の南側の古墳群は、さらに南側にのびた根道から分岐する幹道によってつながれることになる。

7号と8号墳は、周溝の切り合いで7号墳が新しいから、7号は8号に従属するものではなく、規模や位置関係からしても対等関係にあり、南側を通る幹道に個別に直接繋がるものと考える。そしてそれぞれに1段規模の小さな古墳が位置や枝道や茎道といえる墓道と周溝の関係から、7号墳には9号墳、8号墳には10号墳が従属関係にあるものと思われる。

次に占地的優位性を持つのは12号墳と思われる。11号墳の方が西側にあり根道に近いのであるが南側の幹道に対しては12号墳よりは奥にあり、墳丘規模も小さく、12号墳を意識して造られたことに間違いないだろう。12号墳の周溝には、14号と17号墳の墓道が続いている。この両古墳は12号墳の周溝を枝道として利用していることから、12号墳に関連があることは明らかである。

8号と12号墳の間を縫って造られたのが11号墳で、もちろんこの時には10号と13号墳は造られていない。10号墳は、8号墳よりは11号墳に近接しているが、11号墳の周溝さえ回避して8号墳の周溝に合流しているところに8号と10号墳の関連性が説明できる。この点、13号は11号墳の周溝がかなり埋没した後で墳丘を削るぐらいに枝道といえる墓道を掘り、周溝を利用した形をとっている。あと問題になるのは、墓道のない箱式石棺である15号・16号・19号墳である。19号墳は周溝を備えているので墳丘があり、茎道といえる墓道があったかもしれないが、周溝の南側付近は攪乱が多く不明である。しかし、前例から見ると従属する新しい古墳は前代古墳の北東側、つまり根道から隔れた方に築造されているようであるから、11号→13号→19号

墳と続く一連の単位群であると思われる。15・16号の場は、17号が12号墳と関連があるところから、12号墳と関連性があるかもしれないが、11号墳との関連も捨てがたい。

次に問題になるのが20号墳である。20号墳は規模も大きく24号墳と従えているので1つの単位群として扱ってよいのであるが、29号墳を回避しているところがある。単なる29号墳より新しいだけならよいのであるが、12号墳に合流する可能性が出てくる。また、30号も29号墳に関連性が強いと思われるが、茎道は20号の枝道に出ることになろう。

これより東側の古墳は「単位群」を読み取るのは困難である。27号墳は幹道から直接茎道が出るものであることは明らかであるが、22号墳は直接幹道に出てもよいが、墓道が南側より多少西側に片向き、29号墳に向っている傾向が強い。また、22号・27号・28号と相接して古墳が造られると、これより後で古墳を造るとすればこれらより北側に造らなければならなくなる。このようにして造られた18号・21号・23号・25号・26号墳は墓道を先の古墳の共有した周溝を利用して通らなければならなくなる。ここで、今迄の理論で行けば、21号・23号・25号は22号墳に、26号は27号墳にそれぞれ従属することになる。この場合、12号墳までの前例と違って、新しく造られた古墳が逆に規模が大きくなるものや不規則なものがある。これも水野氏の指摘される「単位群は家族の歴史」(註4)であるが、確実な根拠はない。

箱式石棺墓以外に追葬のできないものに土壙墓がある。土壙墓は当然のことながら石棺より ランクが下がるらしく、石棺のように大・中・小の横穴式石室の間に組込まれることなく、古 墳群の北辺に位置するが、一応古墳群に従属する形はとっている。

土壙墓としてあげている10基は3号・4号・5号・9号・10号のように一応土壙状遺構といわれるものも含まれているので、全部が埋葬遺構ではない。つまり、分類すると1つは副葬品があり埋葬遺構として確実な6号・7号。2番目は埋葬遺構ではあるが、古墳群と周時期に考えられない8号。3番目は形態から土壙と考えられる1号・2号。4番目が形態は似ているが埋葬遺構とするには疑問がある3号・4号・5号・9号・10号の4つである。

1番目の6号・7号は副葬品の金環や鉄釘などから、中原Ⅲ支群の古墳と同時期に含まれるが、2番目の8号土壙墓は、長さと礫床などである点から5世紀以前の割竹形木棺直葬と思われ、この古墳群に先行するものである。6号墳の地山整形面で発見されている滑石製の玉類は5世紀代のもので、6号墳に直接関係ないと思われるので横穴式石室墳以前に何らかの埋葬遺構があったのは確実である。

それでは確実な土壙墓群がどのグループに属するかというと、石棺墓と同様に確実にいえるものは少ない。2号は19号墳との新旧関係は不明であるが、明らかに19号墳の周溝を意識して埋葬されたものであれば、19号墳に続く単次埋葬であることになる。さらに、6号は26号墳に近いが、最も重要な木棺墓である7号は古墳群から隔れてしまっている。これが中原Ⅲ支群最後の埋葬であったかもしれない。

以上、墓道の関連から古墳の新旧関係を表にあらわして、従属関係までも述べてきた。しか し、これには新しい古墳の墓道が古い古墳の周溝に合流すれば、この2基の古墳間には1つの 「家族」的な関係があるという前提に立ってのことであった。ここで注意しなければならない のは、墓道が周溝に合流してもその先はたして2基あるいは3基の古墳には共有の枝道がある かということである。古墳は盛土の節約のためか石室掘方が深く,墓道も墳丘外に出ても浅く なることはなく排水溝の役割もはたしている。したがって、同一古墳にあっては墓道は周溝よ り深く,別な古墳の墓道が周溝に合流するころには浅くなり,その周溝からその古墳の墓道に 合流して共有の枝道を持つにはレベルが違いすぎている。 たと えば、 8 号と 10号, 11 号と13 号、12号と14号のように従属関係が明らかと述べたものがよい例である。この中には13号墳の ように,墓道が11号墳の周溝を切って周溝と共有した形で合流しているが,11号墳の周溝から どう出るのか不明である。周構と共に11号墳の墓道に合流して枝道を共有するのであれば、11 号墳の東側の周溝は墓道と同じレベルでなければならず,現状では11号墳に関連するのか,12 号墳の周溝に合流するのか不明である。この古墳群総てにいえることであるが、周溝は他の古 墳の墓道と 共有している部分のみ 深くなっているだけで, 周溝は自然の 埋没にまかせてある が、墓道は数度の使用のためにさらえられるのか、中世まで痕跡をとどめていたようである。 したがって、墓道は枝道を持たずに各古墳は直接幹道に連がる可能性が強い。

このように、「単位群」と読みとるには容易な部分もあるが、「過密群集墳」では簡単にはゆかない。とくに単次葬の石棺墓や土壙墓は墓道を伴なわず、両隣に古墳があるのでどちらに関連するものかわからない。18号墳のようにこの古墳群で最も古い形式の須恵器を伴なっていれば、古墳群成立の最も早い時期に造られたことであり、計画的な占地はなく、規模の大きな古墳から小さなものに移るものばかりではなく、他の古墳との関連がつかめない単次葬の小規模古墳があり大古墳に先行するものがかなりあるようである。いずれにしろ周形式の須恵器は規模の大きな古墳からも出土しているので、短期間に多数の古墳が築造されたようだ。

先にあげた古墳の新旧関連表から一応の単位群を読みとれるであろうから、その先頭にくる 古墳を命主として、その「家族」の推移はたどれるであろう。 (柳田康雄)

- 註1 石野博信「兵庫県宝塚市長尾山古墳群」『論集終末期古墳』1973 塙書房
 - 2 水野正好「群集墳の構造と性格」『古代史発掘』6 1975 講談社
 - 3 註9の水野正好氏の論には賛同するところが多いので、根道・幹道・枝道・茎道の名称はこのまま 使用した。
 - 4 註2に同じ。

3. 須恵器について

当古墳群の須恵器の供給地は疑いなく牛頸窯跡群のいずれかであろう。牛頸の窯跡の研究は 小田富士雄・柳田康雄氏等の野添・大浦窯跡(註1)で大略の編年が立てられ,近年では向佐 野。長浦窯の調査により太宰府史跡出土須恵器との対比(註2)により一段と深化されてい る。また,三笠川東岸では酒井氏ら(註3)の研究がある。

第前地方の須恵器 ▼期は大浦1号窯出土の資料に代表される(註4)。 杯蓋・身とも大小の 二者があり、それを時期差として考えている。蓋はまだ返りを持たず、天井部は丸みをもつ。 口径は13~14㎝内外である。小さい方は径11㎝強を平均にしているが、この段階で蓋に身受け をもつものが現われる。この類の蓋は前者と比べ天井部が平らになるようだ。

V 期に入ると身受けを持ち、乳頭状のつまみを有する蓋が現われ、これも大、小二者が存在するとしている。一方、八女の塚の谷1号窯の調査(註5)では形の大小から小・中・大の三者の存在を指摘し、なおかつ IV 期から VI 期への変化を考え、小→中→大の推移を想定している。

一方当古墳より出土した須恵器のうち,杯蓋,杯身については以下の分類基準によっている。

蓋 I 類 身受けの返りのないもので口径 $11.5cm\sim13cm$,器高 $3.0\sim4.5cm$ 。丸味のある天井部を有し,口唇部で肥厚する。天井部周辺ないし,体部との境のみに回転へラ削りを施すものが大部分である。

表 4 須恵器杯蓋·杯身分類表

蓋

	つまみ の有無	最 大 径 (cm)	器高(つまみを除く)	特					
I	返り 無	11.5~13.0	3.0~4.5	天井部は丸く深い。					
I		10.5~12.0	2.5~3.2	天井部は平らで蓋 に比べて小型化している。					
Ш	0	12~13.6	2.5	宝珠形のつまみを有す。					
[V a	_	9.7~11.0	2.0~3.0	立ち上がり部厚く、器高が低い。					
IV ь	0	9.7~11.0	2~2.7	乳頭状のつまみを有す。					
IV e	0	9.0~9.5	2.0	Noをひとまわり小型化したもの。					
Va		9.0~11.0	2~2.5	立ち上がりが内側にはいり扁平である。					
νь	_	9.0~11.0	1.5~2.5	Vaをひとまわり小型化したもの。					
VI a	0	11.0~13.0	1.5~2.2	乳頭状のつまみを有し,扁平である。薄手の(0.5~0.6cm) 天井部から,なだらかに受部へと移行する。					
VIь	0	13.0~15.0	1.5~2.5	扁平なつまみの出現 立ち上がりが短かく内傾にはいる。					
VII a	0	14.0~17.0	1.5~3.0	嘴状の身受けになる。					
ИІъ	_	10.5	2.3	Waを小型化したもの。					

蓋 I 類 蓋、身が逆転し、身受けの返りをもつ。最大径10.5cm~12.0cm、器高2.5~3.2cm。身 I 類と比して最大径、器高とも減じ小型化する。天井部は平らに近くなり、返りは若干内傾するも、細く高い。天井部と体部と境に回転へラ削りするものがわずかに認められるだけで、大部分は切り離し痕を調整する程度で終る。

蓋Ⅲ類 宝珠形のつまみを有するもので、口径12cm~13.6cm、器高2.5cm内外。身受けの返りは口縁端より若干外方に延びる程度である。天井部と体部の境のみに回転へラ削りを施す。

 \mathbb{Z} 蓋 \mathbb{Z} 類 \mathbb{Z} 類の小型化したものだが,つまみを有さない。最大径 $9.7cm\sim11cm$,器高 $2cm\sim3cm$ 。身受けの返りは口縁端より,直に外方へ延びる。天井部は切り離し後,未調整のもの多い。

蓋 N_b 類 N_a 類に乳頭状のつまみをもつもの。最大径 $9.7cm\sim11.0cm$,器高 $2cm\sim2.7cm$ 。 天井部から体部の境まで回転へラ削りを施す。

蓋 W c 類 最大径 9 cm~9.5cm, 器高 2 cm と W b 類の小型化したもの。

蓋 V_a 類 広く,低平な天井部を有す。最大径 $11.0cm \sim 13.0cm$,器高 $1.5cm \sim 2.2cm$ 。つまみは無い。返りは短かく,口縁端の内側に入り込む。天井部はヘラ調整のみ。

蓋 V_b 類 最大径9.0cm \sim 10.0cm \geq V_a 類より一回り小さいもの。天井部に手持ちヘラ削りをするものが少数ある。

蓋 V_a 類 先端のややつぶれた乳頭状のつまみを有す。最大径 $11.0cm \sim 13.0cm$,器高 $1.5cm \sim 2.2cm$ 。低平な天井部からなだらかに口縁端へ移行する。返りは内傾し,内に納まる。天井部は回転へラ削りで整形される。

身

	高台の 有 無	最 大 径	器高	特 徵
I		11.5~13.0	3.0~4.0	底部は丸く,深い。 立ち上がりは細かく,高い。
П	_	9.5~11.0	3.0~3.5	底部から、内彎ぎみに立ち上がる。
Ш		10.0~12.0	3.0~3.5	底部と体部との境が明瞭で、口縁部近くで直行ぎみ に立ち上がる。
N a	_	9.0~11.0	3.5~4.5	底部から直行して立ち上がり、体中央部に沈線状の 稜を有す。
N ₽		8.0~9.0	3.0~3.5	Naの小型化したもの。
	_	-		
V a		10.5~12.0	3.5~4.0	底部からゆるやかに立ち上がり体部に稜を有さない。
V b	_	8.5~10.0	2.8~3.5	Vaが小型化したもので、口縁付近でゆるく外反する。
VI a	0	11.0	3.0	付高台の出現。高台付杯。
VIь	0	11.5~15.0	3.0~4.5	杯部が深く,高台の畳付が外方にはねる。 高台付椀の出現。
VIIa	0	11.5~15.0	3.0~4.5	低くふんばる高台をもつ。
VII	0	11.5~13.5	3.0~4.0	Wa を小型化したもの。

WIb 類 扁平な釦状のつまみを有するものが多くなる。口径13cm前後のものと、15cm近いもものの二者が存在する。器高は1.5cm~2.5cm。返りは口縁部から折り返した程度に退化する。 広い天井部は回転へラ削りによる整形が顕著。

▼Ia 類 卸状のつまみを有し、返りは口縁端部から直角に折りまげたようになる。口径14.0 cm~17.0cm。天井部は回転へラ削り。

身 I 類 丸みのある底部をもち、深い。蓋受けの返りは、若干内傾するが高い。最大径11.5 $cm\sim13.0cm$,器高 $3.0cm\sim4.0cm$ 。天井部と体部の境のみに回転へラ削りを行なう。蓋 I 類とセット関係を有す。

身 \mathbb{I} 類 平らに近い底部から内湾ぎみに立ちあがる。口径 $9.5cm\sim11.0cm$,器高 $3.0cm\sim3.5cm$ 。 蓋 \mathbb{I} 類に比して天井部が平らになり,小型化しているところから杯身として扱う。底部の回転へラ削りはほとんど姿を消す。 蓋 \mathbb{I} 類とセット関係を有す。

身 ■類 底部から体部への境が明瞭で、口縁部近くで直行ぎみに立ちあがる。口径10.0cm~12.0cm、器高3.0cm~3.5cm。底部は切り離し後のヘラ調整。蓋 ■・■類とセットになる。

身 \mathbb{N} a 類 底部から口縁部へ直行して立ちあがり、体部に一・二条の沈線を有す。口径9.0cm ~11.0cm,器高3.5cm ~4.5cm と器高の高いのも特徴的。底部は回転ヘラ削りを施すものもあるが量的には少ない。蓋 \mathbb{N} a・ \mathbb{N} b 類とセットになる。

身 № b 類 № a 類より小さい一群。口径8.0cm~9.0cm, 器高3.0cm~3.5 cm内におさまる。底部へラ調整, 蓋 № c 類とセットになる。

身 Va 類 平坦で広い底部から外反ぎみに立ちあがる。口径 $10.5cm \sim 12.0cm$, 器高 $3.5cm \sim 4.0cm$ 。体部には明瞭な稜を有さない。底部は簡単なヘラ調整を行なう。蓋 Va 類とセット。

身 Va 類 Va 類の小さい一群。口径 $8.5cm\sim10.0cm$,器高 $2.8cm\sim3.5cm$ 。口縁部付近で外反する。底部はヘラ調整を行なうものが大部分。蓋 Vb 類とセット関係を有す。

身 № 4 類 付高台杯の出現。細身で外方へ張り出す高台。口径11.0cm内外,器高3.0cm。底部は回転へラ削りで成形後,高台を付ける。蓋 № 4 類とセットになる。

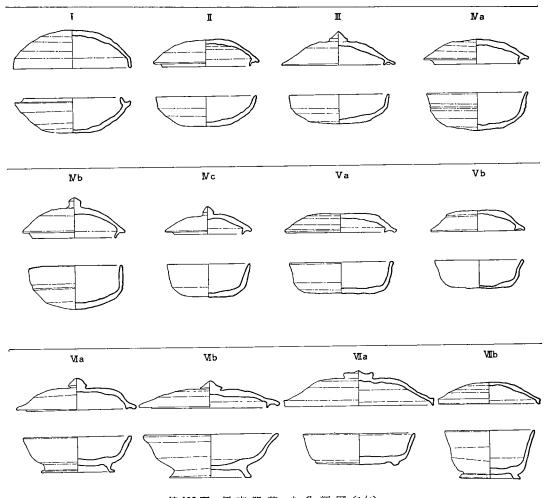
身 VI_b 類 杯部が深く,口縁部は大きく外反する。蓋と同様大小二者が存在する。口径 11.5 $cm\sim15.0cm$,器高 $3.0cm\sim4.5cm$ 。付高台の畳付は外方にはねる。底部は回転へラ削りをするものと,へラ調整の二通りあるが,後者の方が多い。蓋 VI_b 類とセットになる。

身Wa類 低くふんばる高台を有す。口径 $11.5cm \sim 13.5cm$,器高 $3.0cm \sim 4.0cm$ 。口縁部はあまり外反しない。底部と体部の境を中心に回転へラ削りを施こす。 蓋Wa 類とセットになる。

身Mb 類 口径9.1cmと小さいが器高4.5cmと高い杯部に、低く、外方に張り出す高台を付す。蓋Mb 類とセット関係を有するものであろう。

第196図に各々の代表的な例をあげておく。

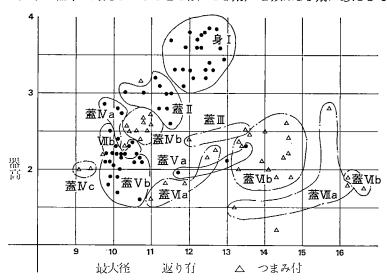
2の分類による古墳別の出土状態はすべてのものが各古墳に均一的に出土していないことは言うまでもなく、偏在化がみられる。 I 類は、 $6 \cdot 21 \cdot 22 \cdot 27$ 号墳ならびに石棺を主体部とする古墳以外は、すべて出土しており当古墳群形成の時期を示している。 I 類は量的に少なく、 $7 \cdot 27$ 号墳墓道下層の一括土器が目立つ他は $4 \cdot 9 \cdot 11 \cdot 22$ 号墳に散在している。 I 類になると蓋につまみがつくものは $7 \cdot 8$ 号墳にのみ出土する。 IVa 類は $2 \cdot 4 \cdot 5 \cdot 20$ 号墳に多く出土し、特に5 号墳における茶褐色を呈し、 ~ 5 記号を同一する一群(第 図)は特徴的である。 IVb 類は $10 \cdot 25$ 号墳に多く、IVc 類は13号墳の 一括があげられるが(第 図)大部分

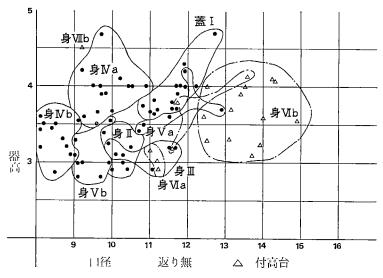


第196図 須恵器蓋·身分類図(1/4)

は盗難にあってしまった。高杯の杯部では V_a ・ V_b 類にあたるものが大半を占めている。 V_a 類は量的に少なく 2 号墳と21・22 号墳石室内のセット になるものが特徴的なものである。 V_b 類は 4・23 号墳にセットで出土している。 V_a 類は 7 号墳に杯身のみが, また, 22 号墳にセットで出土している。 V_b 類は量的に多く24 号墳のそれは他を圧倒している。 当類は11 基の古墳で確認されており,本古墳群の最終的な使用時期—追 葬時期にあたるのであろうか。 V_a 類は11・24 号墳に 1 点づつの出土である。

先学の編年に対比してみると I 類は № 期にあたるであろう。 窯跡では大浦





第197図 返りの有無による法量図

I 号窯, 同 2 号窯に 類似している。Ⅱ類 はいわゆる蓋に宝珠 形ないし, 乳頭状の つまみが付くもの で、V期を画するも のである。 IIa類は 大浦2号窯内出土の ものに似る。IVa~ Nc類も V期のもの であろう。 IVa IVb 類は平田B地点Ⅰ号 窯内(註6)出土例 が知られる。 Wc類 については最大径が 9.5 cmを越えること がない小型化された 一群であり、13号墳 では羨道部東壁際に まとまって出土し た。この杯類には, これも小型の平瓶 (第 図)が伴出 し、埋葬用に特注し たものであろうか。

Va・Vb類は長浦

窯・平田 B地点 2 号窯に出土する扁平な蓋につまみをつけないもので、杯身にはまだ高台を付けないもの。 V_a 期 (註 7) にあたる。この V_a ・ V_b 類は両窯でも V_a ・ V_b 類を伴出しており、蓋では扁平なものにつまみを付けないもの、乳頭状、釦状のつまみの三者があり、身も高台を付けないものと付けるものの二者が存在している。従って V_a ・ V_b 類とも V_a 期に属そう。実年代では 7 世紀中葉頃と考えられている。 V_a ・ V_b 類は向 佐野窯(註 8)出土のものと同じ形態を示すところから V_b 期に該当しよう。 (木下 修)

- 註1 小田富士雄・柳田康雄編「野添・大浦窯跡群」『福岡県文化財調査報告書』43 1970。
 - 2 高橋章・亀井明徳「向佐野,長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 Ⅵ 福岡県教育委員会 1975。
 - 3 岩瀬正信・酒井仁夫・川述昭人「御笠川東岸における須恵器の編年について」『九州縦貫自動車道 関係埋蔵文化財調査報告』XW 福岡県教育委員会 1977。
 - 4 註1に同じ。
 - 5 小田富士雄他「塚ノ谷窯跡群一八女古窯跡群調査報告 I 」八女市教育委員会 1969。
 - 6 坂詰秀一編「筑前平田窯跡」雄山閣 1974。
 - 7 註2の編年による。

VI 自然科学的分析

1. 鉱 滓 の 調 査

(1) はじめに

福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字深原に所在する観音山古墳群中原支群の31基の古墳について発掘調査したところ、4基から鉱滓が発見された。(註1)そのうちの20号墳を除く5・6・13号墳より出土した鉱滓について、鉱物組成と化学組成の検討を行なったので報告する。なお鉱滓の出土状態は表7の通りである。

(2) 調査方法

① 試 料

表5に示す8個の鉱滓について調査を行なった。

表 5 供試鉱滓の履歴及び調査項目

試料符号	出土古墳	出土位置	採取月日	重量(9)	調	査 項	目
政府不分	山工口頃			里里(す)	外観写真	顕微鏡組織	化学分析
K-7	r 13.144	美米3 口(数40kh 片)	不明	25	0	0	
L-7	5号墳	蒙道入口(第48地点)	小奶	10	0	0	
3U-6	6 号 墳	墓道内	不明	65	0	0	
3V6				60	0	0	0
3W 6		閉塞部(黒色土層中)	73.02.18	28	0	0	
3X-6	13 号 墳			15	0	0	
J-7		墓 道 内(焼土)	73.02.22	530	0	0	
M-7		玄 室 内	73.01.23	38	0	0	

- ② 調査項目
- @ 肉眼観察
- **⑤** 顕微鏡組織

鉱滓は水道水で充分洗滌した後,二分割して片方の中央部(Core)を検鏡試料とした。検鏡 試料はベークライト樹脂に埋込んだ後エメリーペーパーの #150, #320, #600, #1000で荒 研摩して,酸化クロム,アルミナ等で仕上研摩を行なった。

© 化学分析

湿式法による定量分析を行なった。試料は検鏡用の片割れを用いた。

(3) 調査結果

鉱滓の外観写真及び鉱物組織を Photo. 1・2に、化学分析値を表6に示す。

① 鉱滓K-7

② 肉眼観察

表皮は赤褐色を呈し、一膜微粉状粘土が付着している。破面は気孔を有した飴茶色のスラグ 質と金属鉄の風化した錆状部分が混在し、後者部分は磁性が強い。

(b) 顕微鏡組織

鉱物組成の大部分は金属鉄(Metallic Fe)が酸化した Goethite: $Fe_2O_3 \cdot H_2O$ で占められている。なお Goethite の一部には、棒状結晶が認められるので現在解析検討中。

② 鉱達L-7

② 肉眼観察

一見金属鉄の酸化物を思わせる赤褐色のなめらかな肌を有している。事実磁性の強い小塊。 破面は気孔なく黒灰色に輝やく個所と、0.2 ミリ程度の外皮のみで、中は空洞部とに分れる。

(b) 顕微鏡組織

Wüstite (FéO) が多量に凝集しかかった状態で存在する。金属鉄に還元される寸前に製錬を中断したものと考えられる。

③ 鉱滓3U-6

② 肉眼観察

表皮は鉄塊酸化物を思わせる赤褐色の無気孔層と、これをとり囲むように石英粒子を含有した微粒子粘土層からなっている。破面は2ミリ前後の鉱滓特有の黒灰色光沢層が存在し、その中の中央部は微粉炭状の炭化物と黄褐色スラグ質が混在している。従来見られなかったタイプであり、比重は大きく磁気もかなり強い。

⑤ 顕微鏡組織

白色粒状の大小 Wüstite (FeO) がかなりの量存在し、その 周辺には多量の金属 鉄の酸化物 Goethite と少量の長柱状結晶の Fayalite (2FeO・ SiO_2) と灰色多角状の Hercynite (FeO・ Al_2O_3) らしき結晶が散見される。

④ 鉱滓3V-6

② 肉眼観察

表皮は製錬滓特有の流動性をもつ飴状タイプ。裏面はほとんど全面に小気孔があり、これに 石英粒子が嚙み込まれている。破面は若干の気孔があるが緻密で比重も大きい。破面の色は銀 色を帯びた黒褐色である。

⑤ 顕微鏡組織

白色粒状の Wüstite と灰色長柱状結晶の Fayalite, その間隙に Wüstite・Fayalite・含チタン glass 質の微結晶から構成された共晶部が存在する。

© 化学組成

全鉄分(Total Fe)は47.91%と高目であり、造滓成分(SiO $_2$ +A $_1_2$ O $_3$ +CaO +MgO)は29.97%と低目で歩留の悪い製錬時での生成鉱滓である。二酸化チタン(TiO $_2$)は1.47%、ヴナジウム(V)0.168%から福岡市西区大原海岸に 賦存する原料レベルの 極低チタン 砂鉄の使用が考えられる。(註 2)

⑤ 鉱 23W-6

② 肉眼観察

赤褐色を呈する表皮をもち、やや粘調気味の凹凸を示し、石英粒子の付着が認められる。破面は銀色を帯びた黒褐色でコークスに類似した気孔をもっている。

動動ののの<l>ののののののののののののの<l

多量の白色粒状の Wüstite が存在し、一部に金属鉄が残留している。また、Fayalite の大きな結晶は比較的少なくガラス質が大半を占めている。

⑥ 鉱滓3X-6

② 肉眼観察

此の鉱滓はガラス質を主体とする比重の軽いカス状のものである。表皮は黒色で表面にかなり多量の石英粒子を付着している。

(b) 顕微鏡組織

鉱物組成のうち鉄分はほとんど存在せず、その主成分はガラス質で硅酸分 (SiO_2) が大部分である。

⑦ 鉱海 J-7

@ 肉眼観察

⑤ 顕微鏡組織

白色粒状の Wüstite が樹枝状に晶出し、Fayalite も長柱状の大結晶できれいに多量に在存している。

8 鉱滓M-7

② 肉眼観察

外皮は鉄錆色を呈し、凹凸が多く石英粒子を含み気孔がみられない。破面は金属鉄が酸化した部分とスラグ質特有の灰黒色を有する部分が混在する。また磁性も感じられる。

⑤ 顕微鏡組織

鉱物組成の大部分は、金属鉄の酸化した Goethite である。しかし、局部には Wüstite や 暗灰色のスラグ地に樹枝状の Magnetite ($\mathbf{Fe}_3\mathbf{O}_4$) 微結晶が晶出しているのが認められる。羽 口近くの高温部での生成物と考えられる。

符号	試料履	歴	全 鉄 Total Fe	金属鉄 Metallic Fe	酸 化 第 1 鉄 Fe O	酸 化 第 2 鉄 Fe ₂ O ₃	二酸化 硅素 SiO ₂	酸 化 アルミニウム Al ₂ O ₃	酸 化 カルシウム CaO
3V-6	観音山古墳群中 13号墳墓道出土	原支群 鉱滓	47.91	0.14	48.86	13.99	20.95	3.58	4.23
	相原古墳群3号 鉱滓		47.02	0.16	37.69	53.72	19.42	4.53	1.81
参	倉瀬戸古墳群1 道黒色土中出土	号墳墓 鉱滓	44.01	0.56	29.39	29.47	13.14	4.48	3.99
考	大牟田 3 号墳前 色土中出土鉱滓		40.33	0.27	36.76	27.90	15.90	6.04	1.52
15	大牟田 6 号墳封 出土鉱滓		37.33	0.41	55.47	20.05	11.28	3.27	1.44
値	出土鉱滓	石室内	40.25	0.28	49.77	9.04	22.26	4.22	3.16
	清田ケ浦8号墳 津	出土鉱	54.42	0.27	53.92	17.50	13.86	3.91	2.38

表 6 古墳供献鉱滓の化学組成(%)

酸 化 マグネシウム MgO	酸 化 マンガン MnO	二酸化 チタン TiO ₂	酸 化 クロム Cr ₂ O ₃	硫 黄 S	五 酸化 弊 P ₂ O ₅		バ ナ ジウム V	銅 Cu	造炭分	造滓成分 Total Fe	TiO2 Total Fe	註	
1.21	0.36	1.47	0.132	0.041	0.309	0.106	0.168	0.002			0.031		
0.93	0.14	1.05	0.123	0.057	0.02	0.09	0.200	0.004	26.69	0.586	0.022	2	5
0.80	0.39	3.00	0.167	0.006	0.274	0.144	0.477	0.0046	22.41	0.509	0.068	2	6
0.75	0.24	2.50	0.514	0.010	0.206	0.124	0.537	0.0050	24.21	0.501	0.052	2	
0.80	0.18	1.55	0.190	0.006	0.263	0.121	0.167	0.0046	16.79	0.292	0.027	2	
1.58	0.23	1.40	0.118	0.00	0.332	0.085	0.293	0.0032	31.22	0.689	0.031	2	7
0.85	0.11	0.60	0.103	0.016	0.194	0.137	0.167	0.0123	21.00	0.386	0.011	4	8

(4) 考察

観音山古墳群中原支群の 3 基から出土した 鉱滓は、鉱物組成を 観察すると40 g 以下の 小塊は、金属鉄の酸化風化した Goethite ($Fe_2O_3 \cdot H_2O$) が主であり、60 g 以上の中・大塊になると Wüstite (FeO) +Fayalite (2 $FeO \cdot SiO_2$) といった傾向がある。

化学組成は、中塊の $60\,g$ 以上の鉱滓(3V-6)を調査したが、全鉄分(Total Fe)は高目の47.91%、造滓成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$)は 29.97%と低目で鉄収率の悪い鉱滓と云える。また、二酸化チタン(TiO_2)は1.47%、バナジウム(V)が0.168%から、製鉄原料は極低チタン砂鉄の使用が考えられ、この時の製錬温度は 1300° C を上回ることはなかったであろう。 (註 $9\cdot10$)

此の様に今回の調査鉱滓は鉱物組成と化学組成から、古代製鉄の製錬滓特有の形態を示しているし、また表6に示した他の古墳供献鉱滓の化学組成(参考値)の構成成分と比較しても大差ない。

しかし、少し懸念されることは、13号墳・20号墳は盗掘を受けた形跡と中世遺物の混入があり、鉱滓が床面から浮き上がった状態で発掘された点である。(発掘担当者談)だが、13号墳の出土鉱滓は4.7 kg以上と量的に多く、可搬性のものでも周辺に製鉄遺構の検出もないので単なる混入とは考えられず、前述の鉱物組成及び化学組成等を共に考慮すれば、古墳期の供献物と判断して差支えなかろう。

古墳出土鉱滓が中世の混入物であれば、中世の鉱滓としてそれなりの価値があるが、今回の場合、古墳期の供献と見做すと6世紀後半から7世紀前半代の製鉄技術や原料を考慮する上で非常に貴重な資料になってくる。現在、日本列島での製鉄の始源は明らかでない。一口に製鉄と云っても、砂鉄や鉱石を還元製錬(Smelting)して鉄素材を生産した場合と、鍛冶で製品

を製造加工した場合では、本質的な違いがあり、排出される滓(前者製錬滓=鉱滓、後者鍛冶 滓=鉄滓)が異なってくるので、これを区別すべきである。

此の問題を追求する上で、遺構の検討と共に鉱滓・鉄滓の分析調査は重要である。今の所、日本列島で最も古い滓は、弥生時代後期の遺跡から出土した鉄滓で鍛冶加工時の排出物であろう。熊本県の二例(下前原遺跡、諏訪原遺跡)の鉄滓はデータ的にも裏付けられる(註11)。なお弥生時代の出土例として、藤田・田辺両氏の鉄器・鉄滓出土地名表(註12)は貴重であるが、1960年での資料であり、鉄滓に限ると福岡県・熊本県の各資料の推定時期は、かなりの修正すべき点がでているようである(註13)。

福岡県で時代の遡る鉄滓は、春日市門田北遺跡の住居址から出土した弥生終末期に比定される分であろう。鉄滓は2・30m離れた門田製鉄址(註14・15)との関連からも検討すべきなので、推定時期や詳細データは後日にまわしたい。次に6世紀前半代の滓として、今宿大塚古墳後円部墳丘盛土中の発見物と、大又遺跡1・4号住居址出土滓等である(註16)。両者は製鉄遺構からの出土でなく、量も数点以下で分析も未調査なので、製錬滓か鍛冶滓かの区分は出来てない。

6世紀後半から7世紀代になると製錬滓として、ほぼ確実的な資料がおさえられてくる。製鉄遺構からの鉱滓(註17)、住居址出土例(註18)、古墳供献例など豊富になる。特に最後の古墳供献鉱滓は、表7に示す如く今回の観音山中原支群の4例を加えると、福岡県下では32例の提示になる。このうち、鉱物組成か化学組成のいずれかを調査したのは12例であり、全て製錬滓と判定できた。このような状況下で履歴が明確で推定時期が判る古墳供献鉱滓の位置するところは重要である。

続いて県外で鉄滓・鉱滓を出土した古墳例を表8に示す。推定時期の古いところは、岡山県月の輪古墳の4世紀後半や、(註33)奈良県石光山1号墳(註35)で5世紀後半の帆立貝式前方後円墳出土品であり、新しい時期は千葉県の扶喰古墳例(註36)である。扶喰古墳では、周涅内からの出土で発掘主体者の渋谷氏によると、土師器・須恵器等の出土遺物は全ての器形に対して意識的に破損した状態であり、祭祀思想の一部が古墳の終了した後も墓前祭的要素として部分的に継承されたもので、鉱滓の供献時期を奈良末から平安初期に比定している。

岡山県の六つ塚墳(註24・28・29・30)の供献鉄滓は、6世紀初頭から6世紀後半のもので、古墳主体内で遺骸の両脇に須恵器と共にそえられた形で出土しており、調査事例としては最も古く1962年であった。しかし、これらの県外鉱滓の分析調査は、月の輸古墳出土鉱滓以外いまだなされておらず、製錬滓か鍛冶滓か不明であるとはいえ、日本列島におけるかなり正確な鉄製錬の証拠物件となり、6世紀代において西日本で高品位砂鉄の賦存する地域で広範囲に鉄製錬が行なわれ始めたものと推定でき、日本国家形成の一つの原動力となったことが指摘出来そうである。

まとめ

観音山古墳群中原支群の供献鉱滓は、金属鉄の酸化した小塊と、製錬技術の未熟な製錬滓で福岡県下の他の古墳供献鉱滓と、ほぼ類似した成分構成で、製鉄原料もチタン分の少ない砂鉄を使用しており、製錬温度は1300°Cを越えることなく、古代製鉄の特徴をよく備えた鉱滓であった。

供献鉱滓は5・6・20号墳ともに2個宛であるが、13号墳は福岡県下でも多い方で、閉塞部及び羨道の30個、玄室1個、墓道21個で計52個余で、重量としては優に5 kgをオーバーする。 大谷古墳7号(464個余),55号(338個余)14号(240個余)に次いで多い分量である。

また、観音山古墳群の特質として、40 g 以下の小塊には、鉄分が多く含有されていて鉄に近いものであり、供献当事者が意識して選んだのかどうか興味を呼ぶところである。

※此の原稿の化学分析は、清水峯男氏(旧新日鉄・生産技術研究所部長,現在九州大学工学部沿金学教室教授)の御尽力で出来たことを銘記して感謝の意を表しておきます。

- 註1 柳田康雄・井上裕弘他「観音山 古墳群の調査」『昭和47年度・山陽新幹線関係埋蔵 文化財 調査概報』1973。ただし当報告書には鉱滓出土が13号のみしか記載されていない。
 - 2 大澤正己「福岡平野を中心に出土した鉱滓の分析」『広石古墳群』(福岡市埋蔵文化財調査報告第 41集)1977。
 - 3 椀形滓「椀形滓は 鍛冶滓の一種であり、直径12から18センチのやや 楕円形を呈した浅い 椀形の鉄 滓である。鍛冶工房で大鍛冶や鍛え鍛冶の作業にともなって発生するものと、小鍛冶の作業にともなって発生するものがあり、前者の表面をやや製錬滓に近い外貌をしており、後者の方はやや小形で質も均一に粗鬆である。いずれも吹子口直下の火床中に形成されるもので、鉄滓と藁灰、あるいは山土との焼結状態を 呈している。」以上は窪田蔵郎「鉄の考古学」雄山閣 1972。194頁の 引用、しかし化学組成からの違いから製錬滓と考える。詳細は注②参照されたし。
 - 4 大澤正己「8号墳出土鉄滓の調査結果」『清田ケ浦古墳群』津屋崎町教育委員会 1977。
 - 5 柳澤一男・藤田和裕『相原古墳群』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第28集)1974。
 - 6 小田富士雄編『倉瀬戸古墳群』1973。
 - 7 柳澤一男他『広石古墳群』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集)1977。
 - 8 小池史哲編『清田ヶ浦古墳群』(福岡県宗像郡津屋崎町津屋崎所在古墳群発掘調査報告)津屋崎町 教育委員会。1977。
 - 9 大澤正己「福岡県下の古代製鉄」福岡考古懇話会々報。第3号。1975。
 - 10 大澤正己 前掲書2。

表 7 福岡県における鉱滓供献古墳一覧表

No.	古 墳 名	所 在 地	出 土 地 点	個数	総重量	推定時期	備考	大澤 調 顕微鏡組織	周 査 化学分析
1	観音山中原5号墳	那珂川町中原・深原	羡道	2	35 9	6 C後半~7 C前半	注1	0	
2	観音山中原6号墳	"	墓道	2	65 g + α	7 C初頭~7 C前半	注1	0	
3	観音山中原13号墳	"	玄室・羨道 (閉塞部),墓道	$34+\alpha$	$4700 g + \alpha$	6 C後半~7 C前半	注1	0	0
4	観音山中原20号墳	"	石室	2		6 C後半~7 C前半	注1		
5	相原3号墳	西区上の原・相原		12	550 <i>§</i>	6 C末~7 C	注2・5	0	0
6	広石 Ⅲ一1号墳	西区拾六町・広石		37	1350 g	7 C初~8 C後半	注2・7・13	0	0
7	野 方 1 号 墳	西区野方				7 C	1969年鈴木重治氏調査	^	
8	野方2号墳	"	羡道後半部			7 C	"		
9	山 崎 2 号 墳	西区西油山・山崎		3		7 C	1975年大川清氏調査		
10	山 崎 3 号 墳	"	羨道・墓道			7 C	"		
11	山 崎 4 号 墳	"	羨道・墓道			6 C後半~7 C後半	"		
12	大谷7号墳	西区梅林・大谷	前庭~羨道前半 250余 前室 23 奥室 191	464余		7 C前半~7 C後半	注19	0	
13	大谷8号墳	"	羨道 4 · 玄室 17	21		7 C前半~7 C後半	注19		
14	大 谷 14 号 墳	"	前庭~羨道 前半部 約 240	240		7 C後半	注19		
15	大 谷 23 号 墳	"	玄室			7 C	注20		
16	大 谷 51 号 墳	, "	前室・羨道 308, 玄室 30	338		7 C中~ 7 C末	注19		
17	駄ケ原C地区3号墳	西区梅林・駄ヶ原	玄室	***************************************		7 C	注21		
18	影 塚 1 号 墳	西区野芥・カケツカ	墳丘外表		***	6 C末~7 C	注22		
19	七 隈 8 号 墳	西区七隈	玄室・右袖部			7 C	1970年夏福大歴研同好会		
20	倉瀬戸1号墳	西区片江・倉瀬戸	墓道	8	272 g	6 C末~7 C前半	注2・6	0	0
21	倉瀬戸2号墳	"	玄室	3	84 9		注2 · 6	0	
22	倉瀬戸4号墳	"	?				注2・6		
23	倉瀬戸5号墳	"	玄室	16	297 9	7 C初~7 C後半	注2.6	0	
24	倉瀬戸7号墳	"	?			7 C初~7 C末	注2 · 6		
25	大牟田3号墳	西区柏原・大牟田	?			7 C	1970~71年三島格氏調査	0	0_
26	大牟田4号墳	"	?			7 C	"		
27	大牟田6号墳	"	?			7 C	"	0	0
28	大牟田14号墳	"	?			?	"		
29	大牟田35号墳	"	?			?	"	0	
30	池 田 1 号 墳	太宰府町大宰府・池田	玄室	-		7 C前半	注23		
31	池 田 2 号 墳	"	玄室			7 C前半	注23		
32	清田ヶ浦8号墳	津屋崎町津屋崎・清田ケ浦		33	1023 g	7 C前半	注4・8	0	0

柳澤一男「福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡」Table.16の一部を補正

表 8 県外における鉱滓供献(出土) 古墳一覧表

No.	古 墳 名	所 在 地	出 土 地 点	個数 総重量	推定時期	注
1	天 狗 松 4 号墳	広島県三次市十日市町	横穴式石室内	2 113.4	6世紀後半	24•25
2	上立川七ツ塚5号墳	〃 〃 上立川町	"	数個 ?	"	24 • 26
3	常定峯双第2号横穴	// 比婆郡口和町	墓道	4個 ?	7世紀?	27
4	六ッ塚1号墳	岡山県津山市玉林	①墳頂直下(多量),回 中央北棺床面 ○中央南棺床面(少量)	(少量),	 ① 6 世紀初頭~前半 ② 6 世紀初頭○ 6 世紀前半	28
5	// 3号墳	<i>"</i> "	@木棺床面(少量),®木棺床面(多量)	,©木棺床面(少量	(A) B 6 世紀前半 (C) 6 世紀中葉	24•29•30
6	// 6号墳	" "	礫槨床面	少量 ?	6世紀初頭	24
7	天神原1号墳	" "	横穴式石室内(高杯内)	少量 ?	6世紀後半	28
8	万 燈 山 古 墳	〃 苫田郡加茂町大字塔中606	横穴式石室, 箱式石棺内	?	6世紀後半~7世紀	31
9	飯 森 山 古 墳	〃 岡山市御津町一宮町		?	フィショントラックによ る測定B P1330	32
10	赤塚1号墳	// 久米郡柵原町	横穴式石室床面	少量	6世紀末葉	28
11	月の輪 古墳	" "	墳頂部		4世紀後半	33
12	佐古田古墳	〃 高松町	石室混入土中		5世紀中葉	30
13	石 峯 2 号 墳	奈良県天理市豊田町字カットリ	羨道(羽口破片供伴)	2 35 g	6世紀中葉	34
14	石 光 山 1 号墳	〃 御所市元町	帆立貝式前方後円墳前方部前面掘割部	1	5世紀後半	35
15	扶 喰 古 墳	千葉県香取郡東庄町羽計字扶喰	周違内	多量	8世紀末~9世紀	36
16	野原八幡 1 号墳	熊本県荒尾市野原	墳丘下	1	7世紀	37
17	長 畝 山 2 号墳	岡山県津山市河辺国分寺	鉄滓と鍛冶見		6世紀初	38
18	茂平1号墳(10号墳)	〃 勝田郡勝央町植月中茂平1987		40		39
19	糘 山 古 墳 群	// 久米郡久米町糘山	15基調査中9基に供献,主に羨道部	120 g ~ 1.8h		40
20	艄 込 古 墳 群	// 津山市				41
21	小丸山古墳群	"				42
22	飯梨古墳群	安来市飯梨				43
23	城 山 古 墳 群	滋賀県東浅井郡浅井町木尾城山	羨道(杯の中,指先程の小塊)	数個	6世紀後半	44
24	東十郎6区4号墳	佐賀県鳥栖市神辺町上の車	_	3	7~8世紀	45
25	押入西1号墳	岡山県津山市押入			5世紀後半	46

- 11 熊本県玉名郡岱明村下前原。竪穴 6 号出土鉄滓。湊秀雄・佐々木稔「タタラ製鉄鉱滓の鉱物組成と製錬条件について」たたら研究14,1968では、滓が小粒のため鉱物組成の検討のみ行なわれ、製錬滓 I と区分されている。鉱物組成は、成長したWüstiteとFayaliteである。 また、和島誠一「鉄の成分」『月の輪古墳』所収1960。による化学分析値は全鉄58.63%、造滓成分25.01%、チタン分 Trace で、鉱物組成・化学組成を勘案すると鍛冶滓であろう。(なお推定時期は弥生末期とも報告されている。) 熊本県玉名郡菊水町諏訪原遺跡出土弥生後期鉄滓。当方で鉱物組成・化学組成調査ずみ。鍛冶滓と判定している。
- 12 藤田等・田辺昭三「弥生時代鉄器・鉄滓出土地名表」たたら研究。第4号。1960。
- 13 柳澤一男「福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡」『広石古墳群』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第 41集)1977。熊本県は文化課松本健郎氏の教示による。松本氏は、故坂本経堯氏の資料の再検討、 遺跡の踏査結果からの見解である。
- 14 木下修編「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会1975。
- 15 大澤正己・中山光夫「門田遺跡製鉄遺構出土品の科学分析結果」『昭和50年度山陽新幹線関係埋蔵 文化財調査概報』福岡県教育委員会。1976。
- 16 柳澤一男前掲書。(注13)
- 17 大澤正己前掲書(注2),柳澤一男前掲書。(注13)
- 18 大澤正己「大道端出土の鉄滓について」『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告 (X W) 』1977 此の遺跡出土の滓は、製錬滓タイプと鍛冶滓タイプがあり、今後の検討が必要である。
- 19 緒方勉他『大谷古墳群』 I (福岡市埋蔵文化財調査報告書第19集) 1972。
- 20 三島格「福岡平野の製鉄遺跡」『和白遺跡群』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集)1971。
- 21 真野修「駄ヶ原古墳群」『倉瀬戸古墳群』1973。
- 22 三島格·佐藤伸二他『影塚第1号墳調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告第21集)1972。
- 23 宮小路賀宏・栗原和彦他「池田遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集1970。
- 24 今井堯他「瀬戸内」『日本の考古学 Ⅳ・古墳時代(上)』1966。
- 25 藤田等「天狗松第4号古墳」『広島県双三郡三次市史料総覧』第5巻。1974。
- 26 川越哲志氏の書簡によると,上立川七ツ塚 5 号墳出土の鉱滓は,先の大水害で三次市市役所陳列ケースに保管されていたものが紛失したとの事である。数個の鉱滓のうち,1 個はソフトボール程度の大きさであったらしい。(潮見浩先生の記憶)
- 27 難波宗明「常定峯双 2 号横穴」『広島県文化財調査報告』第7集,広島県教育委員会。1967。発掘 担当者は,鉱滓の供献時期については保留にしている。
- 28 今井堯・近藤義郎「群集墳の盛行」『古代の日本』 4。中国・四国, 1970。203頁。
- 29 今井堯「六ツ塚古墳群調査略報,津山市文化財略報3」1962。ガリ版刷。
- 30 西川宏「吉備の王者とその舞台」『古代の日本』 4。中国・四国, 1970。119頁。
- 31 岡山県苫田郡加茂町文化財保護委員会「万燈山古墳」1974。
- 32 笹嶋貞雄・西村進「西南日本の考古遺物によるフィショントラック年代について」考古学と自然科

- 学。第3号。1970。
- 33 和島誠一「鉄器の成分」『月の輪古墳』1960。
- 34 泉森皎編『天理市石上・豊田古墳群』奈良県教育委員会。1975。
- 35 亀田博「石光山1号墳」『葛城・石光山古墳群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊)奈 良県立橿原考古研究所。1976。
- 36 渋谷興平「千葉県香取郡扶喰古墳の研究」東京文化史学会。1972。
- 37 松本健郎「野原八幡古墳群調査概報」『玉名考古部部報,第31号』県立玉名高校。1974。
- 38 津山市史第1巻 S47。
- 39 岡山県勝央町教育委員会「勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」1976。
- 40 橋本惣司氏教示。(岡山県文化課)
- 41 橋本惣司氏教示。(岡山県文化課)
- 42 岡本明郎「吉備海部と朝鮮文化」『日本のなかの朝鮮文化』1977。35号。
- 43 上田正昭「古代製鉄と朝鮮をめぐって」(座談会)『同上』1977。35号。
- 44 近藤滋氏教示。(滋賀県文化課)
- 45 佐賀県教育委員会「東十郎古墳群」1966。
- 46 松本和男「上相遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1 (岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 3) 』岡山県教育委員会 1973。
 - 岡山県勝間田付近の横穴式石室墳の大部分は羨道部に鉄滓を置いているとのことである。 (渡辺建治氏の教示)
- ※ 熊本県では、他に坂本経堯「肥後に於ける製鉄遺跡の研究」プリント版。1953。によると、野原古 墳群9号墳(円墳)には、「ふかしたままの鉄塊」1個の上に「未完成の刀身」が副葬されていた とある。「ふかしたままの鉄塊」の再検討が望まれる。

2. 7号土壙墓出土木棺材の樹種名について

(1) 資 料

鉄釘に付着した木材片

資料番号

No. 28 1点

No. 31 2点

No. 34 1点

(2) 付着木材片の組織

資料の木材片には鉄さびが細胞内腔などの間隙に入り、全資料とも切片化は困難であった。 したがって、反射顕微鏡を用いて組織の観察を行なった。

4点の資料はいずれも同じ特徴をもっており、その特徴は次のとおりである。

- ① 主に仮道管から構成されている。
- ② 仮道管壁にはらせん肥厚は認められない。
- ③ 樹脂道は認められない。
- ④ 放射組織は単列であり、その高さは2-16細胞高であった。
- ⑤ 放射組織に放射仮道管は認められない。
- ⑥ 分野壁孔は円型で小形であり、一分野あたり1-3個認められた。

(3) 樹種名

これらの資料 (3種4点) は全て同一樹種に属し Chamaecyparis 属 (ヒノキ属) であると推定される。

九州大学農学部松本 勗

林 弘也

付 録

春日市下白水大塚古墳出土品

春日市大字下白水字下の原1403番地に所在する前方後円墳で、近世の墓地となり、近年の改 葬や隣接地の埋立等によりその形状は多大の変形がある。

昭和30年に,前方部から,鈴木基親が人形型土製品を発見した。その後昭和36年8月,前方部の道路拡幅工事直前に発掘調査し,木葉形土製品が出土した。

土鈴は昭和52年7月に後円部の南東約5m地点の地下20cmのところから中島秀雄が発見し、中央公民館に持参されたので、現場確認に行き、小形2個を採集したものである。

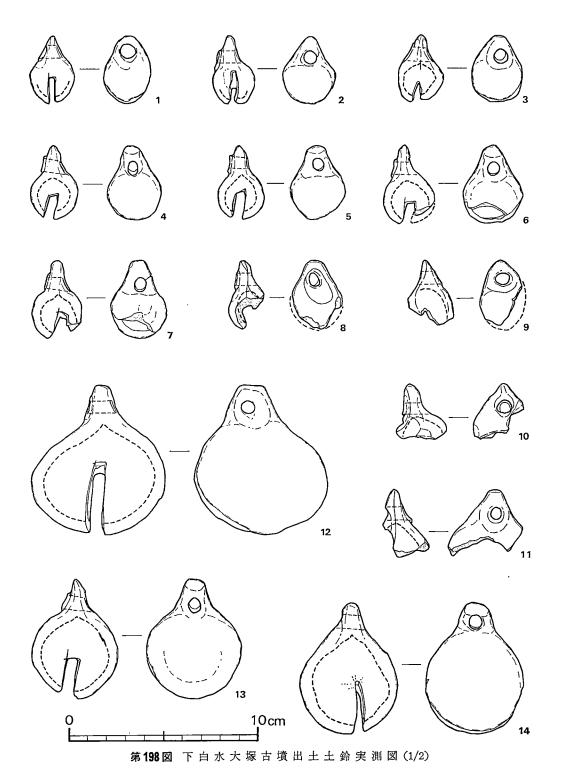
これら三種の出土品は、春日市埋蔵文化財収蔵庫に保管している。

(亀井 勇)

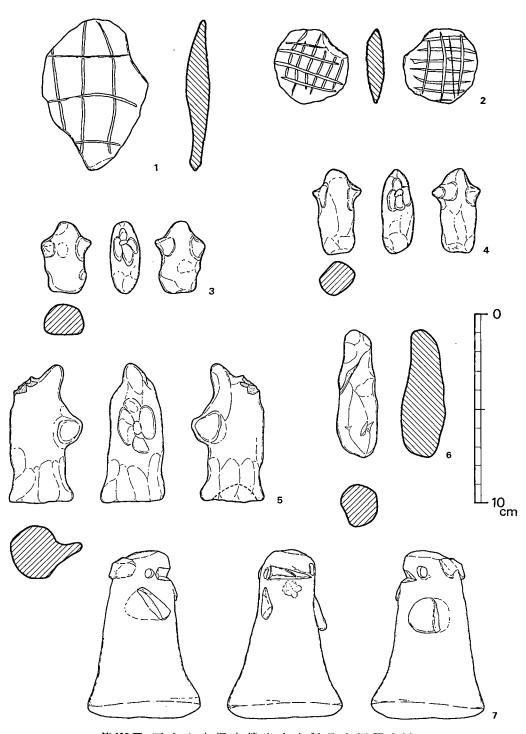
1. 土 鈴(第198図 $1 \sim 14$) 土鈴は大きさの上で小形のもの($1 \sim 10$)と、大形のもの($11\sim 14$)とに大別されるが、なかでも12は際立って大形である。土鈴はすべてその製作技法、胎土の上で共通性が窺える。一体に胎土には非常に精良な粘土を使用し、これに雲母徴粉、細砂を混ぜている。また、製作にあたっては小粘土塊をもって体部をつくり、この頭部を指で摘まみ閉じて紐孔部分を摘まみ上げる。この後に、一方から紐孔を穿ち、更に体部の開孔部を鋭い箆状のもので「 $1 \sim 10$ 0)取る。体部下半は押圧・ナデ調整によって整形されている。小形土鈴($1 \sim 10$ 0)は、色調が淡褐色からややくすんだ灰褐色を呈し、全体では淡褐色のものが多い。焼成はいずれも良好。完形品($1 \sim 10$ 0)から各部の平均値を示すと、体部底より紐孔頭までの器高 $10 \sim 100$ 0~完形。($1 \sim 100$ 0~1)から各部の平均値を示すと、体部底より紐孔頭までの器高 $10 \sim 100$ 0~1)と快い響である。

次に、大形土鈴($11\sim14$)は、12を最大とするが、平均値は器高70mm、最大径58mm,重量93 9 となり、丸径・重量ともこれに比例して大きい。音色は「カラカラ」とやや鈍い音である。これらの土鈴はセットとして使用されたものであろうが、類例に乏しく時期は決定し難い。

2. 板状土製品(第199図、1・2) いずれも体部中央が紡錘状に膨らみ,箆で格子目状文を描くものである。1 は旧状長円形と考えられ,長径 79mm,短径 56mm,最大厚 12.5mmをはかる。格子目状文は片面のみで,かなり不整で,3本の凹線をもって経緯をなし,長軸に平行な方から先に描かれている。色調は暗橙褐色を呈し,胎土に 細砂・雲母微粉を含む。 焼成は良好。2 は円形を呈し,径39mm,最大厚 9 mmをはかり,端部は尖る。両面ともに格子目状文がみられ,一面は 4×6本,片面は 4×7本で経緯をなす。いずれも本数の多い方から先に描いている。色調は若干くすんだ淡橙褐色を呈し,胎土は良質で細砂を含む。焼成は良好である。



— 217 —



第199図 下白水大塚古墳出土土製品実測図(1/2)

3. **人形状土製品**(第199図,3~7) いずれも全て粘土塊を円柱状に整形し,これの一部 を摘み上げ、或いは粘土紐を貼付けて手等を表現したものである。3・4は素材両側辺の上部 を指によって摘まみ出し、2個の突起を造り出している。手の表現であろう。体部は指頭によ る押圧・ナデ調整がみられる。色調は明橙褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。3は横断面蒲 鉾状となり平坦面は背部を想定させる。半均高 41.5 mm,最大幅35.75mm,重量12 g である。 7 は3・4に比して具象的表現が観察できる。底部の安定した円筒形の素材に円形の眼を穿ち、 楔形の口を刻んでいる。また口唇下・側頭部には粘土紐を貼付けているが、これはそれぞれ口 髭・頭髪であろうか。更に、頭部より下った正面両側部に垂れるのは手であろう。体部は摩滅 がみられるが指頭による押圧調整後のナデ調整が残る。色調はくすんだ淡橙褐色を呈し,胎土 に細砂・石英粗砂を含み、焼成は良好。高さ88mm,最大幅60mm,重量21gである。5・6は前 述の3個に比して諸部分の特徴が一致しない。5は3・4と同様に素材から摘まみ出しによって て突起部分を造り出しているが、対称的な両側部の片方を欠き、また頭部には叉状に突起を設 ける点で異なっている。体部下半は指おさえがみられ、底部は指で窪められ、あげ底になって いる。色調は赤褐色で、胎土に砂粒を含む。焼成は良好。高さ73mm、最大幅38mmをはかる。6 は全く円棒状の製品で何等の表現もみられない。指頭による押圧痕が全面に残り、一方の端部 はねじっている。色調は褐色を呈し、胎土・焼成はともに良好。高さ67.5㎜,最大幅24㎜をは かる。これら5・6は製品の形状・表現手法において3・4・7とやや区別される要素がある が、素材そのものの類似点から同一の意味をもつ可能性が考えられる。

以上,ここに揚げた土鈴・板状土製品・人形状土製品のうち後二者は古墳時代の祭祀遺物として時間的な限定はし得ないにしても認めることができるものであろう。土鈴についてはその類例を多くみないが,その形状・胎土・焼成の点でも古墳時代に相当する土鈴との間に非常な相違がみられ,一応古墳時代の祭祀遺物としては除外できるものであろう。

(小林義彦)

山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

第 5 集

本 文

昭和53年3月31日

発 行 福岡県教育委員会 福岡市中央区西中洲6-29